

鹿兒島県史料集
(27)

明
赫
記

刊行のことば

鹿児島県史料集第二十七集として、ここに「明赫記」を刊行いたします。

本書は、島津藩第十五代藩主貴久公から第十七代藩主義弘公までの、九州各藩の割拠時代の記録で、特に、島津勢の肥後攻め、福岡の岩屋城の攻防等は、他の史料に比して詳細に記述されており極めて興味深いものがあります。

県史料集の刊行は、資料の保存をはかり、研究者の利用に供することを目的に進めてきた県立図書館の事業の一つで、史料集の刊行がこんにちままでとどこおりなく続けられていることは、県史料刊行委員の方々の並々ならぬご協力の賜と存じます。

今回は、県立甲南高等学校の宮下満郎先生に解説・書写・校正等をしていただきました。長期間にわたるお骨折りに心から感謝いたします。

なお、この史料が地方史の研究に少しでも役立てば幸いです。

昭和六十二年三月

鹿児島県立図書館長

須佐美新

明 赫 記 目 次

解題

明赫記序文

卷之一

一 貴久公、忠兼公の御養子に為り玉う事	7
二 邊川、實久の謀に与す事	8
三 忠兼公伊作に隠居の後、約を変ずる事、 <small>付たり、忠良君伊作を復す事</small>	9
四 南郷落城、山田某誅せらる事	11
五 川上大和守、勝久公に諫し後遭害、 <small>並びに豊後に遁る事</small>	12
六 伊集院の諸城を陥る事、 <small>付たり、忠良公、實久に會し後加世田城を陥る事</small>	12
七 貴久公谷山を御征伐、 <small>並びに市来城落去の事</small>	13
八 種子島父子不和の事、 <small>付たり、加治木攻めの事</small>	15
九 山田加賀守市成を献ずる事、 <small>付たり、入来院重聰威を仮る事</small>	16
一〇 貴久公を立て太守と為す事、 <small>付たり、近衛殿下玉札・玉衣を玉う事、並びに高祖藤原姓の事</small>	17
一一 本田驕慢、 <small>並びに正八幡宮炎上の事、付たり、本田落居の事</small>	17
一二 伊集院忠朗飢肥発向の事	19
一三 加治木・蒲生渋谷和睦の事	20
一四 貴久公御昇進の事	20
一五 蒲生渋谷加治木を攻むる事、 <small>付たり、貴久公御父子平松を征す事</small>	20
一六 蒲生退治の事	23
一七 島津忠康日州に住す事、 <small>付たり、忠平公飢肥御在城の事</small>	26
附録 上使伊勢備後守日州へ下向の事	27

卷之一

- 一八 肝付兼統謀叛の事、付たり、典廩打死並びに忠平公飢肥より御帰りの事……………31
- 一九 忠平公真幸院に御在城、並びに北原誅伐の事……………35
- 二〇 貴久公陸奥守に任じ、義久公修理大夫に任ず、並びに貴久公御剃髪の事……………36
- 二一 三山城攻めの事……………37
- 二二 菱刈反逆、馬越落城の事……………38
- 二三 菱刈表度々合戦の事……………39
- 二四 菱刈御陣和平、凶徒忽ち和を交す事、付たり、伊東氏飯野着陣に付き忠平公飯野へ御帰城の事……………43
- 二五 相良・菱刈再び和を交す事、付たり、肝付兼寛・新納忠元平泉在番の事……………44
- 二六 伏兵を以て大いに凶徒を敗る事……………45
- 二七 祁答院長野城を攻むる事、付たり、菱刈降参の事……………47
- 二八 渋谷降参、付たり、貴久公御逝去の事……………48

卷之三

- 二九 下大隅の賊徒等海上を寄來る事……………51
- 三〇 忠平公本崎原御合戦の事……………53
- 三一 下大隅御退治、祢寝降参、其外所々合戦、牛根落城の事……………63

卷之四

- 三二 日州高原城攻めの事……………71
- 三三 肝付、伊東と合戦、付たり、肝付衰微の事……………73
- 三四 福永丹羽、其主伊東に背き薩摩に降り伊東没落の事、付たり、伊東の臣長倉忠節石城合戦の事……………74

卷之五

- 三五 大友日州高城を侵し敗北の事……………81

卷之六

三六	城親政旗下に属く事	103
三七	相良領を陥れ宝河内・岩牟礼両城を領す事	103
三八	諸將肥後に発向し矢崎・青田落城の事	104
三九	合志表合戦の事	105
四〇	義久公御昇進、付たり、相良義陽心服の事	105
四一	相良義陽、阿蘇と手を切り合戦、義陽戦死の事	107
四二	田尻を救い又有馬を救う事、付たり、隆信を討れる事	108
四三	合志・隈部・宇動等旗下に属く事	116
四四	肥後花山合戦、鎌田政虎、木脇祐昌戦死、付たり、花山合戦隈部・三船等落城の事	117
四五	筑紫弘門を攻むる事	119
四六	岩屋城を攻め陥す事	119

卷之七

四七	豊後を攻め大友氏敗走の事、付たり、家久、仙石・長曾我部等と合戦、上方勢敗北の事	123
四八	秀吉公下向に依り諸將帰陣の事	127
四九	根白坂合戦、秀吉公と御和睦、三州御女堵、国家泰平の記	129
附録	132

解題

明赫記はその序文にあるとおり、天明元（一七八一）年十一月に、平田正表によって書かれたものである。時代は島津貴久が忠兼（勝久）の養嗣子となつて、家督と守護職を譲与された大永六（一五二六）年から、豊臣秀吉の九州平定によって、島津義弘が天正十七（一五八九）年に帖佐に帰城するまでの、凡そ六十余年におよぶ戦国末期の島津家とその家臣団の歴史である。

従来、鹿児島県史料集は、つとめて原史料を刊行してきた。なかには編さんされたものもあるが、それでも記録性の強いものであつたと思う。今回の明赫記のような個人が書いた史書の刊行ははじめてである。明赫記は、内容的には伊地知季安・季通の旧記雑録とほぼ重複しており、同じ史料も採録されている。「鹿児島県史料 旧記雑録」が刊行された今、本書を活字化する意味は薄いように思われるが、旧記雑録にみられない史料もあり、また早くから信頼のおける薩藩史書として、東京大学史料編纂所編の『大日本史料』にも採録されているので、このたび活字化することにした。

明赫記にみる時代は、旧記雑録では鹿児島県史料の前編二と後編一・二巻に含まれている。筆者は前に県維新史料編さん所時代に旧記雑録を担当していた。今本書を筆耕・校訂しながら、内容としては旧記雑録とほとんど変わらないな、と考えていた。それは両書が採録した史料がほぼ同じものであるから、巻五の大友氏との合戦までは、どちらかという旧記雑録が詳しい。しかし巻六については、肥後国における龍造寺隆信との戦いや、肥後国の

諸氏の服属については、本書の方がより具体性がある。もちろん伊地知季通も、諸家譜や上井寛兼日記・新納忠元勲功記などによってこの間の経緯は述べているのであるが、やや断片的にすぎるきらいがある。

明赫記の書名について、平田正表は命題の由来を巻一にあげている。それによると『詩経』の大雅大明からとつたものように、島津忠良・貴久・義久・義弘らの人君に明々の徳があつたので、赫々の天命によって九州を制圧できた、という意味で名付けたものであるという。しかし同書の小雅小明によると、「明々上天、照臨下土」とあり、赫は光り輝くさまであるから、名君の優れた指揮のもとで輝かしい成果をあげることができた、と解釈することもできる。いづれにしても、平田正表は、四君による近世島津家の初期の輝かしい戦功の歴史を述べようとしたものである。

編著にあたって、平田正表は序文に「其時に当り、其事に臨みまのあたり記るし置、家の残したるあり、……世上家蔵の書あるを幸ひとし、乞ひ求め、書集めるを寄せ、同異をしるし」と述べているので、その当時出陣した先祖の記録を中心に、他家の記録類を参考にしたようである。構成を見ると、本文があつて、次に「世録記」・「箕句記」・「擾乱記」・「惟新公御記」・「翰遊集」（長谷場越前自記）・「菱刈御退治記」・「三国軍記」・「木崎原御合戦傳記」・「長友氏記」・「勝日記」などを引用し、最後に私曰として、平田正表の考証を加えている。なおこの本文に当る部分に、平田家に伝えられた記録が利用されたのであろう。平田正表がどのような人物であつたかは、同氏の系図や伝記もないのでよくわからない。薩摩藩で平田といえば、忠国代より家

老職を務める名家であったが、増宗が慶長十五年に野心があつたとして入来で暗殺されて嫡家は断絶した。庶流家はその後も存続したが、そのうちの一家から家老となつて、木曾川普請の総奉行となつた平出勲貞正輔も有名であるが、正表との関係は明らかでない。本田親孚の「称名墓誌」や人物伝、福崎某編の「本藩人物誌」(本史料集(二三)、昭和四十七年刊)などにも、両書の性格上載せられていない。また、明赫記が書かれた天明元年より三年前の安永七(一七七八)年に完成した清水盛富の「三州御治世要覽」(本史料集(二五)、昭和五十九年度刊、筆者校訂)の「御家格御政治巻」に、御寄合の平田平十郎・平田平左衛門、嫡子御直元服の平田次郎兵衛、小番志番与の平田五次右衛門跡、四番与の平田新兵衛跡、六番与の平田九郎右衛門が見え、「当時御役人」に、組頭御番頭の平出新左衛門、御側御用人の平山平太左衛門、御船奉行の平田善太夫、御目付の平田清右衛門などが見えるが、いずれも通称であるので正表との関係は不明である。

明赫記が書かれた天明元年ごろの薩摩藩をみると、島津重豪の改革がようやく成果をみせようとしているところである。すなわち、重豪はこれより九年前の安永二年に、家中の容貌・言語の粗野を戒め、風俗の矯正を命じた。翌二年には繁栄方を設けて商業を奨励、聖堂(造士館)や武芸稽古場(演武館)を創建し、医学院の建設にも着手している。さらに三年前の安永七年には桜島の大噴火がありながらも、天文館の設置や吉野に菜園を設けるなど、新しい策が次々に出されているところである。このような時に、正表はなぜ忠良から義弘にいたる戦功の歴史を書き表す必要があつたのだろうか。

島津家の正史としては、藩庁の記録所による「島津氏世録正統系図」が初代忠久以後の代々について編纂されている。のちに重豪の命によつて、山元正誼が「島津国史」を編纂することにもなるが、平田正表は序文に「官府の正史ハ殊に備はりたるべきなれと、公廳の禁秘にて世人伺ふべきにあらず」と書いているので、正史をある程度利用できるような記録所などの役人ではなかつたことになる。ところで、薩摩藩では正史とは別に、民間人によつて書かれた史書がある。宝曆八(一七五八)年得能通昭の「西藩野史」や前出の「三州御治世要覽」があり、また史書とはいえないが、宝曆十二年橋口兼珍の「三晚庵主談話」、明和七年清水盛香の「盛香集」、安永五年伊集院兼喜の「薩陽落穂集」など、史書に類する記録があり、文学では天明四年毛利正直が「大石兵六夢物語」を書いて、重豪の新しい策への批判をちらつかせている。徳田邑興は安永三年に「島津家御旧制軍法巻鈔」を書いて、武出流軍学を批判して義弘時代の旧軍法の復活を訴え、久保平内左衛門も藩政を批判して共に大島に流罪になつている。

以上の書に共通していることは、重豪の施政をたたえることではなく、昔のよき時代をたたえていることである。重豪の風俗言語の改正で士風が変わつたことは、頼山陽の兵児謡を持ち出すまでもなからう。藩士の中には改革を是としない者もある。彼らの理想の主君としては、秀吉に敗れはしたが、九州を征覇し、朝鮮に出兵し、関ヶ原で勇敢に戦つた義弘に求められるのではなからうか。清水盛富は義弘までを本文で扱い、家久の慶長以後は年表で済ませている。平田正表が明赫記を書いて四人の徳をたたえようとした動機は、薩摩藩の現状に対する不満であつたらうと

考えられるのである。また毛利正直が一時藩の役人として締方にはなつたが、のちには騎士御救米や手内職で身すぎする下級武士であつたことから考えると、正表も同じような藩の主流となれない下級武士であつたと考えてよいのだろう。

本文はほとんどが読み下し文でわかりやすいのであるが、引用文には島津世録記のような漢文があつたり、勝目氏記のような混淆文もある。ときに読みづらい文もある。例えば巻五、大友侵日州高城敗北之事に、「回国ノ舟、薩摩ノ坊ノ津ニ着陣ス、其船ヲ豊後ノ如ク可被出ノ由雖被懇望、昔ヨリ異国ノ着船ハ於其津商光スト云ヘリ、或ハ又天下ノ命ナラハ不及是非儀也トテ、是ヲ不被許容也」と書かれている。近世文書や史料を読みなれている人にはなんでもないことだが、一般の人には読みづらい文もある。漢文にしても、正しい漢文ではなく、近世の日本の漢文であるから、これもまた同じである。

最後に、明赫記は旧記雑録に採録されていないのであるが、それは季通が存在を知らなかったのではなく、利用しなかつたのだと思う。季通が明治二十三年に磯島津家に進上した蔵書目録にもないので、筆写したこともなかつたであろうが、季通は古い時代には、西藩野史や島津国史などの編纂された史料も採録しているが、次第に使わなくなり、島津国史でさえも天正六年を最後に姿を消している。時代が下がるにつれて文書や記録が増えるので、あえて編纂物を採録する必要がなかつたのだろう。さて、季通には無視されたようであるが、平田正表は季安・季通以前の薩摩における考証史学の先駆者であつたといえよう。

例言

- 一、本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵の「明赫記」を底本とし、鹿児島県歴史資料センター黎明館史料課史料編さん室所蔵の旧島津家編輯所本（現東京大学史料編纂所）のコピー本によって校訂した。ほかに玉里文庫本もあり、三者とも写本である。それぞれに脱文がみられるが、脱文は両者から補った。
- 二、原稿作成に際しては、原則として原本の体裁に従つたが、表紙の巻数立てについては、巻一―巻七をとり、義・不・也などは捨てた。
- 三、印刷に際して、割注などできるだけ原本の体裁に従つたが、一部字数を整えたところがある。
- 四、印刷に際して、原則として原本の用字によつたが、一部当用漢字に改めたものがある。また変体仮名はすべて通用体の平仮名に改めた。但し、江・者・茂・而については、活字を小さくしてそのまま使用した。ㄱ(コト)・ㄴ(トモ)・ㄹ(シテ)などの異体文字も通用体に改めた。
- 五、片カナのルビは原本に附されたものである。
- 六、本文には適宜、読点・並列点などを附した。
- 七、不明か所は字数によって□で示し、右傍に注記した。
- 八、本史料集の作成にあたり、黎明館史料課史料編さん室より、史料閲覧の便宜を与えられた。記して謝意を表したい。
- 九、本史料集の原稿作成と校訂は甲南高校の宮下満郎が担当した。

明
赫
記

卷之一

夫、薩隅日三州ハ、往昔

明赫記

忠久公封せられ給ひしより、連綿として楨幹堅く、枝葉繁く、幾

目錄

久敷 御繁昌ましく、就中、永祿・天正之比、日本國大に乱れ、

卷之一

國々所々割據の徒多く、此三州に於ても、肝属等の大家を初め、

貴久公 忠兼公之為玉御養子事

菱刈・蒲生以下、各其郡縣ニ據り、不臣の挙動多かりし折しも、

邊川與實久謀反

日新公傑出ましまし、

忠兼公隠居于伊作後變約事附忠良君復伊作事

大中公御正統を繼せ給ひ、年月を追ひ、

南郷落城山田某被誅反

龍伯公 惟新公及び御連枝中將・尚久・歳久・家久、相共に四方

川上大和守諫勝久公後遭害并遁于豊後反

の奸賊御征討あり、加之、龍造寺の強敵、伊東の古寇、大友の大

陷伊集院之諸城反并市來城落去之事

敵等討從へ給ひしかハ、肥・筑・豊の前後六州服従し、御武威天

貴久公谷山御征伐并市來城落去之事

下に赫耀たり、其間、君上の御労働、股肱勇卒の忠勤、三國擾乱

種子島父子不和之反并加治木攻之事

記等に顕然也、然るに、其時に當り、其事に臨み、まのあたり記

山田加賀守献市成反并入來院重聰假威事

るし置、家々に残したるあり、其書中、

立貴久公定為太守反并近衛殿下賜玉札御衣反并高祖為藤原姓事

君上の御苦戦、股肱の忠謀、擾乱記に洩たるあり、もとより官府

本田驕慢并止八幡宮炎上之反并本田落居之反

の正史は、殊に備ハりたる有へきなれと、公廳の禁秘にて、世人

伊集院忠朗飢肥發向之反

何ふへきにあらず、世上家蔵の書あるを幸ひとし、乞ひ求め書集

加治木蒲生渋谷和陸之反

めるを寄せ、同異をしるし、一部七卷となしぬ、其素意、今の世

貴久公御昇進之反

此大邦に生れ、貴賤みな太平の化に浴しぬるは、いにしえ

蒲生渋谷攻加治木反并貴久公御父子征平松反

君臣共ニ艱難ましましたる莫大の御功績故なる事を識得し、其御

蒲生退治之事

勲徳を深く欽慕し奉り、當今寸陰を空しくせず、夙夜忠貞の道を

島津忠廉住日州反并忠平公飢肥御在城之事

修行し、御國恩を報するの志を同しふせんと、顕して記し置候事

卷之二

しかり、

天明元辛 五十一月

平田正表謹誌

- 肝付兼續謀叛之反并典殿討死并忠平公從飢肥御帰之事
- 忠平公真幸院御在城并北原誅伐之事
- 貴久公任陸奥守 義久公任修理大夫并 貴久公御剃髮之事

三山城攻之事

一 菱刈反逆馬越落城之支

一 菱刈表度々合戦之支

一 菱刈御陣和平凶徒忽變和付伊東氏飯野着陣付 忠平公飯野御

一 帰城之支

一 相良菱刈再變和事付肝付兼寛新納忠元平泉在番之支

一 以伏兵大敗凶徒支

一 攻邪答院長野城支付菱刈降參之支

一 渋谷降參付貴久公 御逝去之支

卷之三

一 下大隅之賊徒等海上寄來支

一 忠平公木崎原御合戦之支

一 下大隅御退治称寢降參其外所々合戦牛根落城之事

卷之四

一 日州高原城攻之事

一 肝属与伊東合戦付肝付袁微事

一 福永丹波其主背伊東降薩摩伊東没落之事付伊東之臣長倉忠節

一 石城合戦之事

卷之五

一 大友侵日州高城敗北之事

卷之六

一 城親政属旗下事

一 陷相良領宝河内岩牟礼向城事

一 諸將肥後發向矢崎青山落城之事

一 合志表合戦之支

一 義久公御昇進付相良義陽心服之事

一 相良義陽与阿蘇手切合戦義陽戰死之事

一 救田尻又救有馬支付隆信被討事

一 合志隈部宇動等属旗下支

一 肥後花山合戦鎌田政虎木脇祐昌戰死付重而於花山合戦隈莊三

一 船等落城之支

一 攻築紫弘門支

一 攻陷岩屋城事

卷之七

一 攻豊後大友氏敗走之支付家久与仙石長曾我部等合戦上方勢敗

一 北之支

一 依秀吉公下向諸將帰陣之支

一 根白坂合戦与秀吉公御和睦三州御安堵國家太平之事

明赫記 大雅大明曰、明々在下、赫々在上、註曰、在下者有明々之德、在上者有赫々之命云云。

在下者指人君、在上者指大臣。

日新公 伯簡公 龍伯公 惟新公、咸有明明之德、乃得赫々之命、故取之以名此書。

貴久公 忠兼公之御養子成玉事

御當家十五世之太守

貴久公、前太守忠兼公之跡ヲ繼、府君ニ備ハリ玉フテ、叛賊悉ク平定有リ、陸奥守從五位下ニ叙任シ玉ヒ、正宗無窮南山之壽ノ如ク、枝葉繁昌松柏之茂キカ如ク、御當家中興之主ト成玉フ、

貴久公伊作家之御先祖大隅守久長ハ、二代ノ太守忠時公之御、男ニテ、薩州伊作ヲ領シ玉フ、此故ニ伊作家ト号ス、伊作家二代大隅守宗久、三代下野守親忠、四代大隅守久義、五代大隅守勝久、六代四郎左衛門尉教久、七代犬安丸相統アリ、犬安丸十六歳ニテ頓死、無世子、九代之

太守忠國公ニ番目ノ御子河内守久逸、犬安丸ノ妹ニ配偶有テ、伊作家ヲ相統シ玉フ、伊作八代ノ主也、九代又四郎善久、是ハ二十四歳之時、久逸ニ先立テ卒去有、此御子相模守忠良君也、扱、相州家ハ

忠國公之長子相模守友久、他服ニ生シ玉フ、故ニ正統ヲ繼玉ハス、田布施・阿多・高橋ヲ領シ、相模守ト称スルヲ以、相州家ト号ス、御子相模守運久一瓢斎ト称ス、然ニ、伊作善久早世有、河内守久逸モ加世田ニ於テ戰死之後、忠良君幼年ニテ菊三郎君ト申セシ頃、善久之後室忠良公之母室也、新納賢子也。菊三郎君ヲ養育シ、伊作城ヲ守リ玉フニ

故有テ、此後室ヲ運久娶リ玉ヒ、田布施・阿多・高橋・伊作ヲ領シ、菊三郎君ヲ養子トシ、運久死去有テ、忠良君引統キ右ノ四ヶ所ヲ領シ、伊作・相州両家ヲ兼帯シ玉フ、忠良君御男子三人・女子三人有、御嫡男ハ則

貴久公、御二男ハ右馬頭中將、御三男ハ左兵衛尉尚久也、女子一人ハ肝付河内守兼統兼統、善久ノ女也。一人ハ桃山安藝守善久ニ嫁シ、御末女ハ

太守義久公ノ御簾中ト成玉フ、緒、正統十四代ノ 太守忠兼公太守ノ位ヲ踐テ國家ヲ治メ玉ヒシニ、忠兼天性龜毫ニシテ、政道乱レ、混ラニ小人ヲ用ヒ、賢臣ヲ捨玉ヒシカハ、國民憂ヲ懷キケル爰ニ、薩摩國出水之領主高津八郎左衛門實久義虎之 國家ノ久シカラサルコトヲ思ヒ、如何モシテ討モシテ討取奉リ、國家ヲ掌握ニセント巧レケル、此事 忠兼公漏聞召、憤リ深ク憂ヒ玉ヒ、本

田次郎左衛門尉ヲ使ニテ、島津相模守忠良ニ述玉ヒケルハ、是ヨリ我ニ代リテ、國家安全ノ政ヲ成サルヘシト、仰遣サレケレハ、忠良公辞スルニ及ハス、領掌有ケレハ、則薩州南郷ノ地ヲ忠良ニ賜ハハ、城主桑畑孫六モ異儀ヲ申サス、忠良ニ属シ奉ル、大永六年、西成十年、明正去程ニ、忠兼公ハ伊集院ヘ御越有テ、島津下野守昌久忠良君弟也。ヲ遣ハサレ、重子テ日置郷ヲ忠良ニ宛行ハレ、弥國政ヲ打任セ玉

ヘハ、忠良ハ十一月五日ニ日置郷ニ馳越、其地ヲ領シ玉ヒ、明ル日伊集院ニ參候シ、謝礼ヲ述ラル、同七日、忠兼公鹿兒島ニ帰城アレハ、忠良モ直ニ御供有リ、國政ヲ譲リ玉フ誓約ノ佳例トテ、

阿多加賀守 忠兼公ノ御劔ヲ持テ附從ヒ、本田紀伊守ハ忠良ノ劔ヲ持テ相從フ、角テ 忠兼公、忠良ノ嫡男虎壽丸今年拾三ニ成ラレケルヲ養子ニ御所望有テ、國政ヲ讓ント思召ケレハ、土持伊豆

守・村田越前守・梶原備前守ヲ御使トシテ、其事ヲ述玉フニ、忠良強テ辭退ニ及シカトモ、黙止難ケレハ領掌有テ、同十八日、虎壽丸ヲ携ヘ鹿兒島ニ參候シ玉ヘハ、則 太守ノ位ヲ憚ヲセ玉ヒ、又三郎貴久公ト申奉ル、

伊作出來記曰、長祿二年^戊十二月初四日、犬安丸卒去ス、久逸其跡ヲ接キ、伊作城ニ居住有之、田布施境ニハ松崎大藏、永吉境ニハ滿留郷ハ左衛門ヲ番トシテ差置ル、久逸御子又四郎善久ハ、犬安丸死去ノ年ヨリ、十年以後誕生也、其後、善久ヲ曰州久志摩ノ前主新納駿河是久ヨリ智養子ニ所望ノ故、善久若年ノ間、久逸御同心ナサレ、久志摩ヘ御入供衆、中宮又右衛門・池上又左衛門・平田次郎兵衛・堀之内日向、都合式拾人、サレトモ、後ニハ違變有テ、又如伊作帰城シ玉フ、然トモ、是久ノ女ハ、貞女兩夫ニ不見トテ、則善久ノ跡ヲ追イ、伊作ヘ馳越、元ノ如ク縁中有リ、然ニ、善久ハ、二十歳計マテハ世継ノ子ナシ、去ニ依テ、十九ノ初春ヨリ金峯山ヘ深ク祈誓ヲ掛ケ、毎月丑ノ時參詣不怠コト三年、成就ノ辛亥十二月十二日之夜、金峯山小野ニ於テ、山伏七人不圖出合申ケルハ、善久子孫望カ可相叶ト、行方シレス失ニケリ、翌年^己正月元日之夜、善久ノ室夢想有リ、枕上ニ山伏立寄、腹ヲ三度撫ケルト見ルニ、夢サメヌ、其年ノ菊月廿三日之曉天、男子御誕生、御名ヲ菊三郎ト号ス、其後、善久廿四歳、明應三年^甲卯月十八日逝去也、夫ヨリ、善久ノ後室・久逸御夫婦、菊三郎君ヲ寵愛養育有テ、明應七年^戊二月十五日、御年七歳ニテ海蔵院ヘ御登山、久逸御夫婦、善久ノ後室海蔵院ヘ入セ玉ヒ、伊作ノ諸臣ニ酒ヲ賜フナリ、菊三郎君御学文無類ニシテ、御年十五ノ八月初五山下山有、諸臣

喜ヒ申事限リナシ、其故ハ、明應九年^庚十月十一日、久逸於加世田戰死有テ、伊作城明ヌル故ナリ、斯リケル処ニ、菊三郎君之御母堂、容顏人ニ越ヘ然モ御真心之由、田布施之一瓢齋聞召、以使御縁與有度出、再三雖被述、混ヲニ志ヲ違ヘス、御返事モナシ、一瓢齋ノ室ハ、出水之島津筑後守女也シヲ、離別有テ、又善久之後室ニ、一瓢齋ヨリ縁組ノ支ヲ述ラル、其時御返答ニハ、貞女兩夫ニ雖不見、菊三郎ヲ世継ニ成サル、ニ於テハ、免モ角モ御心ニ應スヘキ由、御返事アリ、一瓢齋此由ヲ聞召、我年老ニ及ト云ヘトモ、未世継ナシ、是幸ナレハ菊三郎ヲ猶子ニ可定、今ヨリ以後、雖有直子、此約違變有間數旨、誓紙ヲ成シテ被遣、後室披見被成、一瓢之心底雖無疑、諸臣ノ心中如何、難計ノ由被仰ニ依テ、家臣各誓紙ヲ書テ進上ス、其後、々室田布施ニ至テ婚縁有リ、是ヨリ先、阿多ノ士ハ和泉ト志ヲ合セ、明應四年^乙卯六月廿九日、隅州帖佐ヲ掠取ケル由、忠治公聞召、^丙和泉城ヲ攻玉ヒ、敵落去シテ、阿多ヲ差テ馳行ケルニ、元ヨリ彼面々、和泉方、一瓢離別ノ事ヲ讒憤ニ存シ、田布施ニ出仕疎クナレハ、永正九年^壬三月二十四日^日、阿多退治有テ、同六月和睦ス、然レハ、一瓢阿多ニ移住有テ、伊作・田布施・高橋・阿多四ヶ所ノ主ト成玉フ、

邊川與實久之謀事

隅州帖佐之城主邊川筑前守^{山上}、ハ、當家譜代ノ旧臣ニテ有ケレトモ、實久カ叛逆ニ与シテ、帖佐ノ内木城・新城ヲカマヘテ、太守ヘ仇ヲ奉レハ、忠良是ヲ誅戮セント、大永六^丙十二月七日

両城二押寄、卯時ヨリ矢合シテ、汗馬東西ニ馳セ相闘、敵ノ大将
島津善左衛門尉實之・窓禪寺ヨリ討テ出、敵味方七八度迄掛合セ
戦ケルニ、味方ノ兵岩本壽才、善左衛門カ乗ケル馬ニ混タト取附
引落シ、押ヘテ頸ヲ搔タリケル、其外戦死スル者数ヲ不知、其日
酉刻新城落去シヌ、邊川討負逃ントスルニ、或堀ニ落入、或柵木
ニ身ヲ突傷テ殞命、折節、暴風異ヨリ起ツテ猛火天ニ揚レハ、焚
傷スル者多ク、喚キ叫フ声山岳ヲ動シ、目モ當ラレヌ次第也、暫
時之間ニ、男女五百余人ヲ踏殺シ、骸ハ戦士ニ充滿シタリ、古語
曰、屍填臣巷之岸、血滿長城之窟、無貴無賤同、為枯骨者此謂也、
夫自滅之慶、自天為之、豈有疑乎、斯テ帖佐掌握ニ入シカハ、下
野守昌久地頭タラン事ヲ望ケレハ、其意ニ應シテ、彼地ヲ昌久ニ
免サレタリ、

忠兼公隱居于伊作後變約事 忠良復伊作事

忠兼公ハ、重テ伊集院ノ地ヲ忠良ヘ授玉フ、故ニ、同十二月十二
日、忠良伊集院ヘ馳越、彼地ヲ領シ玉ヒ、翌天永七年丁亥二月十
八日、伊作・谷山之士民ヲ伊集院ヘ移サレハ、忠兼公福昌寺大鷹
和尚ヲ忠良ヘ遣サレ、又三郎雖為幼少、其器量國家之樞機、人物
ノ父母トナリテ、政治安穩ナラン事無疑、忠兼ハ遐世、偏ニ身ヲ
安シ、老ヲ忘度候ト、懇ニ仰ケレハ、忠良是ヲ承リ、サラハ先ツ
隱所之地ヲ定メ、忠兼公ヘ獻シ奉ント、帖佐・加治木・伊集院・
市來ヲ撰ヒ、此間イツレノ地カ、御意ニ叶ハセ玉ント申候ヘトモ、
此四ヶ所ハ忠兼公御意ニ不叶、サレハ阿多・田布施・高橋・伊作
ハ忠良カ先祖相傳ノ地ナレトモ、其中伊作ノ地ヲ撰ヒ獻シ奉レハ、

忠兼公同年四月十五日、田ノ浦ヨリ船ニ乗り、谷山ヘ赴セ玉フ、
忠良モ御供有テ、明ル日伊作ニ至リ玉フ、同月廿九日、忠兼公御
法鉢有ケレハ、忠良ニモ鹿兒島ニテ剃髮アリ、法号ヲハ日新ト付
玉ヒケル、ケ様ニ國家ノ安全ヲ開カレケルニ、島津下野守昌久、
伊地知周防介父子謀反ノ聞得有ケレハ、忠良不易事ニ思ヒ、其身
雖為遐世、以後之大事ナレハ、差置ヘキニアラストテ、同年五月
六日、加治木ヲ發シ、同七日、周防介父子并ニ昌久ヲ殺戮有ケル、
サテ、忠兼公此謀叛ニ恐怖シ玉フ折節ナレハ、忠良公心ニ思ヒ玉
フハ、加治木・帖佐兩所ノ間ヲ、忠兼公ノ隱居所ト成サハ、鹿兒
島之藩籬ト成テ憂少モナカルヘシ、此意ヲ忠兼公ヘ奏セント、加
治木ヲ發シ、舟ヲ戸柱ニ繋ラレケルニ、兵船ト覺シキ數百艘之船、
海上ニ漕運子、夥シク見得シカハ、何事ソト令問玉ヘハ、則曰、
忠兼公ハ實久ト志ヲ合セ玉ヒ、已ニ忠良之領日置・伊集院諸軍ヲ
遣シ、両城ヲ責サセ玉フト承ル、必今夜ノ中ニ落城センハ無疑候
ト申ケレハ、忠良不思議ニ思召、我志ハ全異心ヲ存スルコトナキ
ニ、無心元事也、則伊作ニ馳參、忠良カ愚意ヲ聞ントテ、既ニ打
立ントシ玉ヒシニ、從臣各中ケルハ、爰ニ於テ伊作ニ參候シ玉ハ
ンコト、可然トモ不存、先ツ田布施ノ如開セ玉ハンニ不如ト諫メ
ケレハ、尤トテ、夜ニ入テ湯越ノ峯ヲ打越ヘ、直ニ田布施ニ向テ
退玉フ、同十五日、又三郎貴久公モ密ニ鹿兒島ヲ發シ、田布施ニ
赴ントシ玉フニ、實久カ与黨ニ手ニ分テ追掛ケ奉レハ、危難ヲ遁
ルヘキ様モナク、鹿兒島ノ内、小野村園田清左衛門カ家ニ馳入、
深ク頼セ玉ヘハ、園田志有テ、最安ク忠召玉フヘシト領掌シ、我
居所ノ地に聖ノ宮建テ玉ヒケルニ押籠奉リ、左アラヌ鉢ニテ有ケ
ルニ、敵ハ大勢園田カ居所ニ乱入搜シ求ルニ、園田申ケルハ、今

夜、栗野之道路ニ當テ、夥ク大勢ノ人声ヲ聞候ヒシ、若シ此海道ニカ掛セ玉ハン、尋玉ヘト、申ケレハ、敵ハ案ニ落テ、彼路ニ向テ思々ニ引退ク、

貴久公ハ其間ニ田布施ニ向テ落玉フ、御供ノ人々ニハ、山田伊豫守・木脇大炊介・川越民部左衛門・永井善左衛門・鎌山筑前守・園田清左衛門・井尻九郎等ナリ、斯テ

又三郎貴久公、中途ニテ此事ヲ思召ケレハ、我忠兼公ト父子ノ約ヲ成シ、縦ヒ違乱ニ及トモ、少モ忠兼公ヲ背ヘキニアラス、サラハ、伊作ニ至テ思ヒノ程ヲ述ラルヘシト、則伊作ニ參候シ、件ノ旨ヲ聞キ玉フニ、忠兼公對面有テ、仰ケルハ、貴久父子ノ契ヲ不忘、我ヲ訪コト神妙ナリ、於我全ク秋毫ノ誤ナシ、只實久任我意國家ヲ乱サントシケレハ、士民共ニ憂ニ沈ム時節ナレハ、無力父子ノ約ヲ變シケルト、拭涙ヲ、三日、貴久公ヲ留置、設宴懇意ヲ成シ、同十八日、田布施ニ餞送シ玉ヘリ、此時、實久漫ニ操芥カ權ヲ踐ミ、陰ニ挾、忠兼之柔弱、陽ニ尊忠兼奉之、再ヒ鹿兒島ヘ入シメ奉リ、今年六月廿一日、忠兼再為守護職ト鹿兒島ヘ入セ玉ヘハ、實久容易伐伊作手裡ニ握ン事ヲ諜ケル、此事隱アラス、忠良聞召、會稽之恥ヲ雪ント、頃ハ七月廿三日之夜、潛ニ田布施ノ城ヲ忍出テ、永泉庵ノ下ニ着玉ヒシカ、未ニ更ナラス、金峯山・小野ノ嶺ニ廿三夜ノ月サヤカニ照シ、白昼ノ如ク、諸軍モ皆勇ミ進テ馳集ル、角テ、石牟礼妙見ヲ三拜有テ、神前ニテ旗ヲ舉ケ、其夜半ニ伊作ノ城ニ押寄、喊ヲトツト作りケレハ、城内驚キ騒キ、馬物具ハト馳廻ル、西ノ城ハ市來ノ軍兵固メタリシヲ、悉ク討取、卯ノ刻ニ及落去シケレハ、味方ノ勢勝時揚ケテ勇ミ進ム、

伊作出來記曰、貴久公鹿兒島ヘ、御入ノ時御供ノ衆、松崎飛彈

守・滿留吉左衛門・池上但馬・折田淡路・吉田肥前・河越三左衛門、晝夜御腰元ヘ被召置、然処ニ、忠兼公

貴久公ト御隔意アリ、

貴久公ヲ殺害可有之由、下男聞付、伊作ヨリ御供ノ衆ニ申通ス、是故ニ、夜人

貴久公ヲ密ニ守護シ奉リ、主從七人、右下男御案内仕、鹿兒島ノウラ小野ト申所ノ聖ノ宮ニ、

貴久公ヲ隱置ク、追手ノ者トモ御跡ヲ尋子馳參、彼大宮司武略致シ、打手ノ人々ニ向イ、誰トハ不知六七人之声ニテ、栗野海道ヲ尋通タル由、誠敷申ケレハ、追手ノ者トモ不審ニ思ヒ、大

宮司ノ家ノ内ヲ見斷シ、サテハト心得、行方ヲ尋テ引退ケル、

此時、敵聖ノ宮ヲモ搜サント來リケルニ、宮中ヨリ山鳩飛出タレハ、鳥ノト、マリ居タル所ニハ人ハ居マシトテ、去ケル

ト云々、是豈人カノ及所ナランヤ、殆天授乎、

其後、人目ヲ忍

貴久公ヲ奉守、大永七年^{丁未}六月十五日、山路傳、伊集院竹ノ

山ニ入、夫ヨリ春山御狩倉内ヲ通り、伊作ト谷山ノ境柳カ谷ヘ出、伊作之場買之ノホセヲ登リ、鬢石ヨリ日添ノ尾、伊作ト谷

山ノ境芭蕉ノ流合、夫ヨリ牛ノ河路ニ出、金峯山ノ後ニ出、伊作ノ湯ノ元ヘ無恙御出アリ、此旨

日新公聞召、御立腹被成、縱令鹿兒島ノ土ト成トモ、左様ニハ振廻ヘカラス、早ク忠兼公御許ヘ差越、尋常ニ致サレ、可帰ラル之由依被仰、

貴久公又御越、尋常ニ御暇乞有テ、御帰城アリト云々、

世祿記曰、伊作城攻、致敬於石牟礼妙見、遂揚旗於神前、而夜

半攻伊作東城克之、西之城ハ市來之衆守之、卯時攻破之、得勝
利矣、云、

南郷落城山田某被誅事

忠兼公ハ、再守護職ト成テ鹿兒島ニ居城アリ、享祿元年^{戊子}、勝
久ト改名成サル、薩州南郷ノ城主桑波田孫六ハ、先年、南郷ヲ忠
兼公ヨリ、忠良ヘ授ケ玉ヒシ刻、忠良ヘ屬シケルカ、天文二年
^{癸巳}二月十日、最前ノ約ヲ變シ、又勝久公ヘ參ケレハ、諸兵怒ヲ
含ミ恨ヲ報ント、同年閏三月晦日、南郷ノ者共カ鹿狩ニ出、一人
モ居サリケルヲ、伊作住人門松新弥左衛門見立テ、則伊作ノ城ニ
注進申ケレハ、此隙ヲ以テ攻ラルヘシト、潛ニ評定終テ、伊作ノ
衆兵キノイ進テ、南郷ヘ押寄、暫時ニ攻落シ、掌握ニ入シカハ、
其後南郷ヲ永吉ト改玉フ、同年八月十四日、勝久公ハ忠良ヲ討玉
フヘキ謀アル由、園田後藤兵衛潛ニ是ヲ聞付忠良公ヘ申上ケレハ、
實久公其夜ヨリ永吉ニ打入、城ヲ守リ玉ヒ、忠良ハ田布施ヨリ軍
士五十余騎ヲ引卒シ、敵路ヲ横ニ遮リ、數十人生捕、悉ク首ヲ刎
テ梟ラレタリ、山田民部少輔ハ前非ヲ悔テ、巳ニ日置ノ郷ヲ
忠良ニ獻ス、サレトモ、又如何ナル異心ヲ狹ムコトモヤ有ラント、
伊作ノ内佛坂ニ山田ヲ呼寄テ、誅戮ス、
箕句記曰、日置城主山田民部少輔有高、改前福被參相州、則伊
作・田布施ノ人数ヲ差遣シ、令日置庄知行、然トモ、見前桑波
田カ振舞ヲ後車ノ誠也トテ、同廿四日、民部少輔有高ヲ被討、
昔ヨリ、敵將請降者助ケテ莫殺之ト云フ、是ハ無下ノ事也ト、
人々申ケル、此民部少輔ヲ被討、先年

貴久公鹿兒島 御出ノ時、是非可奉討之、助之、可似牧虎狼ト
云テ、強テ企ト云ヘトモ、諸家ノ侍不許之、全 御命、遂ニ成
當家之家督玉フ、御違ノ末コソ曰出キ、

日新公ハ、忠兼ヲ敵ト成シ玉ヘハ、實久以下一門諸卒ノ大敵ヲ
防ンニハ武略ニ不如、有高ヲ誅セハ、後ニ降參ノ者疑其心叵如
何ナラン、罪ヲ緩スルハ將ノ謀也、莫討之ト宣ヘトモ、阿多加
賀守・鎌田刑部左衛門ナト申ケルハ、彼ハ無骨ノ兵也、若又致
二心、相州家可危ト云テ誅之、雖然、其子藏人遂ニ被召出、
被行恩賞也、

伊作由来記曰、日置之城主打時ノ衆、

龜山之臥草

弓削・久松・宮内・宮下・兒玉・黒川・門松 池田 花房 高
山 萩原 重信 大寺 寺原 竹下 岩下 東條 重久 藤崎
ヤ、ウスノ臥草

三石 青野 肥田 丸田 丸山 坂元 野村 兒島 伊勢 濱
田 前田 吉田 野元 河村 福島 河畑 長田 宮里 上原
搦手ノ口臥草

田尻 床波 向井 伊東 木脇 東郷 鎌田 池上 篠原 高
崎 堀之内 満留 松崎 大久保 窪田 寺師 西田 山ノ内
柳田

右之外、相殘人数ハ皆御城ヘ罷有也、

同記曰、天文二年^{癸巳}十二月廿二日、日置ノ城主山田ヲ、伊作
佛坂ト申所ニテ打捕申、其時之使者、池上伊豆・松元三七也、
即時ニ日置ニ押寄、城ヲ請取、

川上大和守諫勝久公後遭害并遁于豊後支

去程ニ、勝久公ハ再ヒ守護ニ成玉フテヨリ、弥権威ニ誇リ、邪曲年々ニ重リ、賢臣ヲ追ヒ佞臣ヲ親ミ玉ヘハ、末弘伯耆守・小倉・竹内・碓山等ノ者共、元ヨリ佞奸ノ近臣ナレハ、我意ニ振舞、悪ヲ進メ、亡國敗家ノ黨賊ナレハ、川上大和守ヲ始、譜代ノ舊臣都合十六人、各名判ヲ連子テ諫言ヲ成シ、實久ニ依、勝久公ニ獻シ奉レハ、大ニ怒テ用イ玉ハス、故二十六人ノ旧臣手ヲ空フシテ居タリケル、斯テ各密ニ熟談シケルハ、末弘・竹内・小倉・碓山等ノ逆臣、動モスレハ君ニ患ヲ進ム、國家傾覆之基此四人ニ有、此者トモヲ誅戮シテ、其後諫申サント、明ル天文三年^甲十月廿五日、谷山之皇徳寺ニ於テ、末弘伯耆守ヲ殺シケル、勝久公大ニ驚セ玉ヒ、衿邊^{勝久公之}ヲ差テ落行玉フ、同四年^{乙未}、勝久公又潛ニ鹿兒島ニ歸城有、初諫ノ梁川上大和守ヲ殺サレケル、其外連判ノ面々、其禍遁難ケレハ、實久モ亦、勝久公ヲ背キ、已ニ鹿兒島ニ乱入、城外村市悉ク焼拂シカハ、一七日カ間ハ炮煙天ニ漲リ、貴賤上ヲ下ヘト騒ギケル、勝久公是ニ劫レテ、同年十月十日、隅州帖佐ニ向テ落行、亦邪答院・北原ヲ頼ミ、偏ニ此両家ニ身ヲ托玉ヘハ、夫ヨリ鹿兒島ハ實久之計イトハ成ニケル、翌年ノ夏ニ至テ、勝久公身ヲ置セ玉フ所ナク成果玉ヘハ、日州真幸院ニ至リ、般若寺ニテ年月ヲ送セ玉ヘトモ、心ニ任セ玉ハス、又般若寺ヲ出庄内ニ至リ、北郷讚岐守ヲ頼ミ、暫ハ居玉ヘトモ、愛ニモ不得居、力不及、豊後國沖濱ニ落行玉フ、哀ナリシ事トモ也、豊後國ハ、大友氏之領也、大友氏ハ勝久公ノ母家ナリ、

陷伊集院之諸城事 忠良君會實久後陷加世田城事

天文五年^{丙申}三月七日、^{誠節}忠良君御父子三人、伊集院之城ヲ陥ンコトヲ謀テ、同年九月廿三日夜、伊集院大和守忠朗ヲ大将ニテ、先ツ大田原之壘ニ押寄セ、即時ニ攻落ケレハ、同十一月廿八日、敵土橋勘解由左衛門長崎之壘ニ火ヲ掛ケ、桑波出孫六左衛門・鯨嶋某兩人ニ依テ、降參ノ由ヲ申、忠良君之麾下ニ屬シケル、同月廿九日、有屋田某・關某・否笠某降スヘキ由、神殿ノ壘ヨリ申ニ依テ、發向有、折節、大雨頻ニ降テ、日暮暮、諸卒前後ヲ忘レケルニ、不思義ヤ、初ハ螢火ト見ヘテ乱飛シカ、其火蠟燭之如ク燃上リ、白晝ノ如ク、諸勢押行先キニ光渡リケレハ、是ヲコソ稻荷大明神感應擁護之瑞相ヲ顯シ玉フ驗シ也ト、諸軍頼母數三拜申ケルカ、果シテ十二月七日ニハ、石谷伊賀守降參ス、明レハ天文六年正月七日、竹ノ山ノ壘ヲ攻ラレケルニ、入米院彈正大勢ヲ率來テ、味方ニ力ヲ合^{味方ハ實久公領人ノ領也、他ノ勢來助ケルコト始テ此}ケレハ、弥大勢ニ成テ競ヒ進ミケルニ、肥後助西ヲ始敵十二三人ヲ討取、同二月、福山・大廻ノ壘トモ悉ク棄テ降シケレハ、是ヨリシテ、谷山・鹿兒島ニ支タル實久カ軍兵モ力ヲ失ヒ、二月七日、川辺サシテ逃去リケル、同月十一日、本田某カ軍兵、東條出羽守ヲ大将ニテ、鹿兒島ニ乱レ入、福昌寺ヲ始メ諸寺諸社ヲ討破リヌ、四月上旬、實久加世田ニ差越、城ヲ固メ居住アリケル、忠良君ハ國家總カナランコトヲ思玉ヒシカハ、實久ト和睦ヲ成サハ、士民共ニ安カラント、忠良君加世田ニ馳越對面有リ、件ノ旨ヲ述ラレテ、鹿兒島・谷山・伊集院・吉田四ヶ所ヲ實久ニ遣スヘシ、御邊領土加世田・川辺兩所ヲ予ニ与ヘ玉ハ、夫ヨリハ互ニ水魚ノ交リヲ成サン、然ニ於

テハ、誰人カ三州ニ於テ此ヲ悔ル者アラント、理ヲ尽シテ宣ヘトモ、實久敢テ承引セス、アマツサハ邪筈院ヲ相語ヒ謀略ヲナスノヨシ、其間ヘアリ、受太刀ニ成テハ不叶トテ、天文七年十二月廿八日、日新君御父子三人、酉ノ刻、己ニ打立ント酒肴ヲ備ヘ拳盃ヲトシ玉フ時、面前ニ蜘蛛糸ヲ牽テ落下ル、是希代ノ瑞也ト宣ヒテ、軍兵ヲ勇メ打立玉フ、加世田ハ追手ニ五ツノ楯アリ、要害ヲ構ヘ用心稠シカリシカハ、

貴久公ノ御舍弟右馬頭忠將ヲ搦手ノ大将トシテ、思ヒ寄サル内チニ兵ヲ差廻シ、廿九日ノ寅ノ刻ニ、忍々ニ押寄テ、時ノ声ヲ發シケレハ、城内驚駭テ奔キケルヲ、急ニ攻寄ケレハ、木城ヲ攻破リ、乘機ニ競ヒ進ム、于時味方ノ兵富松左京亮先テ衆ニ進出、大山宮内少輔ニ掛合セ、暫ク戦ヒ、引組テ差違ヘテ死ス、阿多飛彈守是ヲ見テ、後レシト城中ヘ走リ入、敵ノ大山内藏助ト暫戦ケルカ、是モ勝負不分、二人トモニ戦死ス、其外之敵兵トモ決死碎力ケレハ、忠良君ノ御勢、織リ路ヲカヲ合セ戦ケレハ、不日新城攻破リ、敵三十四人枕ヲ双ヘテ討レケリ、斯リケル処ニ、敵ノ中ニ相徳ト云者有ケルカ、戦ノ半妻ヲ中途ニ送り、直ニ城中ニ馳帰リ、死狂イニ戦ヒケルカ、是モ終ニ討レヌ、昔ヨリ、身ヲ忘殉國ハ男子武士ノ志也、敵ナカラモ哀レ成ケル次第也、此實久ノ方ニ、谷山藤左衛門・吉富吉左衛門ナト戦死ス、此時相支テ暫息ム、其後太寺筑前守・鎌田加賀守ハ、川辺・山田ノ兵ヲ率テ新城ノ勢ヲ助ントシケルニ、

貴久公躍出テ追討セント進ミ玉フ処ニ、敵兵トモ後ヲ遮リ、貴久公已ニ危ク見ヘ玉フニ、右馬頭忠將馬ニ鞭打テ馳出大ニ戦ケルニ、味方ニ戦死ノ人々ニハ、市來備前守・猿渡与一左衛門・税

所助十郎・本田九郎・蒲池帯刀左衛門・同左衛門四郎等、骨ヲ碎戦、皆其場ニ討レニケル、

箕谷記曰、大寺越前守・鎌田加賀守卒河辺・山田ノ人数、其翌日ニ寄来ル、

貴久公即打出、河辺・山田ノ者トモ、未両家ヲ候フテ催促迄ニ来ヲ、追詰々々討玉ヘハ、足ヲ不留落失ケル、餘リニ遠追シ玉ヘハ、敵モ遮跡、己ニ危ク見ヘツルニ、忠將拳レ鞭ヲ合テ馳ツ、キ、敵ヲ中ニ取箠テ前後ヨリ攻ケレハ、敵ハ戦悪ンテ、其場ニ多ク被打ケリ、市來備前守・猿渡与一左衛門・本田九郎・税所助十郎・蒲池帯刀左衛門・同左衛門四郎・知寛四郎左衛門尉、其外以下ノ輩多ク討ル、入道日新公、彼加世田ハ祖父河内守留レ屍地也、今吾其血散旧憤鬱、云、

伊作由來記曰、忠良公ハ加世田御手ニ不入豈憤リ思召、度々加世田ニ御入ナサルト云ヘトモ、敵用心稠シキ故ニ、御身ノ上危キコトトモ両度有之、其後ハ伊作任人普代ノ臣下松崎大藏・満留郷八左衛門兩人、加世田方聞取トシテ、毎夜加世田ニ忍人、見切ノ者山ノ内、乞食ニ様ヲ替、加世田方行脚仕也、然処ニ、天文六年丁酉十二月廿九日、加世田方油断ノ体ヲ見立、右三人急ニ罷帰リ、伊作御城ヘ此段申上、其夜押寄セ、加世田落城スル也、

同記曰、此城攻ノ時、御家御代々鎗流馬ノ御誓願有之、云、

貴久公谷山御征伐并市來城落去之事

天文八年己亥三月十三日、薩州谷山紫原ノ凶徒悉ク討平ケ、明ル日、

貴久公ハ平田式部少輔カ守タル苦辛城ニ入セ玉ヒ、翌日、守兵ヲ本城ニ置玉フ、サレトモ、僅十日ノ前後ヲ過シ、神前之衆悉ク和睦ヲ求メ降ケレハ、城主ハ谷山駿河守、及伊集院山城守・松崎丹後守ヲ始、其外ノ軍兵皆麾下ニ属シケレハ、同廿八日、忠良君兵ヲ卒シ、川辺古殿ノ地ニ押寄セ玉フ、則高城ノ城主鎌田加賀守降シケレハ、其余族中途ニテ忠良君ニ見ヘ、夫ヨリ高城ヲ新納伊勢守ニ預玉フ、去ニ依テ、鎌田治部左衛門カ妻子ヲ質ニ出シ、田布施ニ遣ケレハ、其翌日、本城平山モ落去シヌ。是モ又、伊勢守ニ命シ城ヲ守ラセ玉ヘハ、諸卒悦勇ンテ太平ヲ唱ケル、斯テ天文八年閏六月十七日、

貴久公大軍ヲ率テ市來ニ發向シ、平城ニ押寄セ玉フ、同廿七日、市來大日寺ノ前ニ落シ合セ相戦フ、喜入撰津守忠俊・柘山安藝守善久・蒲生宮内太輔ナト粉骨ヲ尽シ戦ケル間、味方乘勢勇ミ進ミケル、折節、入來院石見守重俊大軍ヲ率來リ、悦ヲ奏シ帰ケルカ、從軍ヲ置テ餘族ヲ防セケル、佐多・頼娃・蒲生・種子島等ノ旁モ、暫留滞シテ凶徒ヲ防キケレハ、其外称寝・肝付・伊地知ヲ始、究竟ノ面々馳統キ助勢、決死戦ケル間、市來失利落去シヌ、此時、大將右馬頭忠將本城ノ搦手ヲ討敗リ、勢ヒカ、ツテ勇マレケル、爰ニ串木野ノ城主川上彦三郎ハ、未幼シテ頼方ナク成シカハ、同廿八日ノ曙、福嶋ノ某ヲ以、串木野ノ城ヲ
貴久公ニ獻スヘキ由ヲ申ス、篠原氏カ嫡子未タ幼キ小童ヲ質人トナシ携來レハ、同廿九日、新納常陸守モ本城ヲ降テ味方ニ參ケレハ、其威風艸ノナヒクカ如シ、

箕句記曰、天文八年三月十三日、於谷山紫原、相・薩兩家ノ者トモ互ニ相戦ト云ヘトモ、實久勢敗北セリ、其翌日、平田

式部少輔カ谷山苦辛城ニ

貴久公ヲ奉請、是ハ川辺ノ地頭職安房守平宗康カ子也、實久普代ノ為家臣、然ニ日新公密ニ可相語ノ牒狀再三ニ及、日新公御妾腹ノ娘ニ、式部少輔ヲ嫁シテ肩腕トモ可相成之旨、類ニ雖被仰遣不承引、然ニ、此事薩州ニ相告ク、彼レ實ハ雖有不事ニ君賢旨、相州以相謀ラハ、遂ニハナトカ不相順、先ツ是ヲ可誅トテ、竊ニ計ノ由風聞ス、式部少輔其難ヲ遁シニハ、相州方ニ參ンニ不如トテ、苦辛城ニ奉請入、

同記曰、爰ニ實久方市來地頭多田紀伊介頼益ト云者アリ、同弟与一左衛門尉トテ、久ク、日新公ノ在家領ニ、伊集院大和守彼ヲ近付テ云、兄ノ紀伊介可參、當家ノ旨相計可申、忠賞ハ望ニ可任、是忠良ノ仰也ト申サレケル、君命ニ任セ、密ニ忍テ、先ツ稻荷ノ大宮司塚田カ許ニ往テ、稻荷宮ノ修理ニ事ヨセ、多田紀伊介ヲスカシ寄セ、此事ヲ告ニケル、紀伊介少モ不承引、弟与一左衛門ヲ散々ニ怒テ、汝今度ハ命ヲ助クルソ、再ヒ勿來ト、眼ヲ大ニ肝背シテ被出タリ、与一又ニ言ト云事アタハス、竊ニ其所ヲ忍出ツ、塚田カ下女是ヲホノキ、他所ヨリ常々通ヒ來ル男ニ語ケル、其夫則平出水ニ差越テ、紀伊介謀叛之企有、早ク不ハ討是、相州方ヲ引入テ由々敷御大事ナルヘシト申ケル、然ハ、早速ニ可退治、去ナカラ、其色見セテハ悪カリナシ、折節、相州ヨリ市來ノ城ヲ攻ラル、トノ聞ヘアリ、其事ニナソラヘ、催人數馳統ント、大將ニハ島津越前守、新納常陸守、其外侍數十人、其勢三百計市來ヘ馳集リ、多田紀伊介ヲ方便出シ、輒ク是ヲ討ニケル、塚田伊豆守是ヲ聞、稻荷御正鉢御鏡ヲ取テ、相州ニ落行ケリ、即市來地頭ヲ實久ヨリ常陸守ニ与ヘラレ、多

ク軍兵相從へ、日番當番用心嚴シカリキ、然ルニ、天文八年
六月十七日、

貴久公御馬ヲ被出、市來ニ發向有、舎弟又四郎忠將・桃山安藝
守範久・喜入撰津守・入來院石見守・佐多入道半閑・顯娃小四
郎・種子島左近太夫將監・根占右近太夫將監・肝付山城守入道
省鈞・加治木入道威安・伊地知佐渡守・蒲生若狹守、其外宗從
ノ侍三十余人、其勢千余騎、市來ノ城ニ押寄テ平城ヲ攻落ス、
其俣本城ノ大手ニ押寄、各陣ヲ被取ケル、同廿七日、敵大日
寺口ニ打出ル、味方ニハ桃山安藝守・喜入撰津守・蒲生カ舎弟
官内少輔馳合、散々ニ合戦シ、無双ノ高名誠ニ普ヲノ萃ラレケ
ル、同八月四日、野頸ニ陣ヲ着ヨトテ、又四郎忠將ヲ大將トシ
テ、伊集院大和守・三原下総守ヲ武將トシテ、其勢六七百計ニ
テ、案内者ニ長井兵部左衛門相具シテ、本城ノ野頸ニ差掛リ、
堅陣ヲ取ラレケル、日々夜々ニ相戦、
貴久公御方ニ被參日々馳重レハ、城中ノ兵無為方ノ処ニ、同
廿八日、申木野ノ住人福島五郎右衛門・篠原又右衛門ト云者走
來テ申ケル様、申木野城主河上信濃守栄久御方ニ可參由申サル
如何ト思召之処、篠原カ子ニ菊千代丸トテ、十二三ノ幼童ヲ人
質ニ出シ進ラセケル、去ハ、非違義トテ、即新納伊勢守忠歳
ヲ差遣シ、申木野庄令知行、去程ニ、新納常陸守忠躬勇氣疲レ
テ、同廿九日ニ城ヲ下ル、明レハ九月朔日、本城ヲ受取テ大和
守忠朗太平ノ時ヲ作ラレケル、此常陸ハ於度々相州ニ怨讐ヲ
致者也、幸得此時テ誅戮セント、諸卒皆干戈ヲ取テ、彼カ落行
ヲ討ント相待処ニ、日新公聞玉ヒ、無ニ心者ハ實久ノ不貞土ヤ
トテ、却テ新納尾張守忠歳・本田下野守親貞ニ仰テ、新納常陸

守以下百余人舟津迄被相送、世俗ノ言葉ニ、恩ニ怨ヲ以報スル
ト云ヘル、其言ニハ相違シタリ、是ハ怨ニ恩ヲ報シ玉フ、

種子島父子不和之由、加治木攻之事

島主種子島加賀守惠時カ嫡子左近太夫直時ハ、父ノ命ヲ背キ不快
ニ成シカハ、直時ニ祢寝某与力シテ、天文十一年^{壬辰}二月廿三日、
大勢ヲ種子島ヘソ渡シケル、角テ、親時島ヲ討ントシケレトモ、
其籌策モ不叶、無程帰帆セリ、依之、直時

貴久公ヲ奉頼之由、頻ニ申之間、新納伊勢守ヲ以大将トシ、騎兵
二十四人、歩卒百余人ヲ合セ、種子島ヘ操渡ス、閏三月四日坊津
ニ至リ、同六日舟ヲ發、其夜纜ヲ硫磺島ヘソ繫キタリケル、明ル
日屋久島ヘ到着ス、角テ、直時カ父加賀守ハ種子島ヨリ逃來、我
所領種子島・屋久島・永良部ノ三島、

貴久公ヘ獻スヘキ由申サレケレトモ、
貴久公全ク人ノ所有ヲ貪ルニ非スト、終ニ直時カ父子和睦ヲ成シ
メ玉フ、然レハ、歸島ノ後救難ヲ、士卒共ニ帰帆ヲ催、輒ク其地
ヲ与ヘラレシカハ、種子島父子安堵ノ思ヲナシ、
貴久公ヲ父母ヨリモ恭ヒテ、其仁徳ニ心服シケレハ、誓紙ヲ捧ケ、
島ノ安固ナル事磐石ノ如シ、去程ニ、忠良公御父子薩ノ軍勢ヲ
牽テ、大隅國小濱ノ壘ニ到リ、加治木ノ城ニ押寄ント議シ玉フニ、
日州真幸院北原兼孝軍衆ヲ率來テ、忠良公
貴久公ヘ見ケレハ、御父子大ニ悦ヒ玉フ、其日討立ントテ、忠良
公拳盃ヲ玉フ時、天瑞アリ、三獻已ニ過テ、夫ヨリ加治木ノ城ヘ
押寄セ攻戦ケレトモ、強敵ナレハ防兼、北原周防介・泷江兵庫介

ヲ始、其外七十余人討レニケリ、

貴久公旗下ニハ討ル、者ナク、安々ト引返シ玉フ、其後、又凶徒蜂起シテ、侵、小濱ヲコト数度ニ及シカハ、

貴久公御父子、栲山安藝守ト相計テ、先ツ伴テ小濱ヲ本田ニ許シ、夫ヨリ隅州静リヌ、

箕句記曰、天文十一年^{壬寅}二月、日、栲山安藝守ノ在城隅州小濱ノ城ニ、南方ノ士卒ヲ番兵ニ籠置ル、同五日、

日新公 貴久公彼地ニ發向シ玉フ、爰ニ加治木ノ主肝付彈正忠前ニ參、相州ニ雖致軍勞、北原・渋谷等ニ語ラハレ、令謀叛セ、

依之、先ツ加治木ニ可發向トテ被相向之処、日州真幸郡ノ領主北原伊勢守兼孝カ家ノ子、真幸・吉田ノ地頭職北原周防介・渋谷兵庫允、湯之尾・栗野・横川之勢ヲ卒シテ寄來ル、

貴久公、其奴原トモ寄來レハトテ、何程ノ事歟有ヘシ、イサ蹴散ントテ、已ニ打立ント仕玉フニ、御酌參ル、

日新公杯ヲ拳玉フニ、蜘蛛ノ靈瑞有リ、誠哉、十方諸佛上、羅刹不現身、豈圖於此曠野、唯垂大悲分身化、トハ此事ソト宣ヒテ、打立セ玉ヒケル、敵雖猛卒之士早討負、北原八郎左衛門・渋谷兵庫介ヲ始トシテ、真幸ノ軍徒七十余人打滅ス、即御帰陣有テ、鹿兒島ノ御祝言万民益キアヘル也、角テ、同年十一月廿七日、

日新公 貴久公、栲山安藝守ニ被仰遣ハ、近邦ノ凶徒等小濱ノ城ニ寄來コト度々也、今ノ如シハ、若シ利ヲ失事有シ、昔北狄侵周、大王去周遷郊、遂ニ持天下事ヲ得玉リ、其上、柔却テ勝強ト云ヘハ、暫去此地、令休凶徒ノ情欲ヲ、待時至ヲ、不如討之ト宣ヘハ、安藝守十二月六日、本田二郎此地ヲ被去渡、然間、

大隅國內私曰、爰ニ大隅國內ト有ハ、上大隅内ノコトナランヤ、ノ家臣ト、夫ヨリ雖奉服

貴久公、慾ニ誇榮花極遊驕而已、

世祿記曰、此年天文十一年十二月六日、日州野々美谷北郷忠相領之、同十二年正月廿四日、忠相攻落山田、同五月十一日、又攻落志和地、云々、私曰、此事雖未廣本意之事實、國內同時之ヲ改附于此

私曰、據世祿記・擾亂記、此時北原氏ハ御方也、然ルニ、箕句記ハ御敵ト記セリ、其事矛盾ス、可再考、

山田加賀守献市成事付入來院重聰假威事

天文十三年^{甲辰}夏、山田加賀守忠廣之所領大隅國市成ノ地ヲ、

貴久公ニ献シ奉ル、肝付某此間敵攻之勤有二依テ、則市成ヲ肝付ニ与ヘ玉フ、爰ニ入來院石見守重聰、屢々士卒ヲ率テ味方ニ助力ヲ加ヘ、頻ニ忠節ヲ致セシ故、重聰之娘ヲ

貴久公ニ娶セ玉フ、重聰廣ク土地ヲ領ス、川内及伊集院ノ内郡山等ノ地、皆以テ重聰カ所有ト成シカハ、時トシテハ志ヲ變シ、國家ヲ乱サヌト計リケレハ、先ツ郡山ノ地ヲ削り取り、其罪ヲ懲シ玉ヘトモ、重聰更ニ不改前非、已ニ清生・本田・渋谷黨ト心ヲ合セ、弥逆意ヲ振ヒケル、

箕句記及世祿記曰、入來院重聰

太守之縁家ト成、君恩ヲ以テ廣ク土地ヲ領シ、却テ忘之、假主威ヲ驕邪ヲ縱マ、ニシ、剩渋谷・蒲生・肝付・本田等ニ与シ、跋扈スル事勝テ容シヤ誅ス、然栲山安藝守善久久シク隅州小濱ノ壘ニ在リ、敵中之孤城ヲ守、始終心ヲ變セス、曾テ彼輩ニ傾

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

カス、益忠節ヲ尽ス、忠臣ハ見國危ント云、是也ト、云々、

立 貴久公定為太守事 近衛殿下賜玉札御衣事 并高

祖為藤原姓事 私曰、此件以世祿記・實句記并書。

抑 貴久公先年忠兼公之統子ト成リ、雖被補守護職、忠兼公俊臣ノ言ヲ信シ悔還之、然トモ、天戒不義助道理、故遂ニ三州ノ武士奉帰服之、然ニ、居謙ニ施仁恩、責己礼義ヲ正シ玉フ、此故ニヤ未称守護、天文十四年乙巳二月十八日、豊後守忠親・北郷讚岐守時久、世祿記、島津次郎四郎忠廣、豊後守忠朝ノ子、北郷讚岐守忠相ト有。其外一門・普代、參會シテ、貴久公守護職ニ仰キ奉リ、千秋ヲ唱ヘ萬歳ヲ祝ス、此時、近衛殿下、日野左少辨資方朝臣ヲ上使トシ、玉札・御衣ヲ贈下サル、則之ヲ守護職御祝言之裝束と成サル、當家ノ高祖

忠久公三州之主ト成、薩州ヘ 御下向之時、為近衛之猶子ト、改姓藤原玉イシ冥符相合テ、誠ニ奇妙ノ因縁タリ、夫

太守貴久公ハ、其曾祖相模守友久也、友久ハ當家九代ノ太守忠國公ノ御嫡子ナレトモ、隨天運盛衰、降テ家臣トナリ、其權ヲ捨玉フ亘三四代也、今

貴久公ニ至テ始テ 大統ヲ繼玉フ、是天運循環、無往テ不復者也、國人之此君ヲ仰戴スルコト、天命ニ非ンハ何ソ如此ナランヤ、

世祿記曰、或記曰、承久三年六月、改惟宗氏為藤原、云々、且、可令早左衛門尉藤原忠久為越前國守護人事、依仰如件、承久三年七月十三日所記陸奥守平義時ノ状、以是見彼、稱藤原忠久者始此歟、不知孰是、可考、

本田驕滿 并 正八幡宮炎上之事 付 本田落去之事

私曰、此件、擾亂記・世祿記・實句記其同意、擾亂記ヲ實句記ニ比スルニ、文粗ニシテ事簡也、故以實句記書之間、以二書補之、

天文十七年戊申春、大隅又起逆乱ヲ、其由來ハ、本田紀伊守親廣ハ當家累代之旧臣ニシテ、先祖元親ニ大隅之守護代賜リシヨリ以來、代々、敬上撫下政道正シ、故ニ高ケレトモ不危、滿レトモ不濫、此紀伊守ニ至テ國郡一分ニ領シ、剩ヘ嫡子又三郎 太守之命ニ非シテ左京大夫ト称シ、政道不正、朝暮ニ翫奇物、不思民費、日夜逸遊ヲ事トシ、加之、重色貪利、不顧他嘲哂、不知亡國之基、其上去ル大永七年丁亥、背 太守之命、清水ニ楯籠リ、御敵トナリヌ、此時、八幡宮之衆徒・諸司・神官等、各御宝殿左右之構ヲ頼ミ、御壇ト名ツケ、郡中ノ人民篋居ス、本田、新納近江守ヲ相語ヒ、其勢ヲ引卒シテ寄來ル事度々ニ及、或時、小家ニ火ヲ放チ、魔風忽ニ吹掩ヒ、神社一時ニ灰燼ト成リ、多ク人ヲ滅シケル、其後、本田彼辺ヲ一分ニ領シ、徒ニ人民ヲ疲勞シ、己カ私宅ヲノミ造作シテ、曾テ不勵八幡宮ノ興立、誠ニ似嘉祐之破寺、タマ々々有一字モ、覺落テ霧燒不斷香、扉破テ月挑常住燈、

貴久公聞之玉ヒ、國中之勸化ヲ催シ、新ニ神社ヲ立サセ玉フ、其後、日新公作廿五菩薩面貌、莊嚴美麗而供養シ、國家安全ヲ祈レケルコソ曰出度ケレ、太守方ニハ斯神ヲ敬ヒ民ヲ愛シ玉フニ、紀伊守ハ士卒ヲ愛スル心タニナク、天文十七年正月十七日、無罪ニ誅伊地知又八、二月上旬、無科殺本田又九郎、刑彼爵之已ニ及十余人、不恐上不憚下、致無道事而已也、仍而、旧翁之因幡守・本田治部左衛門・野口等、并宗徒之郎徒數十人、雖加諫言、恰如

東風觸馬耳、不能止其惡行、然レハ、各不如退身ヲトテ、同廿五日、他邦へ馳散ス、紀伊守猶モサトラス、益極奢恣業、是偏二宿運之所究也、其時、姫木之城主同名刑部少輔ノ其家來島田民部丞ト云者アリ、内々思ヒケルヤウハ、彼本田ノ先祖親恒ハ、島津殿曩祖

忠久公ヲ孫算忠久公ノ御夫人ハ皇山重忠女也、親恒カ女ヲ爲重忠妻、生此忠女也ニ致、武蔵國ヨリ當國へ御供

中下ラル、其子孫代々恩賞厚シテ誇恩ニ、近年其御恩ヲ忘レ、守護ニ不忠ヲナスコト、則天道ヲ背也、縱令惣領殿ハ如此不忠ヲ仕

玉フトモ、鹿兒島へ申入、刑部少輔殿ヲ出頭サセ申サント思立、此由鹿兒島へ申入ニケリ、

太守聞召シ、島田カ中分神妙也、左アラハ、番兵ヲ籠ント、約束正ク承テ罷歸レハ、ヤカテ番手ヲ忍ハセ差越ル、島田調法シケレ

ハ、無難内へソ引入ケル、去程ニ、三月十一日、刑部少輔姫木城ヲ取構へ、上井ニ与シテ清水ニ向ヒ、始テ軍ノ手形ヲ出シケリ、

紀伊守親廣聞之、同月十三日、卒國中ノ勢寄來、姫木ヲ清水ニ對スレハ、九牛カ一毛ナレトモ、如何シケン、紀伊守打負テ引退ク、

偏二天爵蒙リ、其家可傾覆不遠歟、然処ニ、廿四日、北原伊勢守軍兵ヲ遣シ、日當山之柵ヲ攻落ス、波谷黨ノ者トモ小濱ノ城ニ寄

來ル、廻・敷根・上井等モ連々本田ト中惡ケレハ、人衆ヲ出シ、小村・濱市、其外浦々放火シテ一度ニ焼立ル、彼本田カ領内ハ八

方ニ城郭ヲ連子、東ト北ハ野山高ク、南ハ海、其内ニ数千町之田島アリ、殊ニ清水城ハ岩石數十丈聳へ、輒ク可攻様ナシ、斯ク堅

固ノ地也シニ、忽一族姫木ヨリ乱ヲ起シ、又諸方ヨリ攻立ラレ、國中如何可成ヤト、諸人肝ヲ消驚也、於爰、紀伊守長濱ヲ

太守へ奉テ、御加勢ヲ頼奉ノ由申ケル、連々疎意ノ者ナリトテ、

ハカハカ敷加勢ナシ玉ハス、是ヲ根ニヤ思ヒケン、又北原ニ和談調法シテ中直リシ、鹿兒島へ御敵ト成ニケル、然ルニ、八幡大菩薩ハ、就中當家ハ尊崇之御神也、

太守稽首シ玉フコト年久シ、忽ニ冥感應護シ玉フニヤ、社衆之長留主・桑波田ヨリ道賀沙門ヲ以、御人数ヲ宮内ニ被籠ヘキノ由申

サレケル、於此、諸卒申ケルハ、大隅ハ隔海路又山谷ヲ隔タレハ、洪谷若シ中間ヲ遮リ糧道ヲ絶タハ、進退難義ナラント、猶豫スル

処ニ、伊集院大和守忠朗兵法武略ノ達者ニシテ、忠ヲ重ンシ身ヲ輕ニスル人也シカ進出、不可移時日トテ、数十艘ノ兵船ヲ調へ、

同月廿六日出船シ、其翌日宮内ニ馳集、咲隈ノ城ヲ受取、其夜ヨリ何ツモノ御當家喜瑞之靈火見ユル支幾ニシテ、山野ヲ不照ト云

所ナシ、然所ニ、本田親廣ハ小濱ノ城ヲ洪谷ニ去渡シ、共ニ仇ヲナサントス、抑此地ハ、去ル天文十一年、桃山安藝守以謀、先ツ

本山へ去渡ス、親廣得之、雖存君恩、無程欲覆國家積惡之至、豈不亡其身、彼安藝守ト大和守忠朗兩大将ニテ、本田ヲ退治サセラ

ル、先ツ廻之城ヲ取シカハ、敷根・上井モ刃ニ血ヌラスシテ御方ニ參ケル、又北原某清水・姫木ト和睦ヲナサシメント議ル、是本

田ヲ助ントスルノ謀ニ過キス、然モ運命ノ所尽、本田曾テ不承引、剩肝付ヲカラクリ牛根ニ与シテ、欲奉傾

太守、仍テ五月廿二日、大和守忠朗案内者ヲ取テ、清水ノ新城ヲ忍落ス、親廣、邪答院・北原ニ組テ欲防戰ト、忠朗謀ヲ廻シ、同

年八月晦日ノ夜、日當山柵ヲ忍取、北原カ番兵平良尾張守・白坂助左衛門ヲ大将トシテ、其勢百余人防キ戰ト云トモ、遂攻破レテ

或ハ討死シ、或ハ落矢ケル、爰ニ薩ノ手ニ、田尻荒兵衛ト云強兵有り、忍手ノ人数ニ先立テ、四尺余リノ太刀ヲ横タへ、敵ノウ

ツマイタル真中ニ蒐入、矢庭二六七人切伏セ、弥勵氣戦ケレハ、敵敢テ不近付、其外長井軍介・松下雅楽助・上井甚左衛門・梶原藤兵衛ナト高名シテ、日當山落居シス、同年九月五日、姫木ノ主本田刑部少輔逆戈於其族、薩州之兵ヲ引入、真幸ノ番兵ヲ打ントス、折節、田尻戰場ニ馳入、思標ニ太刀ヲ打、屋ノ上ニ走リ上リ火ヲ放チケレハ、暴風忽吹テ猛烟天ヲカスメリ、此時、伊集院弥六・肥後掃部左衛門・稻留左京・宮原掃部助・宅間與八左衛門・池上隼人・奈良原源八郎ナト、葛原ニテ敵ニ向ヒ合戦シ、粉骨ヲ尽ケル間、敵終ニ降伏ス、此時、北原ノ卒ニ加藤四郎ヲ、薩ノ伊集院ヲ、送玉トテ也、日新公ノ御仁徳深重也。其翌日、清水ニ發向ス、然間、薩隅ノ軍兵互ニ靡旗旗ヲ攻戦、竊ニ惟ニ、此本田ハ不替背府君ノ命ヲ、神社ヲ焼亡シ、佛天ヲ不敬、人ハ依神德添運ト云、豈長久ナランヤ、

日新公御旗ヲ揚ラルニ、俊鷹ハタケタカ天ニ、鈍鳥潛跡ヲト云カ如ク、同月十一日、紀伊守父子捨清水、庄内へ落去ヌ、其外一族郎徒等曉星ノ没スルカ如シ、所謂、不義ニシテ富且貴ハ如浮雲、同月十四日、

太守貴久公大隅ニ 御入部在テ治隅國、慈愛ヲ郡民ニ施シ玉フニ依テ、仁恩ヲ蒙ル者、合掌シテ不拜ト云者ナシ、然ニ、彼本出ハ當家代々ノ隨臣也、親廣ハ不義ノ者ナレハトテ、其家ヲ可絶ニ非トテ、

日新公北郷讚岐守ニ相談有テ、紀伊守カ嫡子左京太夫ヲ被召出、普代ノ者ノ古キ忠義ヲ棄テ玉ハサルコト、大將ノ御心操有難カリシ事トモ也、

世祿記及擾亂記曰、忠朗咲隈ニ至リ、則乘機運籌ヲ、陥小濱ノ壘、云々、私曰、本文二ハ、忠朗咲隈着陣ノ処ニ、本田小濱ヲ

洪谷ニ渡シ、共ニ仇ヲ為ント欲トアリ、可考、

世祿記曰、五月二十二日、忠朗曰、以薩州之衆破清水新城事、豈異以石卵、雖然、本田者故旧之臣也、不忍滅絶之、乃 忠良公素意也、而不得止 忠良公發宮内、北郷讚岐守忠相相談、招出紀伊守及嫡子左京太夫、乃上和下睦而未幾、又合心於北原・邪答院、交締而作乱、於此、忠朗以謀襲取日當山之壘、云々、

私曰、本文二ハ、本田落去ノ後、嫡子左京太夫被召出ト有、

此件前後ス、可考、

同日、姫木ノ本田、此春三月、帰順シテ而與紀伊守絶、然ニ又同九月五日、姫木ノ本田逆戈於其旗而引入薩軍、討北原之番兵トアリ、北原ハ太守方ニハ敵也、其卒姫木ニ在城スルコト何故ソヤ、且刑部少輔已ニ絶其族、又逆戈於其族ニト記ルコト故アランカ、此件ハ世祿記・擾亂記・箕句記共ニ同シ、蓋姫木ノ本田彼紀伊守カ長濱ヲ 太守ニ獻セシ時、一旦与紀伊守和スルカ故ヲ以、北原カ兵毛姫木へ在番スル歟、可考、

伊集院忠朗飢肥發向之夏

天文十八年西三月十一日、伊集院大和守忠朗清水ヲ立テ飢肥ニ發向ス、其故ハ、伊東修理太夫義祐領日州山東称日向守護、嶋津豊後守忠親之居城飢肥へ出張シテ著陣、已ニ七八ヶ所ニ及ヒ、太守貴久公聞玉ヒ、然ハ可加勢大和守、卒人数飢肥ニ可發向ノ由被 仰、忠朗師サノ勝負ハ勢ノ多少不依、武略ヲ廻シ士卒ノ志ヲ同スルニアリトテ、宗徒ノ勇士三百余人ヲ相勝テ、此日飢肥ニ發向ス、豊後守ノ執事奉牟田人道々哲・日置周防介相談シ、同四月

三日、已ニ伊東カ陣ヲ追落シ、打取首三百余人、其外ノ諸陣武威ニ恐レ、次ノ夜皆引取ケル、依之、同十日、大和守掃陣セリ、

世祿記曰、天文十三年、定惠院某自豊後來、而使豊後守与伊東和平、雖然、不成、云々、

又曰、天文十四年乙巳正月廿六日、伊東結陣於飢肥之東水谷、

加治木蒲生渋谷和睦之事

天文十八年、加治木城主肝付越前守ハ、渋谷・蒲生ニ心ヲ合セ、此間鹿兒島へ参謁ノ禮ヲ止、逆意ヲ含メル者トモナレハ、

太守大ニ怒セ玉ヒ、彼三人ヲ追討セラルヘシト、同年五月廿九日、伊集院大和守忠朗ヲ大将トシテ、黒川崎ニ陣ヲ構ヘケレハ、同六月朔日、肝付モ又向陣ヲ築ケル、其間僅數百歩ニ過サレハ、敵味方ニ向ヒ合喚叫テ戦フ声、雷ノ落ルカト、諸人耳目ヲ驚カセリ、

斯テ日數ヲ経、同年霜月廿四日、伊集院掃部介陣中ニ馳向テ火矢ヲ放チケレハ、折節、北風吹起テ狼烟敵陣ヲ掠ケルニ、一時カ中ニ舍幕共ニ焼失セリ、肝付・蒲生・渋谷大ニ驚キ、防カントスルニ術ナク、今ハ早力不及トテ、北郷讀岐守・菱刈某ニ附テ類ニ降ヲ乞ケレハ、

太守聞召、其罪ヲ宥玉ヘハ、彼凶徒トモ皆旗ヲ卷テ退散ス、斯テ北郷・菱刈ハ、肝付カ父子并渋谷・蒲生ニ對面シ、此面々ヲ携ヘ、

同月十一日、各清水ニ参謁シテ、太守ノ御見参ニ入ラル、其後、貴久公率諸卒、経陸地鹿兒島へ帰下フ、於彼輩モ前日ノ怨過ヲ翻

シ、中途ニ出向テ酒肴ヲ献シ、或帷幕ヲ張り、或ハ棧敷ヲ構ヘモテナシ奉レハ、是ヨリ國家安穩ナラント、萬民色ヲ直シテ喜ヒアヘリ、

貴久公御昇進之事

天文二十一年壬子、貴久公任修理大夫玉フ、

上卿廣橋中納言

天文二十一年丁未六月十一日 宣旨

從五位下藤原貴久

宜任修理大夫

藏人頭右近衛中将美濃守源重保

蒲生渋谷攻加治木支付貴久公御父子征平松事

斯ル所ニ、肝付越前守ハ又イツトナク心ヲ變シ、渋谷ト志ヲ通シケル間、帖佐・加治木ノ賊徒蜂ノ如ク起リ來ル、其濫觸ヲ尋ルニ、入來院カ所為ナリ、彼等常々鹿兒島ニ参候シ、時ヲ伺ヒ、乱ヲ起サンコトヲソ謀ケル、其逆謀已ニ

太守洩聞召ケレハ、

太守肝付ヲ召シテ、潛ニ其心中ヲ問シメ玉フニ、肝付申ケルハ、於我少モ

太守ヲ疎ニ不奉存、只渋谷・蒲生カ為ニ惑心サレ、彼逆謀ニ与ミヌ、サレトモ、是ヨリ全ク違心ヲ存候ハシト、誓又ヲ作テ

太守ニ献シ奉レハ、蒲生・渋谷怒テ、即時ニ肝付カ居城^{加治木}ヲ取

開公、菱刈・北原モ相義シテ邪答院ニカラ合セ、天文廿三年甲寅

八月廿五日、渋谷・菱刈・蒲生大勢ヲ催シ、網掛川ニ出張シテ、

肝付三郎五郎ニ對シ相戦フ、於此、加治木方ヨリ敵四人ヲ討取ル、

味方ニハ、日當山ノ住人有川新左衛門尉・柳田左近允及肝付ノ卒

將一人討死ス、又清水・姫木・宮内・長濱ノ軍兵モ馳続キ、市口

ニテ決雌雄、清水ノ住入市來彦六・長濱之卒中村舎人佐戦死ス、

同九月十日、大隅勢打廻ラシケルニ、敵出合終日相戦、敵五六人

討取レハ、長濱ニ雜兵共ニ打死ス、已ニ大隅ノ弓箭及大破、肝付

威安入道父子抛身命忠節ヲ抽之間、為御扶助、天文廿二年癸丑三

月十三日、

太守平松ニ御發向有テ、日當平ノ地ヲ惣陣ニシテ、舎弟ノ左兵衛

尉尚久ヲ大将トシ、狩集ニ陣ヲ取セ、両陣差合ヒ平松ニ相對シ、

毎日矢軍アリ、大隅ノ陣士・足輕共西別府之村々焼拂、此時敵ニ

三人討取、味方ニモ清水ニ足輕走太兵衛、加治木三郎五郎カ郎黨

竹下外記討死ス、楮又、諸軍帖佐ノ境ヒニ進ンテ岩野原ニ互ニ出

合合戦、朝夕無隙ソ見ヘニケリ、両御陣之軍衆多勢ニテ、御陣内

逼迫之間、勢ヲ分テ、右馬頭忠將世祿記ニ忠ヲ為大将、白銀坂ニ御

陣ヲ取玉ヒ、日々合戦アリ、爰ニ加世田之任人ニ鬼塚吉内左衛門

ト云剛性ノ者アリ、岩銀之城ヲ窺察シ為ニ、黒木七兵衛尉ヲ案内

者トシテ、白晝ヲモ不顧城ノ籠ニ忍寄処ニ、敵是ヲ見付テ中ニ取

籠メ討取ントス、彼兩人剛強ノ者ナレハ、散々ニ戦ヒ追マクリ、

已ニ切通シトセシ処ニ、多勢馳重レハ、遂ニ入來院カ手ノ者共ニ

討レケルトソ聞ヘケル、就中、同晦日ニ平松ノ籠於星原、折角ノ

合戦アリ、逆徒狼心之謀ヲ回シ、催多勢伏兵ヲ企ツ、

貴久公、又四郎・忠平公御父子打出玉ヒ、縦令逆徒武略ヲ回スト

モ、何程ノコトカ有ヘキト、此時

忠平公十九歳、今日戦場之初也、イサ蹴散セトテ、軍兵ヲ卒シ、

足ヲト、メス馳入玉フ、

貴久公モ統ヒテ駆入玉ヘハ、軍旅皆一命ヲ輕シシ相戦フ、爰ニ三

原二郎四郎・大寺大学左衛門・大山織部助・河野江兵衛・木村源

五郎ナト、名譽ノ懸合シテ戦死ス、星原ノ戦ヒ烈キニ依テ、左兵

衛尉尚久勢ヲ少引分チ星原ニ差遣ス、サレトモ、帖佐・蒲生之軍

兵負色ニ成ル、味方ノ士卒是ヲ見テ、弥攻入戦ヘハ、遂ニ敵敗北

シテ逆徒多ク討レケル、尚久ハ引分タル勢ヲ以テ平松ヲ攻ラル、

サレトモ、難落ケレハ、先差置テ退レケル、其時山口太郎三郎・

有馬二郎三郎・長田太郎右衛門打死ス、然トモ、平松・星原ノ軍

味方ノ勝利ナレハ、同四月二日、逆徒等放火シテ岩銀ヲ落去シヌ、

岩銀可有在番トテ、即

忠平公・忠將大将ニテ各在番有ケル、又同十二月二日、帖佐ヨリ

敵少々出テ打廻ル、此方ヨリ少々出テ、互ニ矢軍ヲシケルホトニ

次第ニ連キ合ヒ、敵モ味方モ大勢ト成テ攻戦フ、箕倉舎人・折田

権五左衛門・小野郷右衛門ナト云者、名譽ノ合戦シタリケリ、大

將

忠平公・忠將・尚久、何レモ馳連キ玉ヒ、次第ニ烈シク成テ戦フ

程ニ、如何ナル大事モ出來ナント思処ニ、日モ漸々暮ケレハ、互

ニ引取ケル、其後日々ノ軍有トイヘトモ、差セル事ナシ、

世祿記曰、岩野合戦、加治木・姫木之兵為先鋒、春信坊并卒一

人戦死、云々

同日、天文廿三年十月二日、平松合戦之時、帖佐・蒲生・岩銀

之賊徒与我軍會戦、賊敗績、殺帖佐・蒲生之賊五十余人、於茲

殺帖佐城主渋谷河内守之嫡子西侯武藏守、其夜岩劔委去焉、我軍長田太郎左衛門尉死于此戰場、而後又挑戰者數度、故平松城已陷焉、云々、

惟新公御記曰、天文之頃、薩隅日之國民等悖逆心、令峰起方々、依之、可有誅伐逆徒出、

貴久公依御進發、先有着岩劔、逆徒亦回狼心謀、催多數企伏兵、難得勝利、予不量軍吉凶、忽卒陣中之軍兵不止足懸入追散方々、

討亡數千之強敵、得大利畢、自夫、逆徒等放火於岩劔落去、自爾岩劔三年令在番、于時天文廿二年癸卯三月晦日、予年十九歲也、

然処二、明レハ弘治元年乙卯正月、蒲生北村之人内通スル者アリ、中途ニ出合潛ニ返忠セン事ヲ告ルニ依テ、其約束ヲ堅クシ、同月廿五日、

貴久公 義久公吉田迄御出有テ、世継記ニハ吉田ヲ變シテ有同廿七日、御勢其場ニ出張ス、然ニ、敵ノ本意ハ不實ヲ構ヘ、守護等ノ勢ヲ北村ヘ

偽引寄セ、蒲生・邪答院ノ大勢ヲ以、御跡ヲ遮リ討シ為ノ陰謀也、貴久公ハ、邪答院之方ヘ深入シ玉ヒシニ、案ノ如ク敵御跡ヲ取切

リ、諸卒難ニ及ヒ敗北ス、及ニ折角一之間、退玉フヘキ様ナシ、爰ニ指宿右馬允御暇中テ立返ル、舍人ノ竹若丸見次返合テ、暫防

矢仕リ、共ニ討死シケル、其隙ニ 貴久公退キ玉ヒヌ、又弟子丸播守兼テ所難遁ヲ思ヒ取タル者ナ

レハ、是モ返合テ討死ス、 貴久公漸ク退玉ヒテ、味方敗軍也、敵ハ弥競懸テ付來ル、左兵衛

尉尚久馬ヲ引返シ戦ヒ、已ニ大事ニ可及之処ニ、右馬允カ子・指宿四郎二郎・敷根源八兵衛・福崎二郎三郎・木脇刑部左衛門・貴

島圖書介・箕匂舍人助・濱田後藤兵衛・青山太郎三郎、知覽之住

人ニ名越・池井等、輕一命横カケニ切掛レハ、敵大勢ト見テ後ハ崩セハ、虎口ノ敵ハ漸々ニ歩ミ留ル、其ヨリシテ引退ケル、又六郎歳久若年ニテ御坐トモ、名誉ノ勳有テ疵ヲ蒙ラル、味方之危北村ノ返忠トハ此事也、同日、右馬頭忠將ハ大隅勢ヲ卒シ、西之原馳連キ、陣士ヲカケ散々矢軍シテ引レケル、

擾乱記曰、弟子丸播摩守・指宿丹後守・敷根源八兵衛・福崎太郎三郎・濱田後藤兵衛・春山太郎三郎・小野郷右衛門ヲ始、知

覽ノ住人名越・池井等、究竟之者共悉ク討死ス、 太守見之玉ヒ、不勝哀矜之情、不如馳入戰場、致死報恨ヲト混

ヲニ思召レシカハ、 義久公モ共ニ勢ヒヲ助ケ、必死ヲ極メ進下フト、云々、

同日、右馬頭忠將ハ大隅ノ勢ヲ卒シ、西ノ原ノ地ニ馳進ミ、敵ノ群タル真中ニ矢ヲ放ケレハ、賊徒被殺者不知其數ト、云々、

翌廿八日、北原カ者共加治木・溝辺之ウラニ野臥ヲカクル、大隅勢不移時馳ツ、キ、敵ヲ追入、已ニ十余人討取、味方モ足輕少々

打死ス、同三月二日、帖佐別府川ニ於テ、平松勢ト大隅勢互ニ相戦フテ、敵二人ヲ討取ル、

同月八日、肝付三郎五郎、加治木・溝辺・日當山・長濱ノ者トモヲ相具シテ、帖佐・山田ニ至テ伏勢ヲ設ケテ、敵二十二人ヲ打取

味方ニハ三郎五郎カ卒將徳永与一左衛門・安田奎之允、及長濱ニ神崎大藏、其外雜兵打死ス、

同日、義久公、伊集院治部少輔・野村民部少輔ヲ使トシ、加治木ニ差越玉ヒ、右馬頭忠將・案藝守善久ニ謀ヲ相議シテ、肝付

三郎五郎ヘ告シメラル、三郎五郎則申ケルハ、先ツ正八幡宮ニ幣帛ヲ奉、神慮ヲ伺ヒ、吉日ヲ撰ンテ軍ヲ發シ、神助ヲ以戦フニ、

ナトカ敵ノ退散センコトアラント申サレケレハ、忠將怒テ、自ら不戦シテ亡ヲ待ンヨリハ、不如討敵ヲニハト、同廿八日伐帖佐、

此日ニ當テ、薩ノ軍兵別府川ノ南ニ屯シケレハ、忠將ノ隅州ノ卒ハ岩野原ニ在リ、軍ノ評儀シテ、先ツ歩卒ヲ出シ敵ヲ侵侮リ見ント、究竟ノ卒五人勝テ出シケレハ、此者共乘機ニ数千騎ノ内ヲ蒐拔、高樞之橋口ニ馳進テ敵一人討取ル、又一人ヲ生捕リ、剛氣ヲ發シ鬪ケルニ、帖佐ノ賊徒モ馳來リ、岩野原迄追掛ケリ、于時平松ヲ守ル左兵衛尚久ノ騎歩、薩ノ南方阿多郡・川辺郡・知覧郡・嶺南郡・指宿郡・松葉郡・谷山郡・俗三云南方之者トモ追々ニ馳セツ、各先ヲ争ヒ、牛渡之地ヲ取切ケ

レハ、敵進ミ兼テソ見ヘニケル、於是、敵八人討取ル、忠將ノ歩卒モ思々ニ馳來リ、敵十人討取、帖佐ノ城下ヨリ放火シテ、己ニ城門ヲ責破リ、諸兵勢ヒ掛テ相戦フ、總シテ左兵衛尉尚久馳汗馬、南方之兵盡粉骨鬪ケル間、敵悉退散ス、

又四郎忠平公、喜入三郎四郎季久、其外百余人、岩坂口ノ戦功勝テ数フヘカラス、清水ノ住人逆瀬川七左衛門・野口右京亮、笑隈ニハ上田舍人佐・給黎・田代及南方、加世田ノ住人宮原藤兵衛尉・珠阿弥等、身ヲ碎今ヲ限リニ戦テ、同枕ニ死ス、雖然、味方事トモセス、乘勝ニ長驅シテ馳向、同四月二日ノ夜、帖佐ノ新城・山田ノ城悉ク打捨テ、邪答院ニ向テ引退シカハ、北郷二郎・肝付河内守・称寝右近將監父子馳參テ嘯凱歌、閑々ト退陣ス、於是、帖佐平定ス、

世祿記曰、或記曰、七月廿四日、渋谷・蒲生之卒欲侵帖佐來、守兵追退其軍敗北而去、討取東郷將監・白濱某其外数多ヲ、云々、東郷・白濱皆渋谷一族也、

同記曰、放火於帖佐城下時、尚久戒士卒、使神社佛閣免為灰燼、

昔宋曹彬之下江南也、戒以功勿暴掠生民、故凱還之美垂之竹帛、今也、尚久之義戰亦有

按、通鑑云、宋太祖命曹彬下江南、戒以功勿暴掠生民、彬至城下焚香約誓、不妄殺更無掠取、凱還之日、行李蕭然、

蒲生退治文

去程ニ、大隅國蒲生之城主美濃守為清ハ、此間奉獻

太守、己ニ及戟楯ケレハ、御退治アラントテ、弘治二年三月十五日、

貴久公諸軍ヲ卒シ蒲生ノ城へ押寄セ玉ヒケル、此城ノ躰岸高ク、四方共ニ屏風ノ如ニシテ峻岨ノ地ナレハ、ナマシイノ勢ニテ中々陥シイルヘキトハ見得ス、サテハ、先ツ本城ヲサシヨキ、松坂ノ陣ニ向ハセ玉フヘキト相議シテ、諸軍松坂ヘソ向ケル、爰モ又要害堅固ニシテ、数百ノ敵軍甲ノ星ヲ輝シ、寄手ヲ防ント勢掛テ見得タリケル、サレトモ、味方荒手ノ強兵ナレハ、不層喊声ヲ同音ニ揚テ、三方ヨリ取囲ミ、攻上ント勢ヒ掛ル、梅北宮内左衛門先登シテ高名セント思ヒケレハ、己カ手勢ヲ引抜キ、大音上ケテ攻上ル、大将

又四郎忠平公三尺之太刀ヲ提ケ、敵ヲ牀几倒シニセント、城門ヲ攻破リ、己ニ壁ヲ刎越玉フニ、城内ヨリ逞キ強兵一人、

忠平公ヲ目ニ掛討テカ、ル、于時、

公高声ニ呼ハリ、鳥津又四郎此ニ有、強ク掛テ怪我スナト、互ニ切結テ半時計鬪玉フカ、終ニ敵ヲ討取、閑々ト引退テ見玉フニ、鎧ノ上ニ五筋ノ矢ヲ受玉ヒケレトモ、鎧ヨケレハウラカ、ス、

忠平公二十二歳、此時初テ敵ヲ打玉フ、然ル処、菱刈之城主左馬権頭ハ蒲生一味ノ者ナレハ、蒲生ニ加勢ヲ致サント、菱刈ノ軍兵ヲ牽テ蒲生ノ北村ニ陣ヲ構ヘケレハ、同年四月十五日、
貴久公ノ御嫡

義久公ヲ大將ニテ、右馬頭忠將・左兵衛尉尚久副將トシテ、北村ノ陣ヘソ押寄ル、斯テ城下ノ田畠麦作等悉ク拂捨、諸軍競進テ一同ニ攻寄ル、此壘モ山嶮ケレハ、容易責ヘキ様ソナシ、城内ヨリ差ツメ引ツメ射ケル矢雨ノ降カ如クナレハ、味方ノ軍士矢ニ中、殞命者其数ヲ知ラス、味方ノ軍ハ地卑クケレハ、幾度矢ヲ放ツトイヘトモ、サウナク敵ニ中ラス、角テハ墓々數勝負ヲ分ツコトナク、諸勢攻アクンテ只忙然トシテ扣ケルニ、

忠平公下知有テ、是程ノ小城ヲ陥得ス、徒ニ意ヲ費スヘキニ非ス、皆必死ヲ究メ攻上レト、鎧ノ袖ヲカサシ、自ラ躍出壁ヲ破リ攻上ントシ玉フ、折節、敵一人城戸ヲ開キ掛出、高声ニ呼ケルハ、兼テ音ニモ聞召玉フラン、菱刈カ手ニ楠原某トハ我事也、夫レニ扣サセ玉フ大將ハ、

島津又四郎忠平ト見ルハ僻目カ、手並ノ程ヲ御覽候ヘト、真シク
ラニ切テ掛ル、

忠平公是ヲ聞召、全ク我名ヲ偽ニアラス、
忠平是ニ有ト、躍出玉フニ、

忠平公御運強ク、楠原賊シトテ少シヒルム所ヲ躍掛テ、楠原カ真甲碎ヨト討ヒシメキ、頸ヲ取テ太刀ノ鋒ニ貫キ玉ヘハ、側ニ有ケル村田越前守・三原右京亮等究竟ノ勇士ヲ始、我先ニト城戸ヲ打破リ、火花ヲ散シ相戦テ、敵數百人討取ル、味方ニモ桃山助太郎・貴島助五郎・濱田藤左衛門戦死ス、菱刈勢討負、既ニ其身モ討死

シケレハ、城内手弱成テ防ヘキ様モナク、僅ニ残ル者トモ散々ニ落失タリ、昔ヲ思フニ、龍巨齊ヲ救テ功ヲナス、齊ニ益ナクシテ、却テ韓信カ為ニ殺サレ、後人ノ笑ノ種子ト成ケルモ、此菱刈ニ異ナラス、

忠平公余リニ強ク戦ヒ、數ヶ所疵ヲ被リ玉ヒシカトモ、御命恙ナク本營ニ歸玉フ、角テ、蒲生本城ヲ攻ラルヘシト、評定一決シケレハ、敵是ヲ傳聞テ、四月廿日之暗キ夜、城内ニ火ヲ掛、蒲生ハ邪答院・波谷ヲ便リ引退ク、

太守蒲生御退治有テ後、比志島美濃守ニ蒲生ヲ与ヘ、地頭職ニ居置ル、松坂ハ市來内蔵助、帖佐ハ鎌田刑部左衛門政年、山田ハ梅北宮内左衛門國兼、此面々皆地頭職ヲ賜ハリケレハ、

太守凱歌シテ帰陣玉フ、於是蒲生平定ス、
箕句記曰、去程弘治二年ニ成、新玉ノ春モ已ニ過ントス、サレハ國一揆ノ余黨未多シ、是ヲ退治セサレハ國中不静トテ、宗徒ノ人々ヲ召集メ評定アル、
貴久公仰ケルハ、一揆与黨ノ中ニモ、蒲生ハ鹿兒島近キ所也、彼ヲ早速可退治トソ宜ケル、各承リテ蒲生出陣ト評定アレハ、
同二年ノ三月、

貴久公 義久公御父子御馬ヲ出サルレハ、一門ノ人々ニハ、
又四郎忠平・又六郎歳久・右馬頭忠將・左衛門尉尚久・北郷謙

岐守時久・新納近江守忠武・佐多伯耆守忠高、一家ニハ、樺山安藝守範久・河上上野守久偶・大野駿河守・同治部太輔・吉利下総守・同山城守・喜入摂津守・同三郎四郎・伊集院山城守、一郡一荘ヲ預ル人々ニハ頼娃左馬助久虎・種子島左近太夫將監時高・根占右近太夫重興・上井伊勢守兼元・敷根中務丞頼繼、

廻伊豆守頼連・比志島式部少輔國鎮・河田駿河守義朗、其外諸所地頭職人々數十人、執事ニ伊集院右衛門太夫・平田美濃守・村田越前守・三原遠江守ヲ始トシテ、都合其勢五千余騎、蒲生ノ城ヘ押寄、陣ヲ着玉ヒケル、日々ノ打廻リ、時々ノ矢軍隙モナシ、去トモ此城ト申ハ、岸高カケ嵯峨トシ、溪深シテ四方地運キナシ、輒ク攻カタクキ城也、然処ニ、

又四郎忠平ト申ハ、

貴久公ノ御二男
修理太夫義久公ノ御弟也、十五歳ノ春ノ比ヨリ、鹿兎島ノ小城権現ヲ信シ、武運ヲ祈玉フコト日々不懈、此権現ト申ハ、島津第九代ノ

太守修理太夫忠國公三州ヲ全ク治玉ヒ、天下ノ覺モ能御座テ、御逝去ノ後、不思義ノ瑞現新ニシテ、當家ノ守護神ト崇ラレ玉フ、此度ノ門出、此権現ニ參リ祈玉フ也、

忠平申上玉ヒケルハ、松坂ノ要害ヲ先ツ可攻ト存候、蒲生ハ急速ニ難落去覚候、脇ノ小城要害ヲ攻崩シテ候ハ、此城一ツニ城中ノ者トモ自ラ氣迫リ、退屈仕ント覚候、ト申玉ヘハ、尤可然ニソ定リケル、

忠平竊ニ忍テ彼要害ヲ見玉ヘハ、乱杭・逆茂木引、城戸数重立テ堅ク取構ヘタリ、乍去、
忠平罷向テ、一攻々テ見ント申タマヘハ、各其支度ヲソセラレケル、同三月十五日、御勢ヲ引分ケテ、三千余人松坂要害ニ押寄、四方ヲ囲ミ民屋ニ放火シ、時ヲ動ト揚レハ、城中ヨリモ鑿ヲ合テ防戦フ、放火・擲石降雨ノ如シ、
忠平時刻移シテ悪リナント思召、自ラ鎗ヲ取テ真先ニ進玉ヘハ、

軍兵我不劣ト攻上ル、梅北宮内左衛門ト名乗テ真先ニ切入、石打ニ堀底ニソ打落サル、寄手是ヲ見テ進ミカ子タル処ニ、大將忠平後レス攻入玉ヘハ、川上上野守・同名左近將監・新納刑部大輔・山田藏人・伊集院右衛門兵衛尉・平田將監、其外宗徒ノ人々三百余人、我不劣ト責入散々ニ戦ヒ合フ、

忠平モ軍兵ニ打交テ高名セント争イ玉フヲ、大將ト見ルヨリモ武者一騎駈出テ、

忠平ニ渡合散々ニ合戦シテ、

忠平御太刀下ニ打伏セ玉ヒ、頸ヲ取テ我身ヲ急ト見玉ヘハ、鎧ノ上ニ矢五六筋射立タリ、去トモ、鎧ヨケレハ裏カ、ス、
忠平二十二分捕始也、

忠平ノ武勇人皆感シ申ケル、何レモ宗徒ノ人々、輕一命ヲ武勇ヲ勸シケレハ、烈シキ戦ト云ヘトモ、遂ニ城ヲ攻落シ、城ノ地頭中村父子三人、其外數十ノ首ヲ打取、各高名究メツ、勝吐氣動ト作テ、其勢中々申計ナシ、即彼松坂ヲ取構ヘ、地頭ハ市來内蔵助ヲ被仰付、軍兵ヲ差遣、馬立・新城・新椿トテ三ノ陣ヲ取セ玉ヘハ、今ハ渋谷黨諸方ノ一揆通融モ不輒、蒲生城モ小脇狹テソ見ヘタリケル、又同廿一日、蒲生横口ニ敵少々打廻リ、陣中ヨリモ出合テ矢軍シケルカ、敵モ味方モ次第ニ馳重リ、烈シク戦ヒ合フ、伊集院弥六・梶原藤七兵衛・箕倉舍人・勝部主殿助・福屋善三郎城戸口ヘ攻入テ、楯ノ端ヲ切り崩シテ各合戦シ引退ケハ、勝部主殿助ハ垂ノ口ヘ射伏ラレ、即ソコニテ討レタリ、福屋善三郎ハ痛手負テソ退ニケル、同十一月十七日ニ蒲生ノ城ヨリ打出、鼠カ尾ニサ、エテ相戦フ、味方手負多シテ引退ク、去トモ、二階堂帶刀・桑波田主馬允ナト馳合セ、分捕高

名シテ退ニケル、毎度小軍有ト云トモ、城モ難落去日ヲ送ル程
ニ、弘治三年ニ成リニケリ、斯ル処ニ、菱刈ヨリ蒲生ノ加勢
トシテ、菱刈左馬権頭ヲ大将トシテ、蒲生ノウラ北村表へ打出
テ、陣ヲ取り相支ケル間、味方ノ煩ト成也、彼等何ツ迄置テタ
メロウヘキ、早速蹴拂ントテ、弘治三年四月十五日、又同音
ニ打連レテソ喰イケル、時ノ義理トハ斯ル事ヲヤ申ラン、菱刈
郎等ニ山田十郎・原小四郎・曾木筑前助・嶋田ノ新藤ヲ始トシ
テ、究竟ノ者共廿四人、枕ヲ双ヘテ打死ス、敵三百余人ノ首ト
モ切掛テ、勝吐氣作テ味方ノ競ヒ限ナシ、大将ヲ奉始、諸軍皆々
陣所ニ打掃レハ、蒲生ノ城弥力尽テソ思ヒケル、去トモ、蒲生
ノ城主堅固ニ持テ哀ルルモナシ、如今ニテハ勝負不羸行事也ト
テ、城ノ野頸ニ荒平トテ地続キノ山有、嶮岨也ト云ヘトモ、
忠平大将トシテ荒平ニ分ケ登リ陣ヲ取、次第ニ近ク取寄レハ、
城ヲ直下ニ見下シテ、日々夜々ニ攻戦フ、今ハ一揆ノ奴原モ見
次コト不能、蒲生方次第ニ力尽、退屈シテ乞降、下城シテ渋谷
ノ如ク退ケル、爰ニ物ノ哀ヲ留シハ、白尾半右衛門ト云者アリ、
於境目

太守方ニ取合、悪口過言ヲ成ヌ曲者也シカ、下城ノ刻忍通ル所
ヲハ、猿渡大炊入道見付テ、若者トモニ告知スレハ、聊不後、
押ヘテ口ヲサキ舌ヲヌキケル罪ノホト、末世之人ノ禁ニモ可成
カトソ申ケル、是ヤ此獄卒ノ身三口四意三千惡ノ罪人ヲ禁ケル
モ、此ヤラントソ覚ヘケル、蒲生刑部大輔モ遂ニハ蒙御免許、
小地ヲモ安堵スヘキ所ニ、関白殿薩戸入ノ折節、逆心ノ志アル
間、其後被打果、今ニ蒲生ノ家断ヘニケル、夫ヨリ蒲生ノ地頭
ヲ比志島美濃守ニ被仰付、吉田ハ前ヨリ村田越前守、帖佐ハ鎌

田刑部左衛門尉、山田ハ梅北宮内左衛門尉、松坂ハ市來内藏助、
加治木ハ肝付彈正忠、小濱・長濱ハ柁山安藝守ニ自領トシテ被
下、大隅表ハ、上井・下井・清水ヲハ典厩ノ御領ト成、敷根ハ
敷根中務丞、廻ハ廻伊豆頭自領トシテ被下、曾於郡ハ三原遠江
守地頭也、日當山ハ新納近江守へ賜リケル、又庄内ハ北郷讃岐
守、肝付ハ肝付河内入道省約、志布志・福島・飢肥ヲハ豊後守
忠親ニ進ラセ玉、略如此仰定置レハ、國家ノ静謐ノ至ナリ、
惟新公御白記、松坂ノ城ヲ圍玉フ同記ニ曰、蒲生城為加勢、自菱刈
取添陣、依相支、于時永祿元年戊午四月十五日、

貴久公御為大将、麓廻之難拂麦作、押寄菱刈陣攻戦、然陣高山
也、自陣放矢事、如雨降飛來、中味方壯士、自味方所射之矢者
難及敵陣、因之、軍士徒費身力、忙然而難進、予於此着甲真先
攻入、士卒得力之一同攻登、爰補原名乘而渡合、予纏頭之合戰、
終欲決勝負而暫雖相戰、終斬伏劔楠原首畢、在傍勇士又斬手討
取、於是、陣大将菱刈左馬権守自害、所立黨人數悉討亡、誠快
意不少也、雖然、予被斬疵令痛惱、受斃処之矢亦多雖有之、不
徹身也、終日之戰、矢尽力疲及深更、軍兵引退本陣、近日可被
攻蒲生出傳聞、同廿日、放火城内遂逐電畢、云々
或記曰、松坂城主中村右衛門ハ邪答院ノ親屬也、城之兵邪答院
ノ市立ニ出ルト云コトヲ梅北聞付テ、城攻有之、攻落シ玉フト
也、

島津忠兼住日州事 忠平公飢肥御在任之事

島津豊後守季久太守次豊之子修理亮忠兼ハ、文明十八年ヨリ日州

飢肥ニ居住シ、彼城ヲ守ラルニ、忠兼之孫子豊後守忠廣、世子ナキ事ヲ

太守貴久公思召、

忠平公ヲ豊後守ノ養子トナシ、飢肥ノ城ヲ守ラシメントノ命有ケルニ、日州山東伊東修理太夫義祐、永祿二年秋ノ比、宮崎郡飢肥ヘ打出、忠廣ノ居城ヘ着陣之由中來ル、

忠平公聞之玉ヒ、已ニ打立ントシ玉ヒケルヲ、

貴久公強テ留玉フ、

忠平申玉ヒケルハ、忠親ニ一旦父子ノ契約ヲ成シ、此時ニ於テ疎意候ハ、自他國ノ誹謗難遁覚候、是非ニ御暇ヲ可賜由申分ケ玉ヒ、忠親ニ加勢トシテ軍兵三百計ヲ相具シテ、永祿二年^{庚申}春、

飢肥ヘ打越玉フ也、

惟新公御自記曰、從伊東家取掛、飢肥及難儀時節、爲豊州之養

子彼地可罷越旨、承

貴久公命、誠一大叟之義、進退究此也、伊東者一國之猛勢、飢肥者一郷之人数争決雌雄哉、殊於飢肥而有名程之家臣、皆累年之弓矢遂戰死、今相殘衆其裔也、殊東薩^{薩摩}遠路也、輒難請加勢、豈不異夏虫入火、雖然、重義輕命者武士之法也、于時永祿

三年^{庚申}三月十九日、已令進發越着日州飢肥、而三年成在番中

比令帰國処、伊東卒大軍取掛飢肥之由告來之間、忽相立、又欲

趣飢肥、於此

貴久公 義久公御父子、自未明及黄昏雖有御留、一日与豊州

成親子約、當于此時、於相背者可背天道、加之、自他國之誹謗

因難遁、不顧、此ヨリ下末ノ段、忠平公飢肥ヨリ御留リノ如ク合セ見ルヘシ 貴命走筈飢肥、其頃於肝付之郡廻境、

貴久公 義久公爲御大將被着御陣、一日肝付軍兵討出有合戦、

右馬頭忠將不意被遂戰死、御家尤危急存亡之秋也、依之、帰國可致由、密々從

貴久公雖被仰通、更依難見捨不隨、貴命、豊州忠廣被成旅館謝

予曰、一人於帰國者可爲御家長久、愚家又終可開運、國家不相

鎮哉、終日流涙被加意見、被推道理令帰國畢、云々、

附録

上使伊勢備後守日州下向之事

自將軍足利氏之、上使伊勢備後守、上使來、

貴久公於日州末吉御參會有リ、其時ノ子細、柁山安藝守自筆之

書記ニ詳也、左ニ記ス、

永祿三年十月四日、上使伊勢備後守殿下着於庄内末吉、

太守修理太夫殿御參會有、御意趣之段者、日向到飢肥、伊東起

弓箭廿ヶ年余不極勝負之由、達、上聞、無為之御調義也、然者、

飢肥ニ伊東有兩陣、彼地爲公領被召置、可爲和融之旨也、御返

答之次第、使新納刑部太輔・肝付彈正忠・愚身柁山安藝守、十

月七日、伊勢備州御宿江へ參り申候條也、刑部太輔弁是、

一上意ニ、御無沙汰之義、乱國又者依遠方非本意之事、

一大友殿江申談、九州を治め御奉公之事、

一北郷左衛門尉江御内義之旨、到飢肥伊東藏上之地有之由、備後

守殿被聞召付候、彼地伊東被遣可然之旨也、更ニ此段承間敷

之旨、

右条々被問候、川井豊後守、此等之御返意之時者、岡本被相

添候、御返答、上意者、大友殿之前難分、嶋津殿被思召候歟、

爰元非本意者候、於當座安藝守雖憚入候、九州を初、上意

御奉公之儀二候、被問召分候申、罷立候、

一八日、備後守殿御宿^江、屋形様入御候、御面談同篇、

一九日、又兩三人を以被仰條、

一如度々申入候、和融之儀、上意可為次第事、

和談之儀、企弓箭を伊東可有分別之事、

一被屬無^者、大友殿^江同前可為和融之事、

一所領沙汰之^者、同名豊後守一向領掌有間敷事、

一伊東^江可有手附之由、不致分別^者、

右之条々、川井・岡本被成披露御返答之次第、

一日向境目和平之儀、被任、上意之旨、先以御喜悅之事、

大友殿同前^二、伊東無為之儀ハ非、上意、乍去備後守為、上使

罷下上^者、可致其調儀^号之^者、

一伊東^江被境所領向之儀、彼方^江少^者遣問敷之段、被成御心得之^者、

此三ヶ条被仰、川井方物語として、伊東^江被境内前々分國之

由、申上之由候、刺東山殿^江申入、三ヶ國之守護職之御判頂

戴之左右之儀、更^二上意^一もしろしめされず、備後守をん

ちいたさぬ^者共なれとも、なと^二言おほく^一云つ、けらる、則

安藝守田舎者、上方御尊意不知案内也、川井殿私御物語之条、

當座之御返答^二候、嶋津三ヶ國之守護之^者は、頼朝御代以

來之儀、然^者、嶋津陸奥守忠國山東知行、伊東都於郡一所相

殘候^者無其隱、伊東^江被境内分國之儀、更々虚言也、伊東到

飲肥^者雖起逆乱、終に及恥辱^者、眼前之儀^者、猶以伊東逆

心之旨被仰候^者、偏上使御非義之可有沙汰、先苗意之御調儀

專一之由申候之處^二、岡本尤無余儀之由有、川井毛同意^二得

心候、然^者、伊東^江可有手付之由、不致分別之一ヶ條、是又
上使御納得之由候、雖然、追而嶋津可被申敷とて、先々罷立
也、

一十日、又兩三人、上使御宿^江參、御意趣之次第、昨日申入候

条々、皆々御得心之御返答被祝候、就中、^江被境伊東^江少

茂所領遣^者有間敷之儀、御得心一段畏入候、彼境公領之^者、

奉任備後守殿可致御相談旨、此旨同名豊後守方^江雖未相尋候、

彼兩陣伊東引退候ハ、可加意見候也、

右條々、御返答、川井・岡本、

一^江被境任御公領之義祝着、備後守面目之到也、

一伊東^江催促を以可被引兩陣也、自然伊東於難^者、對、上意

不忠者也、到其儀^者、兩國^二被仰付、可令成敗之^者無疑、此

度嶋津殿、上意御奉公無比類旨、始中終可達、上聞也、猶直

二可被仰とて、備後守殿御前^二兩三人被召寄、以御面談蒙仰

段、此度為、上使下向之所^二、和平ノ趣、嶋津殿御得心満足

不少候、然^者、伊東三ヶ國御判東山殿書出、伊東^二有彼一卷、

備後守披見之、雖然、京都^二も其疑有、今又當國之沙汰一向

無其理之由、備後守信之、伊東守護号之^者更^二不入之儀也、

若シヶ條^二被仰、少も於偽^者、八幡御照覽々々々々、可

蒙御罰と三度被仰、則地を御打御誓言之上、到末代伊東守護

職之^者、不可有其證文、此度備後守此段於納得、惣領伊勢守

則同前と堅被仰含候、當家之面目不可過之者也、此等之為御

礼、太守舍弟右馬頭殿、十一日^二上使御宿^江御參入也、

則備後守殿為御礼屋形^江御出候、然^者、不慮^二御酒被取持、

被催興、備州御腰物を太夫殿^江被進、川井方取次、村田越前

守方へ渡之、則 太守江御請取、自是或御腰物被進、其後及
乱絶、御どうきぬを互ニ被取替候、其時川井方之肩衣を拙者
江被着替候、其日風呂を焼せられ候之旨、先風呂へとて御立
候也、頓而此暮、上使御宿江使之而三人御礼參候也、夜ニ

入岡本方為御使、樽ニツ・折ニツ・三種、安藝守宿江上
使被下、數通之御酒有、次朝 上使御宿宝壽庵江安藝守致御
礼、其刻川井殿へ大目、岡本殿へ脇刀進、則為御物語申、今
度數度被中承候条々之中、別而伊東江末代於飢肥境ニ、手付
有間敷候也、一ヶ條堅く申納之由申候、領掌無余儀候、満
足々々、三百町計と也、

一十五日、太守より備前守殿へ御檢被進候趣有、三ヶ國御調
達之度、次ニ伊東方江飢肥之内永代遣間敷之由、此等安藝
守江川井方内談を被遂候而之度也、其返度、後代迄之御證文
たるへき由也。

一十七日ニ、鳥之子一帖、奈良墨二丁從備前被下候之条、為御
礼御宿江參候処、川井被中候儀、飢肥境御料所之豈背候ハ、
則豊後へ被罷登、大友殿江申談、島津殿御存分之儀、事成申
候由被申候、其時其飢肥の度ハ、御公領之義歟いか、と候、
又一ヶ條當方伊東縁結はれ候する内談之由、風説承及候、於
其分、上使御取成可有との義ニ候、此兩條御返答、新刑
と拙者兩人して申候、

一伊東和平之義、於豈成者無申度候、伊東背 上意候者、大友・
島津ニ申合、剩 上意為御奉公、山東退治之時、飢肥之御料
所之度、猶以無余義候、

一伊東江縁之義、更不承候、雖然、ヶ様之度、家景中其調

義被候らん、承度ハなく候にて候、

一以次而、乍重言、大友・嶋津申合度無其隠、伊東以調法、此
段無相違様ニ、備後守殿御故實奉頼之旨、以先川井得心ニ日
出度々々、

一上使御立之刻、上使へ河内茶碗・唐之盆進上仕候、橋本江
毛氈一遣、互歌を送給候、無指度候俣不書之由、御料所三百
町ニ申成、從 上使美濃紙一束・京筆ニ對被下候、從是して
のかま進上。

十月十七日

右本書、柁山家ニ有之、

明
赫
記

卷之二

肝付兼統謀叛之支_付典殿打死_并忠平公飢肥ヨリ
御帰之事

爰ニ

貴久公ノ姉寧肝付河内守兼統、不意ノ恨ヲ懷キ、弓箭ヲ取起シ、
太守ニ仇ヲ成奉ル、其基ヲ聞ニ、伊集院大和守入道孤舟ノ息山城
守忠純ニ遺恨之コトアリ、就雜談謗言セラル、コト遺恨トナレリ、
其由ヲ聞ニ、忠純カ本家ハ島津家御三代

久經公ノ御舍弟五郎左衛門忠經ヨリ始ル伊集院ノ末葉ニテ、今家
ヲ立ルニ三代ノ間也、然ルニ、家ノ重代トイフコトニ就テ、若
家之重代トイハ、我家ナトニハ有シカト、兼統嘲笑シケレハ、
忠純聞テ無念至極ニ思ヒ、此遺恨ヲ報シテ含ミケルトナリ、兼統
入道ノ先祖ヲ尋ルニ、大納言大伴良雄卿ノ後胤ナリ、文徳天皇
御子、惟高親王ト惟仁親王ト兄弟御位争ヒ有シ時、紀兵衛督名虎
トスマフヲトリシ人也、此卿ノ子孫トシテ、時代久シク肝付ヲ領
知ス、河内守兼重、八代孫相模入道義運ノ嫡子ニテ、

貴久公ノ御姉ヲ申請、御當家ノ縁屬ト成リ、御内ノ人々ニモ重ク
執セラル、然ル処ニ、或時

貴久公 義久公ヲ兼統ノ旅亭ヘ奉請、椀飯式正ノ饌ヘ、山海珍味
ヲ調ヘモテナシ奉ル、山城守忠純カ家臣等、前ノ過言ヲ胞臆ニイ
キトナリ、肝付幕ノ紋ノ編ノ首ヲ一々サシ切ル、兼統聞之、啞、
臆テ心得タリ、是ハ忠純カ仕業ナラン、斯不覺ヲカキヌル上ハ、
我鹿兒島ノ出仕モ此度迄也、先年帖佐平松御陣ノ時モ、御馬ノ前
ニ立テ致忠節タリ、今前ノ忠ヲ空シテ、

貴久公ヘ敵ヲ申度モ無念ナリ、去トモ、忠純カ仕業不及力儀ト被

申、此豈肝付ヘ聞ヘケレハ、古江新城ノ津迄連キ來テ如何ト相待
ニ、鹿兒島モ御暇出ケレハ、亦モヤ 御意ノ替ヌ其先ニト、急キ
舟ニソ乗ラレケル、兼統ノ舟與嶋崎ヲ漕過ルヲ見テ、藥丸出雲守・
檢見崎常陸守靜ニ見合、後ヲ調ヘ舟ニ乘リ、ヤカテ追付、無程高
洲ニ着ケハ、ヤトノ亭主三 献ヲ調ヘ奉祝、爰ニ肝付ヨリ連來者、
トモニ一度ニトツト喜ビ、爲キ連テソ帰ラレケル、備兼統高山ニ
着ケハ、宗徒ノ者ヲ召寄、入道此度不思義ニ耻辱ヲアタヘラレ、
難面命ナカラヘテ各對面スル也、如何スヘキト申サレケレハ、一
座相合人々モ、其此申出ス者モナシ、其中ニ、肝付加賀守カ弟ニ
治部左衛門尉進出テ、心易ク思召候ヘ入道殿、會稽ノ恥ヲススキ
申サン豈、案ノ内ニ覚候、先廻伊豆守カ居城ヲ忍取ヘシ、左アラ
ハ、

太守方ヨリ寄ヘシ、其時手ノ程振舞テ鬱憤ヲ散スヘシト申ケレハ、
省釣入道眞誠_{コウ}ニ其也、祖父ノ代加賀守、文安ヨリ應仁ノ頃、肝付
氏ノ代官トシテ忠誠無_{サスカフ}一ノ人也、今汝如此トテ、指合タル重宝ヲ
腰ヨリ拔出シ、治部左衛門ニヒカレタリ、御腰刀ヲ賜リテ居直リ、
ヤカテ指マ、ニ盃ヲ三度アケ、治部左衛門打死シタリト聞召レ候
ハ、城落居セスト思召候ヘ、若生タリト聞召候ハ、忍得ルト
思召玉ヘト申テ、其俣座ヲ立ケルカ、究竟ノモノトモヲ三百人計
相具シテ、伊豆守カ居城ヲ忍見ルニ、大隅庄内皆和平ノ折節ナレ
ハ、余リ用心モナカリケリ、思モ寄ラス或夜ノ明ホノニ、動ト時
ヲ作テ攻入レハ、イマタ目ノ不明モノハ帯モ刀モ不取得、起タル
者ハ弓兵具ヲモ取得ス、周章騒テ落行ヲ、此ニ追詰、彼ニ追掛討
取レハ、伊豆守モ驍テ討ルレハ、タヤスク敵ヲ追落シ、其俣城ヲ
取拵テソ權籠ル、此事肝付ヘ飛脚ヲ以申越ハ、省釣入道即馳越シ、

廻之城ヘソ籠ラレケル、此支

太守聞召、惡ヒ肝付カ所存哉、去ハ廻ニ陣ヲ付ヨトテ、惣陣ニ
貴久公御坐ヲ成ルレハ、竹原山・馬立其外端陣取構へ、上井敷根
モ在番所々ヨリ馳集ル、互ニ野伏ヲ掛ケ、折々出合小軍アリ、然
トモ、多勢ニテ陣ハ付ラレタリ、廻之城危急ノ由、肝付ニ聞ヘシ
カハ、足肝付家連之キハマリ也、又省釣此度運ヲ不開討死アラハ、
耻辱ノ上ノ耻辱也、男子ニ生レタラン者、年來ノ者トシテ、主人
ヲ主人トヲモハム者ハ、何トカ兒次サラントテ、薬丸入道胡運ハ
飲肥ノ堺目ナル間、櫛間ヲ去ヘカラス、安樂備前守ハ牛根ノ在番
也ヘシ、其余ハ打立ヘシトテ、嫡子左馬助良兼・二男修理亮兼定・
三男三郎四郎兼輔・四男三郎五郎兼則打立ケレハ、大崎地頭伊集
院三河入道竹圃・志布志地頭職新納下野入道永侃・安樂下總守・
申良地頭検見崎常陸守・恒吉地頭肝付加賀守此地頭領家也・宗徒
ノ大将トシテ、我モ々々ト馳セ連クホトニ、着到定六千余騎トソ
申ケル、何トカ此勢ヲ以ハ、縱令一万二万騎ニテ取込タリト云ト
モ、一陣破ラサランコトハアラシト、逸ニ逸タル足輕トモ、竹原
山ニ切掛リ、立合者ヲ打取リ、遊ル者ヲ追散シ、其俣馬立ノ陣ニ
切掛懸ル、馬立ニ在合人々、爰ヲ専度ト防キ戦フ、右馬頭忠將ハ
敷根ニ居ラレシカ、坂口迄統キ来リ、馬立ハ如何ト問ハレケルニ、
川上出羽守カ籠シカ、大涉等ニテ下知仕、未健固ニ見ヘテ侯ト申
セハ、イサ去ラハ、何ソ見次サラントテ、登レ々々ト下知ヲ成シ、
坂中ニセメアカル、然トモ、肝付猛勢ナレハ、馬立ノ陣ヲ毛切崩
シ、其勢ニ押カフセ、右馬頭ヲ討ニケリ、忠將ノ者トモ川上・町
田・酒匂等ヲ始トシテ、宗徒ノ者トモ廿余人ソ討レタリ、御内ノ
人々ハ氣迫テソ見ニケル、其俣肝付勢廻ノ城ニ馳籠、省釣入道ヲ

守護シケル、省釣右馬頭ノ打レヌル由ヲ聞テ大ニ驚キ、弓箭ハ一

端ノ支、終ニハ和平ノ嘜トモ成ヘシ、典厩ヲ討テハ永キ遺恨之種
子トナルヘジ、其上、典厩ハ兄弟ノ契ヲ致シ、懇志ノ至ナリシカ、
心ナラス相隔リ、弓箭ノ習トハ云ナカラ、彼ヲ討申コト無面目次
第ナリトテ、涙ヲソ流サレケル、夫ヨリ肝付モ不進、守護方ヨリ
モ肝付ヲ急度退治シ難ク思玉ヘハ、
貴久公御父子、宗徒ノ人々ニ御談合有テ、先此節ハ御開陣アルヘ
シトテ、和平ノ嘜ニ及ヒ、御陣ヲ引玉ヘハ、省釣不斜壹ヒ、廻ノ
城ニ番手計ヲ召置、肝付ノ如ク引ニケル、路次傳ヒ、於市成晝柴
屋ノ内ヘ請シ居ラレケル処ニ、彦山山伏ノ同行五六人列ニテ通シ
ヲ、柴屋ノ内ヘ請シ入、酒ヲ進メテ申ケルハ、定テ薩戸ノ方ヘ御
通り候ハン、肝付省釣ト云者、不慮ノ軍ニ打勝テ、當時ノ面目ヲ
施シ、左扇ニテ罷帰タルト、檀那々々ノ宿物語ニシ玉ヘトテ、立
ニケル、其後、肝付和談ニ成リ、無支也ト云トモ、互ニ隔心ノヤ
ウニ思ハレケル、
忠平公ハ其頃飢肥ヘ打越居玉イケルカ、典厩不意ニ打死有ケルニ
依テ、隅薩兩國雜説カマシケレハ、
貴久公ヨリ、密々ニ早々帰國シ玉フヘシ、御家存亡ノ時節也ト仰
セ遣サル、
忠平公、豊州ヲモ難見捨思ヒ玉ヒケル処ニ、豊州忠廣諫テ申サレ
ケルハ、今事騒シキ時節也、
忠平公帰國ニ於テハ、國中モ治リ、御家モ長久タルヘシ、愚心モ
又運ヲ開ヘシ、何ソ國家ヲ不相鎮乎ト、終日涙ヲ流シ諫言アルニ
依テ、
忠平公力無掃玉ヒケリ、

擾乱記曰、爰ニ

太守貴久公ノ姉聳肝付河内守兼統、不意ノ恨ヲイタキ及大乱、其基ヲ探ルニ、或時兼統鹿兒島ニ參候シ、

大守ニ會シ牽リ、興乘セル折節、伊集院大和守忠朗、肝付カ家臣葉丸ヲ呼テ戯テ申ケルハ、兼統ハ玆ヲ備ヘ、

太守ヲモテナシ申サレシニ、肝付ノ不足コソアレ、何ソ鶴一雙ノ藥ヲ獻シ玉ハサルヤト云、葉丸答曰、汝再肝付ニ來ラハ、狐一疋ヲ兼統ニタヒ候ヘト、嘲笑テ申ケル、忠朗聞テ、面色ヲ變

シテ怒ケルカ、終ニ肝付カ幕ノ紋ニ打タル鶴ノ首斷タリケル、兼統是ヲ見テ、一族家臣等ヲ呼テ、各如何思フンヤ、昔日、我

先祖伴櫛ノ大監兼行、村上天皇ノ勅命ニ應シ、舞鶴ノ紋ヲ下シ賜イ、累代ノ幕ノ紋ト定マリシカ、然ニ、此鶴ノ頭ヲ斷レシハ、

全ク家ノ疵ニテ候ハスヤ、則兼統カ首ヲ斷レシニ異ナラスト、打嘆キテソ居タリケル、各申ケルハ、仰尤トコソ存候ヘ、何ノ

面目ニテカ
太守様ヘ見ヘ玉ハン、是ヨリ一向鹿兒嶋ヘ參調之礼ヲ止ラレ、太守ニ恨ノ矢一筋射テ、勝負ノ運ヲ分チ玉フヘシト、皆一同ニ

申ケレハ、兼統ハ急キ掉舟、肝付ヘソ帰リケル、角テ、永祿四年^辛五月十四日、兼統大勢ヲ卒シ、大隅國廻ノ城ヲソ困ケル、

城主廻伊豆守ハ近年亡目ト成テ、其子ハ未幼稚ナレハ、可防様モナク一怵モセスシテ落去シス、兼統思フ俣ニ廻ヲ押領シ、弥

乘機勇ミ進ム、
貴久公御父子此事ヲ聞玉イテ怒ラセ玉ヒ、則時ニ出陣有テ、先

大塚ノ地ヲ惣陣ニ構ヘ、
太守ハ大卒禮・馬立・竹原山ヘ陣幕ヲ張セ玉フ、斯リケル処ニ、

伊地知重興・祿重長モ對

太守仇ヲナス者トモナレハ、兼統ト志ヲ合セ、廻ノ城ヘソ籠ケル、此年七月十二日、肝付ノ賊徒トモ馳來テ、高原山ヲソ攻

タリケル、島津右馬頭忠將難保勇將ナレハ、此事ヲ聞ヨリモ、馬ニ鞭ヲ進メ、直ニ大勢ノ強敵ニ向テ馳ラレシヲ、家老町田加賀

守忠林ツト馳寄、忠將ノ鎧ノ袖ヲ扣ヘ申ケルハ、楚忽ニ彼大軍ニ對シ可闘交、蟻蟻カ斧ヲ以車ニ立向フカ如クナリ、味方小勢

タリト云ヘトモ、謀ヲ以大軍ヲ破ランコトハ、古今其例多シ、先此戰場ヲ退セ玉ヒ、後ノ謀ニ如ハナシト、頻ニ諫ケレトモ、

忠將少モ聞入ラレス、我勢ヲ以彼肝付カ軍ヲ蹴散ンコト、何ヨリモ以最易シト、一散ニ馳テ進マレケレハ、敵ノ兵舟數十艘海

濱ニ漕運レテ、木ノ葉ノ如ク乘浮ヘ、鐵ヲ揃テ待掛ル、忠將ハ我軍士ヲ勝テ濱ノ手ヘ廻シ防セケルニ、敵大勢雲霞ノ如ク後ヨ

リ落合、忠將ノ陣ノ前後ヲ遮リケレハ、忠將可戰術尽テ、今ハ早是迄ト思ハレケレハ、牀几ニ腰打掛ケ合掌シテ、何方ヨリ我

首ヲ討ヘシト、言ヲ掛ラレケルカ、其如ク首ハ前ニソ落タリケル、戰終テ忠將ノシルシヲ尋ケルニ、其アタリニ見ヘス、如何

サマ敵ニ取ラレテ有ラント、則死カイヲ取上テ、木ヲ以テシルシヲ刻ミ、骸ニ統キ清水標嚴寺ニソ葬リケリ、法名心遠天、安大居士良有テ、

衆兵ノ中ヨリ申ケルハ、何かハ不知、敵槍山ニ物ヲ隠スカ如ク見テ候、モシ忠將ノ御シルシニモ候ハン、尋サセ玉フヘシト申

ケレハ、サラハトテ、其者トモヲ案内ニテ搜シケレハ、果シテ忠將ノ首ニテ有シカハ、即廻坂之上ノ土ニ埋テソ葬ケル、忠將

ノ家老町田加賀守忠林ハ、忠將ノ打死ヲ見テ、今ヲ限りナレハ、命ヲ忠將ノ為ニ抛テ、恩ヲ

太守ニ報ント思シカハ、面モ不振大勢ノ中ニ破テ入、半時計戦ケルカ、終ニ子路カ纒ヲ結ヒ、敵味方同枕ニ打レケル、其外戦死スル者、忠將ノ手ニ町田軍四郎・野田中納言・石谷因播守・酒匂源左衛門・益崎平内左衛門・宇宿大学左衛門・敷根掃部兵衛・潭右衛門・桑波田左近・多田隈源兵衛・有馬与市兵衛・海江田八郎三郎・山内孫左衛門・坂元市弥太・岩城新三兵衛・福崎介八郎・中村宗四郎・池山備後・泊助六・高野左京亮・大寺大炊介・三島兵庫・能勢十郎二郎・竹下和泉・稻留石見・森助三郎・石塚雅楽・平瀬満右衛門・飛松帯刀長・同弥四郎・木下縫殿、新納又八郎、中間ニハ、坂元某カ中間二人、武元氏一人、草滿氏二人、宮田某三二人、市來某二人、有馬氏一人、益崎氏二人、添川氏一人、有川氏一人、合中間拾三人、スヘテ忠將ノ手ニ打死スル者七十余人、骸ヲ戦士ニ埋メケルコソ情薄ケレ、去程ニ、

貴久公ハ忠將ノ打死聞召、忽詔軍ヲ進メテ敵中へ馳入玉ヘハ、梅北刑部左衛門・滝間美作守等力戦シテ、敵数多打取、味方軍上モ皆決死相戦ヒ、数十人討取ケレハ、兼統・重長・重興ハ敗北シテ、日州恒吉サシテ引退ク、夫ヨリ

貴久公ハ廻ヘ士卒ヲ箠置セ玉ヒ、帰陣シ玉ヒケル、

世録記肝付謀叛、組合戦、貴久公御陣陣定、堀内記、大憲同シ、其次ノ文如ク

貴久公遣使徴

忠平於飢肥、忠實傳言ノコト、忠平御陣ノコト、前文ニ由、故ニ略ス

忠平來帰薩摩之地、而後北郷八代之裔尾張守忠親者為養子継忠廣之統也、永祿五年干五月十八日、忠親附与飢肥城於伊東而退去福高院或傳、同九月十八日夜忠親進策遂凶徒再入護於飢肥也、

云々、

私曰、忠親ハ十余年北郷家督ニテ、其後豊州家ヲツギ豊後守ト改名ス、北郷左衛門時久入道一雲ノ父也、

御當家翰遊集曰、永祿四年五月、御家中ノ諸軍勢夜白ヲ嫌ハス馳ツ、キ、廻ノ上野之火牟礼ニ御着陣ナサレ、北郷殿へ被仰通処ニ、省釣齊計策者演表ヲ通用ス、其中道ニマタテト云ル所ヲ御陣所ニ被取、右馬頭殿御大将ニ被定、吐氣役者ハ大寺大炊介承ル、此外ハ南方衆ニ、大隅表宗徒ノ軍勢被固、其高上ニ竹原山トテ柵有、両陣ヨリ出合御番也、海上ニハ船陣ニテ夜昼共ニ攻ラル、箠城ノ人々ハ、肝付省釣ヲ始トシテ、箠鳥ノ雲ヲ思ニ似テ、遁ン方ハナカリケリ、アハレナリケル有様トテ、味方ノ陣ノ足輕ハ言葉戦イ申也、省釣此由ヲ聞、尤ニ存、廻・恒吉進上シテ和平ノ訴訟ヲ言上ス、伊集院大和守此趣ヲ承リ申上ケレハ、省釣數ケ度ノ憚ヲ仕ル、此度ニ於テ可被加御成敗ヲ、是國家之法度タルヘシト、支テ言上有ケレハ、是ヲ聞テ滿坐之人々同心アリ、然ニ新納伊勢守トテ老功ノ人有ケルカ、此事ヲ聞テ申サレケルハ、下説ニ、大綱ヨリ小綱ト申セシマテ承ル、先ツ々廻・恒吉ヲ次第ニ召上テ、不忠人ノ省釣ヲ永代ノ御被官ニ成サハ、肝付之郡内ハ一所モ無殘所御家中ニ相同シ、其上命ヲ御助ケ忝存ナハ、各為ニモ可成也、乍去、旁ノ可為御意次第ト、道理ヲ尽シ申シツ、市來諏訪ノ神可取行、其為ニ六月廿九日未刻、大牟礼御陣ヲ打立テ、伊勢守ハ歸宅ヲコンセラレケル、斯テ日數モ移行、七月十二日、肝付勢打出テ竹原山ヲ攻ケルニ、城ノ内ノ軍兵ハ待設ケタル豈ソトテ、時刻ヲ移シテ防ケトモ、続ク其軍勢遅ケレハ、武略ハ更ニ絶果、切テ出ント詮議シテ、

新納又八郎ハ市來衆中ヲ同心ス、町田因幡守ハ同軍四郎ニ清水上井衆同心シテ、本口ヲ切テ出、馬立ノ陣ヘ籠ラントセシカトモ、敵ノ兵落合テ、爰ヤカシコニ太刀打ス、心ハタケク有ナカラ、大敵ニ被仕付、新納又八郎ハ痛手負テ引退ク、市來衆中ニ三原弥四郎・高野左京亮・福崎助八郎・海江田八郎三郎・山之内孫左衛門尉・中村宗四郎戰死ナリ、清水衆ニ町田因幡守・同軍四郎一枕ニ討レタリ、肝付勢其勢ニ掛テ、馬立ノ陣ニ押寄一合戦仕、肝付方シトロニ成テ引退ク、是ヲ見テ、陣衆各打出テ手ヲ碎キテ矢軍シ、加世田衆ニ岩切雅樂助ト名乗テ、征矢射通シヲ致ケル、大將右馬頭殿御覽シテ、無二ノ合戦致サント馳入玉ヘハ、味方モ敵ニ乱入り、前後左右ヲワカタ又聞ニ、敵ハ是ヲ大將ト見テ討取マイラスル、味方ノ人数一同二手ヲ碎キ戦トイヘトモ、惜哉、朝ノ露ト消ニケル、偕又、大寺大炊介ハ一番合戦ニ高名致シ、薄手負テ居タリシカハ、此左右ヲ聞ヨリモ人ハ一代名ハ末代、名譽ヲ遂ント云ヒ捨テ、大敵ニ切テ入、四方ヘハツト追散シ、敵数多切伏テ、其身モ則戰死也、此大寺ハ加世田衆也、又同所衆ニ富松帶刀長、同弥八郎・春成名字、田布施衆ニ稻留石見守、清水衆ニ益崎名字、此外之人々モ戰死也、残ル人衆ハ馬立ノ御陣ニ取籠リ、陣中ヲ持壁メ、種々ノ謀略ヲメクラシケル、斯ル処ニ、御本陣ノ籠ニハ御手勢ヲ打出シテ、御一戦成レケリ、梅北刑部左衛門尉馬武者ニテ、致下知兵二鑑ノ袖ヲ解セツ、早熊ニ掛リケル、打物取テ馳合ス、敵ハ大勢奇來リ真中ニ切テ入、鹿兒島衆ニ滝間美作守太刀始ト名乗、我モノト合戦シテ、其俣敵ヲ切崩シ、太刀下ニ敵余多打留ケル、此外ノ者共大勢ナレト、敗北シテ恒吉差テ逃ニケル、省約モ又

薄水ヲ踏心地シテ、肝付ヘトソ引ニケル、路中ニテ彦山伏ニ申ケルハ、今度ノ合戦ニ御大將ヲ打取テ、報ヒノ罪ヲ如何セン、南無廣大慈悲權現和光同塵ニ結縁シ玉ヒテ、省約カ武運長久、万人安全ト祈念ヲ成シ玉ヘ、法施ヲ拜進可致ト、申テコソ通りケル、

右諸書、大同小異也、

忠平公真幸院御在城并北原誅伐之事

サレハ、國一揆ノ黨モ未多ケレハ、國中モ不靜、早々不遇治ハアルヘカラス、爰ニ真幸院北原之兼隆病ニ侵サレ死去ス、彼家中ノ者トモ、二向宗ト云憲宗ニ成、佛神三宝ヲモ違背シテ、無道豈トモヲ取行ヘリ、北原カ家來ニ、又是ヲ不用者モアリ、此宗ニ不成者ヲ打果ントセシ程ニ、或ハ日向ヘ落行モノモ有、求ルヘ走ルモノモアリ、方々ヘ逃散テ誹リ罵ル者ノミ也、伊東入道聞之、彼北原カ地ニ望ヲカケラル、又求ルノ相良モ隣所ナレハ、北原家主宰ナシト見ルナレハ、望ヲソカケニケル、然ルニ、北原カ家來ニ踊ノ地頭白坂美濃守ハ、宗論故北原ニ心替シテ、北原ノ隼危ク見ルナレハ、此刻ヲ得、

太守様方ニ申入、忠人ト成ルヘシト思ヒ、曾於郡地頭三原遠江守ヘ此旨密ニ註進ス、遠江守境目役ト云、少モ遅タスヘカラストテ、踊ノ城ヘ番手ヲ差籠ル、仍テ白坂カ一黨同心トソ聞ヘタリ、同列栗野・吉松・馬関田・吉田亦以其言

太守ニ奏シ、麾下ニ屬シ奉ル、サレトモ、横川之城主北原伊勢介・同新介、一向御旗下ニ參ラス、此時、三山ヨリ東ヲ限リテハ伊東

ニ屬シ、飯野ヨリ西ヲ限リテハ

太守ニ服シ奉ル、又求广ノ相良ハ伊東トトモニ北原方跡ヲ伺ケル由、其聞ヘ有テ辺境不穩、

貴久公 忠平公ヘ、早速彼地ニ發向シテ退治有ヘシト被 仰、依之、

忠平公一門侍等ニ相議シテ、永祿七年^{甲子}、彼地ニ赴ント欲スルノ処ニ、彼伊勢守新助横川ニ在城シテ往還自由ナラス、仍テ霧島山ノスソヲ廻リ、飯野郷ヘ打越ヘ玉フ、角テ

忠平公ハ、同舍弟又六郎歳久大将ニテ、伊勢守ヲ討セント、同年六月三日、横川ヘ押寄せ、繼ヲ打破リ、城戸口ヘ詰入、城ノ切岸ヘ攻上ル、伊勢守・同新助待設タルコトナレハ、兼日ノ志毛頭輪廻スマシキトテ、無慚ヤナ、妻子トモ、イツクノモノノ手ニカケ

ンヨリハト、手ニ手ヲ取テ刺殺シ、念佛數返廻向シテ、賢人二君ニ不仕ト、高声ニ呼テ茶屋ノ口ニ切テ出ツ、郎等トモモ不劣ト切テ出レハ、思々ニ渡合、散々ニ切合タリ、鹿兒島之住人モ本田刑部丞・滝間美作守、太刀下ニテ分捕ス、又六郎歳久敵ノ内城ニ支

ヘケルヲ、真先ニ進ンテ攻入玉ヘハ、吉田ノ住人二階堂帯力・箕句舎人佐・村田雅楽介、合戦高名セラレケル、貴島圖書助打死ス、去トモ、多勢攻入ケレハ、伊勢守・新助打死スレハ、即時城ヲ攻

落シテ、数百人之討首ヲ、太將ノ御目ニ掛ケ、勝吐氣奉送モ過ヌレハ、諸軍勢次第々々ニ帰陣ス、然処、菱刈方當時致忠勤之問、

彼横川ヲ被下、永々可有忠節之旨、頼ミ仰ラレ、彼地ヲ宛行ハレケル、其節北原ノ兼親ハ、一先求广ノ方ヘ退去シケルヲ、其後相

良方ヘ談合シテ、北原ノ家督ニ彼ヲ召立ラル、然テ真幸ハ伊東ノ境目ナル間、薩广ト相良ト両方ヨリ番衆ヲ被相加、經年月程ニ、

兼親如何思ケン、伊東・相良ニ内談シテ、薩广番衆ヲ打果サン仕

合ヲソ伺ケル、此コト告知スルモノアレハ、被遂亂明、全ク依露頭、相良方ノ在番ハ一命ヲ助ケ、如求广追歸ス、兼親其外二心ノ

モノトモヲ、往々ニソ移サレケル、兼親ハ伊集院ノ内神殿村世丁被下、恩を知ヌ奴原、何ノ役ニモ立ヘキナラ子トモ、恩ヲ興ヘラ

ル、コト、是仁者ノ道慈悲ノ至也ト、万人申計也、
世祿記及擾亂記曰、横川城攻ノ時、
貴久公隅州溝辺ニ御出張アリ、新納刑部太輔忠元・伊集院源助

久春ヲ横川ヘ差向ラル、本田・滝間奮戦ノ時、忠元・久春亦有軍勞ト、云々、
又曰、此戦ニ又六郎歳久被傷ト、云々、
長友氏書曰、島津殿ト伊東殿ハ數年御取合不淺候処ニ、

義弘公ハ伊東ヲ亡スヘシトテ、三ヶ國御家人ニ談合被成、人数ヲ催シ真幸表ニ切テ出、高原・小林・吉田・馬関田・加久藤・飯野、此六ヶ所ノ城ヲ切取、真幸郡五百五十丁、高原ノ内知行被成候、飯野ニ御居城被成候、云々、

貴久公任陸奥守

義久公任修理太夫并貴久公御剃髮之事

上卿

中山大納言

永祿七年^{甲子}三月十四日

宣言

修理太夫藤原貴久

宣任陸奥守

藏人頭右大辨藤原淳光壽

上卿

中山大納言

永祿七年甲子三月十四日 宣旨

藤原義久

宣任修理大夫

藏人頭右大辨藤原淳光壽

永祿九年丙寅二月彼岸、將軍源義輝公一周忌ニ依テ、

貴久公御剃髮有テ、伯爾齋ト号シ玉フ也、

三ツ山城攻之事

三山小林之城ニハ、伊東ヨリ人数ヲ箠置ヌ、飯野ハ伊東・相良・
菱刈方之堺目ニテ、尤大岬ノ所ナルニ依テ、去ル永祿七年甲子ノ
年ヨリ、

兵庫頭忠平公御在城有、サレハ、諸郡司等皆々在番ヲ勤メラル、
伊東ハ相良ニ相謀テ、飯野表ヲ侵ントスルコト度々也、

貴久公之ヲ聞玉ヒ、小林之城ヲ攻崩シ、伊東勢ヲ不追拂ハ遂ニ岬
ノ煩ト成ヘシ、早速退治アルヘシト、陣薩ノ軍兵、永祿九年十月
十五日ニ打立テ、真幸院ニ到着シ、同月廿六日、小林ノ城ヘ押寄
ラル、花立口ニハ

太守義久公、其勢二萬余騎、大豆別府口ニハ

兵庫頭忠平公、窪谷口ハ左衛門尉歳久向ハレケル、

忠平公ノ御手ニ之丸迄攻入レハ、窪谷口之歳久ハ二重城戸迄詰入

テ、散々ニ相戦フ、市來住人茂山源三左衛門太刀始ヲソシタリケ

ル、玉頭口ノ垂レヲ箕倉舍人・同佐土助・木脇刑部左衛門・中山

又右衛門取詰、切ケルニ、箕倉佐土助ハ主従ソコニテ討死ス、

市來ノ住人田尻荒兵衛トテ、武勇モ人ニ知ラレ、大口キ、ノ男ア

リ、六尺余リノ太刀ニテ垂レニ詰入、散々ニ戦シカ、鎗ヲ鐔ニ

ツキ貫キ、鎗ノ金ヤ劣ケン、曲リテ引ホトニ、太刀ヲ敵ニ奪レテ、

大口聞ノ荒兵衛、一期ノ不覚ヲカキヌルトテ退キケル、連々荒兵

衛ト武勇ヲ励ス人々ハ、目ヒキ鼻ヒキ笑ヒケリ、間世田刑部左衛

門・長谷場長門守・愛徳十郎・濱田右京亮・長野助七郎・塚田太

郎左衛門・面高真連坊・上床源六兵衛・田口仲俊坊・重信平左衛

門・伊地知新三郎、殊成軍勇セラレケリ、然ハ、両口ノ手負・死

人其数ヲ不知也、鹿兒島ニ阿多中務丞・末弘又左衛門・本田治部

少輔・同名与五郎・椎原助十郎、加世田ニ阿多源左衛門・中村源

三、歳久之内ニ内山隼人打死ス、其外所々ニ於テ、軍ニ一命ヲ輕

シ、軍勇スル者勝テ計フヘカラス、時刻移ル程ニ、已ニ可攻傾処

ニ、

忠平公手ヲ負玉ヒ、痛惱甚シケレハ、御開陣ナサレ、重テ御攻有

ヘシト、

義久公被 仰出ハ、操引ニ次第々々ニ退レケル、城中ヨリ是ヲ見

テ、ツケ軍セヨトテ勢ヲ出シ、附送ル、味方ノ兵、此ヤ彼コニ伏

置テ、敵數多打取レハ、夫ヨリ敵ハ付止ス、去程ニ、諸軍飯野ヘ

引取リ、其翌日ヨリ、手負共ヲ在々所々ニ掃サル、御評定事畢、

太守鹿兒島ヘ御帰アレハ、諸軍モ在所ニ帰ケル、

翰遊集曰、先手ノ兵詰入テ散々ニ合戦ス、太刀始ヲハ市來衆ニ

茂山源三左衛門尉仕ル、押並テ、間世田刑部左衛門尉・山尻荒兵衛尉・長谷場長門守・同弥四郎同心ニテ合戦ス、愛徳十郎・濱田右京亮・長野助七郎・塚田太郎左衛門尉・同太郎五郎・真連坊同心ニテ、二番合戦ヲ致ス、アイツ、ク兵ニ、上床源六兵衛尉・田口仲俊坊・重信平左衛門尉・伊地知新三郎同心ニテ合戦ス、爰ニテモ、折目ノ合戦ハ、間瀬田刑部仕ル、無比類手柄也、云、

菱刈反逆馬越落城之事

菱刈ハ横川ヲ賜リ、其御恩ヲ可存ノ処ニ、無程野心ヲ挟ミ、去年小林御帰陣ノ折、横川ノ町口ハ功者ノ者トモヲ差出シ、薩隅之軍勢ノ帰陣之時、手負ノ人数ヲ日記ニ付ル風情、疑シキ仕方成シカ、漸々野心ノ色見ユルコト多カリケル、一揆ニ与同シテ邪義ヲ構ルコソ不思議也、彼奴原ヲ成敗セスハ、無程彼表ノ禍トナラント、早々退治アルヘキニソ定リケル、去程ニ、永祿十年^{丁卯}八月、伯圍入道真幸院ヘ打越、

忠平公ノ軍勞ヲ慰シ玉ヒ、暫逗留御座、

義久公菱刈御退治武略シ玉フハ、去年小林之城ヲ攻落サル、コト無念至極也、故ニ、又々小林立ト披露シテ、御馬ヲ出サレケレハ、数万騎ノ軍兵横川ヲ押通ル、菱刈方是ヲ見テ、時ヲ不移、此由伊東・相良ニ告知ラス、我身ノ上下不知ケルコソ愚ナレ、兵法曰、虎之洞出東辺ヲ打テ西辺ニ行ト、軍勢忽道ヲ替テ、般若寺橋子木越ニ発向シテ、同年十一月廿四日ノ早天ニ、馬越城ニ押寄、吐氣ヲ動ト作りカケ、我先ニト切岸ニ攻上ル、屏際ニテ、先手ノ人々

大略手負・死人ニ成ル、

義久公ノ御勢方山ノ高峯ニ打上セ玉ヘハ、

貴久公之御勢ハ、徳辺ノ岡ニ差上セ、時ヲ不移攻登ケル程ニ、南方ノ住人辻大蔵左衛門・有馬軍弥左衛門・久留軍兵衛尉屏ヲ越ントセシ処ニ、城地頭井手籠駿河入道・同兵部少輔・同弥四郎馳合セテ、手痛ク防ク程ニ、皆ソコニテ打レケリ、

忠平公攻上リ玉ヘハ、飯野ノ宗徒ノ兵、其外諸所ノ軍兵落合テ、我モ々々ト攻戦フ、飯野住人財部傳内左衛門・東郷兵部少輔高名シタリケリ、下柵ニテ、阿多掃部助・宮原右京亮・新納四郎二郎高名ス、伊集院弥六左衛門^{後美守}・新納刑部太輔、折目合戦セラレタリ、下夕城ノ木戸ニテ、村田右衛門尉打死ス、其外所々ノ軍兵トモ、思々ニ合戦、分捕シテ呼リ合フ、詰之城ニテ予井手籠父子三人カ首ヲ取、勝吐氣動ト上ケニケリ、菱刈方ハ、横川・湯尾ナトコソ薩广口ナレハ、蜜々ニ用心シタリ、般若寺・樺子木越之逆戸下シ、思ヒカケトモナカリケリ、馬越一城落ヌレハ、難叶ヤ思ヒケン、湯尾・本城・横川・曾木・羽月・山野・平泉・青木・一山之城々、其夜悉ク落去セリ、去トモ、大口一城ニ取籠リ、求广ノ加勢ヲ待ニケル、明ル廿五日ニハ、本城・曾木・湯尾・一山ニハ、薩广ノ番兵ヲ相籠ラル、山野・羽月・平泉ニハ義虎ノ勢ヲ可被相籠由仰ラルレハ、出水勢トモ打入ケル、薩广ノ勢イ申計ナシ、惟新公御記曰、菱刈依令謀反、可有退治之旨、詮義区々也、予謂諸卒曰、近年於馬越城附近、其趣細々聞之、則臨其境如見之、易可攻落由、雖成謀、諸卒未同心、或曰、菱刈者要害十ヶ所有、余半時之内莫大之人数相集、加之、權威及相良・渋谷郎從滿衛、易御退治難成由為謝、雖然、予被任申旨、永祿十年^{丁卯}十一月

廿四日、被催大軍、

貴久公 義久公為御大將、自粟野御發向、予亦自飯野打立、打寄馬越境、窺菱刈兩院之體、不意統松クイマツ不尽數、往來賊、士卒成疑、敢不進、不思義成哉、是者氏神稻荷大明神之奇火、於當家住瑞其例多、兩院者無程屬旗下支不可疑由、引卒諸軍兵而寄馬越、懸放火籠廻、揚吐氣、自城内合吐氣、數刻雖相戰、以多勢入替々々依攻、難叶相見得處、從本丸斬出追退寄手之勢、予於此渡合強敵、懸手数多打捕、見之而士卒成勇攻入、城主カミ所櫛籠之人数不殘討果訖、然而諸卒

貴久公 義久公群集御旗廻、唱凱歌、其響轟天地、菱刈院中騒動、其夜臨殘更、七ヶ所落去、

菱刈表度々合戦之事

去程二、十一月廿四日、馬越之城攻落サレ、其外諸所ノ城兵トモ悉ク大口城へ逃歸リシカハ、菱刈方求广へ加勢ヲ乞タリケリ、相良頼房是ヲ聞キ、兼テ一味之支ナレハ、求广・八代・葦北ノ者トモ不殘ツ、クヘシト觸渡シ、大勢馳運キ大口ノ城へ楯籠ル、逃散タル地下ノモノ共モ追々城へ馳歸レハ、地下旅合テ大勢二成、城ハ弥強ク成テ、左右ナク可攻様ソナキ、然ル処ニ、市山ノ足輕ト市山ハ市來・伊集院・出希同年十二月廿九日、無評義大口ノ城ノ籠ニサシカ、ル処ニ、求广・大口ノ勢トモ三千計打出、黒烟ヲ立テ攻來ル、西原ノ川口ニ市來備後守・平田加賀守・伊集院刑部少輔、一同ニ差忍へ合戦スト云ヘトモ、敵大勢ナレハ、打負テ、一枕ニ討死ス、其俣敵ハ競ヒカ、リ、勝ニ乗テ市山迄追來ケルヲ、今ハ不

逃ト、鉄砲・羽矢ヲトハシ、漸敵ヲ追ヒ返ス、其後、菱刈ノモノトモ市山ノ城ヲ侵スコト度々ナレハ、新納刑部太輔忠元ヲ警固トシテ、市山ノ城へ移サレケル、

世祿記及擾亂記、求广大口へ加勢ノ人数三百人ト有、是ナラン、同十一年ノ春ニモ成ヌレハ、正月廿日、馬越ノ城ヨリ

忠平公三百人ノ軍士ヲ率ヒ、大口ノ凶徒ヲ侮リ伐ント、兵ヲ伏セ置セ玉フ、斯リケル所ニ、敵數百人追掛ケ來ル、其内ニ卒將六人進出、高声ニ申ケルハ、別府安藝守・岩崎六郎兵衛・内田傳内左衛門、只今先鋒ト成テ馳向フ、ソコヲ引ナト、荒ラカニ匍ケレハ、

殘ル三人ノ者トモハ、總テ一言ヲモ不吐、真一面ニ競進ム、

忠平公是ヲ聞玉テ、島津兵庫頭爰ニアリ、差寄テ太刀打セヨト、踊出サントシ玉ヒシニ、川上左近將監久明飛田之瀨ニ差忍へ、別府安藝守ト向合暫戦ヒケルヲ、

忠平公弓ヲ控テ、敵ノ胸板ヲ一矢ニト放チ玉ヘハ、其矢アヤマタス、別府カ胸板ニ中テ矢庭ニ死タリケル、久明モ思フサマニ戦テ、數ヶ所ノ疵ヲ蒙リ、程ナク打死アリケレハ、久明カ郎從西郷新八、今ハカウヨト思ヒシカハ、敵中ニ馳入是モ程ナク討レケリ、サレハ、敵ハ大勢ニテ馳重レハ、味方難義ノ所ニ、

忠平公サシ忍ヘ玉ヒ、矢タハ子ヲ解クツロケ、少モ不動居玉ヘハ、此勢ヒニ味方多ク助カリケル、

忠平公其俣殿シ玉ヒテ、羽作之瀨ト云ル難所ノ大河ヲ渡シ玉ヒシニ、敵前後ヲ遮リ、危ク見ヘ玉ヘル間、遠矢下総守・財部傳内左衛門・市來筑後守返合ヒ、各一同ニ必死ヲ極メ戦ケルニ、敵ハ是ニ駭散サレテ不近付、命限リニ戦ヒ、少々疵ヲ蒙リシカトモ、支トモセス、

忠平公此者トモノ戦功ヲ感悦シ、先諸軍ヲ全セント、三尺八寸ノ太刀ヲ振テ、近付ク敵ヲ追拂ヒ、左右ニ敵ヲ逼テ闘ヒ玉ヘハ、太刀先ニ掛テ死スル者、其数ヲ不知、流ル、血ハ戎衣ヲ濺キ、誠ニ滴血梵天ヲ濺クカ如ク、目モ當ラレヌ次第也、伊集院右衛門兵衛尉久治・島津左衛門尉歳久ハ、味方利ヲ失ヒケル由聞ヨリモ、急ニ馳來リ、強敵ニ向ヒ、面モ不振戦ヒケルニ、千阿弥堂ノ小道ヨリ、又數十人歩卒トモ討テ出、鋒先ヲ合セ操合ケルニ、有川雅樂助貞真伊勢兵部少輔貞真・伊東右衛門尉馳來粉骨ヲ尽シ闘ケル際ニ、忠平公危難ヲ逃レ、曾木ノ城ヘ退シカハ、敵モ悉ク引退ク、味方ニハ長野仲左衛門・伊東右衛門尉・下島甚左衛門打死ス、貴久公不得止御旗下ノ軍ヲ卒シ、策ヲススメテ馳玉フニ、側ニアリケル梶原某隠シテヤ、旗ノ役ニテ有ケルカ、敵ノ大勢來ルヲ見テ其場ヲ逃去リ、合戦靜リテ後何処トモナク立歸リ、サアラン体ニテ有ケルヲ、以之外ニ怒ラセ玉ヒ、下部ノ者ニ仰付ラレ、御内ヲ放サレ追放有之、

策句記曰、千阿弥陀堂ノ小路ニ零陣士ヲ伏置テ、味方ノ競ヒ幅テ見セケレハ、敵大勢駈來リ決勝負、零陣士ヲモ豈トモセス蹴立テ防キ戦ケル間、怒難義ニ及ケル、
忠平公差忍ヘ玉ヒ、合戦比類無リケリ、敵ハ大勢攻入々々戦ヘハ、味方ハシトロニ成引退ケハ、
忠平公モ無力引玉フ処ニ、川縁ニ追詰討奉ントス、
忠平公之着玉ヒタル五尺余ノ大月ノ甲ニ、鎧ヲ数多打懸ケレハ、大支限リト見ヘシカト、面モ不振戦テ打死セント宣ヒシヲ、久保・吉井ナト、云勇士之者、
忠平公ヲ引返シ、肩ニ引カケ、川ヲ負渡シ退ニケル、長野仲左

衛門・下島甚左衛門無比類防キ戦ヒ、即打死シタリ、伊東右衛門尉・有川雅樂介一命ヲ輕シ、軍勞セラル、
義久公之ヲ闘玉ヒテ、元來馬ハ逸物也、一文字ニ駈付サセ玉ヘハ、軍兵不劣ト統テ防戦ス、又
貴久公見次玉ヘハ、味方競ヲ成テ防キ戦フニ依テ、夫ヨリ敵モ引退ト云、

翰遊集及菱刈御退治記共、大意策句記ト同シ、但シ、有川雅樂介ト一所ニ軍勞ノ人、御退治記ニ伊集院トアレトモ、諸書トモ伊東トアリ、伊東氏はナラン、

惟新公御記曰、永祿十一年正月廿日、於道崎有不意合戦、敵者猛勢身方者無勢也、雖欲相戦、多勢被斬立、或被討、或被疵者多之、弥敵軍成勇、取籌左右前後、欲討捕予、敵味方之間纒隔一二間、雖然、不乱足返合依相戦、身方漸渡大河、引退曾木城、通奇特之難云、

同年二月廿八日、島津又五郎忠長薩摩・肝付彈正兼寛ハ、馬越城ヨリ市山ニ到リ、新納刑部太輔ト大口ノ城ヲ陥スヘキ評義一決シテ歸リケルニ、新納忠元ハ小苗代迄此面將ヲ送り、互ニ暇迄シテ別レケル処ニ、味方歩卒ノ若者トモ、大口城ニ馳連キ、隙ヲ伺ヒ城ヲ攻取ント睨居タル処ニ、城内ヨリ敵數百人先ヲ争ヒ出向フ、此時、島津忠長・肝付兼寛・新納忠元下知シテ一步モ不退、皆死ヲ致シ可戦ト、東西ニ馳テ諸兵ヲ進メケレハ、我先ニト入違入乱相戦フ、新納右衛門佐ハ、痛手ヲ負ヒ引退ケレハ、鎌田尾張守政年ハ、敵ノ牧野二郎右衛門ニ掛合戦ケル処ヲ、味方之軍中ヨリ真蓮坊鉄炮ヲ放チケル、其玉牧野カ胸板ニ中テ、北枕ニソ臥タリケル、田實右京亮是ヲ見テ敵中ニ突入、牧野カ首ヲ取タリケル、角テ、

味方之軍兵トモ市山城ニ向テ逃ントスレトモ、敵強ケレハ如何セ
ント、茫然トシテ居タリケル、新納忠元ハ白坂ヲ望テ打ケル処ニ、
肥後八代ノ勇士的場・後藤ト云者ト、礮ト行逢、互ニ切結ヒケル
ニ、求磨ノ勇士竹添丹後守ト云者ツト寄テ、忠元カ左ノ脇ヲ刺タ
リケル、忠元カ郎従トモ、主ヲ打セテハ叶マシト、一同ニカヲ合
セ戦ケル隙ニ、漸々ト引退ク、川畑藤七兵衛・春成外記踏留テ粉
骨ヲ尽シ相戦フ、角テ、求廣ノ凶徒東藤左衛門・愛甲助三郎・佐
牟田等ノ者トモ、壁ヲ越ントシケル処ヲ、鎌田彦岐・税所右衛門
兵衛・四本源太兵衛馳連キ、彼三人ヲ討取ケレハ、城ノ大手不味
シテ引退ク、搦手モ又防禦ノ合戦烈シケレハ、敵ハ東西ニ向テ馳
散ケル、此鬪ニ、新納忠元ハ六ヶ所迄手ヲ負ヒ、痛ミ甚シケレハ、
太守是ヲ聞召、忠元カ勲功御感有テ、則長谷場織部佐・三原右京
亮兩人ヲ差遣、忠元カ疵ヲ問セ玉フ、誠ニ軍忠ノ程、比類ナキ袁
トモ也、本文據亂記ノ文
也、此條亦同。

三國軍記曰、永祿十一年長二月廿八日、馬越ノ軍兵爲評義一山
ヘ打越ル、路次ノ序ニ、敵ノ手姿ヲ試ン爲ニ、足輕雜兵ヲ小苗
代原ヘ押出シ戦ヒヲ催シケレハ、敵四百計ニ手ニ成テ蒐出ル、
肝付彈正忠・新納右衛門、馬越・市來・伊集院・川辺之勢ヲ卒
シテ、出向ヒ攻戦フ、俄之合戦ナレハ、互ニ備モ不定、彼コニ
衝合愛ニ組伏セ、一挙ニ死ヲ争ヒケル、新納右衛門ハ薄手余
多被リ、暫ク陣ニ引退ク、愛ニ鎌田尾張守河原毛ノ馬ニ鞭ヲ打
敵ノ真中ニ分入テ、味方ノ勢ニ下知ヲ加ヘ、前後左右ニ切テ廻
ル、肥後ノ軍士ニ牧野二郎左衛門ト云ル者、彼尾張守カ働キ尋
常ナラヌヲ見テ、村重藤ノ弓ニ厂俣ヲツカイ、近々ト認寄リ、
引シホル処ヲ、市來ノ住人面高真蓮坊是ヲ見テ、鉄炮ヲツ取、

其間三十間計、牧野カ真中打通ケレハ、引持タル矢ヲ放チ得ス、
真倒ニ仆レ死ス、田實右京走寄テ首ヲ擡ク、是ヲ始トシテ、思々
ノ高名ナレハ、討取首ハ數級也、求廣・八代・大口ノ軍勢ハ急
ニ手立ヲ替ヘ、數百騎ヲ引分ケ、苗代原ヲ打捨、一山ニ攻寄ル、
地頭新納刑部太輔諸卒ヲ下知シ、攻戦フ処ニ、八代ノ住人的場
五藤ト云者直前ニ進ミ、新納殿ニ見參セント、白坂口ニ打テ入
ル、刑部此ニ扣ヘ候ト、三尺一寸ヲ拔持、彼五藤ニ渡シ合ヒ、
南無八幡大菩薩ト引重テ討レシカ、五藤甲ヲ碎カレ、跡ヲモ不
見シテ引退ク、一山ノ軍兵是ニカヲ得テ、一度ニ吐ト切テ出、
ムラカル敵ニ突テ入ル、敵兵東西ニ乱立、不次ニ成テ見ヘニケ
ル、去程ニ、苗代原ノ味方ハ、諸軍ヲ引テ馬越ノ如ク掃リケル
カ、一山ノ合戦ヲ見テ、倡力ヲ添ントテ、敵ノ後ヲ取巻キ、前
後ヨリ打テ廻ル、敵弥度ヲ失ヒ、戦フヘキ様モナク引退ントス
ル処ニ、又苗代原ヨリ求廣・大口・八代ノ勢、急ニ一山ニ寄セ
來リ、最前ノ奇手ニカヲ添、勇ヲ奮ヒ戦ケリ、敵味方入乱レ叫
キサケンテ戦フ音、地雷發出ノ沛然タルカ如也、新納刑部最前
ヨリノ戦ヒニ、數ヶ所ノ疵ヲ蒙リシカ、一先城中ヘ入ランスル
処ヲ、敵兵六七騎蒐ヨセ、刑部ヲ中ニ取囲ミ、已ニ危ク見ヘケ
ルヲ、川畑藤七兵衛爰ヲ我ニ任セヨト、鎗ヲ擦テ蒐出、無ニ無
三ニ突テ廻ル、其間ニ、刑部ハ城中ニ引退ク、斯ル処ニ、求廣
方ノ中ヨリ、東藤左衛門・愛甲助三郎・佐牟田某、川畑ヤラシ
ト打テ掛ル、春成外記屋倉ノ上ヨリ是ヲ見テ、川畑打セテハ叶
フマシト、差詰引詰散々ニ射ル、是ニモ敵辭易セス、猶モ進ン
テ戦ヒケルヲ、鎌田彦岐・税所右衛門兵衛・四本源太兵衛城中
ヨリ蒐出、彼三人ヲ討留ル、是ニ味方勢ヒヲ得テ、息ヲモツカ

セズ戦ケレハ、敵大手ノ口ヲ引退ク、直ニ搦手口ヨリ攻入ントスルヲ、城中ヨリ五十余騎計リ、矢先ヲ搦テ射タリケレハ、敵兵不叶、本所ノ口トク引ニケルト、

箕句記曰、永祿十二年二月廿八日、馬越ヨリ一山へ、宗徒ノ人々見廻トテ打越レケル程ニ、此序ニ敵ノ手姿ヲ見為ニ、小苗代原へ打出、足輕雜兵ヲ大口表ニ差出シケル処ニ、大口ノ城ヨリ是ヲ見テ、二手ニ分テ馳出ス、一山ヨリモ新納刑部大輔打迎トシテ出ラレケルカ、小苗代ニ參リ、南無薬師悲願タノモシヤト伏拜ミ、矢立硯ヲ取出シ、堂ノ軒板ニ歌ヲ一首書ントテ、壁ニ取付、賈ヲフマヘ、軒ニ書ントシケル処ニ、早敵詰入由告ケレトモ、遂ニ歌ヲ書トラントシケルヲ、郎等ニ久保兵太左衛門・尾崎彦兵衛ナト云者、和殿ハ犬死シ玉フカトテ、引落シ引スリ退程ニ、敵即追カケタリ、白坂口へ差忍ヘケル処ニ、八代ノ住人の場五藤兵衛、是ヨリ以下本分同シ

同記曰、偕又、一手ヲハ馬越・加治木・市來・伊集院・川辺ノ勢ヲ以請留、肝付彈正忠諸軍ニ下知ヲナシ、軍配ヲ調ヘ、散々ニ攻戦フ、互ニ矢軍隙モナク、於此新納右衛門手負テソ引退ク、是ヨリ末、鎌田政年合戦、真蓮坊牧野ヲ打コト、全テ前文ニ同シ、

翰遊集并菱刈御退治記・三國軍記共及箕句記ニ大意同シ、

私曰、箕句記・三國軍記・翰遊集・菱刈御退治記トモニ、大口勢ニ手ニ分テ出トアリ、又箕句記前文記スル如ク、一手ヲハ馬越・加治木・市來・伊集院・川辺ノ勢ヲ以テ請留ルトアリ、其後馬越勢ハ馬越へ引退ス処ニ、一山ノ合戦ヲ見テ救來ルト、三國軍記ニ書スルヲ以テ見レハ、大口勢ニ手ノ内、一

手ハ馬越ノ軍ニ掛リ、一手ハ市山ヨリ出シ、新納ノ手ニ掛リシナランカ、然レハ、擾亂記ニ記ス、馬越ノ軍將市山ニ到リ、掃路小苗代原へ人数ヲ出シ、忠元モノノ内ニアリト記セシコト如何、可再考、

偕又、同年三月廿三日、相良・菱刈・入來院・東郷・祇答院内談、兵儀ヲ示シ合セ、曾木ノ城へ押寄ル、地頭職ニ宮原筑前守ヲ居ヘ置ル、同名越中守トテ劣ラン勇士アリ、相加ヘ置ル処ニ、一揆ノ余黨寄來ル出聞ヘケレハ、佐多山城守伊集院ヲ大将トシテ、軍兵トモ相込ラル、渋谷黨ノ者トモ押寄せ、時ヲ作テ攻懸ル、味方モ思ヒ儲ケタルコトナレハ、待受相戦フ、敵モ死人・手負ヲコトトモセス、切岸ニ攻上ル、城中ノ兵矢盡ヲ作テ、一人モ遁サシト、散々ニ射タリケリ、渋谷ノ者トモ悉ク手負ニ成リ、城中ノ兵手痛ク防戦フ間難叶ヤ思ヒケン、攻メアクンテソ引退ク、宮原カ殊成粉骨ナリト申ケル、渋谷後見シテ居ケル、求磨・大口ノ軍兵トモ、馬越ノ遠見ヲ追拂ヒ、城ノ麓ニ鉄炮ヲ打込ミサセル、仕出シタルコト無シテ一山城ニ寄來ル、刑部太輔先日ノ軍ニ手ヲ負ヒ、養生ノ時分ナリシカ、敵ノ行ヲ見ルヨリモ、物具取テ堅メツ、城戸口へ打出ラル、其日ノ遠見番吉出治部少輔・西田主馬允、若武者トモヲ相具シテ、白坂口ニ打出、勇雄ノ敵先駆シタル者トモニ駆合セ、相戦ヒ、各手柄高名シケリ、敵養福寺ニ攻入ケルニ、市來來馳続ク、本田掃部兵衛・石神左吉・河野玄番允・鬼塚源三・長野民部少輔・日高甚五郎・伊地知新三郎ナト馳合セ、防キ戦ヒケル程ニ、次第ニ味方馳重レハ、烈キ矢軍、暫シテ漸ク敵モ退ニケル、皆々辛勞申計ハナカリケリ、

菱刈御退治記及三國軍記曰、永福寺口之戦、求戸ノ中ヨリ、赤

毛ノ笠二三ヶ月打タル差物シ、歳ノ齡二十計ト見ヘタル者、味方ノ中ヲ進出、左ニ當リ右ニ當リ、士卒ヲ勇メ、一涯勝レテ見ヘケルヲ、長谷場三郎鉄砲ヲ以テ打ケレハ、太腹ヲ透サレ、前サマニ伏ケルヲ、首ヲハ敵ニ擡セシト、多勢一度ニ巻圍ミ、箱崎ノ八幡サシテ引退クト、云々、

菱刈御陣和平凶徒忽變和支^付伊東氏飯野着陣付 忠平公飯野へ御帰城之事

同年五月上旬、山野・羽月・平泉ニ入置玉ヒシ番兵トモ、交替之時節ナレハ、多ノ人数ヲ遣シ互ニ替ラントスル処ニ、大口勢是ヲ知テ、兼テ徑路ニ兵ヲ伏セ置キ、番替リノ通ルヲ討ント待掛タリ、此由遠見ノ者註進ス、

日新公被聞召、宣ヒケルハ、此弓箭長カカラハ、人ハ多滅テ後ノ為悪カルヘシ、長陣ニ於テハ陣ノツカレ、人ノ退屈出來タリ、敵ハ其隙ヲ伺ヒ打モノ也、先ツ一所ヲモ相良方ヘ与ヘ、一節和睦シテ時刻ヲ待玉ヘ、天慮宜キコトアラハ、負テ勝ヘキ道理也、能々談合シ玉ヘト、仰ケルニ依テ、山野ヲ相良ニ渡シ、和睦ノ儀調ケリ、然処ニ、無程同年八月十五日、大口ノ者トモ伊東ト心ヲ通シ、堂崎ノ通路ニ陣ヲ取レハ、伊東ハ飯野ノ内桶平ニ陣ヲ取り、加久藤・馬関田表之民屋ヲ焼拂ヒ、狼藉以甚シ、
貴久公 義久公此由ヲ聞召、相良互ニ和睦ヲナシ、剩ヘ山野一所ヲ相付ケ、未幾日アラサルニ、變誓言ヲ、カ、ル狼藉ノ振舞、奇特ノ至也、シハシモ延引スヘカラストテ、菱刈表ノ諸陣ヨリ軍兵ヲ勝テ、加久藤・馬関田ノ者トモニカヲ合セ、防カセ玉フ、去レ

トモ、敵ノ大勢ヲ討シコト謀ニ不如トテ、數百ノ勢ヲ籠ニ伏セ、戰フ毎ニ走テ、敵ヲ遠クヲヒキ出シ、釣付討シ玉ヘトモ、折節雨降続キ、諸陣ノ軍勢徒ニ數日ヲ送ル計也、カクテハ陣中兵糧ノ費ヘ如何也、一先加久藤・馬関田ノ加勢ノ兵ヲ菱刈ヘ引取レトテ、已ニ引取ントスル処ニ、大口ヨリ、兼テ田中川内ノ通路ニ兵ヲ伏置、味方ノ勢ノ通ル処ヲ、一度ニ吐ト起合セ、左右ヨリ切テ廻ル、味方ノ勢ハ思モ寄ラサル支ナレハ、隊伍ヲ俄ニ乱テ、四方ヘ颯トノキニケルヲ、川上丹波・堀之内某・大膳坊、キタナシ返セト、味方ヲ勇メケル、三人心ヲ一致ニシテ、敵ノ中ヘ分ケ入、命ヲ限りニ戰フタリ、是ヲ見テ、味方ノ勢皆一同ニ切り掛リ、声ヲ掛ケ氣ヲ勵シ、半時計ノ戰ヒニ、死人弥カ上ニ重リ伏シ、溝壑ニ埋ミケリ、去ハ、三人之者トモ打死シ、敵モ數多打レケレハ、敵ハ大口ノ如ク引ニケリ、其後、求戸・八代ヨリ大口ヘ加勢トシテ、多勢大山ヲ越テ來リケレトモ、究竟ノ難所ト云ヒ、長途ニ疲レテ一戰ヲモ挑ミ得ス、其上心惰リ氣弛テ、薩州感應寺ノ住持ヲ頼ミ和平ヲ乞フ、

貴久公 義久公此旨御許容アリ、和睦調ヒ、山野ハ大口ニ屬シケル、

私曰、此段諸書同シ、然レトモ、和睦時日、箕匱記ニ記スル処少シ異ナル、故ニ左ニ記ス、

箕匱記曰、永祿十一年五月上旬ヨリ、山野・羽月・平泉番替ニ成ニケル、此刻ヲ見切ツ、大口ノ城ヨリ野伏ヲ掛タリケリ、同年八月十九日ニ、大口ヨリ打出テ、堂崎ノ通路ニ陣ヲ取構ヘ、深水三河守^{相良}ヲ大将トシテ、菱刈カ家來ニハ足輕司之板橋半助・二宮囚獄介ト云者トモヲ案内者トシテ相込、折々野伏ヲカ

ケ支ヘタリ、同日、飯野ノ内桶比良ト云所ニ、伊東勢ヲ押出シ陣ヲ取り、加久藤・馬関田表ノ百姓村ヲ放火シテコソ居タリケル、其時、何ナル者カシタリケン、落書シテ、伊東カ陣ヘ立タリケル、

伊東陣糧ハ尽タリヲケカ平飯野ホシサニ飫肥ノユルサヨ

伯圃公仰ケルハ、

兵庫頭ハ先ツ飯野ヘ帰り、真幸ノ固メニ候ヘト有ケレハ、

忠平公ハ真幸ニソ帰陣成レケル、菱刈表ノ諸軍ヲ少々相分テ、

飯野ヘ加勢トシテ遣サル、夫ニ依テ、伊東ヘ偽引陣士ヲ巧ミ伏

勢セントテ、足輕トモヲ差出サル処ニ、大雨降り、更ニ手タテ

モ不事成、夫ヨリ打続キ降りケレハ、菱刈陣ノ軍衆モ徒ラニシ

テ少々帰サル、処ニ、其折節ヲ見及テ、大口ノ城ヨリ打出、馬

越田中ノ河内ニ伏兵ヲ設ケ置、伊作兼番替シテ通ケルヲ真中ニ

取込メ、川上丹波守・堀之内二郎左衛門ヲ打取ケル、聞之、馬

越ヨリ馳連ク鹿兒島之住是枝大膳坊、無比類打死也、夫ヨリ敵

モ退ニケル、

日新公敵ノ行度々ノ仕方ヲ聞召、此弓箭長ヒカハ、人数多ク亡

テ悪カルヘシ、於長陣ノツカレ、人ノ退屈出來ルトキハ、敵其

隙ヲ打ト云コトアリ、先一所ヲモ相良方ヘ相去リ、一節和睦シ

テ時刻ヲ待玉ヘ、天慮ヨロシキコトアラハ、負テ勝ヘキ道理也、

能々談合シ玉ヘト仰ケル所ニ、求广・八代・葦北ノ大勢モ難所

ヲ打越ヘ、長陣ニ退屈シテ私語ケルヲ、相良モ聞テ如何ト思ヘ

ル折ナルニ、

貴久公ハ

日新公ノ仰ニ随ヒ、先ツ和平セラルヘキノ由仰出サレケレハ、

薩摩守義虎慶トシテ、野田感應寺之和尚ヲ以、山野ヲ相良ニ渡サレ、和義ノ調法ヲ仰出サルレハ、相良悦ビ、和談ト成ニケリ、此歳永祿十一年十二月十三日、島津相模守忠良入道日新公御逝去アリ、御法号梅岳常潤在家菩薩ト申奉ル、偕大口ノ和談調シカハ、同十二年^〇正月廿四日、五ニ出合ヒ、於馬越現形シ、相良方ヨリハ東・深水・犬童、其外宗徒ノ人々数多出合フ、此方ヨリモ宗徒ノ人々出合テ、和談ノ祝言アリ、薩摩方ヨリ謡ヲ上ケテ、一張ノ弓ノ勢イタリ、東西南北ノ敵ヲ安ク平クト、歌ヒケレハ、相良方ノ人々氣色損テ見ヘケルヲ、鎌田尾張守見之座敷ノ興ヲ催シ、又謡ヲ上ケラレ、兵ノ交リ頼アル中ノ酒宴故ト、歌ヒケレハ、東為伯モ参河守頼兼モ、其外相良家ノ人々、尾張守殿御座之興、尤畏入タリ、斯コソ有度コト也トテ、暫シテソ立ニケル、一張ノ弓ノ謡モ折ニヨルヘシ、敵ヲ退治シ、或ハ城ヲ受取テ、太平ノ吐氣ニコソ彼ノ謡モ歌イケメ、是ハ此度ハ禁句成ヘシトテ笑ケルカ、程ナク手替シテ、深水参河守手切ノ證據ヲ出シケリ、

相良菱刈再變和衷^付肝付兼寛新納忠元平泉在
番之衷

永祿十二年三月十八日、蒲地越中守平泉へ通ケル処ヲ、主従十七人打果シ、己ニ弓箭ヲ取起セリ、去レハ、於今ハ平泉ノ御格護モ一大変ト成ニケル、後口ニ山野アリ、^{山野去守相}前ハ大口先キ陣ナリ、道切レテ通路不暢、各難義ニソ思ハレケル、然ニ、先ツ彼平泉ヲモ相去テ、相良カ情欲ヲモ塞キ、後日仕合ヲ以追伐ヲ加ヘ

ハ、必御利運アルヘキカ、先ツ一節御宥メ候ヘカシ、善ヲ急ニシテ惡ヲ延ヨト申コトノ候ヘハナト、評義區々ナル所ニ、肝付彈正忠・新納刑部太輔同心シテ申サレケルハ、敵ヲ退治スル武略サマシク也、然レ、彼相良カ林ヲ見ルニ、心驕テ貪欲不道者也、山野一所ヲ相渡シ、無事ノ調法アリト云トモ、未タ百日ヲモ満タスシテ、又鋒起セリ、彼面所ヲ賜フコトナラハ、無程横川迄奪ンコト疑ナシ、左モアラハ、坂ヨリ上ヲ領分トシテ、加治木・帖佐ヲ真トニ見下シ、弥以情欲ヤマシ、如此ナラハ、真幸モ自ラ相良領分トナラン、大ヲ以小ヲ制スルハ易シ、小ヲ以大ヲ制スルハ難シト云、求戸・八代・葦北ニ今又牛屎・葦刈・真幸迄モ持統ケ、分限タランハ、加追伐トモ輒ク退治シ難カラシ、然ハ今平泉ヲ相良ニ与ヘン更如何也、其上、平泉ヲ差捨ラレハ、羽月一城ニテ大河ヲ隔テ持マシキ所也、於今ハ、平泉ノ在番ハ致カタク所也トモ、此兩人ニ於テハ、是非二百日ノ在番仕ルヘシ、必百日ノ内ニ勝負ノ安否ヲ決シ、心有ン兵ヲ御頼ミアルヘシト、申サレケレハ、太守聞召、誠ニ神妙也トテ御感アリ、諸軍勢ノ中へ仰出サレケレハ、數百人ノ兵トモ進出テ、望中ケリ、依之、平泉在番ニソ定リケレハ、彈正忠兼寛・刑部太輔忠元番大將トシテ、三月之末ヨリ在番ヲ勤ラル、

私曰、平泉在番一件、翰遊集及菱刈御退治之記之説、下文凶徒敗軍之件ニ文義連続スルニ依テ、凶徒敗軍之条末ニ附書ス、

以伏兵大敗凶徒事

新納忠元・肝付兼寛ハ平泉へ在番在テ、日數ヲ送りケル、其比相

良家ノ者トモハ、過半黒皮威ニ黒毛ノ笠、大敷皮ニ大立傘、三間カ、リノ長柄ノ鎧、真中取テ鎧先ヲ揃ヘ突カカルニ、面ヲ向フヘキ様モナシ、幾程モ味方ノ足輕利ヲ失ヘハ、勝ニ乘リ、恐レ心更ニナシ、然ルニ、薩摩方有功ノ人々是ヲ見テ、勝ニ乘リ驕ル敵ハ滅シ易シ、能ク伏兵ヲ謀テ之ヲ討ンニ、何ソ難キコトカ有ランヤト申ケレハ、大將此義ニ同シ玉フ、依之、宗徒ノ人々評義シテ、伏兵ヲソ企ケル、頃ハ同年五月六日ナリ、一番ノ伏兵大將ニハ新納刑部太輔・肝付彈正忠、富神カ尾ニ伏シタリ、二番之伏兵大將ハ大野駿河守・宮原筑前守、稻荷山ニ（稻荷山、羽月伏タリ、請兵ハ羽月之町口、問ハ、今大明ノ時ノ町ニテハナシ、塔橋ト大島ノ其住々ニ、貴久公・義久公・歳久・幸久（後石馬、並来ノハツレタノカノ島也）忠長（忠長、其外一門宗徒ノ人々、其宵ヨリ打寄テ、靜リキツテ居タリケル、偽引ノ大將ニハ中務太輔家久、雜兵四五百人ニ兵糧運送ノ風情シテ、糠俵ヲ馬ニツケ、或ハ人ニ背負セテ、軍兵千余騎ニ警固サセ、平泉サシテ通ラレケル、大口城ヨリ是ヲ見テ、今日平泉番替リナルソ、追落シ荷物ヲ取ント、足輕雜兵共思々ニ馳続ク、先キ陣ノ大將深木參河守、若シ武略ニテモアランヤト制シケレトモ、吾不劣ト、宗徒ノ人々ヲ始トシテ、大勢馳來テ家久ノ勢ヲ追カケタリ、家久所好ノ幸ト思ヒ、差忍ヘタ々防戦ヒ、栗野ノ住人前田豊前介、太刀始トソ名乗ケル、一合戦シテハ退キ、一防キ防テハ退ケル程ニ、各軍勞申モ愚カ也、一ノ伏兵近クニテハ、家久已ニ打レ玉フヘク見ヘケレハ、伏兵心ヲスエカ子テ、一度ニ動ト起ラントシケルヲ、彈正忠・刑部太輔未可起ト怒リ廻テ、團ヲ以横扇シテ下知スレハ、今起ントシケル伏兵ハタト伏潜ム、彼兩人ノ武威ノ程ヲ感セヌ人ソ無リケル、家久ハ色々會釈シテ偽引カレケル程ニ、真中ニ引入タリ、一

ノ伏兵一度ニ吐ト起セハ、二之伏兵一度ニ動ト起合、真中ニ追取
籠攻打ホトニ、相良・菱刈カ勢悉ク敗北シテ、宗徒ノ者切懸ル首
百參拾六人、雜兵ノ首八百余人、其外切捨ハ數知ラス、家久ノ高
名無比類次第也、伏兵ニ遠々ト引入タレトモ、足輕キ者ハ逃ノヒ
ヌ、或ハ老林、或ハ身濕クシテ、宗徒ノ者求磨・八代ノ名ヲ云ヘ
ル人々、皆悉ク打レタリ、前四年ハ度々勝利ヲ得、勢イ以ノ外ナ
ルカ、遂ニハ斯ク滅ケル、去トモ、討洩サレタル者トモ、大口
之城ニ馳籠テ、漸ク城ヲハ持堅メテ居タリケル、

翰遊集及菱刈御退治記曰、三月十八日、深水參河守ニ蒲地越中
守打レテ、後平泉タモチ難キ間、平泉在番勢ヲ可繰取ラル、其
為ニ羽月迄迎勢ヲ遣サル、彼在所ノ在番ハ肝付彈正忠、城
ノ地頭ハ新納刑部太輔被差置、彼番人ハ御意趣ヲ段々承リ、御
返事ニ言上ハ、平泉ヲ御差捨ニ於テハ、羽月一城計ニテ、大河
ヲ隔テ持テマシキ也、然ル間、比良泉ヲ成程堅固ニ我々守護仕
可被遊御持ト申上ル、彈正忠・刑部太輔ハ平泉ハ百日番ヲ致ス
ヘシ、此外ノ兵ハ可有御勤ト、夜中ニ諸勢ヲ差返ス、

御兩殿聞召、御感深重也、扱御側衆ヲ諸外城ニ皆以被遣、御頼
ト有ケレハ、忝上意トテ進ミ出、御番替之日限ヲ被定、扱コソ、
永祿十二年^己五月六日ニ、一番ノ伏草ハ鳥神尾ニテ大將家久
二番ノ伏草稻荷山ニ大野駿河守・宮原筑前守承リテ伏ニケル、
今一手ヲハ、請草ノ勢トテ羽月ノ町口ハ被備、角テ、番衆ハ如
何ニモ尋常ノ風情ニテ被打通処ニ、大口ト求陣ヨリハ是ヲ見
テ、思々ニ掛出、足輕・若黨ノ者トモハ、荷物トランド悦ンテ、
我先ニト勵ミ進出、鳥神ノ尾ニ早ク掛上タリ、家久此ヲ見テ、
好所ノ幸哉、皆打取ト下知アリテ、狼烟ノ螺ヲタテラル、兼

而如義定走合セテ、一合戦イタサル、栗野衆前田豊前守太刀始
仕ラル、其太刀ニテ敵余多被打取、懸ル頸數百三十六生捕一人
打捨ハ數不知、味方將卒共ニ悦ンテ勝吐氣上ケ勇ミケリ、家久
此度無比類高名ノ程、軍兵目ヲ驚ス、扱又、

義久公ノ御裝束、濃紅ノ御帷子ニ、糸緋綴ノ御キセナカニ、同
毛ノ五枚甲ノイチャウ打タルヲ召レ、白檀ミカキノ籠手・鷹當
六具ヲツメテソ見得玉フ、金子ントウノ御ハカセ、三尺計候ヒ
シ長ニ結テサケ、金作ノ御太刀ヲユシクハカセ玉ヒテ、世ニ
無比類御威光也、御馬ハ長七キ計ナル市來ノ月毛ノ駒ニ、金覆
輪ノ鞍置、御身カロケニ被召タル、誠ニ广利支天モカクヤト申
計也、

私曰、三國軍記ノ説、亦大意同シ、
世祿記曰、^{細地村}爾來、彼境往還不自由、使肝付彈正忠兼寛・
新納刑部太輔忠元入羽月城、雖然、凶徒增奢、欲掠羽月城幾度、
由是、忠元・兼寛以伏兵計策、合其論於鳥津又七郎^{義久公ノ應諾}、
而後、五月六日、一番伏兵在戸神尾、二番伏兵在稻荷山、其將
大野駿河守・宮原筑前守也、誘招其敵陷于伏兵中之將家久也、
故驅于大口城下、然共、而敵不出之際、放鉄炮侮其城頻也、於
此追來者如雲霞、家久欣然佯走而退、敵乘勝臨戸神尾西、則家
久交接鞍上遂得其敵首、見之則忠元・兼寛指揮、而諸軍起發從
四面伐之、前田豊前守先諸人有首功、敵及敗北、討殺者一百三
十六、其外虜一人、於此、大口凶徒矢勢也、

私曰、三國擾亂記之説亦同、

攻祁答院長野守・菱刈降参之事

同月廿五日、祁答院之内長野城ヲ被攻、被攻ノ所

太守方ノ軍兵押寄せ攻戦程ニ、凶徒モ少モ不臆、寄手之勢ヲ城ノ近クニ呼寄せ、思フヤウニ伐シテ、兵伏ヲ備ヘ待掛タリ、比志島宮内少輔・同彦四郎ハ勇氣タユマサル者トモナレハ、諸兵ニ先立テ城ヲ越ントシケル処ニ、鎌田尾張守政年ハ早強敵ニ向ヒ合ヒ、爰ヲ専度ト切結フ、斯リケル処ニ、祁答院新兵衛ト云者、城内ヨリツト討テ出、鋒ヲ合セ勝負ヲ決セント、四角八方ヘ切テ廻ル、彼ニ掛合セ、税所宮内少輔・仲俊坊・貴島源五郎・村原新助・同左衛門五郎・深野平六・上床源六兵衛・岩下主殿・鍛冶屋新左衛門・尾上五郎・田實右京亮・肝付権介之、等、枕ヲ並ヘ討死ス、サレトモ、味方ノ軍兵トモ、一同ニ志ヲ合セテ是ニ却ルコトナカレ、爰ニ於テ、命ヲ惜ムヘキニ非ス、太刀ノ刃ノ不碎内ハ闘ヘシト、喚サケンテ操合シカハ、敵モ弱リ、味方勝利ヲ得シカハ、蒲生境迄切靡シ、敵數十人ノ首ヲ切掛サセ、勝吐氣作テ退陣ス、

世禄記亦同シ、然トモ、蒲生境迄切靡シトアル処、世禄記ニハ蒲生境亦討捕敵數十帰陣矣トアリ、

三國軍記曰、永禄十二年五月廿五日、祁答院之内長野城ヲ攻ントテ軍兵ヲ相催シ、已ニ長野ノ城下ニ至リ、東西ヨリ吐氣ヲ造リ、唯一操ニト攻タリケル、然トモ、此城寄場悪ク峻岨ニシテ、卒易ニ攻付ツカレス、流石ニ寄手モアクミタル処ニ、城中ヨリ邪答院新兵衛ト名乗テ太刀ヲ打振り、大勢ニ割テ入、火花ヲ散シ戦フタリ、比志島宮内少輔・同彦四郎・鎌田尾張守是ヲ見テ、三人一所ニマトマリ、彼新兵衛ニ渡シ合、時ヲ移シテ戦シ

カ、不叶トヤ思ケン、新兵衛急ニ引返シ、城中ヘ逃入ントスルヲ、比志島・鎌田遁サシト追掛タリ、城中ノ者トモ是ヲ見テ、兩人ヲ射留メント、究竟之射手十四五人、高檣ノ上ヨリ弓・鉄炮ヲ打掛ル、是ニモ猶僻易セス、シコロヲ傾ケ袖ヲカサシ、城戸口迄攻近ク、城中ヨリモ其勢三百騎計、一度ニ颯ト切テ出、刃交ヘ攻戦フ、巳刻ノ初ヨリ酉ノ夕部ニ至ル迄、勇ヲ振テ戦ヘトモ、勝負ハ更ニ見ヘサリケリ、此ニ市來衆仲俊坊・貴島源五・税所宮内少輔・深野平六・村原新助・弟左衛門五郎・上床源六兵衛・加治屋新左衛門・岩下主殿介・尾上五郎・伊集院二田實右京亮・宇都宮、其外余多ノ勇士等、何レノ時ヲ期スヘキノ、双之腕ノツ、カン程ハ、一筋ニ切崩シ、俁其後ハ敵ニ首ヲ取ラル、カ、敵ノ首ヲ捕ル者カト、共ニ打テ出、真中ニ鬼入り、一手ハ横ニ討通レハ、一手ハ豎ニ切抜テ、雲手十文字ニ馳廻リ、多クノ敵ヲ打取シハ、目覺シカリシコトトモナリ、去トモ、敵ノ大勢ヲリ重リ、皆々打死ス、蒲生口ニハ敵余多打取ト云ヘトモ、味方多ク損シテ、敵ハ猶モ弱ハラサレハ、

義久公御覽シ、暫ク先ツ此陣ヲ引、重テ知略ヲ廻ラサント、長野ノ陣ニ引玉フト、云、

翰遊集、大意同シ、然トモ粗也、勝負之件是、ヨリ前略ス、於蒲生口敵余多討取トアリ、

箕句記、大意同、引陣ノ件是、ヨリ前略ス、肝付権助、此外所々討死ノ人多カリケリ、彼長野城迫リ悪シテ、渋谷ノ者トモ大勢馳籠リ、究竟ノ射手トモ多カリケレハ、烈ク攻戦フト云ヘトモ、味方悉ク手負死人ニ成ケル間、下拵ヲ打破タルヲ手柄トシテ、先々引陣セラレケル、蒲生口ハ敵余多打取テ、味方ノ勝利ト聞ヘケルトア

リ、
緒、桶平ノ伊東陣ヘモ、菱刈表大口城大滅ヒシタル由聞ヘケレハ、
其威風ニ恐レ、桶平ノ陣ヲ引崩シテソ退ケル、是ソ勝利ノ時刻ヨ
トテ、同年八月十八日ヨリ三日出勢シテ、大口ノ城ヘ押寄せ、東
西南北ヘ馳廻リ、秋作ヲソ拂レケル、郡司宗徒ノ人々ニ迄迄、自
ラ鎌ヲ取テソ薙レタリ、相良・菱刈両家ノ者トモ防ントシケレト
モ、前ノ勢イ劣リタレハ、外ニ打出防コト不能、洩リ果テソ見ヘ
ニケル、其時、相良老名執事談合シテ申ケルハ、頼房由ナキ人ニ
与力シテ士多ク失フコト、相良家滅却ノ瑞相也、此弓箭長カラハ、
又如何程ノ者カ滅フヘキ、殊ニ島津殿ハ國ノ太守、分限ト云、旁
以無益也、其上文明ノ比、相良為統ノ時、大口ニハ島津出羽守久
遠、平泉ニ同伯耆守豊久居玉ヒ、為統互ニ防戦有ト云ヘトモ、遂
ニ和睦シテ、御恩力ヲ以、無程八代之郡ヲ知行シテ、今迄モ如是、
其古ヲ思ヘハ、寇讎ヲ成スヘカラスト、遅クソ思ヒ知ニケリ、仍
テ和平ノ嚢ト成、同年九月十四日、求ルノ如ク引入ル、同廿日、
大口ノ城ヲ受取、於内城泰平之吐氣ヲソ作ラレケル、相良申サレ
ケルハ、乍去菱刈ノ家ヲ本城ヘ殘シテ賜ハリ候ヘ、頼房カ三年大
口在番シタル其證シニ、哀レ於爰面目ヲ取セ玉ヘト託ラレケル間、
サヲハ相良ニ對シ、彼家ヲ殘シ玉ントテ、本城ニ所菱刈ニソ下サ
レケル、其時、大口ヲ新納刑部太輔地頭職賜フテ、即武藏守ニソ
成ニケル、真幸・菱刈・牛屎皆御退治アレハ、此度マイリタル所々
之城トモ、皆地頭ヲ被仰付、大將帰陣シ玉ヘハ、諸軍皆陣ヲ引、
御國ノ勇々サ申ハカリハナナカリケリ、去レハ、前年
日新公尊靈、負テ勝ヘキ理アリ、トノ御言葉ノ違スシテ、符節ヲ
合セタルカ如クニテ、各感シ奉ル、

世祿記曰、同八月十八日、環大口城凶徒逆儻、兵器既盡勢衰、

則乞命、九月十日、相良帶刀長・深水太郎左衛門尉為質來焉、

太守亦鎌田刑部左衛門尉政年之子・本田新助為質、云、故九月十四

日、大口之族向球磨退散也、同十八日戊子巳時、

貴久公 義久公登其城、則政年發凱歌也、其後、以牛糞・菱刈

院豫約刑部太輔故授之為地頭職、改名武藏守、前日之忠節高名

所致也、其功業豈下於唐之李郭哉李光弼・郭子儀二人、皆唐ノ廉守ノ時、中
興之功臣也、大曆中興領曰、功勞位貴忠烈

名存、指
此詞也

波谷降參豆付貴久公御逝去之事

元龜元年庚午、波谷黨降參シテ、其所々ヲ

太守ニ獻シ奉リシカハ、薩郡限之城ハ新納伊勢守ニ授玉フ、百

次・平佐・高江・碓山ハ入來院ヨリ進獻ス、高城郡水引・中郷・

湯田・西方ハ東郷ヨリ奉ル、

太守兩家カ罪ヲ宥玉ヒ、清敷・東郷ヘソ差置ル、宮里ハ平田狩野

介ニ授ケ、一所衆ニ被召成、高城郡水引・中郷・京泊・西方ハ島

津義虎ヘアタヘ、隈城ハ家久ヲ地頭職ト定玉フ、

私曰、隈城新納伊勢守ニ授ケ玉フトアリ、又家久ヲ地頭職ト

定玉フトアリ、世祿記亦同シ、此儀如何、翰遊集及質句記ニ

ハ、新納伊勢限ノ城受取ニ差越ト見ヘタリ、是ニヨレハ、伊

勢守ハ城受取迄ノ任ニテ、地頭職ハ家久ニ被仰付カ、又三國

軍記ニ、隈之城ヲ伊勢守ニ配分セラル、ト有テ、家久ヲ地頭

職ニ定玉フノコト記セス、此ニ據レハ、伊勢守并領カ、可再

考、

翰遊集及箕句記曰、菱刈モ降參シ、相良モ引入、一揆之黨類如此成行ケハ、渋谷黨ノ人々、今ハ早頼モナク思ヒ、

太守方ヘ可申入カ、如何スヘキト、取々ニ思ケル処ニ、去年ノ冬ヨリ鎌田尾張守・宮原筑前守・猿渡大炊入道審談ヲ以、東郷重尚ヲ方便付レハ、那答院能重・入來院重豊同心ニテ、悪心ヲ翻シ可抽忠節由、御取成頼入ト被申ル、仍テ去年ノ十二月廿八日、御詫訴ヘ申サル、前科ヲ免サレ、居城計リヲ賜テ、其余ヲ皆差上ラル、以上箕句記也、遊集大意同シ、輸サテ永祿十三年庚午正月五日、限之城ヲ新納伊勢守受取トシテ打越サル、百次・平佐・碓山・

高江・宮里・天辰ヲ入來院ヨリ進上也、又東郷ヨリハ水引・中郷・湯田・西方ニ高城郡ヲ進上也、清敷ト東郷ニ両家ヲ殘シ置、右ノ城之内ニハ宮里ヲ平田狩野介ニ被下テ、一所衆ニ被成、川ヨリ向ヘ高城・水引・中郷・京泊迄義虎ヘ被遣、又大口之内ニ毛山野城ヲ被遣、彼是分限ニ被召立ル、如此御評定相濟テ、貴久公ハ加世田ヘ御帰リアレハ、

義久公ハ鹿兒島ノ御館ヘ帰リ玉フ、出仕無隙シテ美々シカリケル有様也、以上翰遊集也、箕句記又同

去程ニ、今年夏ノ末ニモ成ケルニ、伯圍入道貴久公、有為無常ノ浮世ナレハ、例ナラヌ心地出來サセ玉ヒテ、六月廿三日之曉天ニ、壽五十八ニシテ隠レサセ玉ヒケル、男子四人、

太守義久公ヲ始奉リ、忠平公・歳久・家久、其外ノ一門ノ人々嘆玉フコト、申モ中々愚也、士以下賤キ民・賤ノ女ニ至迄モ、父母ノ喪ニ合ヘル如クソ思ヒケル、鹿兒島ノ南良巽ハ、海ツラニ深キ真砂地ニシテ、三丁余

リニ松ヲ植ヘ、御寺ヲ造立シ、御法名西洞大中庵主ト号シ奉ル、今ノ松原山南林寺是也、彼

貴久公ハ、十三ノ御時、前太守忠兼公ノ御養子ト成セ玉ヒシ頃ヨリ、其志氣非常人、老功ノ人ノ申ケルハ、此人コソ三州ノ太守ニモ可成人ナリ、今 忠兼公諱臣ニ諫ラレ、不快シ玉フコト誠ニ不義ノ至ナリ、彼人世ニ在ス程ナラハ、林野ニ虎ヲ飼フニ似タリ、左コソ相州家ノ人々頼シカルラント申セシカ、幾程ナク三州ノ太守ニ成玉フ叟、梅檀ハ二葉ヨリ香ハシト云如ク、其器ニ所當、老人之見ル目ノ愚ナラサリシハ、實ニ耻シキ叟トモ也、

明
赫
記

卷之三

下大隅之賊徒等海上寄來事

下大隅ノ郡司伊地知民部太輔重興秩父上郎兵衛先祖、秩父系圖ニ總行トアリト云者アリ、是ハ八島山ノ後ニテ、鎌倉代ニハ代々諸侯ノ列ニテ勤仕シ、其後尊氏將軍ノ時、伊地知彈正入道都仁罪ヲ蒙リ籠居セシ処ニ、太守貞久公御自身ノ御戦功ニ依テ、御申替有テ、伊地知カ籠居ヲ御免許アリシソニ依テ、御高恩難忘、御供申テ薩州ニ下向シ、觀應年中、大塔ノ宮ノ御弟征西將軍ノ宮ヲ、菊池肥後守武光申請ニ依テ、新田ノ一族ヲ引具シテ鎮西ニ御下向アリ、將軍方ハ筑前國大宰少貳頼尚ヲ大將トシテ、諸國ノ軍勢馳集、九州ノ諸大名宮方ニ參モアリ、將軍方ニ參モアリ、少貳・大友・菊池・島津ノ一家モ、親宮方ニ參レハ、子ハ將軍方ニナリ、兄將軍方ニ參レハ、弟ハ宮方ニ成、九州ニツニ分レテ兩雄ノ戦更ニ止時ナシ、然ルニ、筑前ノ國金隈ノ合戦ニ將軍大友ニナレハ、太守氏久公數ケ所ノ手ヲ負ヒ玉ヒ、大事限ナル所ニ、都仁前ノ御恩ヲ不忘跡ニ留リ、島津氏久ト名乗テ暫戦打死ス、其間ニ氏久公通レ玉ヒタリ、其子民部太輔益忠功ナセシカハ、夫ヨリ以來、御當家普代ノ重臣トシテ、代々ノ太守哀憐ヲ被加ノ処ニ、此重興ニ至テハ不從御下知ニ、肝付・根占ヲ相語ヒ、剩ヘ伊東ニモ與同シテ、元龜二年秋ノ初、日向表ノ船共ヲ漕ムカヘシ、伊東根占・下大隅ノ兵船大小ヲ不云、浦々ノ獵船マテ驅催シ、兵船三百余艘内海ヘコキイレ、往々ノ船津々ヲ破ラントス、向フノ島ノ内野尻村ヲ破ラントテ、船共數多押ヨセケリ、其頃、横山ノ城ヲ取拵ラヘ、要害構ヘ、地頭ニハ鎌田出雲守殿・島殿原ノ横山・岩切・萩原・上山杯ヲ始トシテ、島中ノモノ馳集ル、又下大隅敵

ナレハ、替ル々、在番アリ、折節、中務太輔渡シテ居ラレケレハ、究竟ノモノ五百ハカリ、赤水・野尻ニ馳ツ、キ、今ヤソシト待ケルヲ、敵船是ヲ見切ツ、赤水・野尻ヲ遭過テ、鹿兒島ノ前ニ漕浮フ、内海ヲ見渡セハ、山辺ノ沢ノ池水ニ木ノ葉散シキタルニ異ナラス、去トモ、内場ノ勢ツ、キ來テ、皆汀ニ取り渡テ、遠矢ニコソ射タリケリ、哀レ陸ニ揚レカシ、手柄セントソ扣ヘタリ、沖ヨリハ弓・鉄炮ヲ揃ヘテ散々ニ射ル、斯ル処ニ、鹿兒島ノ町奉行伊集院善左衛門町地頭トアリト名乗テ兵船一艘漕イタシ、矢束取テ押乱シ、暫カ程散々ニ射タリケリ、敵ノ船ヨリ是ヲ見テ、鉄炮ヲ取合セ、善左衛門カ着タル申ノ真甲ヨリ後ヘ、ツト打貫キケレハ、船底ヘカツハト倒レ空ク成、敵船ヨリハ是ヲ見テ、船端ヲタ、キ笑ヒケレハ、味方ノ方ハ無興ニコソ見ヘニケレ、汀ヨリ遠矢ニ、差詰引詰射タリケレトモ、詮ナシ、敵モ陸ニ上ル事不能シテ、行屋ノ沖ヨリ矢ヲ射入、内輪ノ如ク漕通ル、數百艘ノ兵船ナレハ、海上何憚ルコトナフシテ、靜ニ押テ漕行ケル、島ノ方モ藤野・松浦・西道ノ海辺、此方ノ浦モ美船・花倉ノ磯里、皆悉ク逸失ケル、去ハ、海上ニ打鉄炮ノ音帖佐ニ聞ヘケレハ、帖佐地頭平田大美濃守、イカサマ鹿兒島ヘ子細アルソトテ、小船三三艘取コシラヘ、帖佐與力ノ士トモ少々相具シテソ急カレケル、大崎ニ漕イタシ見レハ、鹿兒島ヨリ大崎マテ漕ツケタル船共、波間モ不分見ヘニケリ、アハヤ敵ソ、是程夥シキ兵船ニ、此小船二三船ニテ何ヲカスヘキ、タ、可戻トテ押戻ス、即兵船追ツケントスレハ、脇元ヘ可漕コトモ不成シテ、多喜カ水ヘソ上リケル、其頃不靜世ノ中ナレハ、百姓等要害構ヘ、垂レナト強ク立ケレハ、幸ニシテ楯籠ル、去程ニ、多喜カ水ノ前ニノリ浮ヒ、要害ヲ破ラントス、美濃

守ハ垂近ク塩屋ノ前ニ物具堅クシテ、牀几ニ掛テ居ラレケル、垂ノ口ヘ差合人々ハ、勝部与左衛門イノ左衛門、又・平田藤九郎後石見守・南雲老岐守・同新次郎、其外美濃守ノ郎等以上八九人、惣シテ五十人ニハ過サリケリ、城戸ニハ石ナト大物取カケテ、破ラレシトソ構ヘタリ、敵ヨスルカ如何ト見ル所ニ、小船一艘莫先ニ押付タリ、赤毛ノ笠ニ銀杏ノ立物、赤キ陣ノシキナ十衣物ニ白檀ノ弓箆手サシ、太立拳當タル男、舟ヨリ飛テアカリ、三尺余ノ太刀真甲ニサシカザシ、垂ノ際ニ按テ飛來リ、今日ノ一番合戦、馬場玄蕃ト名乗タリ、味方ニ鉄炮二丁アリケルカ、周章テ前ニ玉ヲ入タレハ、有ル甲斐ナシ、彼勝部ハ鉄炮ヲ得タリ、火繩ヲ取テ敵ヲキツト見タリケレハ、弓杖三杖四杖ノ間也、振仰キ嘗ル顔白々ト見ヘケル所ヲ押當テ動ト打ケレハ、無情カツハトソ倒レケル、其次ヲ見テアレハ、薄紅染ノ衣物着タル大男、下大隅ノ住人田上助左衛門ト名ノリテ、石垣ヲ押ヘ、已ニ登ラントシケルヲ、真逆ニ射倒シタリ、又其次ニ、志布志ノ住人検見崎何某、夫ヨリタメ付々々打程ニ、雑兵以下数多目下ニ射倒シタリ、斯リケル処ニ、小舟十余艘舳サキヲ揃ヘテ漕ツケ、思ヒタニ飛テ上リ、其中ニ大將ト覺シキ人、白檀ミカキノ鎧ノ、今已ノ時ト輝クヲ、六具堅メタリケレハ、即毘沙門・韋駄天ヲ彩色タルカ如クナリ、南雲老岐雜兵ニ目ナカケソ、彼白檀ノ鎧武者、是射損スル物ナラハ、此要害タマルマシ、能直タメヨト、口々ニソ云ケル、餘ニ直テ直損ケルヤラン、思矢坪ニ不當シテ、脇ニ副テソ當リタリ、左レトモ、大將手ヲ負ヘハ、十余艘ノ舟ノモノ混々ト馳ヨリ抱テ、船ニ退ニケリ、其勢七八十毛有ケルカ、皆船ニ取乗テ、沖ノ如ク押出ス、夫ヨリ敵モマハラニナリ、南雲敵ノ首一ツモ取ランハ口惜コト也、垂ヲ開ントシケレ共、美濃守

敵ハ大勢ナリ、不入軍ノ仕フリシテ、怪我スルナ、垂ヲ開クヘカラスト、制セラレケレハ、城戸ヲヒラクニ不及、敵是ヲ見テ、此要害ハ百姓村トキク、然々ノ大將ハ居ラレマシ、攻之人ヲ損シテ何ノ詮ソトテ、引ケルトソキコヘケル、夫ヨリ大隅表ヲ漕廻シ、瀬戸ヲサシテ乗行、瀬戸村ヲ破ラントセシカトモ、家久御下知ヲ成レケレハ、嶋中ヨリモ心掛タル若者トモ、我先ニト馳込レハ是ヲモ破ラテ漕通り、下大隅ノ湊ヘトテ輕砂ヲサシテソ行ニケル、此伊地知重興案内者トシテケ様ノ振舞、代々ノ御高恩ヲ忘れ、憚ノ至ナリ、去程ニ、平田美濃守此度辛勞シタル者共ヲ召シ具シテ、鹿兒島ヘ被參ケル、義久公其アリサマヲ聞召、美濃守奇特ノ運ヲ開カレケルトソ宣ヒケル、馬場玄蕃ヲ大山玄蕃ト聞召替シテ、哀レ新拵ノ陣士大將、馬場玄蕃ニテアレカシト被仰シニ、聽テ伊地知方ヨリ使僧來リケルカ、何ヲカ隠シ可申、白檀ミカキノ鎧ハ重興カ老名ニテ伊地知伊賀守ニテ候、新拵ノ馬場玄蕃、田上助左衛門打死仕候、彼田上ハ、下大隅ノ警固大將仕ル田上仁助カ兄ニテ候、弟ノ仁助大廣東ノ大弓射テ、船ノ軍ニ調練シタル者ニテ候、兄ノ助左衛門ハ陸ノ軍ニ名ヲ得タル者也ト申セシカ、誠ニ彼僧申セシ如ク證據アリ、一ト年、鹿兒島ノ武村ニ武与七兵衛カ所ヘ、彼仁助沖ヨリ射入シ征矢ノ根ハ、大撃ナトノ如クニシテ今ニアリ、又彼勝部ハ鉄炮ヲ能ク得タル者ニテ、先年下大隅ヘ警固陣士ヲ掛玉ヒシ時、船ノ上ヨリ汀ニ居タル敵ノ遠々トアリケルヲ、余リ射迦スコトナシ、亦忠平公小林ヲ攻損シ引玉ヒシ折節、付ケヲクル敵ヲ数多射テ、御感蒙リシ者ナリ、其後根占重武無程味方ニ被參テ、此軍物語ニ、此時多喜カ水ノ沖ヨリ見物セシニ、上ノ山ヘ逃ノホリタル者共ノ

衣物ノ其色々ヲ正シク語ラレケルニコソ、苦々シキコトトモ多カリケリ、

忠平公木崎原御合戦之事

元龜三年^{壬午}五月四日、伊東カ凶徒数千、真幸院飯野城ヲ打過キ、加久藤城へ攻ヨセ火ヲ放チケレハ、焰煙半天ニミナキリ、事々シキソ見ヘシカハ、其境騒動シテ、上ヲ下ヘト返シケル、忠平公ハ、不遁凶敵ナレハ、チツトモ不憶セ、閑々ト鎧甲ヲ帶シ、僅四五十騎ヲ携テ、木崎原ニ打出玉フ、斯テ横ニ敵兵ヲサヘキリ玉ヘハ、伊東又二郎・落合源左衛門尉大軍ヲ卒シ、一戦ニ蹴チラサントキソイ進ム、忠平公モ乘機突カ、リ、汗馬東西ニ馳チカイ、互ニ太刀ノ刃モ碎ヨト挑ミケル、其声天地ヲ覆スカ如シ、遠矢下総守ハ衆兵ニ魁シテ闘ケルカ、伊東方ヨリ長峯弥四郎ト名乗テ下総守ニ向ヒ合、竹下又左衛門・瀬戸口八郎左衛門走ス、シテ、共ニ長峯ヲ取圍ミ半時ハカリ戦ケルカ、長峯ハ一人也、ナシカハ不叶、終ニ首ヲ擡レケル、味方無勢トイヘトモ、勇氣不撓者トモナレハ、一足モ不退必死ヲ極メ戦シカハ、伊東カ軍敗北シテ、上ヲ下ヘト返シケル、伊東又次郎・落合源左衛門モ早打レケレハ、伊東カ軍是ヲ見テ、弥引色ニソ見ヘタリケル、乘時出原ノ陣ヲ攻破ケレハ、伊東加賀守ハ五代右京亮友善カ為ニ討レシカハ、子息新二郎・伊東大炊介モ戦死ス、于時有川雅楽介貞真・川上參河守忠智・鎌田刑部左衛門ナト馳來テ、尽粉骨ケレハ、忠平公ハ鬼塚ノ原ヲ望テ向ハレシニ、強敵二人、柚木崎丹後守ト

名乗、此一人ハ肥前、一人ハ不言、真幸院ニ切テカ、ル、于時忠平公大首アケテ、島津兵庫頭コ、ニ扣タリ、近ク寄テ怪我スルナト呼リ玉ヘハ、敵

忠平公ニ向ヒ、目ヲ張テ無下ニ突カ、ル、互ニ接刃戦ヲ、暫シモミ合ヒケルカ、

忠平公御運強シテ、二人ノ敵ヲ切フセ、暫ク息ヲ休メテ扣ヘ玉フ、敵ハ怖レテ不近付、味方ニハ鎌田大炊介・野田越中坊・曾木權廣守・富永刑部左衛門戦死ス、伊東修理大夫義祐・同右衛門佐、漸ク命計ヲ助ツテ三山ヘソ邊走ル、三山・飯野ノヒロキ野原二人ナタレヲ築テ、人馬弥カ上ニ落重リ、目モ當ラレヌ次第也、伊東ハ一國ノ勢ニテ戦ヒ、

忠平公ハ真幸一院ノ勢僅ニ三百騎ニハ過サレトモ、是偏ニ天ノ助ニ非スンハ、争カ此危ヲ過レサラン、昔項羽三万ノ兵ヲ携ヘ、漢軍五十六万ヲ唯水ノ上ニ破シモ、ケ様ノ事ヲ申スヘシ、

惟新公御記曰、伊東入道義祐驕奢之余、元龜二年^{辛未}五月四日、卒猛勢差通飯野発向加久藤、兼而可相働之由雖有其聞、未分明處、俄如雲霧寄來、加久藤之城近押寄、揚放火其煙橫半天、敵猛勢味方漸不過二三百、若又敵合心者有之哉依疑敷、手廻纒之人数相分、差箆加久藤之城、馬廻纒四五十騎召列、欲懸向大軍、誠蟻螂斧無所取驗、而傳、西原之徑路懸出大明司前、見加久藤之要害煙打掩、敵為攻破敷、未攻破敷不分、是非如何有之哉思廻處、寄掛加久藤敵兵共欲引去、忽白城中斬出追掛后原、然処、歴々之武者共相備狐疑原、双楯插干戈、揚吐氣一同斬掛、身方之軍兵追散左右前後、予於旗元捨身勇士十四五騎差向、散火花相戦、予亦依難遁、相定戦死自碎手、真先進來者共討取矣、統

軍兵落合切崩、於是副力、身方一人不殘可討取由加下知、諸卒
弥相進、追掛落行敵、予笈馬而走抜敵軍、從加久藤一里半相過
於鬼塚、落行勢之中、着紫威之鎧五六十騎相具馳通之間、呼返
來、其時柚木崎丹後守高声名乘、一人者不發言語、目掛予不振
面切掛、寄付二人共懸手討留畢、猛勢之敗軍故、易取返事不叶、
少成共欲逃延、三山・飯野之間之廣野、被打者如乱算也、一國
之猛勢纔以二三百人討亡、可謂前代未聞乎、自夫伊東運命窮
矣、

木崎原御合戰傳記曰、元龜三年^{壬申}正月、伊東三位入道義祐一
族家老ヲ集メ、評定有之、加賀守^{義祐}ヲ以求廣之相良ニ被申越ハ、
累年島津ト對陣シ、先年ノ恨ヲ散シ度存シ、精ヲ出シ候得共、

島津強敵ニテ、動モスレハ、出拔ニ逢ヒ勝利ヲ得ス、反テ味方
ノ負ヲ取候、此度大軍ヲ相催シ、是非共島津ノ居城ニ押寄、十
死一生ノ軍イタシ、加久藤ノ城ヲ乘取リ度存候、御憐好ノ儀ニ
候故、御加勢頼入候也ト有ケレハ、相良内談有テ、返答ニハ、
援兵ノ御頼得其意候、重テ御出戰之刻、御註進次第、後卷ニ可
罷出ト也、加賀守悦テ歸國シ、内儀有之、味方ノ地ニ忍問者ヲ
入ヲキ、飯野・加久藤兩城ヲ攻ント、窺ヒケルト也、

傳曰、島津家ト菱刈ト御取會最中、永祿十一年八月十九日、伊
東ヨリ為後卷、飯野ノ内霧島ノ麓田原ト云所ニ、陣城ヲ附テ人
數ヲ籠置、飯野・加久藤ノ城ヲ押ヘ隙ヲ伺ヒケル、然ニ

忠平公御武略ニテ、人數五十人、黒木播磨・遠矢下総兩大将ニ
テ、養原・本地・大道橋之辺迄、夜中ニ忍ヨセ伏兵致シヲキ、
田原・小原ノ上鷲狩ノ人數ヲ被出シニ、田原ノ陣ヨリ見付テ、
夫遁スナ打取レト、大勢出テ追掛ル、兼テ巧ミシコトナレハ、

引掛々々引取ニ、敵ハ伏有トハシラス、右往左往ニ散乱シテ大
追ニスルヲ、思フ圖ニ引付テ貝ヲタツルト、其マ、伏兵起リ、
跡先ヨリ取マキテモミ立タル程ニ、敵ノ名有士二人、其外雜兵
多ク打レケル、或曰、田原陣所本名ハ置平ト云、島津方ヨリ、
陣所ニ一首ノ歌ヲ札ニシテ立タリケル、

伊東めか真幸の陣は置平に飯野ほしさに鉄肥のゆるさよ
ト説テケレハ、是ヲイミテ、田原陣ヲ引キトルトモ云、又邪答
院長野城落居ニ付、後卷ヲ失ヒ、翌年七月、田原陣ニ火ヲ掛引
取也ト、又或説ニ、伊東修理太夫^{義祐}ヲ、死去ニ依テ、陣ヲ引拂
トモイヘリ、

一 忠平公御合戰前御計策

傳曰、公ハ飯野龜ヶ城ニ居玉ヒテ、加久藤城ヲ虛城ニ成タル
体ヲ示シ、攻サセントノ御謀也、故ニ輪番ハ加勢ノ人數ヲ、昼
ハ大明司前ノ本道ヨリ飯野ノヤフニタリ入、其俣後ノ廻路ヨリ
加久藤ヘ反シ、夜ハ明松ヲ燈シ、本道ヨリ人數ヲ飯野ヘ遣シ置
タル振ヲシテ、敵ノ忍ヒニ見セ玉フト云リ、

傳曰、御輿ヘ奉公仕ル女ノ内、忠義ヲ忘マシキ器量ノ者ヲ御撰
ミ有之、御誓詞ノ御盟約ニテ、敵陣ヘ問者ニ入玉フ、其次第ハ、
右女ハ夜中ニ小林ノ如ク逃行申候ハ、

兵庫頭與方ノ身近ク奉公仕者ニテ候ヒシカ、忍ヒ男ニ送レル文
ヲ路ニ落シ、蜜通露見イタシ、法ノ為明日罪科ニ逢ヒ候ヲ、與
方此程奉公能勤候情ニテ、今宵求ルヘ逃去レトテ、縛ヲ解キ被
申候得共、夜中ノ更ニテ跡先不知、深山ヲコヘ求ルヘ落行モ心
細シ、近キヲ頼ミ御城内ヘ馳込ミ申候、哀レ命計ヲ御助ケ、御
抱置被下候得カシト眞實ニ申ケル、敵モ聞テ哀レニ思ヒ、抱置

テケリ、此女常ニ咄ニモ、加久藤ノ城外廻リ堅固ニ見得候ヘト
モ、鑰掛口ト云所ヨリ攻上リ玉ヘ、奥方ノ居間近ク、岸モ纒ニ
尋計リモ可有之候、其外城之陰易、無残トコロ語リケルニソ、
敵モ心易ク思ヒモシ、云モシケルト也、此間女ハ、不日ニ伊東
御攻可有、其時ニ相圖ノ火ヲタテ、陣内ノ手引ヲセン為、且敵
ノ手段可聞トノ御計策也、如案合戦ノ節、敵鑰掛口ニ攻入ケリ、
此地ハ隘地ニテ、大手・搦手ヨリ出テ差狭ミ討ニ能地也、此外
女ニ御教之趣、皆敵ヨリ攻入カタキ場ナリ、再女合戦
以後編參
傳曰、兼々諸方御手當有テ、白鳥山光嚴上人モ心掛深キ僧ニテ、
武器ヲ調ヘ白旗ヲ多用意セシト也、
傳曰、加久藤三徳院、昔ハ三寶院ト云、三寶院御門跡
有之故改名開基ノ住僧旨
名ハ兼一ト云、新傳此座頭有能占之名、
忠平公御眠ニ、御戰場ニテ御馬ノ腰折候トノ御夢ナリ、御不快
ニ被 思召、御使ニテ、吉凶奉判シト有ケレハ、御城ニ罷出申
上候ハ、御夢ハ占ニ不及、吉事ニテ候、御乘馬腰折候得ハ御徒
也、重而御合戦アラハ御勝利タルヘシト申上レハ、扱々能モ判
シ候トテ、御機嫌能御盃頂戴、從是御誓約有之、御蜜談ヲ以、
敵國ノ間者ニ入玉フ、兼一言曰琵琶ヲ提テ、敵領内ノ往來自由
也、敵地ノ百姓迷々スルコトヲ聞、敵將ノ賢愚、軍法ノ手段ヲ
聞来タレハ、此方ニテハ裏ヲ用玉フコト、此兼一カ功有ヲ以、
三國平均ノ後、日州十三ヶ外城ノ地神座頭本江寸ニ被仰付、小
林ニ屋敷ヲ玉ハリ、高須セシタシ、アチ
惣三ヶ所ヲ高見五百石ノ持高ハ今有リ、
一 同年五月三日ノ夜、飯野之城ニテ御日待有之、御家老其外之歴
々衆御前ヘ相詰、御咄被申上ケルニ、肥後式部少輔少外へ出、
加久藤表ヘ火氣夥シク立ヲ見テ被申上候、

忠平公ヲ始メ御内ノ人々ヲトロキ、御供ニテ西ノ原ノ岡ヘ御登
リ御覽有ニ、矢火ト相見得候、故ニ何レトモ不審ニ被存候、早
走ノ若者ニ被仰付、見テ參レト御下知有、然処ニ、上江道筋ニ、
死苦村ニ藤元丹波ト云者走來テ申上ルハ、先程伊東勢ト相見得
人馬夥シク罷通り、加久藤ノ方ヘ越候ト、高声ニ言上ス、扱ハ
伊東加久藤ヲ實ル放火ナルヘシ、兼而謀リシ支ナリ、何分心得
タルカトノ玉ヒテ、其手當アリ、先廣問ニテ、御膳早々被召上、
在城ノ人数三分一ハ加久藤ヘ本道ヨリ後詰タルヘシ、遠矢下総
大將トシテ被遣、六人村尾源左衛門御使大將ニテ人数五十人、
敵ノ帰路本地口古溝ノ内ニ伏兵イタスヘシ、百姓老人十四五人
ニ白旗ヲモタセ、横尾ヨリ本地口迄山ノ高ミニ伏置テ、相圖次
第可押立、相圖ハ富永万左衛門可仕候、大口其外ツナキノ城ヘ
烽ヲ立テ可通、御留主ハ有川雅樂タルヘシ、実名貞信、入
道シテ号位世五代右
京御使大將トシテ四十余人、白鳥山ノ禁野間門内ニ伏草被
仰舍、又玖戸ヨリ若モ伊東ニ加勢來ラハ、軍難儀タルヘシ、然
共、味方少勢ナレハ、見セ旗ハカリ山林ノ間ニ徘徊シテ、大勢
ノヤフニ見スヘシト被仰付、早々御玄關先ヨリ御馬ニ被召、御
甲ノ緒ヲシメ玉ヒテ、仰ニ、此節伊東カ根ヲ可絶ト、御齒カミ
ニテ御イラヒアリ、扱御供ノ歴々ニハ、上井次郎左衛門御家・
鎌田尾張守政年、号高
御家・和田圓覺院兵具、
奉行・佐谷田武蔵守上、
赤塚吉
右衛門上、
宮原伊賀守、
御使・其外都合百三十人余ニテ、西原ヨ
リ大明司山ノ東ニ八坂ト云所ニ、先牀几ヲ被立、敵ノヤフス味
方ノ勝負御聞、御軍法也、去程ニ、伊東勢三千計、義祐ノ弟加
賀守・二男右衛門・四男源四郎・同氏又二郎・同氏權之助・同
氏宗右衛門・同大炊介・落合源五右衛門・佐土原四郎・長倉四

郎兵衛十人ハ大将分也、加賀守ハ殿ノ大将トシテ後陣ニ有之、
木崎原ノ東ノ岡ノ高ミニ旗打立扣ヘタリ、謀有ヤフニ見得タリ、
先勢九頭ハ夜中ニ加久藤ニ攻入、不動寺辺城下方々放火シ、関
ノ声ヲ揚テ鑪掛口ニ責入ケルニ、夜毛漸々明方ニ成リ、城ヨリ
毛川上參河入道航枕御家老下知ニテ、大手・搦手ヨリ切テ出ル、
鑪掛口ノ向ノ岡ニ、禪山淨慶ト云山伏父子三人居ラレケルカ、
高キ所ヨリ石ヲ投テ打ケル故、敵進ミカ子、少シ色メクニ、大
手・搦手ヨリ攻掛候故、敵颯ト引取ケル、然処ニ、大将伊東宗
右衛門馬上ニテ鞭ヲ振上、退ク味方ヲ招キ、掛レタト下知スル
ヲ、不動寺ノ僧是ヲ見テ、六匁玉ノ鉄炮膝臺ニカケテ、馬ヨリ
下ニ打テ落ス、

加久藤由緒ニ曰、此僧鉄炮ヲ衣ノ袖ニカクシ、陣僧ノヤフニ
忍ヨリ、敵米良筑後守ヲ射落候ニ付、敵ノ備破レ候トアリ、
故ニ敵サハキ立、諸卒進ミ兼ル処ニ、飯野ヨリ加勢モ続キ、幸
菱刈ヨリノ輪番衆モツ、キ來テ横ニ入ケル故、敵皆木崎原ノ加
賀守カ備シ所マテ引取、爰ニテ相談アリシニ、加賀守被申シハ、
求广ノ加勢モ不來、帰路ヲ見ニ島津ノ白旗多ク、跡ヲ取切ト寛
タリ、加久藤ヘ飯野ヨリ助勢アルトミヘテ、白旗多クツ、キタ
リ、時刻ヲ移サハ、大勢ノ荒手ニ被追立、軍難儀ナルヘシ、是
ヨリ白鳥山ニ掛リ山ヲ越シ、高原ノヤフニ可引取ト押登ル、白
鳥山ノ住持光嚴上人、門前ノ者或ハ牢人マテ馳集メ、三百人計
竹鎗・鎌・紙小旗ニテ、関ヲ揚テ伊東勢ニ突テ掛ル、敵大勢タ
リト云トモ、カサヨリ落ス勢ヒニテクシカレ、無是非木崎原ノ
ヤフニ引テ下タル
傳曰、上人下知ニテ、南木場ヨリ本地ノ上迄白旗ヲ立、御勢ノ

伏有ヤフニ見セ、紙ニテ衣裳ヲ作り、人形ヲ所々ニ立テ、權現
ノ神助ノヤフニナセリ、見セ旗見セ勢ノ本意口傳深シ、今ニ云
權現ハ日本武尊之御神故、白衣ノ神人多ク見ヘタリト云、
私曰、此合戦最中ニ、求广ヨリ為加勢五百計リ差コヘケルカ、
彦山嶽迄押登セテ、木崎原ヨリ白鳥山マテ一面ニ見渡セハ、白
或降者雖キタリト云、我日本武尊也此山ニ住スコト久シト云テ、白鳥ト現シテ去ル、性神
旗影シク満々テ、伏兵如雲霞ノ如ク充滿シテ、木崎原合戦最中
ヲ山中ニ立テ、是白鳥神ト云、是ヲ以飯野近郷白鳥ヲ祭サス
ニ横合ヨリ掛ルヘキ体ニ見ヘケレハ、求广勢大ニ周章シテ、取
者モ取アヘス、我先ニト引取ケル、是誠ニ白鳥權現ノ擁護ニ依
テ、白旗多ク見得ケルト也、今真幸ニ於テ白鷺ヲ射ルコトヲ禁
ス、求广勢ノ白旗ト見シハ皆鷺ト、云、光嚴上人謀ニ出ルト
イヘトモ、實ハ

忠平公御蜜談ノ上ニテ如此ト、云傳ヘリ、
一忠平公ハ二八坂ヨリ敵ノヤフヲ御覽シ、沢田八専ヘ物見被仰付
候、沢田畏リ、馬上ニ乗テ逸足ニ川ヲ越シ、見届ケテ罷歸申上
ハ、敵進退爰ニ極リ、木崎原ノ向ノ岡ニコソリ居候、其勢二千
七八百モ候ヘシ、今朝ヨリノ合戦ニ草臥タル上ニ、山ヲ登リ下
リテ惣勢勞候、只今御掛リ御一戦候ハ、敵モロク敗北可仕候、
早々ト勤メ奉レハ、公ノ仰セニ、汝カ如申、敵進退究ル上ニ、
草臥有ヘキソトテ、鎌田尾州ヲ召テ、敵ノ後ヘ廻リ裏切可致ト
有ケレハ、畏テ自分ノ人数六十人余リ、廣瀬ノ下ヲワタリ、未
永ノ西ニ向テ、馬ニ鞭ヲ加ヘテ押レケル、此時加久藤ノ人数モ
未押來ラス、少シ敵ヲ怖レケルニヤ、猶豫シタル有様ヲ御覽シ
テ御立腹ニテ、御旗元僅ニ五十騎ニテ、廣瀬ヲ真一文字ニ御渡
リ、急ニ御掛リ故、御備乱タルヲ見テ、敵岡ヲ下リ、伊東又二
郎・落合源五左衛門士卒ヲ下知シテ、必死ヲ究メテ切テカ、ル

故、先衆敗シテ、三隅田ノ辺迄一町計押立ラル、御供ノ士衆久留半五左衛門・遠矢下総領守申上ラレケルハ、我々御先手ニ罷出防戦可仕候間、御備ヲ被召直、御一戦可然ト申捨テ、敵軍へ切テカ、ル、相伴フ人々ニハ、富永刑部・野田越中坊・鎌田大炊介・曾木播磨、火水ニ成テ疾戦シ、終ニ戦死ス、此間ニ、御旗元鋒矢形ニナリテ、繰抜ノ御備ニテ、真一文字ニ切通ルト云トモ、敵ハ大勢味方ハ小勢、然トモ、敵ハ必死ニ成リ、味方ハツ、ク勢闊遠クシテ、味方ハ大事ニ及ケル、公モ自身鎗ノ石突ヲ御取、鎗首ヲ御中間ニ御持セ、味方ノ崩勢ヲ御押留ナリ、キタナシカ、レ々々ト御下知也、カ、ル処ニ、敵中ヨリ長峯四郎ト云大力ノ勇士、日ノ丸ノ前立物ニテ、太刀ノ三尺計ナルヲ振テ切テ廻ル、公ノ仰ニ、彼ノクセ者打取レト有ケレハ、竹下又左衛門・瀬戸口八郎左衛門共ニ走掛テ、長峯ヲ切伏セケル、余リニ敵強ク戦フ故、公モ田ノ中ニテ、伊東新三郎新三郎ト御鎗被成、終ニ新三郎ヲ突伏セ玉フ、兎角スル間ニ、加久藤ヨリモ惣勢押キタリ、菱刈衆モ掛來リケル故、敵モ色メキ立テ狐疑原ノ方ニ又ハ小引行ヲ追打ニス、此處勝ニ小引有、味方ノ勢血付ノ太刀ヲ洗ヒケル故、洗川州ハ廻リ路遠クシテ、木崎原ノ御合戦ニハ手ニ不逢、直ニ末永ヨリ鳥越山ニカ、リ、横ニ出テ一戦アリ、野間門内ヨリモ五代右京相圖ニテ、伏ヲコシ、吐氣ヲアケテ切テ掛ル、加久藤勢モ跡ヨリ追カ、ル故、三方ノ味方ニ藤田・五代、加久藤勢ニ方ナリ敵モ難通ヤアリケン、伊東加賀守・同氏大炊介・同又二郎・落合源五左衛門、此所ニテ打死也、

傳曰、加賀守ハ五代家來弓ニテ射殺ト云、又曰、大坂廬相ト云

ハ舊百姓也、此合戦ニ大将ノ首ヲ取、實檢ノ時、持出私事、近比廬相ノ儀ヲ仕首ヲ取り候ト申上ル、依之、公ヨリ廬相ト名ヲ玉ハリ、士ニ被召成候也、

一新納武藏守大口ヨリ相圖ノ火ヲ見テ、手勢引列、三里ノ路ヲ打込ニ早押來リ、般若寺越ヨリ直ニ吉松川ヲ渡リ、大溝原ヨリ木崎原へ馳付ケル、然レトモ、

公ノ戦ニハ不逢、岡ノ上ニ扣ヘタル敵ヲ目ニカケ、切テ掛ルト也、敵ノ敗軍ノ内ヨリモ、名ヲ惜ム士ハ近付、味方ト引與テ打死スルモアリ、又ハ切死スルモ有ケル、大将伊東權之助・同源

四郎・同右衛門加賀守・長倉四郎兵衛戦死ナリ、其外長倉久九郎伊東八千・伊東宇右衛門・丸目兵庫・別府宮内少輔・小森民部・北原又八郎ナト、名アル士百六十人余戦死也、上江道ヲ追打ニシテケレハ、直ニ小林ノ如ク乱散テソ邊ニケル、

傳曰、名アル伊東ノ士、凡上江ヨリ本地ノ辺迄ニテ戦ヒ多シ、味方ハ惣追ノ法也、或説ニ曰、田原陣ノ路へ伊東勢進入者モ少々有リ、味方敵ノ隠レタルヲ見テ、寛柄攻入、雜兵少々打取、早々場ヲ引取タル印

ニ、旗ヲ被立タリトモ、一富永方左衛門ト云士一人、村尾氏伏兵ノ相圖ノ為ニ、本地ノ上ノ岡ニ伏シ隠レテ居タル所ニ、敵余多逃來ル、一人ニテ勝負不

叶ト思ヒ、鎗先ニ紅手拭ヲ結付、立アカリテ打振り、後口ヲ懸ト見返テ、時分ハヨキノ、掛レ々々ト呼ヲ、敵トモ是ヲ聞テ、

驚キサハキ、岡ヨリ下リテ、本道ヲサシテ落ユキケル、忠平公ハ御手廻被召列、敗走ノ敵ヲ大追ニ被成、黒木播磨加久藤・飯野ノ地土二百五十人引卒シテ、殿ヲ仕ル、

是ハ敵考ヲ取テ返サ

カ、^カ鬼塚原ヲ追返シ、粥餅田ノ渡リニ御掛ノ時、紫威ノ鎧武者、馬ヲ輪ニノリ來リ、采振テ五六十人ノ味方ヲマトメテ引揚ル、

公御覽シテ追付玉ヒ、島津兵庫頭爰ニアリ、キタナ者返セト有ケレハ、此武者取テ返シ、弓ニ矢ヲツカイ待掛タルカ、何トカ思ヒケン、弓矢ヲ捨テ、地ニ跪キテソ居タリケル、

公モ降参ノ色ヲ顯ストハ思召ナカラ、若モ我ヲ近付ケテ引組ンモ不知ト、御鎧ニテ馬上ヨリ御突成、此時敵ノ下人モ御手ニ掛テ打取玉フ、是則柚木崎丹後ト云者也、是ヨリ先ハ敵城近ク候故、播廣ヨリ申上、粥餅田ノ小川ヲ限リニ追留玉フ、播廣備ヲ先ニ繰出シ殿ヲシテ、早々諸勢ヲ揚玉フ、寅ノ刻ニ軍始リ未ノ刻ニ終ル、打取タル敵ノ首五百余級、^{共三}味方ノ戦死二百六十人、町田越中忠辰頭捨ノ引導等、血祭吐氣有ト云、^{伊東家此外}

^{余ノ敵}死也、
一或説ニ曰、柚木崎丹後ハ長刀ニテ御切被成ト云ハ誤也、今ニ御兵具所ニ御鎧有之、公丹後ヲ御討、思召有テ子孫ヲ尋被召出、御切米六十石被下テ、于今如此、

一傳曰、御乘馬ハ女馬、八十三歳迄生キ候、柚木崎ヲ御突之時、前膝ヲ折、御鎧ノ勝負ヨカリシ故、膝ツキ粟毛ト申候出也、龜泉庵^在ニ葬リ、今ハ石塔・碑文有ト云、

一公永祿七年^{甲子}十月十七日、飯野ノ城ニ御移也、御年三十也、元龜三年御合戦ノ時ハ、三十八ノ御年也、飯野ニ廿七年御在城ニテ、天正十八年六月廿六日、栗野川松尾ノ城ニ御移也、

一飯野ノ成就軒ト云ハ、元龜三年ヨリ天正五年迄七年之間ニ、伊東敗走シ、御意願成就スル故ニ、此寺ヲ御立、寺号ニモ如是、

寺領七石程寄附被遊候也、

右、是迄、木崎原御合戦傳記之文也、

箕句記曰、伊東大和守散位藤原祐純入道、島津殿當代

貴久公、義久公ニ至テ、權威ヲ二州ニ振ヒ、其勢ヒ日々ニ強大ナレハ、伊東ノ迫切也ト思ヒ、殊ニ

義久公ノ御舍弟ヘ、兵庫頭忠平公、其身至剛ニシテ武勇拔群ノ士ト聞リ、其上、去ル永祿九年小林ヲ攻ラル、城不落去ト云ヘトモ、是ハ我嘉運ノ故カ、今ノ如キハ、終ニ二三之山モ難抱相覚ル、大日向ヘ薩廣勢ヲ引請テハ、伊東ノ家ノ大事ト可成、

早速日州勢ヲ催促シテ、小林ノ城ヲ家陣トシテ、猛勢ヲ以テ薩廣ノ勢ヲ追拂、如何ニモシテ

兵庫頭ヲ可討ト申サレケレハ、伊東ノ一門・一家・宗徒ノ人々、尤ト同心シ、評定一決シテ、國中ニ相觸テ打立、着到八千余騎トソ聞ヘケル、元龜二年ノ冬ノ比ヨリ、真幸ヘ發向シテ三ノ山・小林ヲ家陣トシ、高原・野尻・神屋ニ連キ、番兵ヲ籠テ由々シキ風情也、薩廣方ハ飯野ノ城ヲ本城トシテ、加久藤・吉田・吉松ヲ枝城ニ以テ相戦フ、伊東サスカ猛勢ナレハ、飯野・加久藤

ニ手當シテ、吉田・吉松ニ差通り、陣士ヲ懸ル時モアリ、或ハ飯野ニ働キ、加久藤ニカ、ル時モアリ、薩廣方ヲ擒ニシテ奢ルコト類ナリ、互ニ相諍テ日ヲ送ル程ニ、同三年ノ春、大河平ノ要害ヲ破リ、大河平カ一族ヲ追却シ、其競ニ乘テ、五月四日、

伊東カ軍勢打出、飯野城ヲ側ニ置キ、加久藤ニ雲霞ノ如ク寄來、早不動寺馬場ニ入、城内ヨリモ出合ヒ、爰ヲ専度ト防キ戦フ、去レトモ、伊東猛勢ナレハコトトモセス、宗徒ノ人々旗竿押

立々々備居テ、足輕・雜兵トモニ眼下ナル苗田ヲ踏セ、或ハ方々

二働キ破ラントス、大將

忠平公ハ能キ時分見計ヒ、今日ノ合戦コソ一期ノ思出ソ、高名セント思ハン人々ハ、能勇メヤ兵共ト下知シテ、我身ハ紺糸威ノ鎧ヲ着、黒キ馬ノ遅シキニ白覆輪ノ鞍置テ、ユラリト打乘リ、十文字ノ旗一流、如何ニモ高ク差上サセ、味方打時暮テ出玉ハ、霧ノ深キ朝曇ニ、日輪光リ高ク出玉フ如クソ覺ケル、加久藤ヨリモ是ヲ見テ、カヲ得テソ戦ヒケル、伊東勢競ヲナシテ戦ヒケルカ、飯野ヨリ横掛シ玉フト見テ、蹶紛ニナツテ引ントス、加久藤勢追詰々々打程ニ、小林ノ地頭中村筑前守・平治部左衛門・米良筑後守ヲ始メトシテ、宗徒ノ者トモ十三人迄討取ル、飯野・吉田・吉松・牛屎・菱刈兩院ノ者トモ列來テ居タレハ、味方モ相重ル、

忠平公ハ上ノ原ニ打出玉ヒ、御勢ヲ三手ニ作り、先陣ニハ武功アル足輕ヲ迹ニ着テ射カケサセ、又一手ハ三ノ山ノ方ニ差通シ、横合ニ射カケサス、敵返シ合セテ戦ヘハ、會釈シテ引退ク、敵引ケハ、又後ニ慕フテ射懸ル、伊東勢返シ合セ、身拂シテ捲レトモ、引煩タル大勢ナレハ、蹈留カタキ物ナレハ、伊東又二郎・伊東新二郎・伊東右衛門尉・落合源五左衛門・中倉半九郎ヲ始トシテ、宗徒ノ軍兵三千余騎計リニテ差忍ヘ、今日ノ合戦大事限ナルソ、各心ヲ勵セト下知ヲナシ、木崎原ヲ西ニ向キ、南無西方極樂ノアルシヲ頼ム、弥陀佛ト、心ニ十念唱ツ、一同ニ面モ不振切テ掛ル、味方ノ軍兵差忍ヘ、此ヲ専度ト攻戦フ、其場余リ烈シクシテ、味方ノ勢戦ヒアクミ、敵ト味方ト、其間弓杖十杖計リモアルラン、鏝ヲ傾ケ面ヲ双ヘテ會釈セラル、折角シテ不覺、半段計リ尻シサリヲソシタリケル、已ニ味方敗軍

スヘキ所ニ、

忠平公一足モ不退、キタナシ返セ、兵庫頭爰ニ有ト下知シ玉ヘハ、取テ返シテ攻戦フ、大口ノ住人久留伴五左衛門太刀始トソ名乗ケル、日高掃部左衛門、久留二相双ヒ太刀打シテ、痛手負テソ退ニケル、鎌田源三大炊介・野田越中坊・曾木播磨守・島田彦十郎、能敵ト見ル者ニ、馳合々々合戦シテ、終ニ太刀下ニテ打レタリ、無比類振舞也、敵モ味方モ今ヲ限リト相戦フ、忠平公モ面ヲ不振切テ入玉ヒ、木崎原ヲ縦横ニ操合テソ闘ケル、内山ノ住人柚木崎丹後守ト名乗テ、

忠平公ニ渡リ合、

忠平公請付、真中突テ打伏、即首ヲ取玉フ、

忠平公斯シ玉ヘハ、軍兵何ニ命ヲ惜ヘキ、思切テ戦ヘハ、遂ニ其場モ切崩シ、伊東又二郎ヲ始トシテ宗徒ノ人々、悉ク其場ニ皆打死ス、カ、リケル所ニ、古陣原ニ、伊東新二郎・伊東加賀守・同惠源四郎・落合兵部少輔・中倉四兵衛ヲ始トシテ、軍兵三千計ニテカタメタル所ヲハ、飯野ノ勢ハ本口ヨリ打出、有川雅樂介ヲ始トシテ、究竟ノ兵三百余騎ニハ不過、真フクラニ切テ入、味方ノ大勢是ヲ見テ、我不劣ト切テカ、レハ、伊東勢モサスカナレハ、差忍ヘテ入乱レ、打ツ打レツ相戦フ、烈シキコトタトヘン方ソナシ、然処ニ、二階堂四郎左衛門入道伊東加賀守ヲ打テ、加賀守コソ打タレト嘗レハ、伊東方ハ力ツキ、味方ノ勢ハ強力ヲ得テソ攻戦フ、加賀守打ルレハ、宗徒ノ人々皆ハラ、ト打死ス、其勢ヲモ引崩シテ、足ヲ不留落テ行、扱又伊東權守・同右衛門尉ハ、軍兵三千計ニテ本地原ニ差忍ル、忠平公又續テ掛ラセ玉ヘハ、川上參河守・鎌田刑部左衛門・有

川雅樂介ナトヲ始トシテ、究竟ノ兵我先ニト切テ掛レハ、伊東方ハ敗軍也、味方ハ競ニ乗シケレハ、我モ々々ト切掛テ切崩セハ、敵ハ大勢打死ス、其路三里計ヲ追詰々々打程ニ、伊東ノ兵名ヲ惜ム者トモハ、返シ合返シ合、皆打死ヲソ遂タリケル、何某殿ハ打死ト云ヘハ、返シ合セテ打死スル者多シ、サレハ、親打ルレハ子返シ、子打ルレハ親返シテ戦死ヲ遂ル間、伊東人々ノ有様、哀也トモ申計ハナカリケリ、手負ノ數ハイサ不知、真幸ノ原ヲ見渡セハ、算ヲ乱セル如ク也、去程ニ、打取ノ首數々ノ其中ニ、宗徒ノ首ハ六十余人ト記シタリ、

兵庫頭忠平公為追善供養、木崎原ノ戰場ニ六地藏ヲ立ヲカル、往來ノ人々、貴賤老若、是コソ伊東ノ人々ノタメ供養ノ六地藏トテ、念佛廻向シテヲルナリ、昔ノ形見トテ、今ニ有ケル、難有ヤ、

伊東方討死ノ人々

伊東又二郎 惣大将 都於郡住
 伊東新二郎 惣大将 佐土原住 領分三百町
 伊東加賀守 大将 佐土原住 領分二百町
 伊東源四郎 加賀守舍弟
 伊東右衛門尉 加賀守弟 領分百町
 伊東宗右衛門尉 大将 佐土原住 領分五十町
 中倉四兵衛尉 大将 都於郡住 領分廿五町
 佐土原四郎兵衛尉 大将 佐土原住 領分廿五町
 落合源左衛門尉 大将 佐土原住 領分二百町
 中倉半九郎 清竹住 八千町ノ總築、云、領分七十町

落合兵部少輔 高城地頭 領分五十町
 別府宮内少輔 清竹住 領分廿町
 別府甚七郎 清竹住
 河野善七郎 佐土原住 執事 領分廿町
 福永刑部丞 佐土原住
 荒武小二郎 佐土原住
 稻津四郎二郎 佐土原住
 壹岐弥太郎 佐土原住
 野尻右馬助 佐土原住
 野村七郎 都於郡住 領分七町 肥前カ甥
 中倉駿河守 都於郡住
 深利源兵衛尉 都於郡住 散位 殿近習
 伊東左衛門尉 都於郡住
 湯地式部少輔 都於郡住
 稻津又三郎 都於郡住
 佐土原八郎兵衛尉 都於郡住
 河崎肥後守 都於郡住
 小早川弥左衛門尉 都於郡住
 餅原安藝守 清竹住
 宮路安房守 清竹住
 米良休介 坪屋地頭
 飯田肥前守 箕納ノ地頭 領分廿町
 河崎主税助 海江田地頭
 大塚八郎 財部住
 落合新五郎 財部住

小森民部少輔	財部住
竹井式部丞	山下住
中山壹岐守	日知屋住
右松四郎三郎	垣見住
福永又四郎	日知屋住
福永又八郎	日知屋住
中野新左衛門尉	門河住
福永四郎兵衛尉	門河住
野村四郎左衛門尉	内山住
野村藤七郎	内山住
柚木崎丹後守	内山住
實相院	河屋 領分十二町
紙屋圖書助	三山ノ執事
多津目民部少輔	三山ノ住
橋口半七郎	三山ノ住
肥田木越中守	三山ノ住
野森源秀入道	三山ノ住
平治部左衛門尉	三山地頭
中村筑前守	三山地頭
福永四郎左衛門尉	木脇住
丸目兵庫允	求廣執事 于時佐土原二年人

去程二、大将十人、宗徒ノ人五十人、其外究竟ノ勇士、待以下切捨數ヲモ不知也、逃散タル者共ハ、小林・高原・野尻ヲ差テ落行ケハ、小林毛漸ク城ヲ持留タリ、日向ノ人々ハ佐土原・都

於郡ニ馳集リ、十方ニ暮テソ見ヘニケリ、此度出場思ヒ立タル時、民以下誹謗シテ申ケルハ、對薩廣執深甚ノ恨ヲ不可然、往古ヨリ島津ト伊東雖有相隔、島津家ハ隅薩兩國ノ勢ヒ成カ故ニ、彼家ニ相從ノミ也、身拂不意ノ軍ハ力ニ不及也、又遂ニハ和睦共可成者ヲト申ケル、又伊東年來ノ人ニ、田島刑部丞ト云シ人ノ弟出家シテ、玄哲首座トテ安國寺ノ僧侶成カ、還俗シテ林翁齊トテ、其比ハ八十有余ノ入道アリ、文才博キ人ナリ、其林翁齊カ云ケルハ、今國ノ家風ヲミルニ、散位入道ノ行跡不可然、愛佞幸之臣、溺阿媚面從、避ケ賢愛小人事ヲ得タリ、異朝ニモ其例アリ、桀・紂惡理与義、愛利与非、遂ニ夏・商滅スコトヲ得タリ、今ノ政風ヲミルニ、古ノ聖人禁戒スル所一ツモ闕ス、ソノ古、伊東撰津守祐氏此國ヘ下向ノ時ハ、日向ヲ十二人シテ知行シ、共ニ天下ノ出仕ヲ勤ケルカ、息ノ大和守祐隆太守島津陸奥守久豊ヲ誓ニ取奉シヨリ、其勢力ヲ以遂ニ二十一頭ノ人々ヲ滅シテ、獨リ日向ヲ安堵シケルトナリ、其古キ好ヲキク時ハ、只薩廣ニ和談シテ、今領知スル所ヲ安シ、子孫ニ是ヲ傳シニハシカシ、嘗ハ我道不直テ他國ヲ貪ルハ、花ノ開カンコトヲ求廣百尋ノ樹ノ根ヲ堅クセサルニ似タリ、危哉々々、爪弾シテ中セシカ、果シテ敗北ト成ヌ、國ノ將無道ナル時ハ其家滅スト、古人ノ言アリ、林翁齋カ云ヘル支符合セリト申ケル、日向其時ノ有様ヲ見ルニ、薩廣方ヨリ追付打入タラハ、何ノ手隙モ入ヘキコトナラ子トモ、薩廣方ヨリモ不入、ヤフ／＼ニ取立、國中相靜リヌ、去レハ、此度ノ合戦ニ、可然者ハミナ打レ、今ニ逃殘タル者トモノ耻ヲモシラヌ奴原トモ、無人俣ニ出頭シテ、吾世ノ中ト振舞ヘハ、弥賢才ノ者ハ氣ヲ病テソ入ニケ

ル、枉レハ上ニハ無直、下曲レル士ニハ直キ無友ト云ヘハ、散位入道似タルコソ友トシヨケレハ、誘若ノ申コトヲ用ヒ、人ノ

飄ヲモ顧ミス、然ルニ、野村源左衛門トテ、嬖人ノ財ニ富ル人アリ、散位殿ニ、何ニテモ珍菓ノ類ヲ調ヘ、毎日音信ヲ進スレハ、御寵愛他ニ異ナリ、其外物ヲ可言人々ニハ不断路ヲ入レハ、

源左衛門カ子ノ吉次トテ十三ニ成ケルヲ、是コソ可然者也トテ、老名職ニソ定ケル、其故ハ、評定・談合ニ携ル程ノ人利ヲ貪ン

トスル者トモナレハ、奉行役ヲ若年ノ人ニ持セ、我儂ニ執行ハシコトヲ胸臆ニ含ミ、議シケルトソ聞ヘケル、去程ニ、佐土原

ニ物云コトハ不絶シテ、朝ノ非ハ夕ヘノ理トナリ、夕ヘノ理ハ朝ノ非ト成、理非ノ一決ナク、空シク月日ヲ送ル者多カリケリ、

只國ノ家風ヲ見ルニ、毀譽ハ非善惡シテ、理非ハ人ノ貧富ニアリトソ見ヘニケル、余リノコトニ、如何ナル者カシタリケン、

八幡ノ御託宣也トテ、落書ヲ書テ、佐土原・都於郡ニ數ヶ所ニ立タリケル、行直シテ言善ヲ者、惡之武略ニ有功者ヲ不事、

空前只拳時譽、只金銀ヲ以テ是ヲ調ニ、事不成ト云コトナシ、ソノ比小路引トテ、佐土原・都於郡ノ馬場小路ノ曲リ道ヲハ直

ニシ、或ハ又、今日モ遊山明日モ遊山、此ニ棧敷彼コニ柴屋ヲトトノヘ、徒ニ民ノ力ヲ費シ、今又奴子ノ吉次ニ執事職ヲ持セ、

山路法元ノ輩、執頭ノ事一々不心得トテ、立タルトソ聞ヘケル、落書曰

貴理賤非スルト云モ古ノ道也

式条ノ角スリツフス非義車

ソコ退ケ道路不義ノ通ルニ

文ト武トハ猶如車輪、鳥ノ二翼ト云ヘリ

文モ武モ皆絶果ル國ナレハ
マシテヤ仁義礼智信ナシ

可直政道ハ不直シテ、路次ヲ直クスル、何ノ由ソ、

曲ムヘキ道ハ殊更直ニシテ

直ナル道ハユカミコソスレ

野村吉次ニハカツケヲ御副アルヘシ

山路法元ニハ只鷹ヲ御任セ有ヘシ

如此ノ落書、品ヲカヘ辞ヲ替テ、度々立タレトモ、散位入道父子ニケ様ノコト有ケルナト、申者モナカリケレハ、只伊東ノ家

ノ嘲ヲ世間ニ觸ル、ノミナリ、國ノ將トシテ、横見・耳聞ナト、

テ、不入ヤコマシキコトヲ聞ニ詮ナシ、尤可聞ハ、國ノ政道・

制令・法度ノ人ノ誹リヲ聞テ、改惡事善也、魯ノ孔子ノ辞ニ、

言之者ハ我師也ト宣ヒシ、宜哉、只世間ハ、我惡ヲ不貴シテ、

人ノ我ヲ誹ルトテ責之、是愚ノ至也トソ申ケル、散位入道ノ無

道ノ義ヲ申ニ、神事ノ營トテ神女巫ヲ集テ、一七日モ二七日モ

自飯ヲ調ヘ、神舞ヲ舞ヒ、真言・禪僧モ自物ヲ調ヘ、祈念法會

ヲ寺役トス、一寺ヲ抱ルホトノ者ハ其課役不少、無信心モ祭奠

無モ、布施・法會也トテ笑者モ有、嗚呼笑止ト云モ多カリケリ、

又或時ハ、出家ヲ請シ二十ノ内ノ女房ヲ、紅ノ薄衣ヲ着セテ宮

仕サセ、アサマシカリシ有様ナリ、己レ又、無故者ノ娘ヲ女官

ニシテ妾トナシ、氣ニ違フ時ハ裸ニナシテ耻ヲサラシ、夕ヘ榮

花ヲ見テ朝ニ耻辱ヲ得者多カリケル、或ハ百姓等ノ娘ニ、大ニ

契約アルヲモ押取ニシテ召拳テ上レハ、其夫ハ手ヲ空シテ憤リ

思フ者モ有、此等ノ惡事ノミナリ、古キ諺ニモ、君ハ耻臣、臣

ハ貴君時ハ國長シト云ニ、君ハ不愧臣、臣ハ慢君、失社稷ノ道、

殊ニ薩ノ大敵ヲ隣國ニ持ナカラ、カ、ル諸行無本意トソ申ケル、

下大隅御退治祢寢降參其外諸所合戰牛根落城之事

同年九月廿六日、

太守義久公御舍弟左衛門尉藏久ヲ大将トシテ、下大隅ノ凶徒ヲ打
タント、諸軍ヲ櫻島ニ渡シ、明日瀬戸ヲ過テ、早崎高峯ニ一陣ヲ
構ヘ、伊地知重興カ守タル小濱ノ古墨ニ押寄ル、

太守濱辺ニ兵船ヲ浮ヘ立、軍衆ヲ二重三重ニ囲ミ、一時之間ニ攻
落ス、肥後平次郎・桑波田孫太郎・河野玄蕃允・伊集院源助久春
碎骨戦ヒ、四人共ニ疵ヲ被ルナリ、扱今年モ己ニ暮テ、明ル元龜
四年^{天正下}ノ春迄諸軍在陣ス、此時軍中ヨリ歌ヲ詠ス、

年ノ矢ノ早サキ初ル梅カ香ニ

千里残ラス春ハ來ニケリ

此歌ノ志ヲ思ヘハ、可挑戦コト今度ナリ、此間、味方数千人尽粉
骨攻戦ケレトモ、未雌雄ヲ決セス、サレハ

太守鹿兒島ノ寶持院ヲ使僧トナシ、八木越後守昌信ヲ差ソヘラレ、
祢寢重成カ城ヘ遣サル、斯テ寶持院・八木ハ、掉小船祢寢ニ着ケ
ルニ、兵士数百人ト見得テ、思ヒ思ヒ兵器ヲ備ヘ、是ヲ防ントヒ
シメキワタル、八木ハ舟底ニ隠レ、寶持院ハ船ヨリイタケ高二仲
上リ、高声ニ呼リケルハ、我ハ寶持院ノ住僧也、今度

太守ノ命ニ應シ、祢寢殿ヘ使僧トシテ罷向フ、出家ハ素ヨリ劔戟
ヲ不帶、然ルニ、兵杖ヲ備ヘ出ラレシハ何事ソヤ、免シ玉ヘト申
ケレハ、敵モサスカニ岩木ナラネハ、忽騒動靜リヌ、寶持院ハ舟

ヨリ閑々ト上リ、小根占ノ東禪寺ヘソ入ニケリ、八木ハ夜ニ入竊
ニ忍ビテ東禪寺ヘ來リ、住持ヘ對面シ先ツ和睦ノ籌ヲ告シカハ、
住持此事ヲ聞テ、則祢寢重武ニ告タリケレハ、重武是ヲ聞テ、サ
ラハ八木ニ對面シテコソ愚意ヲ述ント申ケレハ、八木ハ其期ヲ約
シテ、祢寢カ城ニソ入ニケル、危カリシ事共也、角テ八木ハ重武
ニ對面シ、和睦ノ蜜儀ヲ懇ニ告ル、重武申ケルハ、我久シク
太守ニ奉背雖無面目、肝付ト相隔ル時ハ、祢寢カ家自滅ニ必セリ、
ケ様ノコト共ナレハ、今更

太守ノ旗下ニ降ルコト全無力ト、言葉ヲ碎キ申ケル、八木良忠案
シテ申ケルハ、御辺ノ息男齡幾程ニ及セ玉フカ、願クハ

太守ト婚姻ノ約ヲナシ候ヘカシ、然ラハ、主臣合鉢ノ好ミヲ成玉
ハンコト目出度候ト申シカハ、此時、重武少シ色ヲ直シ欣然タル
鉢ナレハ、数日八木ヲ留テモテナセリ、昌信弥和睦ヲ説ケルニ、
此上ハ重武モ再ヒ

太守ニ仕ヘント、無二心中ケレハ、昌信一人悦ビ、則帰帆ヲ揚、
太守ノ陣ニ參候シ、件ノ趣一々奉演

太守ヘ、行末頼母鋪思召、新納武藏守忠元・上原長門守尚近・伊
集院下野守久治ヲ差遣サレ、事議定アツテ、祢寢終ニ降參ス、斯
テ天正ト此春年号モ改元アリ、同三月十日、薩隅三州ノ軍兵祢寢
カ城ニ入、肝付兼續カ賊徒ヲ伐ヘキ籌ヲ廻シケル、此時

太守伊集院城ニヲハシケレハ、世傳記ニ太守住テ在 薩州指領城トアリ同十四日、

太守ノ軍勢肝付境ニ馳向フ、サレトモ春雨頻ニ降續キ可戰ヤフナ
ケレハ、先高須ノ浦ニイタリ、漁火ノ舟共ヲ悉ク追放チ、同十八
日兼續ヲ攻ント、西俣ニ発向ス、賊徒トモ馳向テ戰ヲ挑ムコト夥
シ、島津右馬頭征久大隅ノ勢ヲ卒シ、兼續ハ我父ノ仇ナリ、只今

ノ合戦願所ノ幸也ト驪ラレケレハ、島津圖書頭忠長ハ薩州南方ノ軍兵ヲ率テ馳進ム、川上上野守信久・桃山兵部少規久・上原長門守尚近・肝付弾正忠兼寛・野村兵部少・鎌田外記等ノ勇士競進テ戦ケル間、賊徒トモ駈立ラレ数百人打レケル、衿寝重武ハ太守ノ陣中ニ在テ、凱歌ヲ揚テ已ニ指宿ニ参謁シ、夫ヨリ鹿兒島ヘ陪從シケレハ、

太守宴ヲ設、数日ノ遊會ヲ催シ玉ヲ、折シモ秋ノ比ナレハ、霖雨降ツ、キ、味方ノ衆兵早崎ノ陣ニ在ケレトモ、次第ニ勢モ減シケレハ、敵ハ其隙ヲ伺ヒ、同年七月二十三日ノ夜半ハカリハ山ノ嶮岨ヲ越ヘキタツテ、曙ニ凶徒俄ニ早崎ノ陣ヲ取カコミ、弓鉄炮ヲ放チ騒動スルコト斜ナラス、守兵營ヲ出テ闘ケルニ、敵案内ハ能知ツ、兵ヲ分ツテ山ノ頂ニ登リ火ヲ放チ、味方ニ攻入戦ケルニ、味方大半打レテ引退ク、中務太輔家久ハ早崎ノ本營ヲ守ラレシカハ、味方前後ニ敵ヲ受テ可逃様ナケレハ、自ラ太刀ヲ提テ、從者纒ニ二三人携テ東西ヘ切テ廻ル、敵ノ群タル真中ヲ打破リ、面モ不振戦ケルニ、其身ハケ所迄疵ヲ被リケレトモ、命ヲ限ノ戦ナレハ、物ノ数トモセス、右往左往ニ切テ廻ル、サレトモ終日ノ合戦ニカツキ、已ニ危ク見ヘラレケルニ、喜入小四郎久續ハセキタツテ散々ニ相戦ヒ、其身モ二ヶ所ノ疵ヲ受テ引退ク、平田美濃守光宗・同左馬介・木脇刑部左衛門力ヲ合セ相戦テ、大敵悉ク退散ス、角テ敵牛根ノ城ニ有ケル由ヲ聞、陣ヲ平常ノ岡ニカマヘ、十二月十四日ヨリ矢合シテ戦ヒケルニ、天正二年^{甲戌}正月三日、兼續カ凶徒トモ高隈ノ大山ヲ打越、牛根ノ茶園尾ニ陣ヲ結ヘキトソ計リケル、味方評定在ケルハ、彼者トモ爰ニ陣ヲトラハ、味方ハ利アルヘカラス、忽ニ押寄テ追拂ハント、島津忠長・川上信久勇ミス、

ンテ、四方ヨリ敵ヲラツトリ囲ミ戦ヒケル間、敵大ニ恐レ、兵ヲ高隈山ヘソ引タリケル、残ル兵纒ニ下大隈ニイタリ、皆魁ヲステ、逃走ケレハ、味方ハ茶園尾ニ陣ヲ取テ寄キタル敵ヲ待掛タリ、早崎ノ味方トモ、兼續カ兵士安樂備前守カ諱ヲ題トシテ、一首ノ狂歌ヲ綴リ、矢ニ記シ敵陣ヘソ送りケル、
弓モウシ根モヲレ矢トソ引カヘテ

甲ヲ脱ハヤカテ案樂

去程ニ、平常ノ軍兵トモ、正月十八日濱辺ニ屏ヲ構ヘケレハ、茶園尾ノ兵ハ牛根ノ城ニ至リ、数十丈程ノ高岸ニ附テ路ヲ作り開キシカハ、城中ノ兵是ヲ防キ、或ハ大石ヲ投ケ、或ハ羽矢ヲ飛スコト雨ノ降カ如シ、又ハ竹藁ニ火ヲ包ミテ八方ヘ投ケレトモ、味方ノ軍兵トモ是ヲ事トモセス、三日三夜ニ險キ岸ヲ掘崩シ、城中ニ連リ、悉ク打破リシカハ、城内為之、女重トモ震ヒ恐レテ、泣叫声地獄ノ責ニ逢カコトシ、城内為之氣ヲ失ヒ、遂ニ降ヲ乞ヒケレハ、正月十九日ノ夜ヨリ合戦已ニ止ニケル、角テ伊東モ又兼統・重興ト心ヲ合セ、益黨ヲ結ヒシカハ、衿寝カ薩^薩ニ降参シタルコトヲ恨ミ、起兵衿寝カ城ノ麓ニ乱入、火ヲ東西ニ放チ、城辺ノ在家一宇モ不殘焼拂フ、衿寝モ大軍ニ囲マレ危ク見ヘケル所ニ、折節喜入根津守季久衿寝カ城ニ在テ、敵ニカケ合セ七死一生ニ戦ヒ、敵百余人ヲ打取ケレハ、敵是ニ恐レテ四方ヘ逃走ル、根占カ兵モ数多打レケレトモ、季久カ戦功ニテ城ヲ全フセントシケレトモ、季久弟圖書頭忠通・小四郎久續ヲ始、以上十四人討レケレハ、中々其計略モ不叶、空ク打過ヌ、斯ル処ニ、牛根ノ城兵安樂備前守・弟彦四郎ヲ質トシテ降参シケレハ、兼續・重興力尽テ、太守ノ麾下ニ屬シケレハ、

太守ノ方ヨリハ新納刑部太輔忠堯ヲ質トナシ、牛根ノ城ヘソ送ラレケル、同廿二日、新納忠元牛根ノ城ニ入シカハ、同廿七日、義久公早崎御開陣在テ鹿兒島ヘ歸ラセ玉ヘハ、諸兵トモニ皆喜悅ノ肩ヲソ開キケル、凶徒如此悉ク平定セシコトハ、偏ニ新納忠元ノ謀計勲功ノ成ス所ナリ、其外逆瀬川豊前兵衛・久留伴五左衛門・木村筑前守等ノ者トモ、捨身命尽粉骨ケル故トソ聞ヘケル、其句記曰、根占ノ重武ハ、守護方ノ其勢ヒ今ニ見ルヨリモ、危ヲ不改ハ無智ノ故也ト、早々守護ニ忠勤ヲ可抽ト思ヒ、元龜三年^{壬申}春、守護方ヘ申入番兵ヲ申受ラル、ヨリテ右馬頭征久・圖書頭忠長為大將、加勢ノ兵ヲ称寢ヘソ渡サレケル、同三月上旬ニ、國一揆ノ与黨ニ手替シテ、大始良表ト高須ノ津ヲ放火シテ横尾ノ如ク打上ル処ニ、肝付・伊地知両家ノモノトモ大勢ハセツ、キ、大始良ノ方ヨリ着送り、一戦セント進ミケル、岩垣ニ偽引セ、弓鉄炮ヲ以テ散々ニ射程ニ、先懸ノ者トモ悉ク手負ニ射成、十余人射伏テ即七八騎打取、去程ニ、肝付・伊地知ニ手ニ分テ切テカ、ル、

太守方ヨリ是ヲミテ、相カ、リニカ、リ合、川上上野守・樺山兵部太輔・肝付彈正忠・上原長門守・野村兵部少輔・鎌田少外記、其外所々ノ軍兵トモ、我モ々々ト差忍ヘ相戦フ、

三國軍記曰、敵ハ俄ニ手立ヲ替、横尾ノ如ク嶺サシテ引上ルヲ跡ヲ追テ攻上ル、山半ニ至時、敵忽ニ取テ返シ、手々ニ長刀鎗ヲ持、敵ヲ麓ニ追落サント、声ヲ揚テ突下ス、而將素ヨリ案ノ内ナレハ、皆下リシケト下知アレハ、軍勢一同ニ鎗長刀ノ先ヲ揃ヘ、地上ニ必至ト踞ル、敵ハ突下ル勢ナレハ、足ヲ不留鎗ニ貫レテ死スル者幾クト云數ヲ不知、折節忠將ノ二陣ヨリ鉄炮ヲ

雨ノ如クニ打ケレハ、ナシカハ以テタマルヘキ、死人弥カ上ニ重リテ、廣々タル横尾山草木死血ニ染ミワタリ、秋ノ竜田ニ不異、敵勢案ニ相違シ、可戦様ナク引退ト云、

敵ハ横尾ヲ攻越シテ、比良八分ニ差下シ、揉ニ揉ンテ戦ケル、敵モ味方モ大略手負ニ成ニケル、重武ノ郎等ニ田代ノ地頭野間武藏守、三百計相忍ヘ戦シカ、大勢押カフセ切崩セハ、味方ノ蹀紛ニ敗軍セントスル所ヲ、大將右馬頭・圖書頭軍兵八百余騎横合ニ入違ヘ切テカ、リ、面モ不振戦ヘハ、敵何カハ可忍、敗軍シテ皆悉ク打レタリ、其假横尾ニ打ノホリ、勝吐氣動ト作りケル出々シサ限リナカリケリ、夫ヨリ根占ノ如ク打入玉ヘハ、ソノトキ、重長本望此事也ト、御祝言申サレ、御武運ノ程ヲ感シケル、

同三月下旬ニハ、境目ノ城々ニ番兵ヲ入置レ、大將ヲ始トシテ軍衆皆々帰陣セラレケル、其時、重長ノ息男未ト少年成ヲ人質トシテ差上ラル、其折節、一揆無念ニヤ思ケン、伊東・肝付・伊地知評儀ヲナシ、小根占ヘ勢ヲ打出シ、濱ノ掙ヘヲ攻落シ、其假本城ノ麓ヘ押寄セ放火ヲ成ス所ニ、喜入圖書介・同弟小四郎加世田ノ勢ヲ相具シテ、國見ノ城ヨリ馳續キ、火焔ヲ散シ防キ戦フ合戦ソ比類ナカリケリ、去レトモ、大勢ナレハ打負テ、圖書頭ト小四郎即其場ニ即打死ス、其外諸所ノ軍兵討死スル人多カリケリ、圖書助兄弟文武二道ノ器量ヤト、惜マヌ人ソナカリケル、相連ク味方ノ勢岩瀬戸口ヘ追カケテ合戦シ、敵トモ數多打取ラル、於此、猿渡越中守・伊尻伊賀守・喜入損津守同心ニテ殊ナル働キ、平田新左衛門川辺ノ勢ヲ卒シテ手ヲ碎キ働キ、各軍勞セラレタリ、此度ハ伊東・肝付得小利、先々引軍シケル

ト聞ヘケル、

同年四月下旬ニ、下大隅ノ麦作ヲ拂ハントテ、守護方ヨリ兵ヲ出サル、鹿兒島ヨリ兵船ヲ調ヘ、下大隅ヘ押付、麦作ヲ薙キ苗代ヲ踏セラル、折節敵勢連キ合セ、矢軍烈シクシテ互ニ手負トナル、去レトモ、足輕雜兵トモ馳合セテ、敵一兩人打取テ、先々引レケル、

天正元年^{癸酉}九月廿七日ニ、瀬戸村ノ向ヘ成早崎ト云処ニ着成レケル、伊地知ノ重興ハ肝付左馬介良兼ノ聲ナリ、故ニ引語ヒ、度々緩怠ヲ致ナリ、仍テ是ヲ攻伏シカ為ニ、早崎作桑平ニ御陣成レケル、或時、敵城ヨリ多勢打出ル、慈モ大勢打出シ矢軍烈スル程ニ、慈次第ニ馳重レハ、敵ヲ追入、城ノ本口ニテ人々合戦セラレケル、續ク軍兵我先ニト岸ニ攻上ル所ヲ、切ツ突ツ拂ヒ落セトモ、寄手ノ勢支トモセス、屏垣ヲ取破リ攻戦フ、伊集院源助真先ニト進ミケルカ、痛手負臥ニケル、郎等トモ馳寄、肩ニ引掛退ニケル、於是、肥後平三郎・桑波田孫太郎・川野玄蕃允、其外所々ノ人々打死ス、敵百余人打トレハ、城地頭伊地知美作守構ヘ未練遊落ケリ、即城ヲ攻落シ、其マ、取コシラヘ、今ハ又両陣ト成テ、牛根ノ城ヲ取卷ケル、サレトモ、籠城ノ者トモハ案内能知タリ、肝付ヨリモ種々ノ知略ヲ設ケテコトヲ左右ニ寄セ、色々ノ謀ヲソ巧ミケル、ヨリテ伊地知・肝付カ両勢ニ押合テ、互ニ陣士ヲ懸テ相戦フ、アル時陣士ヲ掛タルニ、敵モ慈モ連キ合ヒ、大勢トナリテ烈ク戦フ程ニ、慈敗北トナリケルニ、梅北宮内左衛門白キ胴服着タルカ、敗軍ニ押靡カサレテ遊ケルニ、其比鹿兒島ニ口ヲ利勇雄ノ者トモ多ケレハ、白胴服カ遊タル見タカト、目引鼻引、其人ノ仮名指計ニ笑ケリ、其後

軍有ケルニ、殊更烈シキ戦ナリ、敵ト慈ノ其間ニ、敵一人射伏ラレ、敵モ退ルコト不能、慈モ打コト不成シテ、折角ナリシ処ニ、赤毛ノ笠ニ三尺ハカリノ薄磨キシタル菖蒲ノ立物猪頭ニ着熊ノ皮ノ大引入シタル長靴ヲ後高二帯シ成シ、白胴服ヲ着ルマ、ニ、三尺余ノ太刀ヲ真中ニ指カサシ、敵打テ見セントテ、斯烈シキ敵間思ヤフニ走り出、即首ヲ打取テ、刀ノ先ニ貫キ、イカニ白胴服カ敵打タヲ見タカ、人事云ノ若者トモ、何ト敵ヲ討ンカト陣中ワメキ廻ルニ、若者トモ皆面目ヲ失ケル、人ノ高名不覺モ折ニヨルコトナレハ、他ノ嘲ヲ笑ハンモ能思案アルヘキコト共也、

然ルニ、平床ハ肝付往々ノ通路ナレハ、此所ニ陣ヲトラント評議アル、此所ハ境ニ川寄々ニ市成・恒吉・廻、又ハ肝付内場諸所ノ通路ヲ塞ク在所ニテ、シカモ難所ヲ抱ヘタル牛根ノ城ヨリ奥ニシテ、往來不輒所也、仍テ同年十一月中旬ニ、右馬頭幸久・左衛門尉歳久ヲ大将トシテ、平床ニ陣ヲ取レケル、斯リケル処ニ、平床陣ノ後卷セント、伊地知肝付カ勢寄來ルニ依ツテ、茶園カ尾ニ向ヒ陣ヲ取ントテ、天正二年^{甲戌}正月三日、武功ノ者ニ足輕トモヲ相付、見切ノ為上場ヘアカリケル処ニ、早ヤ敵合シテ仕合能カリケレハ、雜兵一人打取テ、年ノ始ニ御吉左右ヲソ申ケル、兎角シテ日モ移リ行ヌ、

去程ニ、六月ニモ成ヌレハ、方々諏訪ノ神事ヲ為可被執行、鹿兒島ヲ始トシテ、境目ノ軍役ヲ引レケル、其折節、牛根陣ノ番大将ハ中務太輔家久在番ニテ、陣中無人ナル由ヲキ、傳ヘ、能仕合ソト心得、磯傳ノ山道ヲ潜ニ忍ンテ、七月ノ中旬、肝付大勢ヲ催シテ、或夜ノ曙ニ大手ノ口ニ押ヨセ、鎗階ヲ持セテ三千

ハカリ寄來ル、大手ハ平田美濃守・同左馬助、帖佐ノ衆中相具シテ堅ラル、搦手ハ家久ノ勢ニ川内表ノ勢ヲ加ヘ堅メラル、都合二千余騎ヲハ二手ニ分テ置レタリ、大手ハ垂ノ口ニ出合、木協刑部左衛門・帖佐淡路守・梅北梅齋杯高名ス、其外ノ人々軍勞セラル、夫ヨリ敵テタテモナク引退キ、定テ時刻ヲ待ヌラン、家久此様見玉テ、牀机ヲ迦サセ玉ヒテ、手廻三十騎計相具シテ御本陣ヲ打過、護所ノ小路ニ打出見玉ヘハ、時刻ハ日出ノ比ナルニ、山統キニ立上ル秋ノ節ナル朝霧カ、モヤノ烟カ有ヌカト見ル処ニ、三百計陣中へ切登リ、護所ノ小路ニ馳出ル若者共ノ至ニハ、陣屋ニ火ヲ放チナハ、何かハ忍ヘキナルニ、アナタコナタト案スルヲ、家久急ト見玉ヒテ、アハヤ敵ゾアマスナ打ト下知ヲナス、家久ノ御内ナル東郷掃部助ト名乗リテ散々ニ切合ヒ、其場ニ即打死ス、家久是ヲ御覽シテ、愚カニ會釈、郎等數多打セテハ悪カリナント思召、三尺五寸ノ有馬作ノ大太刀ヲスルリト拔テ、南無大將摩利支天・愛宕山ノ太郎坊・大天狗・小天狗、家久カ太刀先ヲ能守ラセ玉ヘト念シテ、縦横ニ捲リ立、ハツ花形ニ散々ニ切玉ヘハ、此太刀風ニ恐レテ、左右ニハツトソ退ニケル、爰ニ肝付ノ住人ニ、河南安藝守ト名乗テ家久ニ渡リ合フ、家久見テ、汝ハ雄男ノ者也ヤトテ、受付テ甲ノ鉢ヲ打碎カル、無力木陰ヲサシテ逃失ヌ、敵トモ大将ト見ルヨリモ、打取ント攻戦フ、家久目下ニ數多ノ敵ヲ切付玉ヘハ、郎等ノ人々モ不劣ト切テ入、縦横ニ捲リ立追廻シ追返シ、一時ハカリ切合ヘハ、遂ニ敵トモ不忍シテ、岸ヨリ下ニハラハラト拂ヒ落セハ、岩ニ當リテ死スルモアリ、或肩腰打損シ、終ニ片輪トナルモアリ、思ノ外ニソ打レタリ、中書モ手淺クコソマシマ

セトモ、身ニ七ヶ所、胸腹ニ當ル疵共ニ、以上十三ヶ所トソケル、牛摩利支天トハカ、ル人ヤ云ラントテ、敵モ慈モ其高名ヲ感セヌ人ハナカリケリ、去レハ、野頸ニ敵攻入タル由大手ニ聞ヘケレハ、大手ノ人々騒キ續ントス、美濃守是ヲ見テ、タトヒ野頸ニ攻入タリト云共、大手ノ堅メニ居ル者カ是ヲ迦スハ不覺ナリトテ、少モ動スル氣色ナケレハ、各無力居ケル処ニ、野頸ノ敵ハ悉ク追落シ、中書打勝玉ヒヌト聞テコソ、人々安堵ノ思ヲ成ニケリ、美濃守騒キタラハ、敵大手ヲ攻破ルヘキヲ、イツレモ劣ラヌ大将ヤトソホメニケル、於野頸打取タル頸トモヲ大手ノ口ヘ掛双レハ、敵共是ヲ見テ、力尽テソ引ニケルカ、牛根ヲサシテソ取籠ル、夫ヨリ伊地知重興ハ居城ニ引籠ル、肝付ノ者トモハ皆住家ヘソ帰りケル、然レトモ、肝付・伊地知カ両家ノ大勢、往々ニハ七廻テ色々ノ智略ヲナス、其折節、伊東伊地知加勢トシテ大隅ヘ打出ヌトスルト云雜説モアリ、守護方心遣ノミニシテ、牛根モ急度可裏行ヤフニモ見ヘス、御陣ヲモ先ツ引玉フヘキカナト、評定區々ナル処ニ、數根中務丞頼繼小船三艘ニ郎等少々相乗テ、其身ハ段々威ノ鎧ノ、今己ノ時ト輝クヲ、両袖シツカニ引付テ御陣ヘ參リ申ケルハ、縦ヒ伊東參リタリト申トモ、我等數根ニ罷居候ヘハ、大隅ノ御家人ヲ相催シ馳向ヒ一戦仕、打滅シ候ハシコト案ノ内ニ覺ヘ候、心強ク牛根ヲ御退治候ヘト申サレケルヲ、嘗ヌ人コソナカリケリ、去程ニ、何ツ迄互ニ白眼ミ合、月日ヲ送ルヘキカ、早々退治アルヘシトテ軍勢ヲ打出サル、先陣ノ大将ニハ圖書頭忠長、士大将ニハ上原長門守、其外宗徒ノ人々究竟ノ勇士ニテ先陣ニ進マル、後陣ノ大将ニハ左衛門尉歳久猪鼻ニ打上テ、如何ニモ備ヘテ堅固ニシテソ

見ヘニケル、御本陣ノ其勢漫々トシテ打出ラル、肝付勢是ヲ見テ、敗軍モ理ナリ、陣具足ヲ取捨テ、後トヤ先ニト逸失又、於是

義久公雜歌ヲ詠シ、矢シルシニ付テ射サセ玉フ、

弓モウシ根モヲレ矢トソ引カヘテ

甲ヲヌカハヤカテ安樂

牛根ノ城ニ射送り、ヤカテ相ノ垣ヲ結セラル、斯リケル処ニ、大口ノ住人逆瀬川奉膳兵衛・久留伴五左衛門尉トテ勇士有ケルカ、夜ニ紛テ野頸ノ山ニ忍入り、切岸ヲ掘崩ス、城ノ地頭安樂備前守是ヲ防カントセシカトモ、防ニ手術ナク、城内ノ人々セシ方ナクソ見ヘニケル、深ク掘入、岸ノ中ヨリ二筋三筋ニ堀破リ屏際ニ堀出、地頭安樂殿其外城内ノ人々ヘ申ヘキコトノ候、其方ノ主肝付ハ、普代ノ君

太守ニ弓ヲ引、八逆ノ罪ヲ犯ス輩ヲ主人ト頼トモ、無程天罰ニ滅センコト疑ナシ、惡逆ノ主ニ伴ヒ無道ヲ致玉ハ、各無罪ト云トモ、其黨ニ與セハ其罪遍レカカラン、其故ハ、明日合戰ヲ遂ナハ、各首ヲ賜テ軍倍ニ備ヘンコト案ノ中也、同クハ今日逆心ヲ顯シ、

太守ニ致忠節ハ新納武藏守ニ告知ラセ、御取成ヲ申サン、大口ノ住人ニ逆瀬川奉膳兵衛・久留伴五左衛門ト、大音上テ呼リケリ、城中ノ者はヲ聞キ、今ハ早カニ不及次第也トテ、降參ノ由ヲ申ケル、是

義久公ノ御詠歌ノ徳ナリト、陣旅皆感シアヘル也、去程ニ、新納武藏守牛根ノ城ニ打入、一日支度調へ、地頭安樂備前守在番教輩ノ者トモ肝付ヘコソ送ラレケル、鹿兒島ノ淨光明寺期阿上

人ヲ使僧トシテ遺サル、於此肝付ハ、市成・恒吉・廻ヲ差上ラル、伊地知ハ垂水・田上・高城・新城ヲ差上ラル、前非ヲ悔ヒ、自今以後、全ク可守忠信ノ旨、誓紙ヲ以テ奉レハ、

義久公仁義ニテ御座故、其罪ヲ不咎、赦免シテ彼家ヲ殘シ玉フ、誠ニ御厚恩ノ至也、重興ハ下大隅下ノ城ヲ被下テ居住ス、新城ニ高城ヲ相加ヘ鎌田出雲守、垂水ハ川田駿河守、牛根ハ伊集院右衛門兵衛尉地頭職ヲ賜リケル、田上ハ根占重武早々參上被申、恩賞ニ被下ケル、

翰遊集、大意箕句記ニ同、三國軍記、右同

私曰、諸書年月同異アリ、左ニ記ス、

肝付・伊地知海上ヨリ鹿兒島ヘ寄事

世録記ニハ本分ニ不記、粗々細書ス

擾亂記ニハ不記之、

箕句記、元龜二年秋ノ始ト有、

翰遊集、天正元年酉ノ九月、早崎御着陣ノコトヲ記シテ、

其前ニ此事ヲ記ス、

三國軍記、翰遊集同時ニ記ス、

根占氏降參ノ事

世録記、擾亂記、天正元年春ト記ス、

翰遊集・箕句記・三國軍記、共ニ元龜三年^{壬申}春ト記ス、

肝付ヘ根占手切合戰

世録記、擾亂記、天正元年三月中旬ト記、

箕句記、翰遊集・三國軍記、元龜三年三月ト記ス、

境目ハ番手ヲ箆置諸所帰陣ノ事此隙ヲ伺ヒ、伊東・肝付・

伊地知カ勢寄來リ合戦アリ、喜入氏軍勞ノ支、

箕句記・三國軍記・翰遊集、元龜三年三月下旬ト記、

世録記・擾乱記不詳、

早崎御着陣小濱落城

世録記・擾乱記、元龜三年九月廿七日ト記ス、

箕句記・三國軍記・翰遊集、天正元年^西九月廿七日ト記

ス、

諸所諏訪神事ニ依テ、諸軍版陣、其跡番兵無勢ニ付、肝付侵
來家久軍勞ノ支、

世録記・擾乱記、天正元年^西七月ト記ス、

三國軍記・翰遊集、亦同、

箕句記、天正二年ノ所ニ記ス、

平床御着陣ノ事

世録記・三國軍記・擾乱記・箕句記、天正元年十二月ト

アリ、翰遊集ニハ元龜三年トアリ、

肝付軍ヨリ茶園ケ尾ニ陣取ノ企アリ、歳久・忠長追拂合戦ノ
事、

諸書共ニ天正二年正月三日ト記ス、

牛根落城

諸書共ニ天正二年、

天正二年正月十九日、牛根請降、其次伊地等根占ヘ寄來リ合
戦アリ、<sup>此時喜入
氏軍勞ス</sup>其次牛根落城ト、世録記・擾乱記ニ記セ

私一、此時牛根逼迫、安樂已ニ降ヲ乞、肝付・伊地知モ

ヲ失ヒ、麾下ニ屬セントスルノ時ナリ、危難ノ時ニ

シテ其身スラ死生未不定、此時根占ヘ寄來支如何、根占
ヲ可攻ノ理ナシ、肝付・伊地知根占ヘ寄ルハ、根占御方
ヘ參ルノ時、怒之テ根占ヘ寄ルト、箕句記・三國軍記・
翰遊集ニ記スルコト是ナラン歟、

明
赫
記

卷
之
四

日州高原城攻之事

夫霧島ノ山タルヤ、日隅二州ノ間ニ跨リ、我邦内ノ名山ナリ、高原ノ城ハ此山ノ東ニアリ、伊東カ軍兵高原ヨリ霧島ノ大山ヲ越、太守ノ御領大窪・田口村ヘ打出、時々其郷ヲ侵シケレハ、時至テモ封内ノ名山大川ヲ可祭様モナク、衆民此艱難ニ罹テ、憂ヲ懷ケルコソウタテケレ、

忠平公是ヲ怒玉ヒ、如今シテハ、後ノ大事無疑ト思ハレケレハ、先ツ

太守ノ命ヲ乞、高原ニ陣ヲ可取ト、大口ノ住人市來美濃守、栗野ノ住人迫間甲斐守、飯野ノ住人細山田武藏守・遠矢下総守并玉利大炊左衛門・同壹岐椽玉利同人、高野ノ地等、各志ヲ合セ、密ニ高原ニ差コス様子ヲ伺ヒ來テ、委細ノ趣

忠平公ヘ告ケレハ、天正四年丙子八月六日、義久公鹿兒島御立有リ、先ツ飯野ニ至リ、高原追討ノ評儀ヲ成シ玉フ、同十八日ニハ、諸軍高原ヘ馳越、十九日、陣幕已ニ成ヌ、サレハ、味方ノ諸卒急ニ城ヲヤフルヘシト謀ケル由、

太守聞玉ヒ、楚忽ニ城ヘ寄事ナカレト、深ク戒玉フ、然レトモ、皆逸リ切タル勇士、殊ニ若武者トモナレハ、其命ニ不應、何程ノ叟カ有ヘキ、即時ニ押寄セ、一モミニ揉崩セト、云程コソアレ、柏原將監・間世田刑部左衛門・濱田右京亮・長谷場兵部少輔・上井伊勢守・伊地知伯耆守・長谷場織部佐・長野兵部少輔・福屋日向守等ノ者共、俄ニ押寄、悉ク門扉ヲ討破リ、敵味方トモ揉合ケルニ、味方ニハ三原源三郎尉・入佐郷左衛門・中将坊・曲田某・野村右衛門尉・井尻早左衛門・四本伴八郎・尾辻某・宮原越

中守、枕ヲ双テ討レケル、忠長・家久是ヲ見テ、齒カミヲナシ、敵中ニ突入、東西ニ敵ヲ追拂レシカハ、

義久公ハ、今夜霧島ノ麓花堂ニ扣玉ヒ、明ル廿日ニハ、鎮守尾ニ陣ヲ築カントシ玉フ、然ルニ、高原城ヨリ念佛寺ヲ頼ミ、偏ニ和陸ノ由ヲ申ケレハ、本田因幡守親治・徳持舍人佐ヲ敵城ヘ遣シ、誓約ヲ堅メケレハ、落合豊後守・肥田木河内守ヲ質トシテ來ラシム、鎌田政年凱歌ヲ唱フ、同廿二日、伊東勘解由次官高原城ヲ下テ去ケレハ、

義久公其日未刻城内ニ入セ玉ヒ、外壘モ其夜悉ク放火シテ灰燼ト成シカハ、高原・高崎・三山・内木場・岩牟礼・須木・須師・原崎ハケ所、旗下ニ属シケル、高原ハ上原長門守ヲ以テ守ラセラル、箕句記曰、天正四年丙子、高原ヲ可攻トノ評儀アリ、其故ハ、高原ノ内ニ竹崎ト云所アリ、白坂式部丞領分シテ、要害ヲ構ヘ居ルカ薩ヘ參上可申、先高原ヲ急ニ攻玉フヘシ、案内者可仕由ヲ申入ニケル、仍テ隅薩ノ軍兵高原ヘ發向ス、小林・温泉・三ヶ山ヲ跡ニ置、野尻ノ城ヲ側ラニ見テ打通リ、高原ノ城ノ野頸ノ原ニソ打出ラル、大將ニハ

義久公ヲ始奉リ、忠平公、又霧島越山道ノ大將ニハ右馬頭征久、竹崎表ノ大將ニハ北郷入道一運、都合御勢四萬六千余騎、同八月十六日、高原ノ城ニ押寄、各陣ヲ取レケル、勢ノ中ヨリ弓ノ手達ヲ撰出テ、射付火矢ヲ射サセラル、高原ニモ究竟ノ者共籠居タレハ、城戸口ニ出合セ、爰ヲ専度ト防キ戦フ、爰ニ曾於郡住人ニ柏原將監ト名乗テ、幸春口ノ一ツ橋ヲ打渡リ、不應詰入合戦スル、続ク兵不劣ト橋詰ニテ、我モ々、ト合戦アリ、大手ハ隅薩ノ軍兵攻入テ、揉ニモンテ相戦フ、新納武藏守カ一

男刑部太輔、片手ニハ小楯ヲ取テ差カツキ、打刀ハカリニテ城戸口へ攻入、纏頭ノ合戦シ、楯ノ端ニ鎗疵・切疵數多受、暫戦ヒ退ケル、比類ナクソ見ヘニケル、其後高原下城ノ時、高原ノ足輕大将シケル漆豊前守トテ勇敢ノ者ナルカ、先一番ニ新納刑部太輔ト尋テ見參ニ入、御軍花ヤカ也ト、褒美シテ行ニケル、其外隅薩ノ勇士共、合戦功名シテ罵ル者多カリケリ、鹿兒島衆ニ三原源三郎、伊集院ニ入佐郷左衛門、新宮ノ中將坊、蒲生ニ曲田八郎打死ス、所々ノ軍兵共手負・死人數不知、大柑子口ニハ禁ノ村ヲ攻破リ、板城戸ニ追詰テ、爰ヲ專度ト相戦フ、爰ニ桃山安藝守ノ二男ニ、未タ若年ナルカ花声ナル支度ニテ、城戸口ニ攻入鎗合セント働キケル、敵ノ方ヨリ矢取テ打番ヒ、能引テ已ニ発ントシケルヲ、誰トハ不知、傍ヨリ其矢ヲ押取テ、アツハレ若年ノ人ソ、惜哉、若キ人ヲトテ制シケレハ、桃山不思議ノ命ヲ助リ、後ニハ權左衛門美濃守トソ申ケル、其矢能取タリヤ、是ヲ射テハ、敵慈ノ覺少シト申ヌ人ハナカリケリ、是ヲ射ントシケル人ヲキケハ、落合豊後介ト云者ナリ、矢ヲ發ツニ射損シタルト云コトナシ、余リ二人ノ云ハントテ、高原ノ城豊前カ白矢臺ニアタ矢三ツトソ申ケル、田布施住人野村右衛門尉打死ス、此城戸ヲモ打破リ、松尾小城ニ切上ル、加世田ニ井尻早左衛門・四本伴八郎、山田ニ尾辻次郎左衛門打死ス、菱刈曾木ニ宮原越中守無比類合戦シテ、即打死ス、如此ナレハ、手負死人イカ計トモ教不知、忠平公仰ラレケルハ、軍士モ勞レ、手負死人モ多ケレハ、先今日ハ一戦ヲ止サセ玉ヘト、有ケレハ、義久公其義ニ同シ玉ヒ、御下知ニ任セ、西ノ刻下リニハ各陣屋

ニ入ニケル、夫ヨリ夜詰日詰ニソ攻ラレケル、去程ニ、此由伊東聞ヨリモ、日向ノ大勢馳ツ、キ、猿瀬ノ太川ヲセキワタシ、山ノ肩ニ引上リ、篠陣取テ色動キケル、斯テ時刻モ移行ニ、サテイカ、可為ト、種々ノ智略ヲ廻セ共、日州加勢ヲ可成様ソナシ、只互ニ鋒火ヲ拵タル計リナリ、城ノ内ニモ能兵トモ籠ケレトモ、薩戸ノ大軍ニ押巻レ、武略モサラニ尽果、降參ヲソ請タリケル、去レハ、下城可成トテ、城ノ内ヲ操出ス、福永丹波守・同名丹後守ヲ始トシテ陣中ヲ通サル、道ニ障ハナケレトモ、敵ハ心ヲ顧テ一大事トヤ思ヒケン、高原ノ住人漆豊前介ニ諫メラレ、逆穂ノ鎗ヲソ持ニケル、伊東勢猿瀬ノ山ヨリ御シ合セ、迎取テ野尻城ヘ引入レハ、三ヶ山・温泉・小林ヲモ打捨、皆引拂テソ退ニケル、須木ノ山モ參レハ、薩戸ノ威勢申計ナシ、即高原ノ城ヘハ上原長門守ヲ地頭ニ仰定ラレ、手裏ニ參ル所ニ皆番兵ヲ入ラレ、隅薩ノ大軍、御大将ヲ始トシテ、皆々御飯陣成レケル、翰遊集大意、箕句記ニ同シ、三國軍記、高原攻ノ人數、義久公、義弘公御勢三千五百、征久ノ勢一千餘、北郷一雲七百、余、都合五千二百余ト有、同記ニ、伊東ヨリ高原へ後巻人數、猿瀬ノ山川ヲ渡シヌレハ、鹿兒島ノ御陣蜜フシテ、輒ク高原ヘ入シコトモ不叶、出陣シタルヲ知ラセン為、只狼烟ヲ上ルノミ也ト有、

肝付与伊東合戦 肝付哀微事

高原ノ出陣ニ、國中ノ催促ニ任セ、肝付良金軍兵三百余騎相立ラ
ル、隅薩ノ軍兵手ヲ碎キ骨ヲ折トイヘトモ、別所ニ分立テ、空見
シテコソ居タリケル、人々是ヲ見テ、肝付カ所存不心得、慈若シ
失利コトアラハ、後切セントスル者也ト、口々ニ申ケル程ニ、
太守聞召、此由肝付ヘ仰セラル、良金承リ、御家ニ對シ、イカ
デカニ心候ヘキ、全ク疎意ヲ不存ト、堅ク陳シ申サル、然ハ、
伊東ニ對シ一戦セラレ候ハ、心底無殘所、如何成神文誓詞モ入
ヘカラスト宣ヘハ、良金承リ、尤ノ御意ナリ、一戦ノ後、兎角ノ
御左右可申トテ、天正五年^{丁丑}春、肝付一族軍兵引具シテ、各福
島ヘ打集リ、伊東一戦ノ談合トテ日ヲ暮ス、此左馬介良兼ハ省約
入道ノ一男ニテ、
太守貴久公ノ御為ニハ外甥ニテ有ト云ヘトモ、伊東散位入道ノ誓
ナレハ、内儀ノ方志深シテ、
太守方ノ權ニ恐ルトイヘトモ、動モスレハ、又伊東ヲ背ント云心
ハナカリケル、如此ナレハ、伊東ト内談懇ニシテ、人目計ニ矢ヲ
射カハシ、境目烈ク振舞ント、互ヒニ約諾シテ、日州郷ノ原ニ打
出ラル、伊東方ヨリモ打出向陣ヲ取ル、大将宗徒ノ人々ハ、内心
ニ互ニ知タレトモ、軍兵以下ニ露端^{アブラ}ニ云ヘキ儀ナラ子ハ、示之ニ
不及、両方ヨリ出合、我モ々、卜防キ戦フ、肝付宗徒ノ人々ハ、
遙ノ後ニ扣ヘテ心易ク柴居シテ、破笠シテコソ休ミ居ル、伊東方
ハ其心得シケレトモ、肝付ノ雜兵其旨ヲ不知シテ、射伏、切伏、
手痛ソ戦ケル、伊東方是ヲ見テ、肝付武略スルソ、實ニ合戦セヨ
ト下知スレハ、取テ返シ攻戦フ、肝付勢捲リ立ラレ、引煩ヲ追

詰々々打程ニ、半里計打レテ、宗徒ノ人々ノ扣タル所ニ逃カ、リ、
連々宿意モ有ケルヤ、又ハ當座ノ難ヲ通ントヤ云ケン、是迄ハ足
輕共一戦仕ル、是ヨリハ加増取ノ地行殿原ニ渡シ申々々ト呼テ、
横半ニ引崩シテ逃タリケル、伊東勢肝付宗徒ノ人々ノ扣タル所
ニ混々ト切掛リ、物一時ニ切崩ス、肝付宗徒ノ人々悉ク打取、其
競ヒニ伊東勢福島ニ押寄セ、十三所ノ浦ニ陣ヲ取ニケリ、肝付
方ノ右サマトコウスル様ソナシ、打洩サレタル雜兵以下、櫛間ノ
城ニ逃籠リタレトモ、イマタ心モ不定、伊東ヨリハ、福島ノ城ヲ
早速可渡、速ニ不渡ハ、即押寄セ城ヲ可攻由、使頼也、其比、鎌
田出雲守政親ハ下大隅新城ノ地頭ナリ、此由ヲ聞ヨリモ遅々セス、
其勢八十計相具シテ、薩ノ加勢ノ先陣トテ、早福島ニ馳籠レハ、
肝付方ノ人々毛漸々心ヲ取靜ム、其翌日ニ、右馬頭幸久大隅ノ大
勢引具シテ、福島ヘ打入由聞ヘケレハ、肝付ノ人々志布志ニ打集
リ、典廐櫛間ヘ通シ申サハ、是ヲ見テ見次申サントテ、薩ノ大
軍打入ルヘシ、大軍打人程ナラハ、此節肝付ノ家ハ滅却スヘシ、
早福島ハ相靜タリ、是ヨリ御帰陣可有ト、強テ留可申ト、内儀評
定區々ナル処ニ、鳥毛空穂百腰真先ニ歩マセテ、以上三百計浪志
ノ町ヲ押テ通ラルヲ、評儀区ニソ留ヲ、セサリシカハ、肝付ノ運
ノ末トソ覚ヘケル、福島ヲ伊東ニヤ可渡、薩ノニヤ可渡ト談合ス
ル所ニ、右馬頭着陣アレハ、薩ノヨリ大軍統キ來ル由聞テ、伊東
方モ引テソ退ニケル、斯テ薩ノ後軍ノ大軍統キ來ル程ニ、志布
志・福島ニ薩ノ勢ハ充滿タリ、
太守モ志布志ニ御馬ヲ立ラレ、一門宗徒ノ人々評定有テ、肝付カ
領分先ツ此節召上ラルヘシト、肝付ノ郡内ニ高山一所ヲ給リテ、
始良・大始良・内ノ浦・串良・小原・鹿野屋・百引・平房・郡外

二押領地、松山・志布志・大崎・福島ニ至テ、皆悉ク召上ラル、然ルニ、無程左馬介良兼卒去也ケレハ、薩州阿多郡ニ僅十二町ノ知行ヲ賜リ、左馬介ノ娘ニ舎弟ノ三郎五郎兼則ヲ嫁シテ、良兼ノ後ヲ立ラレシカトモ、夫婦ノ中悪クシテ内乱出來リ、嫡孫トテ内儀方ヲ引者多カリケリ、仍テ阿多ヲモ召上ラル、知行ヲ二ツニ割分テ賜リケルカ、自夫次第ニ肝付家知行不足シテ、兼則モ左馬介ト云ケルカ、慶長五年、天下ノ劇乱石田三成力謀叛ノ時、

惟新公ノ御供シ、関ヶ原ノ合戦ニ打死ス、其子伴十郎モ豊前ノ澳ニテ、船ヲ損シテ空ク成テ、于今此今ハ、實切ヲ書、今ナリ其養子有トイヘトモ、如無人ノ成行、計カタキ者也、去テ、肝付足輕雜兵共ノ述懐ノ本ヲ聞ニ、大崎・松山領分ト成ナラハ、勇敢ナル足輕共ニ忠實惜カラシト進メラルレハ、誠ニ肝付ノ足輕ハ空ヲ飛カ如也、無程両所領分ト成ケレトモ、先此度ハ分限宗徒ノ人々ハ配分有ヘシトテ、足輕ニ無恩賞、志布志手裡ニ入タラハ、其時ハ違儀アラシトイサメテ、輒ク志布志ヲ取タレトモ、爰ニテモ其儀ナシ、福島ヲトラハ無是非宛行ヘシト勇ムレハ、今ハ早ヤ偽諫マシト、心々ニ思ヘトモ、若モヤト勇テ福島ヲ取レ共、其忠賞モナカリケリ、結局分限ノ人々加増重恩思フ様ニ知行シテ、小身ナル士ヲ真下ニ見タル顔付見レハ、中々腹立テ足輕述懐シタレトモ、実ニ八年來ノ者ナレハ、強テ此家ヲ破ヘキトハ思ハ子ト、身ノセン方ナサニ付テ、日頃ノ鬱憤出合タリ、世ノ中無憂ナル時ハ、忠モナク野心モナシ、人ノ將タル者ハ能ク思慮スヘキ事共也、去レハ又、日新公二年肝付ヘ打越玉ヒ、厚ク礼物ヲ調ヘ、至當家ニ忠勤ノ志ヲ可被抽ノ旨、雖能被仰、聊以不承引、是為可加憐愍、一月余逗留御座シテ諫メ玉ヘトモ、貴命心ニ不染、如加世田掃較ノ刻、鹿

野屋ヨリ省釣ヘ詠歌ヲ送リ玉ヘリ、

洩ヨトモシラテ頼マハ木ノ本ノ

旅寝ハサソナ露ヨ涙ヨ

ト被遊シ、御言ノ末久シクモ生茂リ榮ヘユク世ノ中ヲ見渡セハ、無程頃ハ秋ノ野ニ露置増ル夕暮ハ、虫ノ音迄モ枯々ニ成行ハ浮世

ノ習カヤ、今ノ肝付入道ノ一榮モ亦一落ト成行ケル、

日新公ケ様ニ懇切ノ諫ヲ成シ玉フモ、御嫡女ヲ省釣ニ遣シ置玉フ

故也、

福永丹波其主背伊東降薩 伊東没落之事 伊東之

臣長倉忠節石城合戦之支

去年天正四年、伊東勢高原ニ打負引入テ後、三ノ山・小林ニハ川上參河守、高原ニハ上原長門守地頭ニテ在番ヲ勤ケル、伊東ハ野尻ヲ限リニ持テ、入番勤テ、互ニ心ヲ遣ヒ日ヲ送ル程ニ、天正五年丁丑、上原長門守常々

忠平公ニ御内談申、野尻ノ城ノ預リ福永丹波守ニ竊ニ申遣ヌ様ハ、傳承レハ、御辺定テニ心有間敷ヌナレトモ、薩方ヘニ心ノ志有トテ、御勳氣ノ由承ル、其上御息為加冠、佐土原ヘ久ク御逗留有トモ、散位殿見玉ハスシテ、返テ面目ヲ失ヒ玉フトキク、主人ヲ頼ム者ノ世ノ習トハ云ナカラ、定メテ本意ナキ事ニ思ヒ玉フラン、如今ハ、味方ノ為被害玉ハント、一定覺ヘ候、今又散位殿行跡ヲ聞ニ、非法世ニ越タリ、悪行逞キ故ニ、天爵已ニ頭ル、先年真幸ニカケ、一門ノ侍多ク打滅ヒ玉ヒヌ、宿運傾タル主人ヲ頼ミ、何ノ益ソ、速ニ薩方ヘ御參候ヘシ、如何様ニモ御馳走申ヘシト云

ケレハ、丹波守常々能便リモカナト思ケル処ニ、幸トハ思ヘトモ、
普代ノ主人ト云、或ハ武士ノ失本意ヲコトナレハ、心區ニシテ案
シ思ヒ煩ケルカ、熟々思案シテ、一定今ノ如キハ野心ノ者トテ打
レ、子孫ニ至迄恥シメラレンコト、世ニ口惜キ事也、誠ニ兩度迄
愚息為元服佐土原ニ參ルトイヘトモ、御覽ナキコソ意恨ナレ、行
末可能カルトモ不忠、所詮、此難儀ヲ免レンニハ、薩戸ニハシカ
シト思ヒ定メテ、丹波守申サレケルハ、伊東年来ノ者トシテ、斯
申ハ本意ナキ事ニテ候ヘトモ、内々述懐ノ儀アリ、島津殿御家ニ
參上シテ、此難儀ヲ散セント存ル也、御家ノ仕合、万事ハ奉頼ト
ソ申ケル、長門守是ヲ聞、

義久公 忠平公ニ竊ニ申上レハ、大ニ悦ヒ玉フテ、能計策可致ト
仰ケレハ、穩便ヲ以テ武略ヲソ計ヒケル、同年十一月八日、丹波
守日向在番ノ人々ヘ向テ申ケルハ、各ニ御酒ヲ進セ度候ヘトモ、
何ソ跡數コトナシ、乍去、山ノ者ハ獮ヲ得タル者トモニ數多申付
テ候ヘハ、一定是ハ可取ト覺ヘ候子トモ、真鳥ノ啄所ニ蹄ヲ調ヘ
待セ候ト云ケレハ、番大將ヲ始トシテ、各多人數ノ哀ナルニ、御
太儀ノ至候ト、辭儀セラレケルコソ可笑ケレ、随分方便ヲヲセタ
リト思フテ、未タ昼中ヨリモ子共ハ皆出ニケリ、去程ニ、高原ヨ
リ人數次第々々ニ忍寄程ニ、猿瀬ニ於テ、丹波守カ息十四五才ニ
成ケルヲ人質ニ相渡ス、高原ヨリハ

忠平公ノ執事川上參河守カニ男助八郎相渡スヘキト契約シテ、其
時ニ至テハ、小姓ノ童ヲ遣サレケル、互ヒ二人質取替シテ、有武
功者トモ三十余人先手トシテ、八日ノ夜半計ニ、野尻ノ城ノ野類
ニ無難忍寄ル、兼テ約シタルコトナレハ、繩ヲ數多下ケ置ケレハ、
取付々々上ル程ニ、手隙モ不入本丸ニソ忍上ル、福永待儲ケタル

コトナレハ、奥ノ家ヲ拵ヘテ、先ツ是ヘソ請シ入、次第々々ニ五
十人・三十人忍寄テ、先手ノ人々、紙ヲ白ク付置タルヲ誌ヘニテ
タトリ上程ニ、三百余ニ及ケル、其夜ノ寒サ、冬ノ半ノ事ナレハ、
皆人氷リ痛ケルニ、粥ヲ調ヘ、丹波守カ妻女自ラ酌ヲ取、酒ヲ進
メテ嘗翫シ、暫ク息ヲ休メ、最早時分丑ノ刻ノ末成ニ、丹波守本
丸ヨリ禁ヘ望ミ、大音声ヲ上ケテ申ケルハ、日向ノ御番大將方々
ニ可申事ノ候、昨日迄ハ伊東殿ヲ主君トシ、仰キ奉レトモ、我等
身ニ於テ、無情次第、遺恨深重ニ存候、今日ヨリシテ島津殿ヲ奉
頼、此本丸ニ薩戸ノ衆ヲ三百人忍ヒ上セテ候、高原ヨリハ數千騎
支ヘ来リ候間、方々先御聞候ヘ、此程ノナシミニ、斯中候ト云モ
不果、時ヲ動ト上ケレハ、野類ノ大勢モ時ヲ合セテ、動ト作レハ、
天地モ響キ、城内モ動キ渡ル、大日向入番ノ人々、暫シハ東西靜
テ音モセス、如何ト聞処ニ、動ト動スル声シケルカ、帶取者ハ刀
ヲ不取、弓取者ハ矢ヲ不取、鎗・長刀ヲモ不取敢、親ハ子ヲ忘レ、
子ハ親ヲ忘レ、下ハ上ヲ不知、我先ニトソ落行ケル、繞テ後ヨリ
ハ追掛ル、少々返シ合セテ打死スルモアリ、戸崎ノ渡リニテハ、
過半道具ヲ捨テソ落行ケル、薩戸方ヨリハ追打程ニ、紙屋迄コソ
追詰タリ、軍兵トモツカレタリ、今ハ長追スヘカラスト、御下知
ニ任セテ引返ス、伊東方ノ有様哀レトモアサマシトモ、可云様ナ
カリケリ、其翌日、

兵庫頭忠平公打入玉ヘハ、福永八百計ノ勢ニテ、上下懸懸ニ拵ヘ
少サ刀ヲ差俣ニ、馬上ニテ来リケルカ、野尻ノ原ニテ十字ノ御
旗ヲ見テ、馬ヨリ飛テ下リ、郎等供ノ者ヲハ遠ク退ケテ、吾身一
人道ノ側ニ跪踞マル、
忠平公御覽シテ、御言葉掛リケレハ、祝着シテソ見ヘニケル、即

野尻ニ着玉フ、然ルニ

修理大夫義久公ハ、大隅正八幡宮へ御參詣ノ折節、同十一月六日ニ、福永手替仕タル由ヲ申來ナリ、

義久公是即正八幡ノ御加護也ト、不斜喜ヒ玉ヒ、社頭ニ參リ礼拜ヲ奉リ、同七日ニ打立玉フ、曾於郡ヲ打過キ、霧島山ヲ越ントテ、六所権現伏拜ミ、實ニ頼母シキ悲願ヤト、其日ハ花堂ニコソ着玉ヒ、暫クカシニコニマシノクテ、御吉左右ヲ待玉フ、去程ニ、飢肥口ハ野村カ一黨依謀叛、下大隅・祿・肝付・浪志・福島勢、飢肥ヲサシテ發向ス、飢肥殿モ忍兼テ、佐土原サシテソ落ラレケル、隅州ノ勢ハ、夫ヨリ郷ノ原越ヲシテ、曾井・清竹・宮崎へ打入、野村但馬守へ取合ヒ、土民ノ家ヲ放火シテ財産ヲ奪ヒトリ、方々へ兵烟ヲ焼立レハ、散位殿ヲ始トシテ、門葉ノ人々己方積惡ヲモ不辨、是ハユメカヤ現カヤ、如何國モ成行ヘキヤトテ、驚クコト無限、野尻口ヨリモ敵數万騎寄來由聞ヘケレハ、散位殿モ佐土原ニ留リモ不敵、住馴シ古郷ノ館ヲ立別レ、早屋形ヲ出玉ヘハ、附徒フ士以下モ心細クソ思ヒニケル、財部ハ野村肥前守カ地頭ノ所也、重恩ヲ與ヘ、日來不便ニセシ者ノコトナレハ、頼ムニ異儀アラシ、彼ニ暫ク居玉ヒテ、世ノ中ヲモ伺ヒ見ント思ヒ、無隔頼玉ヒシニ、高城・財部ハ野心ノ者ノ一家ナレハ、城内ニ入モセス、結句押テ御入候ハ、乍恐矢ヲ參センナト、イヘハ、是ヲモ頼ムカツキ、頼ム木陰ニ雨ノタマラン風情シテ、淺マシカリシ形勢ナリ、夫ヨリ國中何クニ行テカ、暫シ徘徊シ方モ有ト、アナタコナタト思ヒ玉ヘトモ、何クトテモ人ノ心疑シケレハ、頼依ルヘキ方モナシ、今時ノ習ニハ、年來トテモ頼マレス、如何スヘキトテ、忙然トシテ案シ煩タル計也、サラハ美々細島ニカ、ツテ、船ニテ

豊後ノ府内カ土佐ノ方ニ落ユキテ、浮世ノ程ヲシハジ見ント被仰ケレトモ、乱國ト成行ハ、船ノ白由ヲ思フ任セニヨモナラシ、世ノ成行ニ順ヘハ、昨日迄モ今日迄モ、千世カケテ替ラシト思ヒシ者モ、今ハ早ヤ敵ニコソ従フラメ、疾々何方ヘモ忍ハセ玉ヘト云ヘハ、夫ヨリ横道ニ蹈入タモフ、是迄付添タル士共モ、今ノ有サマ見ルニ付テモ、行末迄モ覺束ナシ、或ハ親ヤ妻子ノ成果ヲ見定テ、後日參ント云者モアリ、空ヲ目ツカイシテ跡ニ留ル者モアリ、色々ノ分別出來テ相留リケル程ニ、僅ニ二三十人ニ成ラレケル、本道ハナラスシテ、野原ノ細道ヨリタトル、涙ト共ニ、ヤフク、穂北ニコソ着レケル、地頭職中倉勘解由左衛門ハ忠信アル士ニテ、己カ亭ニ請シ入、三日ハ逗留アリ、心静ニ支度シ玉ヘハ、自ラモ御供仕ント申ケル処ニ、隅薩兩國ノ軍勢數千騎國中へ乱入、在々所々ニ發向シテ、往々ニ火ヲ上レハ、散位殿ト、心モ不留、俄ニ衣物ヲ破テ袋ニ縫ヒ、金ヲ納メテ、此迄モ付添タル者共ナレハ非別儀ト、三十人ノ者共頸ニ掛サセ、或ハ膚ニ入サセ、二日前ニ穂北山ヘソ入レケル、上端出河ヲ志シ、鬼士ノ御門ニ出玉フ、伊東飢肥ノ四郎ノ妻年十六ニテ有シカ、イツ習ハセ玉ハン旅ノ道、サカシキ山ヲ歩行、ハタシニテ凌セ玉ヘハ、足腫イタミ、進退叶玉ハス、山中ニソ臥サレケル、散位殿ヲ始トシテ、女房達其外供ノ人々、皆袂ヲ顔ニ押アテ、涙ヲ流サヌ者ハナシ、只世ノ常ノ旅タニモ、旅路トナレハ心ウキニ、主人ノ今ノ有様、或ハ故郷ノ別ト云、或ハ親子ノ分レ、親族ノ中ヲタテ思ヒ過セル方モナク、行末迄モイツカ又古郷へ立皈ンコトモ定メナシ、是ニ付テモ、野村・福永カ行末不見シテ、若シヤ果ナント悲ミ焦レ、泣ヨリ外ソナキ、兎角シテ行玉フ程ニ、高知穂山ヲ出ラレタレハ、金袋ヲ付タル者

トモ、爰ニ入彼ニ入、或ハ足ヲ痛レテ後ル、者モアリ、ヤフク上下八人トナリ、六日ニ豊後ニコソ出ラレケル、爰ニ野村・福永カ謀反ノ起リヲ聞ニ、野村但馬守カ妹ニ優ナル者アリ、修理太夫義祐ノ妾ニ召置レテ、御福園ト申ケル処ニ、伊東大炊介土佐一条殿ノ姫ヲ乞取、義祐ノ内室ニ備ヘケル、此土佐ノ一条ノ姫ハ、妙花寺ノ閑白教房公ノ四代、権中納言兼定卿ノ姫ナリ、土佐ノ國士ニテ御座セハ、彼國ニテ設玉フ姫也、此姫迎玉ハシ以前、御福園暇ヲ賜テ、親ノ所ニ送ラレケル、土佐ノ君聞召、猶モ殘ル心ヤアラント、嫉妬深ク色々謀ヲナシ、御福園ヲ捕ヘテ由ナキ死ヲソ行ヒケル、野村一黨縁屬等ニ至ル迄、ウタテシキ事ニ思ヒケル、大炊殿モ老少不定ノ変ナレハ、散位殿ニ先立テ隠レサセラル、左レハ此家モ末ニ成ケルヤ、義祐誓願ノ事アツテ、岩崎ノ稻荷ニ一七日參籠アリシカ、其願成就モセスシテ、即社頭ニテ死セラレケル、土佐ノ姫ニ二人ノ若一人ノ姫ヲ儲ケ、三人ノ母上ニテ有ケレハ、弥氣任ニソ驕ラレケル、大炊介若達ノ守ニテアレハ、是又執權双ビナクシテ、此方サマノ人ノ權威ニハ、肩ヲ双ヘ難クソ見ヘニケル、如此ナレハ、後室ニ大炊介參リ申サルナト云、虚ヤラ實キヲ知ラ子トモ、福園ヲ罪科ノ道モコソアレ、情ナキ御暖也、結局我身ハ、今又如此御振舞ト、野村一族憤憤ヲ含メハ、土佐ノ君大炊介カ方トハ打トケズ、上ハヨケレトモ底ハ腹悪クソ思ヒケル、夫ヨリ思内ニアレハ色外ニ見ハルト、迷懷見ユレハ、三位殿前ヘモ不快気色ヲ取違コトアレハ、是ヨリ伊東ノ家ヲ非ニソ見ラレケル、讒人國ヲ乱セハ、嫉婦ハ家ヲ破ルト云コト實也、福永モ殊ナル寵臣ナル故ニ、境目ノ城代モ預ル程ノ人ナレトモ、如何ナル天广ノ所為ヤラン、薩戸方ヨリカラクリ状トテ書テ落シケルニ、夫

ヨリ勘気者アリケルヲ申開タレ共、其胸ヲ思ヒ拂サレス、其上福永カ子松千代丸十三ニ成ケルヲ元服サセントテ、両度五六十日、佐土原ヘ參リ逗留ストイヘトモ、赦免ナク面目ヲ失也、散位殿境目ヲ預ル程ナラハ、此行ハ不義ノ至也、夫モ己レ積悪ノ報カヤトソ申ケル、丹波守モ無ニ心通ハ申開タレトモ、入道殿ノ奥意モイカ、シクヤ思ヒケン、此難ヲ遁ン為、斯ハ思立ヌラントソ申ケル、去程ニ、大隅・薩戸ノ軍勢乱入テ、悉ク発向スレハ、野村・福永カ一族等出頭シテ、何事モ此人タノ云成シ正ニナレハ、昨日迄モ肩ヲ双ヘシ士共、倒伏恐怖スル也、去レハ、彼者トモヨリ、彼ハ伊東カ為ニハ何也、散位殿為ニハ何也、是ヲ助ケ置ハ、薩戸ノ為ニ仇ナラント云テ、彼コニ掛付、此ニ押付、腹ヲ切ラセ打果セハ、耻ヲシラン奴原トモ、是ハ野村カ一家ノ目カケノ者、是ハ福永カ目掛ノ者トテ、仮主ニ頼マス者ソナキ、散位殿世ニ有ル時ハ、御恩山ノ如ク蒙タル者幾千人モ有ケレトモ、貪祿妻子ヲ養フト云コト計リヲ知テ、士ノ祿恩ヲ報スル道ヲ不知、誠ニ忠臣ハ國ノ危キニ見ハルト云コト是也、御恩深キ士ノ中ニ、伊東大炊介・木脇越前守・別府狩野介・中倉勘解由左衛門四人ハ、今一度散位殿ヲ本國ヘ入レ申サント思ヒケレハ、心怠ラス見ヘニケル、忠節望ノ地下人共、イカナルコトモカナ、忠ニ備ヘテ身ヲ立ント思フ折節ナレハ、耻ヲモシラン無道人共、野村・福永ニソ告知ス、則薩戸ノ執事平田美濃守入道・伊集院右衛門太夫・村田越前守有談合、狩野介ハ日州本城ノ川路ト云所ニテ、主従四人打タレタリ、木脇越前守ハ於福島、松浦筑前守使節ヲ承リ打越、父子共ニ生害アリ、子息ハ拾四歳ニ成ケルカ、容貌美ナル生レツキ、天晴器量ヤトテ、惜マス人ハナカリケリ、夫ヨリ兩人ハ忍陰レテ、伊東殿恩下ノ士

トモ、其方此方トカラクレトモ、身ヲ捨テ奉公セント云者ナシ、
義理ヲモシラン臆病奴原、何ノ用ニカ可立ト思ヒ、夫ヨリ方々カ
ラクルニ、サシテ恩ハナケレトモ、國ノ年來、家ノ年來ト云計リ
ノ數武者トモヲ驅催シ、二百余騎實納ノ城ヲモカラクリ付、石ノ
城ニ取籠、豊後ニ加勢ヲ乞タレトモ、加勢スヘキ由ハ有ケレトモ、
未タ勢モ見ヘス、俄ニ取入りタレハ、兵糧モナク、薩ノ大勢差
向由聞ヘケレハ、又其内ヨリ落失テ、二百余騎カ僅ニ成ニケリ、
頓テ薩ノ軍勢石ノ城ニ馳向フ、殘ル六十三騎ノ者トモ、偏ニ命
ヲ三位殿ニ奉ラント、思ヒ切テ戦ヒケレトモ、寄手大勢也、城内
ノ人々久數糧ニハナレ、腫脹テ見苦敷死骸ヲサラサンコトモ思ヘ
ハ、所詮益ナシ、乍去、甲斐ナク只下城ヲ乞、命ヲ生キ、豊後國
ヘ落行テ、今一度三位殿ノ御目ニ掛リ、又モヤ詮ニ可立ト、乞下
城ヲ、城ヲ下リ、竹ノ杖ニスカリテ、上場土河ヲ志テソ行ニケル
土河ニツキ、年頃ニ云ケル人々、難有ノ人ノ有サマヤト、暫シハ
留テ氣ヲ慰メナトシケルカ、勸解由左衛門土河ノ人ニ語リケルハ、
國ノ將タル人ハ人ヲ察見コト專也、散位殿世カ世ノ時ハ、我コソ
御身ニモ替リ、一口ノ防キ矢ヲモ射ント、勇者顔シテ厚キ恩ヲ慾
ニ貪リシ人々、今一人トシテ御用ニ立タル者ナシ、散位殿ヲ今一
度日向ヘ入タテマツルト思フ志ノ者モナシ、異國ヲ聞ニ、越ノ勾
踐ハ范蠡カ謀ヲ用ヒテ再ヒ故郷ニ皈リ、吳越ノ二國ヲ并セ、會稽
ノ耻ヲ雪ト云、又齊ノ襄公ノ子小白、鮑叔牙カ謀ヲ以、再ヒ父祖
ノ國ニ歸リ、有齊國、齊ノ桓公是也、臣ノ道ヲ尽ニハ、掛ル例モ
アリトキク、我愚俗ノ身トシテ、乍不及モ、今二度ト思ヘトモ、
力不及コトノ口惜サヨト、後ニハザレ物語ニナシ、高笑ニソセラ
レケル、誠ニ彼四人ハ、伊東ノ為ニハ、昔平相國清盛ノ士ニ、上

總五郎兵衛忠光・薩ノ平次家秀ニモ不劣勇士也、彼等トテモ主
ノ敵ヲ子ラヘトモ、運尽ヌレハ無力、家秀ハ被捕、可被助由有ケ
レトモ、水穀ヲタチテ、終ニ二十四日ト申ニ餓死シタリ、忠光ハ歸
レテ關東ニ下リシカ、鶴力岡ニテ梶原ニ見付ラレ、相模堅瀨ニテ
切レタリ、世ノ末ニ成ヌルホト、無下ナリシコトハナシ、大炊介
モ勸解由左衛門モ、心ハ猛ク思ヘトモ、羽ヌケ鳥ノ如クニテ、キ
ジノ御門ヲ立煩ヒ、兎角シテ豊後マテソ行ニケル、去程ニ、薩
ノ大軍打入テ、日向國中悉ク発向シテ相治リケレハ、地頭ヲ定ラ
ルヘシト、先佐土原ヲ中務太輔家久領掌玉ヘハ、阿縣ヲ土持彈正
忠本領ナレハトテ給ハル、八代ノ内廿町、忠人也トテ、紙屋ノ替
リニ米良通圓ニ玉ハル、其外地頭職ニハ、南郷五百町ヲ伊集院右
衛門太夫、飯肥ノ西方五百町ヲ本田因幡守、東方五百町ヲ上原長
門守、曾井ハ伊集院美作守、清竹ハ比志島宮内少輔、實納ハ伊地
知民部少輔、比知屋ハ伊尻伊賀守、三庄ハ吉利下總守、高城ハ山
田越前守、門川ハ吉田若狹守、財部ハ野村備中守、逆谷ハ奈良原
狩野介、六笠ハ平田將監、都郡ハ鎌田刑部左衛門、内山ハ鎌田出
雲守、紙屋ハ稻留新助、野尻ハ市來美作守、須木ノ米良ハ武功ア
ル者ナレハ、村尾右衛門兵衛暫ク見廻申セトテ被仰付、
御大將モ薩ノ如ク皈陣アル、伊東ノ入道ハ妻子トモ引具シテ、
ヤフ、豊後ヘ出、大友殿ヲソ被頼ケル、豊後梅川ノ内三十町、
馬飼領トシテ進セラル、アル時伊東被申ケルハ、今度思ノ外ニ島
津ニ國ヲ被押領、無念至極ニ存ル、日州ヲ宗麟ニ奉ル、大友ノ勢
ヲ差下候ハ、何ノ手隙モ不可入、其故ハ、我等ノ普代ノ國ニテ、
罷下候ハ、日州一國ノ者走參ヘシ、薩ノ勢少々罷居トイヘトモ、
地下人トモ心替候ハ、一支モ難忍覚候、早々日州下向ヲ奉頼由

ヲソ被申ケル、宗鱗如何ト思ヒ玉ヒケル処ニ、困甚・双六ノ相手ニ成ケル執政ノ鬼里下殿原、京・堺商人、朝夕御座ヲ興スル者トモカ、八千町御手裏ニ進ルコト御家ノ繁昌也、是ニ過タル喜ヒナシ、廻船商売利倍ニ、沙汰ヲスル様ニ口々ニ申ケル、伊東モ又、御承引ナキナラハ、土佐ノ様ニ参ラント云ハレケレハ、宗鱗、人ハ人コソ頼也、土佐ヘ渡ラレナハ、他國ノヲホヘモ如何也トテ、日向入ニソ定リケル、其翌年ノ冬ノ半ニ、打立テ日向ヘ下リ、無由モ打負テ、ヤフ、豊後ヘ販リ上リ、已ニ豊後モ危ケレハ、宗鱗モ後悔アレトモ詮モナシ、三位入道ハ面目ヲ失ヒ、肝付尼ヲ引具シテ、四國ノ様ニ打渡リ、夫ヨリ境ヘ上リ、一町幽ナル家ノ住居哀ナル形勢也、去レトモ、土ノ末コソ不知也、前右大臣信長公、北條氏政退治ニ関東御下向ノ時、秀吉公イマタ木下筑前守ト申セシカ、信長公ニ申入、参河國額田ノ御陣所ニテ御見参ニ入り、於此奉祿米百石賜リケル、其時ハ川崎駿河守老名トナリ、小姓トナリ、纒ニ主従七八人ノ鉢ナルカ、四國退治ノ折節、祿米三百石ニナリ、人数ヲ多ク語ヒテ九州御下向、薩入ノ御供シ、本領ナリトテ、日州宮崎ノ一郡賜テ、伊東ノ子孫殘レリ、飢肥殿ヲ修理亮トソ申ケル、散位入道モ、今ハ浮世ニヲハセ子ハ殘多ソ思ハレケル、舎兄ノ太夫義祐ノ息ニ、小吉・慶辰殿トテ二人御座ケルカ、修理亮ノ本復ト聞レケレハ、飢肥ヲ頼ミ下ラレケル、飢肥ニテハ、是コソ嫡々ニテ御座ハ、年來ノ者共伊東大炊介ヲ始トシテ、取立ント思フ者モ多カリケル処、修理介ニ告知スル者アリ、高麗入ノ折節、壹岐ノ島ニテ凶害トソ聞ヘケル、其節、大炊介其外志アル士共数拾人、飢肥ニテ打レケル、

惟新公御記曰、累年廻計策、天正五年丁丑十二月七日、伊東之

家臣福永丹波守企逆意、可何當家之由告來之間、馬廻纒三三騎召具、馳籠野尻之城、同九日推入綾、翌日伊東古城討入都於郡、哀哉、伊東入道楯籠本城防戦、俄之逆乱依國中騒動、軍兵一人不馳統、同十一日、戦防既尽、指豊後國浮落矣、予差向日州境成武功者十有五年之間、或勝或討負、及難儀事度々也、一々不記之、

擾乱記及世祿記曰、野尻ハ素ヨリ伊東要害ノ地ナレハ、福永丹後守ヲ以テ守ラシム、此時、伊東義祐暴虐其シク、福永不意ノ恨ヲフクム、野村モ又福永カ親戚ナレハ、同シク戈ヲ倒ニセント欲シ、此旨上原長門守ニ告ケレハ、長門守則軍士ヲ馳テ野尻ニ至ラシム、福永上原ト約ヲ堅フシケレ共、野尻ノ假主伊東大炊太夫其外数百之軍士、未嘗テ此事ヲ知ラス、夫レ故味方ノ軍士僅百余人ニテ野尻ヘ打入コト不叶、カ、ル処ニ、此日

忠平公一千ノ驍勇ヲ卒シ野尻ヘ押寄、野尻ノ城ヲ陥レ玉フ、実ニ天正五年丁丑十二月初七日也、翌早朝、薩隅之軍士鉞戟ヲ鳴シ突出シテ、戸崎ノ城ヲ攻テ、九日戸崎落城ス、同十日義久公六千余騎ヲ引卒シ、日向地ニ赴セ玉フ、伊東義祐ハ野尻・戸崎ノ陥ルコトヲ聞キ、甲冑ヲ着、自ラ太刀ヲ提テ、本城二人テ防ントセラレシカトモ、士卒共此間ノ積悪ニ各恨ミヲ含ム折節ナレハ、皆心々ニ落失テ、戦ルヘキ行モナク、十方ニクレ、止ラントスルニ一士モト、ム者ナク、遁レントスルニ従者一人モナシ、矢尽弦断テ、進退爰ニ究リシカハ、漸ク命計ヲ助テ、豊後國ヘソ落ラレケル、

同記曰、翌天正六年丁丑春、伊東カ家臣長倉勘解由左衛門尉ハ、収メ数百人ノ軍士ヲ、日州石城ニ籠リ

太守二仇ヲ成ケレハ、孟秋初六日^{丙辰}、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟、數千人ノ軍士ヲ卒シ石城へ押寄ル、前面ノ大川逆浪ヲアケ、石ヲ轉シテ流ケレハ、船ヲ渡スヘキ様モナク、筏ヲ乘ヘキ様モナシ、諸軍只忙然トシテ扣居タリケルニ、何ツ迄城ヲ守リ居テモ詮ナシ、只徒チ渡リニセヨト、云程コソアレ、諸勢一同二甲ヲ脱キ、兵具ヲ手々ニ持テ、逆巻水ニセキ入、川ハ浅キソ、皆渡レト、手ヲ取組テ渡シケルニ、案ナラス川モ浅カリシカハ、直ニ石城へ取附門壁ヲ打破リ、乘機闖ヒケルニ、敵數十人打取ケル、去レトモ、味方ニ戦死ノ者ハ纔ニ五六人ニ不過、圖書頭忠長ハ左ノ臂ニ矢疵ヲ負レケレトモ、物ノ數トモセス、驅廻々々戦テ、姑ク息ヲ休メラル、此石城ハ鉄石モ透リ難キ城ナレハ、易キヲ見テハ進ミ、難キヲ見テハ退クハ軍ノ習也、其徒ニ與テ覆取ニ至ンヨリハ、不如唯全師センニハト、姑ク引退ク、善戦者不必進而退又進也ト、古ヨリ傳シ事ナレハ、諸勢一同ニ佐土原ノ地ニ引タリケル、其後、右馬頭征久ヲ大將トシテ、伊集院右衛門太夫忠棟・平田美濃守光宗・上井伊勢守寛兼、此人々ヲ副將トシテ、重テ石城ヘソ押寄ル、大勢大川ヲ渡ヘキ様ナケレハ、忠棟下知シテ大木ヲ切テ川底ニ埋メ、大竹ヲ以テ浮橋ヲ掛双ヘタレハ、大勢難ナク川ヲ渡シ、陣ヲ三ヶ所ニ構ヘ、石城ヲソ囲ミケル、角テ、昼夜トモナク鉄炮ヲ放チ、羽矢ヲ飛ス、雷雨ノ降カ如シ、雷電天地ヲ震シケレハ、城内終ニハ糧ツキ水絶テ、及餓死者不知其數、長倉可戦術ナク、味方ノ陣ヘ和睦ヲ頼ニ乞ケレハ、諸將此有サマヲ見、却テ哀ヲ催シ、則其困ミヲ解キ、酒食ヲ送り糧ヲ遣シ、長倉ヲ豊後國ヘ送ラレシカハ、武士ノ志優シクコソ覚ケル、^{云々}

長友氏記曰、伊東殿ヨリ福永・野村へ逆心カノ由申サル、兩人申候ハ、首尾ナキコトヲ仰掛ラレ候物哉、於其義ハ薩方可仕ト、番ノモノ拂出、薩方ヘ味方ヲ申ケル、依之、敵ノ面ヲモ不見、天正五年^{丁丑}十二月七日ニ、佐土原ノ城ヲハツシ、東光寺ノ山伏ヲ以テ高鍋ヲ頼マレシカトモ、高鍋ノ地頭落合心替シテ、使ノ山伏ヲ打果シ、手切イタシ候、其時、伊東殿ハ甲斐ナク、平打鞍ヨリ穗北へ落行一宿シ、三納平野へ退キ、米良山ヨリ肥後へ可出ト、申サレシ事、

一長倉勸解由左衛門申候ハ、米良山ヨリ肥後へ御出候ハ、高城ノ野村石河内ニ差上リ、渡川口取切可申ト存候、拙子事石河内ニ參候^而、長友新六ヲ手ニ付番可仕候間、肥後ノヤフニ御退キ被成候得ト申候、伊東殿尤ニ思召候、勸解由左衛門ハ三納ヨリ立返リ、石河内へ參リ、長友新六へ談合イタシ、城ノ覚悟セシメ候事、

一伊東殿ハ、無程肥後ノ内屋邊ノ庄ニ着セラレ候事、
一島津殿ハ、日向一ヶ國知行被成、石河内ノ者伊東方仕由相聞ヘ、人数ヲ催シ、石河内へ人数ヲ出シ城ヲ攻サセ玉ヘトモ、城兵能防キ候付テ落城不仕、依之、無支ノ暖サセラレ、城ハ薩方へ渡リ、長倉ハ案内者ヲ付ケ、渡リ川迄送ラル、勸解由ハ伊東殿へ參リ満足ノコト、
一伊東殿肥後へ被居候ヲ、阿蘇ノ神主聞テ、薩方へ敵セシ伊東殿ヲ召置候ハ、薩摩ヨリ押ヘラレ、國ヲ被取事一定ナリト、イソキ拂出候得ハ、伊東迷惑シ、豊後へ被退候、カクテ大友殿ヲ被頼候得ハ、野津ト云所ニ三百町ヲ、伊東殿へ大友殿ヨリ被進候、^{云々}

明
赫
記

卷之五

明赫記卷之五

大友侵日州高城敗北之事

是年天正六年^{戊寅}、大友新太郎義統^{後德左衛門尉}、老父左衛門尉義鎮入道宗麟六ヶ國ノ軍勢二十餘萬騎ヲ引卒シ、日州ヲ侵サント、先懸ノ古畷ニ屯ヲ成テ、十月廿日^辰、大友ノ大軍日州高城ニ押ヨセ、一度ニ噓ト時ノ声ヲ發シケレハ、大山モ崩レ天地モ覆スカト覺ケル角テ凶徒トモ城外ヲ放火シテ、村舍百餘軒一時カ中ニ灰燼ト成ニケル、去程ニ、山田新助有信ハ五百余騎ヲ率テ高城ノ幸ト成ケレハ、薩隅日ノ健將勇士一千余騎替ル々、其地ヲ固メ、中務太輔家久モ大將トシテ相籠ラル、相從フ人々ニハ、塩見主吉利下總守・都於郡鎌田出雲守政近・比志島紀伊守國貞等宛寛ノ人々、高城ヲシツカト固メ、旗ヲモ不立、門ヲモ不開、人ナキ鉢ニシテ靜リ反テ居タリシカハ、敵ハ是ヲ侵サントセシコト度々ナレトモ、城中鳴ヲ閑テ居タリケル、此ニ於テ、敵陣ハ行列ヲナシ、旌旗ヲツラ子弓矢ヲ備テ、自ラ兵ノ強キヲ頼ミ、日州ヲ一呑ニ吞テ一戦ニ蹴散サントヒシメキ渡リ、將士ノ騎射ニナライ、軍卒ノ步戦ニ熟スル者幾千人ト云數ヲ不知、シカノミナラス、秦青遏雲ノ曲ヲ唱ヘ、右軍曲水ノ盃ヲ揚ケルトソ見ヘシ、高城ノ將卒ハ其鋒ヲ碎キ其鏑ヲ歛メテ、連ハ天ニ有トソ待カケタリ、城ハ水少ク軍多ケレハ、城内水ニ渴キ難儀ニ及ヘリ、谷ニ出テ汲ントスルニ、敵兵昼夜透間モナク守居ケレハ、一人モ汲コト不叶、然トコロニ、不思議ヤ、古墻ノ辺ヨリ水少シ湧テ流出ケルカ、二日三日ニ至テ源強ク成テ潺湲タリ、味方軍勢千余人渴ヲ止ケルコソ、誠ニ天ノ恵私ナラン、
 交共ナリ、是ヲ以古ヲ思フニ、梁景泰禪師ハ惠州ノ寶積寺ニ居ラ

レケルニ、此境地無水シテ數百ノ渴ヲ止ヘキ様ナシ、然ルニ、禪師錫ヲ地ニ卓シケレハ、忽泉數尺流レ出ヌ、是偏ニ禪師ノ徳ニ依テ衆僧ノ渴ヲ止メテケリ、今高城ニ湧タル泉ハ軍士三千余人ノ渴ヲ止ラレシ、彼レハ一寺ノ僧、是ハ軍士三千人、

太守ノ徳ハ禪師ニ優リ玉フトソ申ケル、去程ニ、大友ハ伊東ノ殘卒ノ日州ニ在者ヲ陰ニ語ヒケレハ、其謀ニ與シ、三納村ノ賊徒トモ農民千余人ヲ驅集メ、河原田ノ馬場ヲ要害トシテ烽火ヲ拏ケ、國中ヲ乱サントシケル間、味方ノ軍勢則道場ヘ押寄セ、賊徒數百人カ首ヲ切カケサセ、其外校ヲ荷フ者アリ、囚ニ就者有、一百余人擲取テ、十月廿四日家久總書ヲシテ使至鹿兒島、^{私曰、此總書ハ、十月廿四日三納賊ヲ打采セリ也、家久ヨリ山走ヲ以申上ラル、此使十月廿六日、義久公曾於郡御立ノ御中途ニ參也、已鹿兒島ヘ至ルト本文ニ雖有之、左ニテハナシ、故ニ弁之、}陣ヲ破タル知謀ノ趣一々聞召、先キニ

義久公於鹿兒島近侍ノ面々ト謀リ玉フニ符節ヲ合タルカ如シ、翌廿五日

義久公數十万ノ軍衆ヲ引卒シ、旗ヲ日州ヘ揚サセ玉フ、其夜太守不思儀ノ夢想ヲ受玉フ、其句ニ

打敵ハ立田の川の紅葉かな

諸軍勢是ヲ聞テ、誠ニ御勝利ノ告ナラント、皆一同ニ敬ヲ成シケル、十一月朔日佐土原ヘ御着、此地城郭村舍數千戸有シカ共、數十萬ノ軍勢ナレハ、宿ヲ寄スヘキ様モナク、諸卒皆野陣ヲ張り、尺地モ不殘充滿シタリ、斯テ吉日ヲ撰ヒ大友ノ陣ニ掛ラント評定一決シケレ共、數日雨降續キ風烈シケレハ、天ノ晴ヲ今ヤ遲シト待タリケル、十一日^{或記曰、十一月十日ノ夜、忠平公計策ヲ以テ令歩卒六百人行敵陣而來、於此伏兵起發討殺五百余人、以松山陣放火去屯都於郡、佐土原大勢見此火烟、馳向高城稱陣於川原、而後、早野高良山坐王降參矣、同十一日早天、敵之三陣回志馳來、我軍及攻戰彼不認、敗北、而溺死於深淵者不知幾許、其餘散聚中、兵有向美々川奔者、追而擊之凡五百余、云々}

義久公ハ根白坂ノ上ニ御旗ヲ建テ、此日福鳥院ノ有司伊集院下野守久治數百人ノ軍兵ヲ卒シ、為先鋒直ニ大友ノ松山ノ陣ニ馳進シ、遲志振腕テ陣中ニ衝入ケレハ、敵畏テ一人モ掛合スル者ナシ、於此松山陣破ニケル、高城ノ囲モ一面解ケレハ、久治ハ城ニ入ニケル、此夜河原ノ陣ニ在ケル筑後ノ高良山ノ座主、松山陣ノ敗レタルヲ見テ、類ニ降ヲ乞ケレハ、比志島國貞ヲ河原ノ陣ニ遣サレ、和睦ノ儀ヲ定ラル、翌十二日ノ曙ニ、敵ノ三陣志ヲ合セ、味方ノ野外ニ屯シテ扣タル者ト雌雄ヲ決セント進來ル、其勢ヒ當リ難キニ似タリ、サレトモ、相戦フ処ニ敵ノ兵モノ數百人打取リ、又味方ニモ本田因幡守、北郷藏人戰死ス、サレハ、其後ニ有ル歩卒共驚走レハ、前ニアル軍士モ是ヲ畏ル、ニ依テ、大友ノ兵乘勝進スマシト追カケタリ、

忠平公ハ是時率數萬ノ軍衆ヲ、自ラ太刀ヲ横タヘ、大友カ軍ヲ一採ニ採マント競ヒ進ミ玉ヘハ、鳥津征久・同忠長モ數萬ノ勢ヲ牽ヒ、横ニ敵陣ニ突入、喚叫シテ戰フ天地ヲ覆スカ如シ、此地ニ洪測有テ、深キコトニ丈餘、横ハ三丈餘、縦ハ百余丈ト見ヘテ、平日歩行渡リスル者ナシ、於爰敵味方入乱レ入違ヘ鬪ケルニ、人馬驚汗シテ左右ニ可避之地ナシ、不得止大友カ諸軍深淵ニ追入ラレテ、人馬溺死スルモノ幾千万ト云數ヲ知ラス、其旌旗羽旄ノ水上ニ浮沈スル者、サナカラ紅葉ノ秋水ニ浮ヘル如クニテ、縹ニ義久公ノ夢中ニ得玉フ所ノ発句、其シルシトソ知ラレタリ、カ、リケレハ、大友カ軍馬ニ乗り、或ハ歩行ニテ美々川ニ向イ奔ルモアリ、或ハ棄甲曳兵、彥嶽ヲ望テ迓ルモアリ、數萬ノ味方遁スマシト追掛タリ、家久モ高城ノ門ヲ開キ切テ出、追伏々々敵ノ將士十余人ヲ討取ラル、大將如此ナレハ、味方十四萬ノ士一人トシテ

敵ヲ討サルハナシ、其勢ヒ乱雲ノ空ニ散ルカ如ク、敵軍ノ敗北ハ秋葉ノ風ニ飄ヘルカ如シ、彥嶽ニ向テ走ル敵ヲハ、山田新助追伐ニシテ悉ク討留ル、高城ト美々川ノ地相去五七八里、此間縦横人ナタレヲ築テ、屍ヲ草葉ノ邊ニ伏セ、骨ヲ砂礫ノ間ニ曝シケルコソ憂立ケレ、斯ル処ニ、誰トハシラス、大友カ大將ト見得テ、士卒七拾人ヲ率テ少モ不乱、行伍閑々ト逃去、味方ノ軍兵是ヲ見テ、遁スナ討テト追掛ケル、彼大將取テ反シ、決死シテ相鬪、サレドモ、僅ノ勢ニテ、即時ニ利ヲ失ヒ悉ク討死ス、味方ハ敵ノ首廿余切掛テ勇ミ進テ扣ヘケル、此時味方ニモ海江田主殿允・真方大炊助討死ス、大友ノ軍中ケ程戰功ヲ逞スルハ此大將一人也、後ニ其名ヲ聞ケハ、田原紹忍也ト、未其實否ヲ知ラス、嗚呼大友父子傲ヲ長シ欲ヲ縱ニシテ我日州ヲ侵シ、大ニ敗績シテ其災六ヶ國數千萬ノ衆ニ及ヘリ、同十三日

義久公敵陣ニ大旗ヲ揚ケ玉ヘハ、川田駿河守義朗凱歌ヲ唱ヘ、同廿八日乙亥御開陣也、

勝日記曰、豊後國ノ守護大友左金吾藤原ノ義鎮入道宗麟子息修理太夫義統、九州ノ執權振威於四方、代々執權ノ家也、就中、此義鎮ノ世ニ至テ殊ニ世ニ蔓リ、府内ヲ住城トシテ六ヶ國ノ大名小名相集リ、何事モ心ニ不任ト云々ナシ、物ノ盛衰、時ノ旺廢アル浮世ノ習ナレハ、家ノ傾覆ヤ来リケン、棠花余リナル処ニ、南蠻ノ黒船流盪シテ府内ニ到着ス、異流曼イルマント云和尚来リ、其方便説法他ニ異ニシテ、其上天竺・震旦ノ珍物錦繡・絞・綺羅・厚絹ノ類、數々ノ異獸ノ皮毛氈等ヲ持運テ進セケレハ、宗麟是ニ心ヲ寫サレ、改禪宗鬼里下宗ト成玉フ、國中ノ輩大凡此宗ニ不成者ナシ、普代ノ賢臣ハ是ヲ苦ニ病テ退ケハ、鬼里下ノ

時ニ誤ヘッロフ者ハ驕奢テ國政ヲ專トスレハ、國ノ誹謗言ヘッロ之不斷、大友第五代出羽守貞親ノ建立アリシ萬壽寺モ覺落テ壞レ果、諸社寺堂モ崩レ廢テ冷シカリシ有様也、斯ル処ニ、同國ノ船薩スサ坊ノ津ニ着津ス、其船ヲ豊後ノ如ク可被出ノ由雖被懇望、昔ヨリ異國ノ着船ハ於其津商賈スト云ヘリ、或ハ又、天下ノ命ナラハ不及是非義也トテ是ヲ不被許容セ、南蠻ノ人憤リ訴之ケルニ依テ、宗麟俄ニ薩スサ入ヲソ含マレケル、執事白杵安藝守・木下筑前守・吉岡入道宗觀申ケルハ、島津伊東ヲハ打滅シツ、豊後モ程近ケレハ、定メテ豊後入スヘシ、中國ニ着陣ヲ若薩スサヨリ入ト云ハ無由可引也、是本意ナルヘシ、日向ノ島津勢ヲ追拂ハシト案ノ内也、先ツ日州ヲ御知行有テ、其後兎モ角モ御計ヒ玉ヘト申ケレハ、散位入道モ、日向ハ我譜代相傳ノ國ニテ候ヘハ、君臣ノ好ミ未忘、大友家ノ大勢引具シテ我等罷下ルト申サハ、年來ノ者共定テ蜂起可申、日向ノ島津難忍覚候ト云レケレハ、宗麟モ義統モ左アルヘキ支ナリト同意アツテ、日向入ニシテ定リケル、廻文ヲ以テ諸郡ヘ觸渡サル、志賀入道道喜・戸槻入道道折・高橋入道紹運ハ肥後口ノ大將タルヘシ、肥後一國ノ諸侍此下知ニ可從、其外ハ日向ヘ出馬カトソ聞ヘケル、其中ニ肥前ノ國ノ龍造寺ハ數年大友家ヘ仕フト云ヘトモ、此高信肥前國ヲ一分ニ横領ス、其故ハ、彼先祖ハ賤カリケレ共、高信依器量國內ニ三十町ヲ賜リ、其餘ハ豊後ノ人々ヘ配分トナル、高信ト知ヲ以テ收斂シテ豊州ヘ相納ム、此節ヨリハ大友家ノ下知ニ不從、其地ヲ國人百姓等ニ取ラセ、國民モ率テ一國ニ隨付、貴之貴家ノ旧臣ノ如シ、豊後ヘモ不付、薩スサハヘモ屬セス、獨立シテコソ居ラレケル、去程ニ、天正六年一五七八十一月二日、豊後ノ府

内ヲ打立、大名小名心ニ入モ不入モ思ヒタ、ニ馳下ル、大將義統ニ相從ハ舍弟二男ノ田原民部太輔親家、三男同與左衛門尉親盛、侍大将ニハ武山紹哲・毛利九郎鎮範・毛利左馬介鎮實・田原入道紹仁・富饒左衛門大夫鎮運・蒲池武藏入道宗雪・息民部少輔鎮並・上蒲池備前守鑑廣・息六郎鑑光・田尻伯耆守鑑種・同常陸守種家・筑紫上野守弘門・秋月筑前守種實・高橋三郎左衛門尉種春・草野將監鑑員・久留目入道林慶・黒木因幡守益種・星野長門守・津口大膳亮・原田越前守種純・西牟田刑部丞・尾山修行良親・長野三河守・城井下野守・時枝美濃守・野中彈正忠・須美長門守・福島中務少・廣野日向守・宗像大宮司齊藤弥兵衛尉親利・田北兵部少・奴留湯美作守・小齊下野守鎮仲・毛利式部少元實・今井上總守・三善左近將監・千葉右衛門尉鎮胤・土居備中守鎮實・御臺太郎惟益・吉國少監物・高崎右近大夫・速水内膳正・野上彈正忠・匹田源左衛門尉・清田越前守・冬田三河守・一間田下總守・迫刑部丞・吉弘兵庫助・佐和新三郎・有家久兵衛尉・赤野新助・保並刑部少・柴田入道了哲・木槻勘助・俣野兵部少・鳥井萬左衛門・三池新左衛門・星井若狹守・朽網入道々益・息平六左衛門鎮光・戸瀬源三惟定・緒方正左衛門惟清・佐伯入道紹點・息三郎左衛門惟實・同弟新助鑑純・伯父掃部助惟忠・入田入道源道竜・橋岡ノ志賀入道々益・其子小二郎親宗・同新左衛門親元・白根ノ志賀入道々連・白杵ノ家督白杵少輔太郎鎮家・田原入道宗喜・執事ニハ志賀入道々喜・宗像掃部助鎮則・木城半大夫鎮方・白杵安藝二郎左衛門鎮直・志賀平次親紹ヲ始トシテ、其勢七萬餘騎、阿津佐ヲ越ル者モアリ、高崎ヨリ能賀ヲ通り船ニ乗テ下ル者アリ、思々ニ

攻下由聞ヘシカハ、日向ノ人々ハ高城ニ馳來ル、其時ノ地頭山田新助有治也、中務太輔家久此度大友ノ大軍攻下ル由聞ヘル、薩廣ノ大事不過是、見次ヘキ所也トテ馳籠ラレシカハ、日向ノ諸地頭宗徒ノ人々、思ヒ々、二籠リケル、地頭ニハ吉利下総守季久・比志島紀伊守國貞・伊集院伊賀守・吉田若狭守・阿蘇ノ主土持彈正忠綱實、其外日置周防介・松浦筑前守・二階堂安房介、日向衆ニ福永丹後守・野村監介後越ナト、武功アル者共數十人相籠ル、都合三千余騎トソ記シケル、縦ヒ大友ノ猛勢寄來ルトモ、千騎カ一騎ニ成迄ハ武力ヲ盡シテ持コラヘ、薩廣大勢ヲ待テトテ、如何ニモ堅固ニ持レケル、豊後ノ大勢ヲ今ヤ明日ヤト待処ニ、阿蘇ノムシカヲ本陣トシテ、津野那實ニ篠陣ヲ往來ノ為ニトテ取連テ高城ニ近ツキ寄り、同十月十九日先陣三萬余騎押寄テ、惣陣野頸二陣、松山陣其外續小陣ヲ付、明ル廿日卯刻大軍高城ニ押寄セ、時ヲ襲ト上ケレハ、天地モ響キ城モ崩破ルヘキトソ覺ヘケル、外垣外垂ヲ引破リ、下拵ヒヲ焼拂ヒ、本丸計ニ成ニケリ、互ニ敵モ慈モ愛ヲ専度ト防キ戦フ程ニ、洪志ノ住人間世田刑部左衛門・有川備前守・川野助七ナト云者外垂ニ出テ防キ戦ヒケルカ、即打死シタリケリ、本田次郎左衛門・貴島雅樂介不臆防キケル所ヲ打連キ、矢庭ニ五六人迄射伏ラレ、皆ソコニテ死ニケル、其外手負死人多ケレハ、國中馳集ノ叟ナレハ、假名知レサルトソ聞ヘケル、城内ノ人々破ラレシト手ヲ碎キ戦ヘハ、手負死人多シテ、終ニ破レテ引退ク、高城モ外拵ヲ破ラレテ茫々ト成ケレハ、三ノ城戸ヲ限ニ堅メ、各利方カツテニ新カツテ手ヲ替押寄ル、鉄炮數千挺揃ヘテ打掛レト、矢先キ上リニ射ケル

ニヤ、城内ノ人々手負更ニナシ、城中ヨリハ調ヘ置タル鉄炮ニテ、近々トタメ付テ打ケレハ、寄手ハ手負死人數知レス、城戸口ヨリ陣ノ外ノ垂迄三町計リ、血村ヲナカシテ朱ニ染マヌ者ハナシ、又西ノ刻計ニ三ノ陣押寄テ廻リ、時ヲ吐ト上ケ城ノ内ヘ打掛ル、鉄炮岸ニ當リ、竹山林ニ當ル音聲ノ降カ如クニシテ、天地モ響キ動スレ共、城ノ内ハ其構ヘ堅クシタレハ、余リ手負モナシ、敵ハ多射殺サレ、臆シテヤ有ケン、次ノ日ハ寄ルコトナシ、慈モ競ヒ内場ノ往來モアレハ、鎌田出雲守都之郡ノ勢ニ百計相具シテ、高城ニコソ馳セ籠ル、城中ノ競ヒ申計ナシ、同廿二日川原表ヲ見ルニ、敵五十騎計リ討出テ薪ヲ取ラセケル、城ヨリ出テ追散シ、川ニ追入討ントスル所ニ、陣中ヨリ駈出し横掛ニ掛切ラントシケル程ニ、漸々城ノ内ニ引退タリ、夫ヨリ川原ヘ集リ居テ、明ル日ハ陣ヲ取堅メ、相垣ヲ結廻シ、内場ノ往來ヲ取塞ク、日州ノ者共ハ佐土原・都ノ郡ニ馳集リ、薩廣勢ヲ待タリケリ、左レハ豊後ノ人々、日向ヲ急度可退治ニモアラス、漸々シテヲノツカラ薩摩ノ大軍ヲ待付ントスル計ナリ、豊後ノ人々ノ体ヲ聞ニ、數年治マル國ナレハ、世拳テ花麗ヲ好ミ遊興ニ身ヲ染ミ、軍旅ニ趣ト云ヘトモ其心ニ忘ラレス、夜白酒宴ニ沈醉シ、武勇ノ道ヲ忘却シテ、鼓大鼓亂舞ニテ榮花ニ誇ル風情也、斯ル処ニ、樽一箇・菓子ノ臺ヲ持セテ、豊州ノ住人ニ志實勸六ト申者ニテ候、昔ヨリ諸侯國争ニ是ヲ頼ム、武士ノ弓矢ヲ取ハ習也、互ニ死生定ナシ、敵トナル人トテモ何カ恨候ヘシ、御大將ニ籠城ノ御究屈ヲ奉問ト云テ、是コソ贈ケル、次ノ日返礼セント思ハレケル折節、高城ノ地下人ニ永利助七ト云者、高城川ニ釣ヲ流シケルニ、大鱸ヲ數多釣上ケテ家久ニ奉之、

奇特成仕合ト、彼鱸一掛・樽一筒持セテ、家久ノ士上野半助・妹尾二助陣ニ望テ申ケルハ、昨日ノ御返礼申也トテ、城内ヨリモ使二人罷出テ候ト云ヘハ、又陣中ヨリ出合テ返酒ヲ受取、陣ト城トノ其間ニテ、又酒ヲ持出テ使ノ人々ニ酒ヲ進ム、妹尾二助ハ乱舞ヲ得タル者ナレハ、金鞘巻ノ大脇刀ヲ弓矢ノ脇ニ押マワシ、茜ノ銅腹ニ金ノ扇ヲ抜開キ、謠ヲアケテ舞タリケル、陣中ヨリモ、アツハレ舞タリヤトソ誉タリケル、家久モ是ヲ感セラル、然處ニ、河原ノ陣ヨリ敵小勢出テ慈ヲ偽引体ニ見ヘケル、此方ヨリモ出合互ニ矢軍シケル処ニ、敵會釈モ防キアハセテ、薩ノ衆ヘ物申サン、今日此口ノ番ノ者ニ候カ、矢誌ヲ進ラセント云モアヘス、能引テソ射タリケル、是ヲ見レハ、文ヲ書キ矢ニ押巻張付テソ射送ケル、是ヲ取テ大將ヘ見セ奉レハ、状ニ曰、今度任豊洲ノ催促ニ、不慮罷下候、近年大友之行跡蔑侍虐民暴政之至、旁以胸底雖含鬱憤、獨叛之力不足侍待時而已、傳承、御大將中務太輔殿御在城、天之與歎為愚家之幸也、吾等屬從二百余人奉憑萬事、可拔忠節之日也、誠惶謹言、又袖書、自然ノ事ノ有ラン時、笛ノ音トリヲ一ツ吹可申トソ書ニケル、筑後國ノ住星野長門守・川原山修行良親トソ書タリケル、先古左右ナリ、目出度トテ、大隅・薩ノ勢ヲ待処ニ、大將軍ニ、修理太夫義久公、同舍弟

兵庫頭忠平公・左衛門尉藏久・從弟右馬頭幸久・圖書頭忠長、一家ニ豊後守忠親・北郷入道一雲・柘山安藝守範久・佐多山城守忠孝・新納近江守忠武・川上上野守久隅・大野治部太輔・寺山四郎左衛門尉・桂常陸守、一郡一庄其外地頭職ノ人々ニハ、顯姓左馬介久虎・種子島左近太夫時高・祢寝右近太夫重武、伊

地知民部太輔重興・東郷弥左衛門尉重尚・邪答院二郎能重・入來院彈正忠重豊・肝付三郎兼則、加治木ノ肝付彈正忠兼連・菱刈民部太輔頼清・本田紀伊守親廣・同大炊太夫親重・數根中務丞頼繼・上井伊勢守兼長・比志島式部少輔國季・川田駿河守義朗・伊集院下野守・同右衛門兵衛尉・同名三河守・同名源助、鎌田筑前守・同又七郎・新納伊勢入道一慶・同右衛門尉・比志島美濃守・川上武藏守・新納越後守・川上備前守・同名左近將監・大田治部丞・大寺越前入道休角・同大炊介・新納十郎左衛門尉・川上三河守・市來備前守・伊地知備後守・宮原筑前守・鮫島土佐守・同又左衛門尉・猿渡大炊介・新納縫殿介・村田雅樂助・税所新助・吉田美作守・伊地知伯耆守・同又八・町田出羽守・本田下野守・鎌田尾張守・同刑部左衛門尉、執事平田美濃守・村田越前守・喜入撰津守・伊集院右衛門太夫忠棟ヲ先トシテ、其外地頭職ヲ欺ケ程ノ勇士七百余騎、

義久公打立玉フト云ヘハ、民以下ニ至迄、心有者ハ催促ナケルトモ勇ミアヘリ、三ヶ國ノ軍兵我不劣ト馳續ク程ニ、國內ノ事ナレハ、日向ニ馳集テ、佐土原・都之郡・富田・財部ニ合テ、都合其勢五六萬騎ニハ不過トソ申ケル、山林田畠ヲ不嫌陣屋ヲ打程ニ、四五ヶ國ノ勢ニモ不劣トソ見ヘニケル、出水ノ義虎ハ肥後口ナレハ、彼口ノ堅メトシテ參陣シ玉ハス、大口ニハ新納武藏守、肥後求ノ境目ナレハ出陣御免アリ、住番トソ聞ヘケル、去程ニ、

義久公佐土原ニ着玉ヒケル、其夜不思議ノ夢相アリ、何ソヤラ大ヒナル宮殿ノ艶ナル其内ニ、衣冠正シキ人ノ御座ニ

義久公祠候シ玉ヘハ、左ノ方ニ請シテ、其人ノ曰、

立田川ノ紅葉ナリ、ト詠シテ

義久公発句シ玉ヘト宣ヘハ、夢打覚メ、不思議ノ瑞相カナト思召、五文字ナカリケリ、
義久公聽テ讀玉フテ、打敵ハ立田ノ川ノ紅葉ナリ、ト十文字ニ成玉ヒ、川田駿河守ヲ召寄、奇特ナル瑞相ナリトテ、自ラ願書ヲ成シテ、國ノ宗廟氏神諸軍神ニ能祈誓申ヘシト、兵法ノ壇ニソ籠玉フ、此由ヲ

忠平公・歳久一門ノ人々ニ使シテ宣ヒケレハ、誠ニ慈ノ勝利無疑トソ喜ヒケル、去ハ隅薩兩國ノ勢着合タレトモ、敵モ慈モ軍ナレハ、其時刻ノ宜シカラシコトヲソ伺ハレケル、高城ノ往來モナク、無心本ソ思ヒ玉ヒケル、左レトモ、若キ足輕トモ、我不劣ト山潛ヲ心掛、或ハ山ヲ忍モアリ、或ハ川ヲ忍モアリ、又ハ敵ニ打交リ紛レ通ラントスルモアリ、無縁者ハ打殺サレ、或ハ川ニ追入ラレ、道具ヲ捨テ命計リ助ルモアリ、爰ニ鹿見島ノ住人ニ、否笠刑部少足輕數多伴ヒテ高城ヘ籠ラントシケルヲ、敵掛合テ打タントス、防キ戦ト云ヘトモ、終ニ打死シ玉ヒケル、義久公聞召、此山潛リタルコト、我ト自ラ進ムタニモ通得ル者ハ罕也、人ノ損ソコトハ治定ナリトテ、仰付ラル、コトモナシ、左レト通得ル者、御内ニハ六人

忠平公ノ内三人、家久内ニ四人通得テ、内場ノ事ヲ通シタリ、自夫勢分可有トテ、鎌田尾張守入道・新納伊勢入道・伊集院右衛門兵衛・川上三河守・上原長門守・伊集院美作守・奈良原狩野介、此等ノ人承リ所賦分ノ其勢、先ツ根白口ヘハ兵庫頭・右馬頭二萬余騎、中川原口ニハ左衛門尉、圖書頭一萬五千余騎、藤松ノ川原口ヘハ北郷入道一雲ノ手七千余騎、其外打込一萬余

騎ハ

義久公ノ御陣ヲソ守護シケル、兎角シテ時刻ヲ伺ケル程ニ、十一月ノ上旬ニ武功アル者共二三十人寄集、物語ニ事ヨセテ久峯ノ觀音堂ニ出合、小陣士軍ヲ談合ス、心掛タル若者共聞付々々寄程ニ、六七百人ニ成ニケリ、何ト是程ノ勢ニテ思切タランニ、一手立セサランヤ、其手立ノ様ハ、二三人モ川原陣ニ忍人、尾山ノ法印星野ニ取合談合シテ、此五六百人ノ者共カ川縁ノ山ニ付テ忍寄リ、烽火ヲ約シテ内ヨリ城ヲ開クヘシ、内外取合ヒ、寅ノ刻計ニ同志合ノ認シテ、白八巻ニ小幡・腰幣取付テ、向黒ニ切入テ、敵評義モセサル其内ニ、此ヤ彼ニテ打取追拂ヒ、垣引破リ高城ニ取合ハ、定テ味方ノ大軍馳續クヘシ、川原ノ陣ヲ焼拂ヒ、ヤカテ根白坂ヘ引上リ向陣ヲ取、陣士ヲ出シ敵ノ通路ヲ断切ラハ、慈ハ強ク敵ハ弱ク、夜崩シテ引ヘキカ、左ナクハ、降ヲ乞テ和談スルカ、別ノ事ハ候マシ、御家ハ目出度成ヘシト、評議一決シテ、伊地知伯耆守ヲ以テ申上ケレハ、
義久公年來ノ者トモナレハ、御家ヲ思ヒ輕身、去レトモ仕損スル事モヤアラント思召、暫ク返事シ煩ヒ玉ヒシカ、手立ノ様ヲ具ニ聞召テ、能武略可仕ト許サレケル、自夫、今日ヨ明日ヨトスル処ニ、

忠平公ヲ始トシテ、右馬頭・圖書頭・川上上野守・肝付彈正・伊集院右衛門兵衛・上井伊勢守・鎌田刑部左衛門・新納刑部太輔・上原長門守・伊集院美作守・奈良原狩野介ナト、地頭川上三河守高城ヘ打寄テ、武功アル者トモナレハ、伊地知丹後・逆瀬川奉膳兵衛・富山備中守、其辺ノ案内能存タレハ召出シ、境目ノ様体委々相尋、兵儀有テ伏兵ヲ企、十一月十日ノ夜ニ入ケ

レハ、雨ヲヤミモナク降ニケリ、時雨フルヲモ御佳例トテ、夜半ニコソ打出ラル、シカモ冬吹烈ク難堪折節ナレトモ、我ヨク、ト勇ミケル、此間切テ此方ト照シケリ、是ヲ見ル者伏拝ミ、我モ々、ト勇ミケル、去程ニ、奈貴ト陣ノ間ニ伏ヘシ、略次近キ処ナレハ、大勢ハ難成トテ百四五十騎忍セテ、受ノ大將ニ肝付弾正忠・新納刑部太輔・伊集院右衛門兵衛尉二千余騎、別府村ニ伏居タリ、懸手司ハ逆瀬川奉膳兵衛・富山備中・梶原隼人・伊地知丹後守、以上三百計ニテ待ケル処ニ、同十一日ノ午ノ上刻計リニ、豊後ニ通ル番販り案ノ内ニ通ケル、馬上三人以上、上下三百計通ケルヲ中ニ取込メ、吐ト闕ヲ作りカケケレハ、一人ハ馬早ニ遊延タリ、馬上二人以上七十三人打取テ、雜駄荷物ヲ追落シ、慈競ヒニ成ニケリ、敵陣ヨリ是ヲ見テ猛勢馳續ク程ニ、無勢ニテハ仕難キ軍ナレトモ、カナク受留テ一戦セント勇ム処ニ、其夜高城ニ山潜リヲ遣シ内通有ケレハ、家久日出ニ櫓ニ上リ是ヲ見テ、如何サマ内端ニ子細アラン、敵ハ大勢野頸ニツ、クソ、時ノ声ヲ上ケ陣ニカ、ル風情セヨト仰ケレハ、城中ヨリモ打出テ時ヲ作り其風情シケレハ、敵ツ、キ戻リ高城ニ押寄ントス、三池屋鋪ノ本口ニテ、山田比志島紀伊守・鎌田出雲守下知ヲナシテ防キケル、其外ノ軍兵、我モ我モト粉骨ヲ励シケル間、漸ク敵モ退キニケル、其場ニ福永丹後守・長谷場彌九郎打死ス、引ケル敵ノ間ハラナルヲ、陣ノ外垂マテ追入ケル、敵數百丁ノ鉄炮ヲ揃ヘテ打掛ル、夫ヨリ引退キケル程ニ、鎌田出雲守・日置越後介能鎧ヲ着能キ馬ニ乗ケレハ、アツハレ大將ト見テ、遁サシト打程ニ、色々會釈シテ城中ニ引入ケル、手負モ少々有ケレト、慈ノ勝利ナレハ事トセス、野頸ノ仕合如

何ト思フ処ニ、松山ヨリ豊州ノ宗徒ノ人々ニハ、今井上総守・毛利式部少輔・土肥備中守・赤野新助・三善左近將監・保並刑部少輔・小齋下野守・有家九兵衛尉・佐和新三郎・千葉右衛門尉ヲ大將トシテ千騎計馳出シ、不臆コソカ、リケリ、伏兵勢受留テ合戦セントスル所ニ、根白口・財部口ノ慈ノ勢高城田間ニ漫々ト打出、高城ヨリモ出合ヘハ、慈是ニ力ヲ得、カ、リニ掛ツテ散々ニ攻戦フ、豊洲ノ人々面モ不振戦ヘト、此場ヲモ切崩シ、其競ヒニ付入ルニ追入、間ノ垣ニ敵大勢居ケルヲ、味方モ猛勢ナリケレハ、追マクリ追拂ヒ、間ノ垣ヲ引破リ、番屋物見ヲ壞リカケ焼拂ヒ、高城ニ取合テ颯ト引テ、根白ヨリ川縁下リソ備タリ、各軍旁申計リソナカリケリ、夫ヨリ中書ヘ御喜ニ參者由々敷ソ見ヘニケル、敵陣ヨリ是ヲ見テカケ、レト、互ニ相討レテ差ル事モナシ、其日モ酉ノ刻ニナリケレハ、備ヲカヘテ川ヲ前ニアテ、根白ヨリ川縁下リ藤松ノ川下迄、六萬余騎九備ニ備タリ、其夜ハ轉々ニ篝火ケレハ、暗タル空ノ秋ノ夜ニ星ノ光ヲ見ルコトク森ク見ヘニケル、惣陣口河原、其往々ノ通路ニ五百人・三百人ノ外陣士出シ、用心稠數ソセラレケル、去程ニ、高城ヨリ河原ノ陣尾山ノ法印へ、前ノ約束如何ト仰ケレハ、大ニ喜ヒ、頓テ使ニ列テソ參シケル、夜中ノ事ナレハ、焼拂ヒタル下拵ニ紫扉ノ疊ニ三帖敷双ヘテソ是ニ入、五十人ノ番ヲ付、篝火ヲテソ置レケル、然処ニ、陣大將白杵少輔・佐伯新助・田原入道紹仁之使僧トテ城籠ニ來リ申ケルハ、大友ノ執事共ニ談合仕、明日ヨリ矢ヲ留、御陣ニ參リ和平ノ調法致スヘシ、口ヲ明テ賜リ度候ト申ケル、山田新助承リ、無事ノ調法ト被仰尤可然事トモ也、當城ノ下知ヲ仕コソ幸也、乍去、境目ノ外陣

士ヲ勢々ト出シ候ヘハ、案内存知タリ、津野奈貫迄モ行廻ルト
承ル御心底ノ程如何ニ存知候ヘトモ、和談致ヨリシテハ、城麓
ヲ通シマイラセ、薩陣ノ坂口迄案内付申サン、但多人數ハ叶
マシ、ト申ケレハ、上下拾六人城麓ニソ參シケル、暫ク案内ノ
者トモノ仕合スル、其間星野長門守ノ所ニコソ請シ置、野村ノ
監物伊東滅シテ、其後ハ傍輩共ヲ郎等ニ引列ケルカ、四五十人
計ニテ高城ニ籠リタリ、伊東滅ノ根元ヲ豊洲ノ人々聞傳ヘルコ
トナレハ、陣中ヨリノ言聞ヒニ、義理ナシノ監物未堅固ニ有ケ
ルカ、義理ナシノ監物ト日々ニ呼リケルヲ無念ニヤ思ヒケン、
其夜銀杏ノ立物ノ甲ヲ臺ニ受サセテ、花解ナル鎧ニ袖引付テ、
箒手佩楯迄仕合せ、三尺余ノ金張鞆、二尺計ノ張鞆一腰揃ヘテ、
帶マ、ニ武者杖ヲツキ、郎等拾余人引具シ、豊後ノ使ノ其座ニ
出、膝ニ草摺ユリカケ、動ト居テ、此程御陣ヨリモ呼ハレシ義
理ナシノ監物ト申者ニテ候、御覽アルヘシト申ケル、使者時ノ
會釈ニ、サスカノ武士ト承リ及タル監物殿ニテ候ヤ、御目ニ掛
ルコソ幸也トソ申ケル、監物、カタ、御免候ヘ、明日ハ必戦
場ニテ花ヤカニ申承シ、ト云俣ニ卓立シケルハ、物々敷ソ見ヘ
ニケル、頓テ案内者出ケレハ、陣ヘ送り、坂口ヨリ引返ス、明
ル日ハ引陣ニ成ソト夜ヲ待明ス処ニ、謀ナレハ、左ハナクテ、
津野奈貫ノ勢迄陣ニクリ入、七萬余騎ヲ二手ニ分ケ、其曙ニ財
部口備ニ雲霞ノ如ク掛リケリ、一番備ヲ追拂ヒ、雜兵少々打取
リテ、二番備ヲモ切崩ス、爰ヲ堅メタル飢肥ノ地頭本出因幡守、
鹿兒島住人廻三玉坊、相續ク兵ニ朝倉常陸守・鯨島与助・平原
隼人助、北郷・雲ノ郎等ニ、三侯ノ地頭北郷藏人一足モ不退戦
シカ、即ソコニ打レタリ、因幡守カ子ニ本田刑部丞、弟ノ三郎

五郎痛手負、郎等共ニ漸ク助ケ退ラレケル、敵ハ競ヒ、薩陣ノ
勢ヲ捲リ立、高城川ノ中瀬迄攻渡ス、慈ニ平出美濃守・同新三
郎・同二郎三郎・上原長門守・同太郎五郎・同名勘解由左衛
門・同名内蔵介・奈良原狩野介・宮原越中守、其外軍兵五百騎
計、差忍ハ防キ戦フトイヘトモ、無勢ナレハ危ク見ユル所ニ、
義久公ノ御勢ニ、左衛門尉・圖書頭ノ手勢、以上三萬餘騎、築
瀬ヲ渡シ散々ニ攻戦フ、北郷一雲川下ヨリ坂口上リ、一萬騎ニ
テ切テ入、兵庫頭・右馬頭ノ御勢二萬餘騎、横合ニ面モ不振切
テ入、前後左右ニ相當リ、四方八方ヘ戦ヘハ、今迄勝ニ乘タル
豊後ノ勢ヒタヒタト崩レ行ク、慈ノ勢聞ヲ吐ト作リカケ、高城
川ヲ関渡シ、攻立々々戦ヘハ、半ハ衣張坂ヲ敗軍ス、半ハ高城
田間ノ北ノ方ニ、深サ一二丈モアリケル淵々タル古川ニケル、
ト追込ハ、人カ人ニ弥重テ淵モ平地ト成ニケリ、下成者ハ水
ニ溺レ踏殺サレ、上成者ハ同士具足ニ貫リ、一村々々追コマレ
テ、兎ヤ角ヤトスル所ヲ、或ハ弓鉄炮ヲ放テ射殺シ、或ハ月劔
鎌ニテ引寄テ、頭ヲ取物モアリ、誠ニ冥官阿鼻地獄ノ消息モ斯
コソアラント思ヘル計リナリ、左レトモ、サキノ戦ニ、鹿兒島
ノ住人ニ鎌田大膳亮ト名乗テ、戦死比類ナカリケリ、中務太輔
家久ハ、高城勢ヲ相具シテ惣陣ヘ切テ掛リ、此陣ヲモ即追崩シ、
薩陣ノ味方勢ニ取合ヒ、競ヒテ成テ追掛ル、打洩レタル豊後勢、
高城原ヲ落行ヲ、此ヤカシコニ追詰テ、五十騎三十騎五騎十騎
目次ニコソ討レケル、靡立タル勢ナレハ、大軍一同ニ取テ返ス
ヘキヨウモナシ、敵返ラントスルモ、各々ニシテ踏止ントスレ
トモ、負軍ノ習ニヤ、臆病風ノ立ケレハ、豊後ノ盛成シ時ハ鬼
神ノ様ニ云レシ者モ甲斐ナク、討ル、者ノミ也、斯ケル処ニ、

豊後譜代ノ大名武田入道紹哲・息九郎鎮範・柴田入道了哲・古岡監物・鳥居萬左衛門・同弟之隼人之助・木槻勘助・梶井若狹助・俣野兵部少・赤野新助・臼杵少輔太郎鎮家・同左京亮則景・同早左衛門尉・佐伯入道紹點・息二郎左衛門尉維實・同弟新助鑑純・同伯父掃部介惟忠・筑後ノ住人柳川ノ主蒲地入道宗雪ヲ先トシテ、其勢以上三百余人、究竟ノ者トモ大膚拔ニハタ拔テ、道具モ不持指刀拔持テ、曳ヤ声ニテ一面ニ、面モ不振切テカ、ル、奈費ノ原ニテ差忍ヘ、梅北宮内左衛門・市來軍助・海江田主殿助・曲田伯耆守・野村監助・右松右馬丞ナトヲ始トシテ、各合戦スト云ヘトモ、各忠切タル敵ナレハ、慈ノ勢ヲ捲リ立テ追崩ス、市來軍介・曲田伯耆・海江田主殿介、佐土原ニ大山ノ何某、戰場ヲ不去シテ太刀下ニ討レタリ、左レトモ、豊後方ハ敗軍ニナリ、薩戸競ヒナリケレハ、返シ合々ニ大勢馳重テ戦フ程ニ、十余人ノ大將以下皆悉ク打死ス、此十余人ノ人々ハ、此度ノ日向下リ心ニ不入思ケレト、催促迄ニ下リ、實ニハノ時ハ為我君耻ト思ヘハ、皆返合セテ打死ス、臣トシテ忠ヲ遂ル士トモ、義理ナル哉トソ申ケル、此比執権ナリシ鬼里下トモ、能馬ニハ乗タリ、足ニ任セテ遊ノヒ、縣ノ武志實ヨリ舟ニ乗モアリ、梓越ヲコヘテ落行モアリ、田原紹忍ハ夢ノ告モヤアリケン、陣ニ掛ラス後ニ扣ヘテアリケルカ、早ク山ニソ入ニケル、十余人ノ人々ノ討レシヨリハ、立掃ラントスル者モナク、暴風^{フハキ}ニ偃ス叢カ、只一方ニ落行ヲ五人十人、隙モナク連テ討レケレハ、本道ニハ不成シテ、野方ニ付テ山ニ上ル者モ、百騎二百騎或五六十騎村々ニ退キケレトモ、敵モ慈モ疲レ果、山ニ向テ追ハント思フ人ハナシ、心安キニ任セツ、平地ヲ目次ニ討ニケ

リ、サスカ味方モ大軍ナリ、高城陣ヨリ美々川歩渡ノ縁迄七里ケ原ヲ打ケレハ、豊後ノ七萬余騎モ三分ニシテ二ツハ生キシトソ申ケル、已ニ其日モ酉ノ刻ニ成ケレハ、美々ノ常住坊ヨリ津野ノ原中ヲ、堅横ニ隅薩ノ軍勢篠陣ヲ取タレハ、尺地モナクソミヘニケル、其夜各陣取人々ノ有様、手負ノ看病スルモアリ、打死スル仮屋ニハ憂ヲ含ム処モアリ、或ハ手柄ノ程ヲワメイテ語ルモノモアリ、或ハ資財雜具ヲ拾ヒ得テ悦ヒ合フ者モアリ、人ノ禍福ノ無定コソ面白ケレ、自夫若キ者共、雨ハ頻ニ降ケレトモ、求舟川ヲ渡リ、退タル跡ニ打入見レハ、兵糧故實酒肴皆打捨置ニケリ、幸也、此ノ程ノ窮屈ノヘントテ、何恐ル、事モナク、酒宴シテソハメキケル、聞之テ、聞付々々渡ホトニ、夜中ニ四五百人モ渡シケル、御下知ハナケレトモ、卒忽ナル者共カ、虫賀ニ遊集タル者討ントテ、六里ノ間其朝ノ間ニ馳行ミレハ、虫賀ハ舟津オレハ、一人モナシ、皆阿津佐ノ如ク落行ケリ、大友大陣ヲ思立ル、事ナレハ、兵糧倉若干造置レケルヲ先懸シタル三十余人ノ者トモ、押領シテ得クニ付テソ居タリケル、後陣ノ者兵糧ヲ乞ケレトモ、與ヘスシテ皆人獨取ヌ、弓矢ニ道徳カマユル惡ヒ奴原カナト云ケルカ、如何ナル者カシタリケン、頃ハ十一月ノ事ナレハ、北風強ク吹タリ、丑ノ刻計ニ風表ニ火ヲ放チタリケレハ、兵糧資財悉ク煙塵ト燒成シ、一時ニ馬場小路迄燒塞リ、漸々身スカラ遁レ出、後ニハ吐下笑テ打列テソ退ニケル、其日大將宗徒ノ人々皆美々川ヲ打渡シ、日知屋・角川・塩見・縣ニ打入、山家・坪屋ノ両城迄召取テ、縣ハ本領ナレハ、土持彈正忠ニ遣サル、去程ニ、中務太輔家久其翌日高城ヘ打掃リ、此度大軍ニ討勝籠城ノ運ヲ開キ、御内ノ人々皆召

出シ軍勞ノ一札ヲ述ラレ、次日ハ佐土原ニコソ着レケル、由々敷ハ申計ナシ、釈迦堂ノ前ヨリ馬ヲ下リ、

義久公ノ御館ニ参リ御悅ヲ申シ、宿所へ帰り玉へハ、悦ヒニ参ル者上下益キアヘルナリ、其次日ハ

太守ノ御館へ各参上アリテ、御三獻過碗飯之饌へ、着座ノ人々ニハ、

兵庫頭忠平公・左衛門尉歳久・中務太輔家久・右馬頭幸久・圖書頭忠長・豊後守久廣・北郷入道一雲、末座ニ伊集院右衛門太

夫・平田美濃守・村田越前守・喜入撰津守・鎌田尾張守、其外宗徒ノ人々皆参會シテ、酒杯數巡タレハ殆ト歌舞ニソ及ヒケル、

已ニ御通りニ成ケレハ、家久張限^{キハ}ニ下リサカリ、此度籠城ノ人々ヲ召出ス、山田新助・鎌田尾張守差寄御札ノ由一々述ラル、伊

集院九郎酌ニ立テ酒ヲソ進セケル、其次ニ中書、此度山瀝リ一人参リ候へハ内端ノ体ヲ承リ、城中千騎ノ競ヒヲナセリ、彼

者共抛身命其心掛莫大ノ勲功ニ候ト申サレケレハ、其者共御覽アルヘシトテ召出サル、一番ニ平田豊前介、夫ヨリ連レテ出ケ

レハ、相本単人佐・有馬主馬首・勝部弥次郎・堀内大圓坊、忠平公ノ御内ニ和田圓覚坊、家久ノ内ニ矢上弾正忠・田中筑前

介・永山大炊左衛門尉・長野金兵衛尉、御末ニ罷出、面目ヲ取テソ入ニケル、

義久公、陣中ヨリノ鉄炮責ハ如何ト仰ケレハ、中書、山岸ニ當ル音ハ雨ノ降如ク候ヘトモ、城中ノ者トモ格護堅ク仕候へハ、

慈ニ余リ手負モ候ハス、只野頸ノ近陣ニ、右松平太助ト申者、大鉄炮ヲ城ノ真中ニタメ付構置候程ニ、如何成業カ仕ラント存

候処ニ、其日モ不打、次ノ日モ不打、敵モ慈モ靜ナル折節、未

ノ刻計リニ動ト打タレハ、大地震動シテ櫓ノ構ヘヲ打崩シ、倉ノ梁口打折テ、ウラノ外廻ナル大榎ニソ打留、夫ヨリハ又トモ不仕ト申上ケラルレハ、仕候ノ人々アヤマチ無コソ御仕合ナレト、吐ト動シ申サル、其時

日新公ヨリ相傳シ玉ヒタル鎌倉行光ノ二尺六寸赤銅作目貫并後藤カ作トテ、頭巾袈裟ヲ物ノ見事ニ調タルヲ、中書へ是ヲ引玉

フ、中書面目施シテ、御腰物ヲ押戴キ、居直リ懸テ帯セラル、暫シテ、御兄弟御一門ノ人々各宿所へ帰り玉ヒケル、去程ニ、

隅藤ノ軍兵佐土原・郡郡ニ群集シテ、箕納ノ城ハ伊地知民部太輔ニ被仰付ノ処ニ、豊後ノ大軍下ル由ヲ聞テ、競ヲ取テ其ノア

タリヲ発向シ、城ニ引籠テ高城ノ様ヲ見、郡郡ニ打出ント待処ニ、思ノ外ニ豊州勢打負タレハ、妻子共ヲ退ヘキ様モナシ、誠

ニ思案餘ナルニ、佐土原ヨリハ、今日寄ル、明日責ナト云へハ、今日モ々々ト心迫テ見ヘニケル、依テ評定アリケルハ、城ヲ攻

ハ定テ人ヲ損スヘシ、是程ノ仕合ニ左様ノ儀不可然、只絡ヲ入謀ヲ以テ退治スヘシトテ、鎌田尾張守・同出雲守・上原長門守

於郡郡石ノ下城使シタル僧、石ノ城ノ佳例トテ呼出シ、箕納ノ使ヲ仰付ラル、二度ノ御奉公能申調者ナラハ、内山ノ寺ヲ本

領本ノ如ク相付玉ハルヘシトソ仰ラル、其意趣ハ、各豊州へ與カシテ薩摩へ怨ヲ成楯込レ候ヘトモ、

義久公天運宜キ武將タレハ、大軍ニ打勝テ國民迄モ安堵セリ、各楯籠レタリト云共、近國ニ與カスヘキ物ナシ、終ニ徒ラト成

ヘシ、其上三ヶ國ノ兵、賊ノ與黨數千騎ノ者共帰陣スヘシトセシカトモ、箕納ノ事ヲ聞テ未帰、野狼シテ資財雜具ヲ取ラント

テ勇ミ敢ル、箕納ノ滅却只今ノ事ニ候カト覚候、此度豊州陣退

治ニ付テモ、人數ナラ子トモ御評定ノ末席ニ連テ、謀ヲ致シ人
ヲ亡シ多ノ罪ヲ作ル、箕納ノ人ヲ助ケ是ニ報謝スヘシト思ヒ、
愚拙等三人和平ノ調法是非共相望ミ候、又各ノ謀叛本意ナシト
ハ不存、野村・福永カ謀叛ニ異也、為君憤リ伊東殿ヲ一度日向
ニ入奉ント思フ志、臣トシテ忠タリ、世話ニ云ヘル毒藥變シテ
良藥ト成ト云ヘハ、其惡心ヲ翻シ薩戸へ參ル者ナラハ何ソ別儀
有ン、惡ニ強キハ善ニモ強シ、敵ニ強キハ慈ニモ、如此ナレハ
頼母數コソ候へ、箕納ノ人々ハ内山ニ移シ可申ト、僧ニ能云含
メテソ遣サル、使僧即箕納ニ行キ、和平ノ調法ト申ケレハ、上
下馳集テ其意趣ヲ聞ントス、弁口明ナル僧ニテ、三人ノ意趣ニ
差添テ實シヤカニ有々トソ中ケル、箕納ノ人々聞之喜ヒ合、思々
ニ引手物ナトシテ、或ハ雅キ子共持タル者ハ弟子ニ參ラスル、
扱地下ノ者共、豊州ヨリ一人ノ本人有ト披露ス、使僧聞之テ、
無下城内ニ其男ニ目ナ放シ、落行ハ打取テ己達ノ忠ニセヨト、
云含メテソ販リケル、箕納ノ者トモ忝キ御慶ニ、互二人質ノ沙
汰ハ不似合トテ、三人ノ使僧ニ打列テ佐土原ニコソ參ケル、即
參上神妙也、暫ク御用アリトテ留ラル、上下五六十人箕納へ打
入、豊後ノ本人討タントシケレトモ、又地下ニ心置ノ物アレハ、
其仕合ヲ伺ケレハ、三日迄ヲ相延タリ、
義久公御氣色惡フシテ、東郷與助・友野左近將監承テ參ルヘシ
トテ使ハサル、打手ノ人々此彼ニテ仕合ヲ伺ケル程ニ、其色ヲ
覺ヘテ早抜開キテ切テ廻ル、與助請留相討ニ丁ト切レハ、与助
痛手ヲ負ニケリ、打手ノ人々鎗ヲ以テ突伏、即頸ヲソ取ニケリ、
左近將監即佐土原ニ參リ、箕納ノ体委ク申上ケル、箕納ハ以上
三百人ニ及候ヘハ輕々敷候ハス、仍テ三日相延申也、夫サヘ以

テ足浮テ候ヘトモ、ヤウ、ニ相詰タル由申サレケレハ、尤サ
ルコトアルヘシ、皆々辛勞神妙也トソ仰ラル、与助聽テ參タレ
ハ、手柄仕リタリトテ、御腰物ヲ拝領シテ、手負タレハ薩戸ノ
如ク帰リケル、夫ヨリ評儀アリケルハ、野心ノ者ノ向後ノ戒也、
是ヲ打果サルヘシトテ、内山ノ鎌田尾張守ニ會テ屢敷ヲ取、早
速任所替仕ヘシト有ケレハ、聞之喜ヒ、狼藉人ニ恐レテ案内者
乞ヒ、一同ニ内山ノ如ク行ク処ヲ、六野原二千騎計相伏テ真中
ニ取込、八十六人打果シ、洩レユク者ヲ方々ニ追詰テ打取、箕
納城ヲモ心易ク退治シ玉フ、又此度ノ陣半ニ、内端ニ立火ヲシ
慈ヲトヤシタル者、川北・川南ヲ糺シ成敗シ玉フ、扱諸所前ヨ
リノ地頭ハ其如クニテ、無キ所ニハ地頭職ヲ定テ日向ヲ治メ玉
フ也、去程ニ、三ヶ國ノ若者トモ此競ヒニ追付豊後へ入タラハ、
何ノ子細モアルマシ、輒ク御利運アルヘシト勇ミ敗ルニ依テ、
御評定有ケル、有功ノ者トモノ申ケルハ、今度大軍ニ打勝玉フ
コト、是ニ過タル喜ヒナシ、善ヲ見テハ又惡ノアランコトヲ思
ヘト申事ノ候ヘハ、天道モイカ、ニ存候、先今度ハ國ノ軍兵共
ノ勞ヲヤスメ、重テ御出陣アルヘシ、他國ノ覺モ目出度折節、
先々御帰陣然ヘクモヤ候ト老名申サレケル、
太守諫ニ從フコト流ル、カ如ク、善ヲ用ルコト速ナル御事ナレ
ハ、御同意マシマシテ、御引陣ニソ定リケル、御帰陣トテ
義久公御立アレハ、日向ノ人々ハ六野原ヨリ御暇ヲ玉ハリ、宿
所々々ニ打歸リ、大名小名御供ニテ、其日ハ竹原ニ着玉フ、北
郷一雲ハ中途ヨリ暇玉ハリ、庄内八ヶ外城ノ者共ヲ引具シ、露
キツレテ帰ラル、夫ヨリ諸縣・肝付・根占・大隅ハ竹原ヨリ
近方ナレハ、真幸・菱刈・牛屎ノ人々モ暇玉リ、其翌日ハ霧島

ニ御參詣、座主ノ坊ニ御着、御祈誓ノ結願ヲ法印快答ニ仰置レ、
聽テ御立、大隅正八幡へ立願ノ成就ヲ留守・桑畑ニ仰付ラレ、
濱ノ市へ御出アリ、大隅・曾於郡・桑原ノ人々暇玉ハリケリ、
左レトモ、未ダ大軍ナレハ、加治木・帖佐ノ陸地ヲ經テ白銀坂
ヲ上ルモアリ、船ニテ海上ヲ渉モアリ、我先ニト喜ヒ列レテ帰
ル程ニ、

義久公鹿兒島ノ御屋形ニソ着玉フ、夫ヨリ薩摩・入來・邪答
院・日置・伊作・南方ノ人々、皆々暇賜ハリケリ、去程ニ、鹿
兒島ニ着御ナレハ、及モ不及モ御悅申サン者ハナカリケリ、次
ノ日ハ御祝言ノ會席トテ、伊集院右衛門太夫・喜入親津守・平
田美濃守・村田越前守・町田出羽守・木田下野守・川出駿河
守・鎌田刑部左衛門・吉田美作守・伊地知伯耆守ナト參上シテ、
御三献ノ後美膳ノ饌、御酒宴始リケレハ、近習外様ノ士下ノ間
御末ニ並居タリ、其比都ノ藝者ニ、渋谷太夫カ子ニ千夜又トテ、
年ノ程十四五ニ成ケル器量ノ小童アリ、
義久公ヨリ金鞘巻ノタラ脇差ヲ拝領シ、御前ニテ押戴キ、下ノ
間ニサカリ、己カ刀ヲ後サマニ投捨テ、賜リタル御脇差ヲ其俣
サシ、御前ニ參リ御酒ヲ奉獻、金ノ扇ヲ披開キ御前ヲ舞下リタ
ルヲ見テ、都者トハ云ナカラ、仕合結構サヨト申サン人ハナカ
リケリ、去程ニ、三州ノ大名小名・寺家社家等ニ至迄鹿兒島ニ
群集シテ、御家ノ繁昌・弓矢ノ面目ト悦合ヌ者ハナシ、扱又、
筑後ノ住人尾山法印星野長門守サツマノ如ク具シ玉ヒ、出水之
義虎ニ送玉ヘハ、モテナシ奔走シテ船傳シテ筑後ヘコソ帰サレ
ケル、扱大友殿此度ノ敗軍、豊前・筑前・筑後ノ人々心ノイラ
ヌ出陣シテ、過半打死シ、宗麟ヲ恨ミ顔ニ思フ者多ケレハ、心々

ニナリ、肥前ハ龍造寺近年豊後ノ下知ニ従ハス、今ハ只大友ハ
豊後一國ニナツテ、臣下ハ皆心細ク思ヘトモ、大将ハ其心モ不
付、鬼里下今出頭ノ殿原面目ヲ失ヒ我ト引入テ、今ハ何ノ用ニ
立ヘシトモ不見、普代ノ者トモ寄集テ如何ト心ヲ尽セトモ、敢
テ用ル所ナケレハ其甲斐ナク、薩廣ヨリモ不入、中國ヨリモ無
妄ナレハ、ヤウ、ニ豊後相靜リヌ、去レトモ又六ヶ國ヲ相治
ント思フ心モナシ、京・堺ヨリ數寄者・藝者・白拍子・諸商人
ノ類ヲ呼下シ、或ハ府内ノ頓休、三江ノ昭和ナト云大福長者ノ
有徳ナルヲ呼下シ寵愛シテ遊興ニ空ク日ヲ暮シ、明朝ハ何某殿
ノ數寄、晚ニハ誰某殿ノ夜會ノ御申ナト、テ、御愛想ヲ事トセ
ハ、宗麟モ義統モ遊興ニ墮弱シテ、何某ハ釜ヲ拝領シ、何某ハ
小壺ヲ拝サナト云ヘハ、我不劣ト座ヲ構ヘ、己ニ府内計ニ番匠
ヘ力尽シタリ數寄屋四十八ヶ所、其外數寄屋數不知トコソ中ケ
ル、然ルラ、家ノ老臣諫レトモ遂ニ聞入ラレス、國ノ將トナリ、
人ノ君トシテ、賢老ノ者ノ云々ヲ無下ニ不用ハ大ニ誤也、異朝
ノ古ヲ聞ニ、殿ニ三仁アレトモ是ヲ不用シテ亡タリ、又項羽ト
高祖トハ古ノ朋友也、咸陽宮ニテ韓信高祖ニ問、項羽ト高祖ト
ハ何レカ明ナル、高祖對テ曰、才及コト能ハス、韓信カ曰、然
リ、サレトモ項羽ハ賢ヲ用ルヤ、己哲ナルマ、ニ敢テ用ス、然
レハ遂ニ高祖ノ天下タラン、夫如何トナレハ、君ハ賢老ノ臣ノ
諫ヲ不違、果シテ終ニ漢ノ世トナレリ、宗麟モ義統モ己レ愚ナ
レトモ、老臣ノ諫ヲ用ラレハ是程迄ハヨモアラシ、國ノ費・民
ノ勞ヲモ我身ノ仇ト成事ヲ不知ケルソ悲シケレ、國民寄屯ヒ嗚
呼笑止ヤト私語スル計也、去程ニ、此度大友勢若下亡タル支ナ
レハ、其菩提ノ為ニトテ、福昌寺ノ住持代賢和尚一千余人ノ僧

侶ヲ引テ彼戦亡吊ヒ、一念法界ノ大施餓鬼ヲ行ハル、是ヲ見聞人々モ有難ソ覺ヘケル、

惟新公御記曰、豊後大友新太郎義統振威於六國驕傲之餘、與伊東入道義祐易可斬婦日州由令評儀、天正六年^{戊辰}十月廿日寄來日州高城、燒拂城廻打破下郭欲攻傾、前中務太輔庵合當番回謀略、寄付敵於岸涯、於鉄炮轟天地、忽被打殺敵不知其數、雖然強敵不屑之、結廻間垣引退本陣、同十一月十一日、予成下知、

於松尾之通路企伏兵、敵軍數千討捕、即平攻攻破、一陣之敵軍不殘討亡、白夫推寄惣陳、於是當大川前可備人數由、雖伊集院右衛門太夫忠棟依無同心、諸軍兵置大川後相備、同十二日曙、

敵軍一同斬懸、予最前之志慮少不違、越川為相備、軍衆共皆被追立猛勢、不辨大川深淺迤渡、北鄉藏人久盛・木田因幡守親治於立所遂戰死、予當大川前依相備、自筋更瀬口与敵相掛々渡斬崩、於是伊集院忠棟緩駒之手繩合手被感、豊州之軍衆雖為無双之強敵、宿運所究、無為方而崩入古川、人馬相重埋側測、如是

日醒數儀難述言語者也、數萬之軍旅僅被打成二百令帰國云、尔來六ヶ國之大名小名、皆欺義統成恐當家無限、身方之大軍致敗北処、以次一人之粉骨切返、被當家之運之由、為御感自義久公一文字ノ御腰物令拜領、播面目畢、

川上久辰ノ日帳

天正六年^{戊辰}九月十一日未尅、山東へ就御行之儀、御発足被成候、御劔ハ本田紀伊守、御旗ノ役ハ三原右京亮、御旗差色紙金右衛門、其外御供衆鹿兒島ノ人衆迄ヲ被召連、先御諏訪へ被成御參詣、直ニ御立也、松尾坂ヨリ御吉例ノ雨終日也、夜二人、帖佐ノ内餅田名觸主計介所へ被成御座、御塩參リ、

聽テ御臺敷返之御酒ノ砌、平田新五郎御着之目出度由被申上、御樽一荷・折肴進上、帖佐ノ衆中モ少々伺公也、

一同十二日卯刻、餅田名八日町ヨリ長濱ノ内鳩ノ脇迄御船ニ召レ、御劔・御旗ノ役、御近習少々御座船ニ御供也、其外陸地ヨリ鳩ノ脇濱邊迄御迎ニ參ラレ、御船元ヨリ御輿ニ召レ、社家ノ衆留守式部少輔・桑幡左馬介迂ノ堂迄被罷出、沢永賢父子中途へ出會被申、濱之市別當モ中途迄供申也、酉刻始霧島山ノ麓田口名へ被成御着、其砌、清水ヨリ町出周防介伺候也、并霧島ノ法印參上、御樽一荷・折肴進上、其次山東那賀ノ平等寺為使僧參ラル、意趣直ニ被聞召、則木山下野守・白濱周防介兩人被召出、様子被仰聞、

同十三日雨、卯刻田口名ヲ被成御立、霧島之麓作通道ヲ御通被成、高原ヨリ御迎衆中途迄被參、地頭上原長門守依留守、高原ノ衆中大手ノ原へ柴屋ヲ構へ御會釈被申上、長門守三男被罷出、中途迄御供被申、野尻衆中猿瀬渡ノ口迄御迎ニ參、西ノ刻野尻へ御越着被成、内城市木美濃守所へ被成御座、則三獻之上御盃被下、本田紀伊守賀雲御座ニ被參、數獻之御酒也、

同十四日、鹿兒島ヨリノ御供衆二手ニ御分ケ被成、日州石ノ陣へ二番替ノ校量ニ被成遣、此日川上源三郎就領地之祭礼、從山東能帰候由被申上、野尻城外廻被成御覽候、

一同十五日、御供ノ衆各出仕也、此日石ノ陣へ一行ノ御催也、此日飯野ヨリ御使者、白坂宮内少輔意趣白濱周防介被申上、此日霧島・鶴戸・妻萬三社へ為御祈禱、仁王三部講読也、酉刻佐土原ヨリ伊集院右衛門太夫以書狀被申上、御行昨日十四

日酉刻各被打出由註進也、

一同十六日、大口ヨリ新納武藏守使僧、意趣吉田刑部少輔二聞セラル、此日敷根入道山東御番罷立候由為可申上候候也、此日願娃小四郎方ヨリ津曲宮内少輔ヲ以被申子細、白濱周防介被為聞、此日

兵庫頭殿飯野ヨリ御参上ノ事、今月廿日比ニ可被差延由、本田下野守、白濱周防介前ヨリ書状ヲ以被申越、此晚都之郡長善寺ヨリ、御着目出度由使僧ヲ以被申上、

一十七日、吉田刑部少輔山東へ為御使被差遣、午ノ刻石ノ御陣無何支結構被相調候由被仰上、同日申ノ刻老名數中ヨリモ同篇之儀、使僧西ノ坊ヲ以被申上、

一十八日、御遊山ノ為アト瀬ノ渡之上迄被成御差出、御帰ノ砌自北郷殿野尻迄御発足目出度奉存候出、同名右衛門尉ヲ以テ被申上御案内也、

一十九日、北郷殿使者御見参、意趣本田下野守被聞セ、則内城表ノ座ニテ、使者へ本田下野守御酒御寄合被申、此日栗野八幡ノ御祭礼成就之御水、白坂藏人持参、此日

兵庫頭殿野尻へ御着也、白濱周防介中途迄御迎ニ被罷出、一廿日、兵庫頭殿被成御差出、御樽一荷・折肴進上、則御寄合、本田紀伊守加雲齋御座ニ被参、

一廿一日、飯野近山ニテ狩有、為御慰御登セ也、兵庫頭殿モ御供被成、此日石ノ御陣へ御遣ノ使僧被罷帰、吉田刑部少輔へ被聞、石ノ御陳へ御遣ノ鹿兒島衆被罷取、

一廿二日、平田平次郎前ヨリ、御発足目出度由、使僧ヲ以被申上、此日

兵庫頭殿御寄合、本田紀州御相伴ニ被参、此日菱刈表ノ衆ヲ

新納刑部太輔・町出三郎五郎・白坂式部少輔・菱刈孫三郎方、此衆ヲ始山東へ罷立候通為可申上候候也、一廿三日、山東へ財部ヨリ右衛門大夫殿ノ御使僧、意趣白濱周防介被聞セ、此日

兵庫頭殿飯野御帰宅被成、此日新納四郎殿平和泉ヨリ参上、此日三原右京亮・絮阿弥兩人、石ノ陳へ御使也、一廿四日、鎌田源左衛門尉伊作妙現御祭礼成就ノ御水持参、此日伊地知又八・平田右近將監・高城左馬介石之陳へ被遣候ノ

処ニ、氣任セニ長々滞留曲支ニ被思召候由、稠敷被仰出、就夫三人斟酌也、此晚新納四郎殿へ御寄合、本田紀伊守御座へ被参、此夜石ノ陳ヨリ町田出羽・税所新助兩人為使被参、此日出水へ川村金兵衛為御使被差越、

一廿五日、野村民部少輔石ノ御陳へ御使也、此朝町田出羽守・税所新助如御陳御暇被中、一廿六日、朝呼ニ御登セ被成候、此日山東綾之米良備前守ヨリ使僧ヲ以、豊後衆耳川ヲ渡候由、佐土原ヨリ注進候段被申上、此日御供衆ヲ以、野尻大手ノ御普請也、

一廿七日、桃山殿使僧俊蔵司、意趣本田下野守被聞セ、此日野尻衆中御酒進上、此日種子島ヨリ番衆岩川民部少輔、野尻内城ニテ被懸御目、先刻石ノ城へ働ノ時手火矢射通、別而辛勞

神妙ノ由被成御感、此日山東財部川上三河守前ヨリ使僧ヲ以、豊後衆少々耳川ヲ渡候得共、無差儀引退、無何支被申上、此日鹿兒島へ被居残タル衆少々御座所へ被馳参、此日新納四郎殿御寄合、賀雲御座ニ被参、

殿御寄合、賀雲御座ニ被参、

一廿八日、野尻惣社大王へ御社參、地下旅衆御供也、御幣宮内坊持參也、大官司・祝子共伊東代ヨリノ者拜殿ノ庭ニ參也、此日鶴戸ノ別當御祈禱ノ御礼・配秩持參也、御樽一荷進上ナリ、

一廿九日、高原ノ鎮守へ為御代宮内坊社參、此日都之郡長智子家ノ為祝千匹進上也、此日養虎ヨリ野尻迄書狀ヲ以被仰遣、

彼飛脚石ノ陣所へ罷通也、此日大口ヨリ新納武藏守書狀到來、右意趣ハ、此頃從相良方至武藏守、使僧ヲ以大夫宗麟日向表へ雖一行之企候、一口迄ニテハ難閉、拟ハ肥後口之衆猶々以被頼思ニテ、又々八代迄真光寺ト云僧下着候、一圓申迄モ、自然前方ヨリ洩聞候テハ、得御意、相良之旨候条如何ノ由、

懇意ノ儀被申事候、一ニハ石へ御着陳頃始テ承候通、又ハ一ニハ栗野・横川へ雜紛ノ武藏守助言頼入候由、此三ヶ条題目也、此日紙屋之地頭稻留新助石之御陣ヨリ、同名大膳亮ヲ以御発足目出度奉存候由被申上、此日鹿兒島衆、去ル八月始ヨリ山東へ御番手衆、野尻ノ御座所若シ無人數ニヤ候半ト、老

名數中分別ヲ以各參上也、御陳ハ猛勢ニ依テ、其内ヲ寄々高城・財部境目へ被差籠、此日新納殿ヨリ雁一ツ進上、此夜戌刻從穗北野邊名字ノ方ヲ以テ、穗北へ野心人多候、其内ヨリ致返忠三人ハ、無異条被擲捕セ候也、

一晦日、從石ノ御陳御左右、昨日廿九日石ノ城へ被仰越ハ、備被執延間敷進退、早々城ヲ可被相渡候、左候ハ、道ノ口明ケ堅固ニ可被送セ由、日置越後守・市來軍助兩人ノ前ヨリ言セラル、無頼方故ニヤ、無異儀其趣ニ應シ、備ハ今日ヨリ矢ヲ留メ可申ナリ、夫ヨリ人質取替談合定、御陣ヨリ徳持舍人

助・有馬右衛門尉人質ニ被遣、石ヨリ井尻伊賀守・荒武左馬助兩人也、此日石之城無篇目被受取、石ノ衆長倉勘解由左衛門ヲ始、悉如三城被送セ候、此日野尻ノ南之原ニテ若キ衆鶴狩サセラレ候テ、御野遊也、此晚佐土原ヨリ鎌田尾張守申上ラル、一昨日廿八日、三城衆耳川ヲ渡リヒシコ嶽ニ打居タル由、財部邊ヨリモ同然ノ使僧也、

十月

一朔日、從養虎使者木通上野介御樽四荷・折着進上、此日新納殿進上之初、津曲但馬守於御前包丁被申、新野四郎殿御寄合被成、同候候衆へ於御前猪被下、從出水進上ノ御酒召出也、此日老名數中ヨリ石ノ城昨日晦日被受取由、使僧ヲ以被申入、

此日平田民部左衛門尉石ノ城ヨリ被罷帰、巨細ノ義被申上、此日佐土原ヨリ鎌田尾張入道・上原長門守兩人前ヨリ、石ノ城屬御安利候祝言并豊後衆耳川ヲ渡リ候通、使僧ヲ以被申上、此日平野左近將監老名數中へ御使也、

一二日、豊後守殿ヨリ石ノ城屬御手裏候御祝言、使僧ヲ以被申上、此日從高原上原長門守三男彦千代丸參上也、此日老名數中ヨリ書狀ヲ以山東番手、從爰ハ所々三番代リ之為賦由被申上、鹿兒島衆ノ叟ハ依御座諸事繁候間、此節ハ五番代リニ賦分候、諸所一番衆ハ

太守様鹿兒島へ御帰宅候日ヨリ可為日限談也、此日石ノ城輒被召取候御祝言、使僧ヲ以御申被成、此晚羽月猿渡掃部兵衛使者ヲ以、同然ノ御祝言被申上、新納武藏守ヨリモ同前ニ被申入、此日加世田片浦ノ山下造酒佐伺候ヲ以、御國料從中國徳山帰帆之由、御案内役人迄申入候、袷之表ニ、被之皮ニ、

御樽一荷進上申也、此夜市來軍助石ノ城ヨリ被召歸、彼境ノ様子悉ク被申上、御前ヨリ別而辛身之義被仰聞、御手盃被下、則致拜領、忝由被申上、

兵庫頭殿石之為御祝儀御使僧ナリ、意趣ハ伊地知勘解由左衛門被承、

一三日、鹿兒島奥ヨリ種々御酒御持セ也、此日上井伊勢守從山東參上、桃山入道殿横川ヨリ參上被成、則御番所へ御寄合也、

一四日、太守様依石之城御勝利御帰陣、如飯野被成御立、此日鹿兒島へ御供衆ノ内山東在番替一番衆ノ分ハ、野尻ヨリ直ニ番所如佐土原可罷立由被仰出、一番伊地知勘解由左衛門、同名又十郎、白濱次郎左衛門尉、瀧間孫九郎、長谷場織部

介、養輪織部介、津曲六郎左衛門、村田藤右衛門、又五六日跡ヨリ市來備前守、肥後山城守兩人被罷立、御番大將平田左馬介、伊地知周防介同番ナリ、

天正六年^{戊辰}十月廿五日、山東高城へ大友家ヨリ近陣ヲ取構、已ニ内端ノ往來モ不輒、折角ノ由、追々依御左右、此日巳ノ刻被成御發足、然ハ先如御吉例御諏訪へ御參詣、夫ヨリ直ニ高津ノ濱ノ磯ヨリ御出船、御座船廻ノ舟數大方五十艘程、御釵ハ本田紀伊守、御旗ノ役三原右京亮、御旗差色紙金右衛門、御乘馬瀧ヶ野川原毛、吉野黒槽毛、御兵具衆木脇大炊助、和田玄蕃助、鎌田源左衛門尉、高城左馬介、其外御供衆鹿兒島・谷山寄々ノ人數何千騎トモ不知其數、海陸同前ニ打立ナリ、扱御座舟長濱ノ沖テフジガ嶋近ク被押渡候砌、日州財部之使僧太平寺御座船へ被押向被申上候趣ハ、高城へ近陣ノ上三納ノ地下人依惡心、去ル廿三日夜敵仕拂候、其外平野之城

迄モ燒落シ、八代・綾・本庄城鑿石ノ裏里ニ悉放火、都於郡・佐土原・木脇邊迄煙ヲ立候様子危見得候由披露也、御座船御供ノ舟ニ至迄各無心元由被申合、然ハ、御船濱ノ市へ酉刻前ニ着岸也、別當ノ所ニ被成御座候、其砌霧島山ヨリ使僧、山東ノ様林都於郡・佐土原迄折角ノ故、敵六ノ原ヲ取切候間、音信不通ノ由被申上、諸軍兵誠ニ手ニ汗ヲ握ルアリサマ半時計ナリ、

一廿六日、未明ヨリ宮内ヲ被成御立、辰ノ刻曾於郡ノ内松永・川路ノ邊ニテ、又霧島山早走ノ使僧ヲ以被申上候ハ、一昨日廿四日、山東ノ惡心人三納仕崩、其競ヲ以都於郡へ攻上七候ヲ防返シ、川原田道場光大寺へ追詰、敵五百程被打捕、殊ノ外御勝利ニテ候、城々之事三納・平野ノ外ハ無何々堅固ニ被

持留、往來モ聊無煩候ノ条、可安御心通具ニ被申上、此左右ニ各得力、軍兵以下ニ至迄皆一同ニ氣色ヲ直シ、霧島山ノ嶮難所ヲ無嫌輒ク打越、酉ノ刻初高原へ被成御越宿、内城上原長門守館へ御宿也、山東ノ様子無心元被思召由、毎々被仰出、

廿七日、辰ノ刻高原ヲ被成御打立、未刻紙屋へ御着也、内城稻留新助所へ被成御座、此日伊集院右衛門太夫・上井伊勢守、此外鹿兒島衆少々佐土原へ被差遣、平田左馬介ハ石ノ城御着陣以來直ニ佐土原ノ御番被閉目頭、兼日笑齋從福島被續セ、先々此來差揃談合也、此夜半計、

太守様紙屋ノ於内城、立田ノ川紅葉哉ト御夢想、五文字不足ケ様ノ御靈夢ハ毎々被次セ事モ候ト申合ケレハ、打敵ハト被遊、誠ニ奇妙成事共也、

一廿八日

一廿九日

十一月

朔日、御供衆各出仕也、

一二日、辰刻紙屋ヲ被成御打立、都於郡・佐土原ヨリ御迎衆數萬騎、綾・本庄・六ノ原邊迄追々被參、路次警固五千人程、別而帶物具左右二分テ美々敷粧也、平田左馬介中途迄御迎ニ被參、此日モ忠棟宿ニテ談合也、

兵庫頭殿・左衛門太夫殿・川上上野介殿・新納近江守殿・伊集院右衛門太夫・上井紀伊守殿(伊勢守)・一所衆・諸地頭、此人數ハ佐土原積迦堂小路迄出會被申、各御假屋ノ城迄御供也、村出越前紙屋ヨリ御供也、

一三日、御一家・國衆・一所衆・地頭悉ク御宿へ祇候也、此日於御宿終日之御評定也、

一四日、就御談合、財部ヨリ川上三河守・伊集院美作守・伊集院下野守祇候也、此日

兵庫頭殿圖書殿へ御寄合、其砌、敵陣火懸退候ノ由風説也、悉中途迄被續セ、勿論雜説ニテ各被打掃、此日川田駿河守從根白坂邊勸請之儀有之、然刻、從財部敵陣於通路被懸野伏、敵十五六人被打取セ、吉兆ノ由ニテ、懸テ川田駿河守勝吐氣也、此日依吉日、

兵庫頭殿

太守様へ手裏之御武略御相傳也、此夜平田民部左衛門尉高城へ間ノ垣ヲ忍御使ニ被遣、野村周防之介案内者被仰付、彼周防介へ御腰物被下、

一五日、於御宿御談合、未刻從高城上床主統介・土橋名字而使

被參、高城跡折角御行被成、忽可自出度由被申上、此日可被陣崩被成衆儀、

一六日、先々川原ノ陣被崩候而、諸陣可被見合談合相定也、然処、此夜依俄ノ大風、御行被差延、御大將ノ御事ハ不及申、諸軍雜兵以下迄至、此時ケ様ノ大雨洪水ハ、乍不及天道之御惠モ如何候哉ト皆々苦敷申合ケリ、此朝平田民部左衛門尉從高城被召掃、扱高城ノ良、歷々究竟ノ人數差箒手堅候ノ間、城へ御心遣有問敷候、乍然、手火矢ノ玉藁塩哨不如意、殊ニ長々手ヲ取候候、何共無為方様体ニ候、片時モ御行被為急可然由被申、此使ニモ豊後陣ヨリ和平ノ調達中務少輔殿可被成申、頻ニ申懸由御註進也、

一七日、終日大雨也、

一八日、此日モ御宿ニテ御談合終日也、

一九日、敵陣至通路就掛野伏之儀、

兵庫頭殿・右馬頭殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守殿、鹿兒島衆御供衆少々、其外御一家・國衆・一所衆・諸地頭人數ヲ催、此夜半時分佐土原ヲ打立財部原へ被打上、雖然、無差儀由依御左右、軍衆ハ從中途被打掃、

兵庫頭殿・右馬頭殿・右衛門太夫殿・伊勢守、其外評儀衆各財部へ被差通、

兵庫頭殿御宿於内城終日御談合、兎角川原ノ陣可被詰崩儀定無篇目、然共、近日中吉日不廻之間、先以往來へ伏仕儀ノ評定也、

一十日、兵庫頭殿御宿ニテ談合終日也、此夜飲肥ノ山伏大圓坊高城へ財部ヨリ為使僧被差遣、佐土原ヨリモ伊作衆ニ山口

早右衛門ト云者ヲ被往也、往來無煩

十一日、通路ノ仕役行往來候掛衆二百程、一ノ伏草五百余リ
田原橋、二ノ伏草五百余リ築地ノ本、請之伏草三千程、十日
ノ亥ノ刻ヨリ被打立、向へ野伏衆ハ夜明ニ被打立、然砌、松
浦筑前守從高城使也、夫ニ付、歴々人衆ハ財部内城ニテ日長
迄談合也、向へ野伏衆ハ

兵庫頭殿・右馬頭殿ヲ始、諸大將一手ノ軍兵ヲ相催、楯鋒ヲ
調、旗呼兵ヲ持セ、財部川ノ渡口ヲ前ニ、持仕役ノ様子ヲ被
聞合、川上上野介・上井伊勢守・額娃小四郎・鎌田刑部左衛
門鹿兒島衆少々同心ヲ以、根白坂ノ口ヨリ至川原陣野伏ヲ出
シ、敵ノ依振舞一行可致校量談合ニテ打上セ、陣ノ様子被見
廻砌、午ノ刻初、往來ノ衆被掛出ト見得、敵殊ノ外仰天シ、
惣陣、松山ノ陣ヨリ馬乘・陸立五十・百・二百・三百計ツ、
両陣ヨリ馳續ク勢不知其數、一ニノ伏草衆モ依大勢、如何可
有ト雖心遣、互ヒニ耻合ケル故ニヤ、伏草ニ存分入籠ム、三
ノ伏草同前ニ起合、我先ニト被攻懸、敵相調雖防戦、大軍被
押崩、人少之鎗ヲモ不合致敗軍、残り少ク被打捕、扱手ニ立
者モナケレハ、松山ノ陣へ被押寄、根白坂ノ下口ヨリ、川上
上野介・上井伊勢守・額娃小四郎・鎌田刑部左衛門・税所越
前守・鹿兒島衆少々、以同心築ノ瀬ヲ打渡リ、雖少勢川原ノ
陣へ被差向、松山ノ陣輒追拂、於陣中モ大將分ノ者餘多被打
捕、逃殘タル雜兵以下、兩陣ノ南ノ廻切岸ヲ越上候有サマ
誠ニ哀成体、松山ノ陣悉焼拂、川原ノ陣ヨリ出合散々ニ手火
矢ヲ放掛、去レハ手負死人多々アリ、否笠刑部・福永丹後・
長谷場弥九郎、此等ハ當座越度也、財部渡瀬ノ衆

兵庫頭殿・右馬頭殿・喜入殿・圖書殿・伊集院右衛門太夫・

平田左馬介・佐多殿・新納殿・北郷殿・豊後守殿、此等ヲ始
御一家衆・一所衆・諸地頭衆川原表へ被打渡、松山口之人數
ニ取合、境ヲ隔手火矢・野伏無陣、惣陣・川原陣・野頭ノ陣
三ノ陣互ヒニ往來モ絶、無為方アキレツ、梓弓可引道モナ
ク、籠鳥ノ雲ヲ戀タル有サマ也、兼テ川原陣ヨリ筑前高良山
ノ座主星野方至中務太輔殿、此度ノ弓矢非本意候ノ条、和平
ノ調儀可被召成由、節々被申入、以其首尾既至、此日人實取
替ノ義急ニ被申、依難默止人實兩人被召寄、因茲、川原ノ陣
トハ互ニ矢ヲ留、扱惣陣・野頭ノ陣へ御行司被差寄評議取々、
御勢廿萬騎一手旗呼兵ヲ持セ、高城・田島・川原表へ被打居
夕陽傾ケハ、諸軍衆川原ヲ前ニ持、一手ノ成勢揃、渡口ヲ堅
固ニ可被持ト談合雖相定、依猛勢衆扱不存分故、或ハ川ヲ前
ニ持、或ハ川ヲ後ヲナシ、足輕雜兵ヲ如外間差出ス、面々籌
ヲ燒續ケ、楯ノ端ヲ並、帶甲冑、弓・鉄炮・鎗・長刀側ヲ不
離、敵掛ル氣色タラハ可相崩粧也、異國ノ響喧・張良トヤラ
ンモ可耻風情也、味方ノ吐氣ノ声ハ天地震動スル計也、諸大
將軍兵以下迄、翌日ノ御行如何可有ト心ニ不掛人ハナシ、
太守様ハ、鹿兒島・谷山・伊作・田布施、伊地知周防介加世
田家都合三萬余被召列、佐土原ノ城西ノ刻初御立被成、亥ノ
刻高城ノ向ナル根白坂へ御着陣、御供ノ諸軍衆甲ノ鉢ヲ枕ト
シテ、鎧ノ袖ヲ片敷寒夜ヲ被明誠ニ無比類、此夜半程ニ惣陣
ノ野頭ノ方へ火矢ヲ被射、敵殊ノ外驚タル体也、此外諸陣ノ
者トモ限リト成り、互ニ名殘ヲ惜故ニヤ、鞍・笛・大鼓ニテ
終夜ノ慰ト聞ユル由、

十二日、敵陣雖為折角、御行凡慮難及、如何可有ト諸軍兵疑
敷心ヲ運シ、未明ヨリ思々出立、御下知ヲ兎角ト被相待処ニ、
霧島・鶴戸・正八幡・諸天・三宗ノ擁護ニヤ、辰刻初敵陣ノ
大手野頭ノ口ヨリ高城田鼠ヘヲロシ、川原ノ軍衆ヘ鉄炮ヲ射
懸、馬ノ鼻ヲ並ヘ、鎗ヲ揃ヘ一面ニ切掛ル、味方ノ軍兵格護
ノ前タリト云ヘトモ、彼行慮リノ外ノ間、少シ油断ニ相似タ
リ、然ハ、川原表ノ足輕以下足ヲ乱ス様子也、サレハ諸軍兵
モウシロ足ニナル砌、鉄肥ノ地頭本田因幡不及異儀合戦イタ
シ、一足モ不去無比類戦死、鉄肥ノ人衆モ因幡守可見次出候
得共、大勢ニ被押隔、漸三四人程同枕ニ討死也、其並ニ庄内
高城衆北郷藏人手廻主従五六人打死、其外川原表ニテ、或ハ
立返リ鎗ヲ合せ弓鉄炮ヲ射、或ハ主人傍輩ヲ、川ノ洩淺瀬ヲ
不見分、味方ヘ逃懸タル奴原モ有、然ハ彼大軍難調ニ、此川
ノ渡口ニハ
兵庫頭殿・左衛門太夫殿ヲ始五萬騎程、宵ヨリ堅ク勢揃被成
候而、至時聊無仰天、即刻入替川ヲ打渡シ被切掛、先陣我先
ニト争ケル、向ノ川岸ニハ楯鋒ヲ置相調処ニ、猛勢打渡リ合
戦アリ、上ノ口從藥之瀬、鹿兒島衆・田布施衆・少シ財部衆
此衆先陣也、打續ク右馬頭殿・圖書殿・喜入振津守殿・川上
殿・上井伊勢守、此衆ヲ始一所・外城ノ人數都合五万余騎、
我劣ラシト横合ニ被切入、

也、其内ニモ心有者ト見得、水底ヨリ澄上リ合戦シ被打者有、
又太刀下ニテ引組被打族モ有、扱横入ノ口ヨリ鎌田大膳若武
者ノ故、無思慮手合駈入主従戦死也、敵過半ハ水ニ溺レ、洩
ノ面ニ浮沈ミ漂ケル、究竟ノ者共ヲ雜兵以下迄、切付引寄生
頭ヲ搖落コト無量、左レハ、大敵ヲ被打果之間、辰ノ刻ヨリ
未申迄時刻移ス、味方モ爰彼ニ於テ手負死人多シ、然ハ、川
原ノ陳半時分
兵庫頭殿・右馬頭殿・左衛門太夫殿・圖書頭殿・川上殿・高
入殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守ヲ始、豊後守殿・佐多
殿・北郷殿・大野殿都合七万余騎、如雲霞忽陣サシテ攻上リ、
川原ノ陳衆筑州高良山座主星野両手之事ハ、依降參高城麓ヘ
被召置、其外ノ者共二三日程後足ニ成、如忽陳馳籠ルモアリ、
又如野鈴原直ニ逃帰モ有、四方八方ヘ被追崩、高城ヨリ中務
太輔殿ヲ始、同大将新納殿・桃山殿・吉利殿、國衆ニハ東郷
方田代・菱刈方・肝付方、其外一所衆・諸地頭、福島殿・市
來殿・伊集院衆・百次衆・都於郡衆・八代衆、此衆ヲ先トシ
テ、凡三萬騎計リ惣陣ヘ被攻上、敵一涯稠敷難防戦、川原表
ノ衆ヲ被打果ヲ見テ、無力惣陣ヲ被追落、陳内ニテ被打モ有、
又如野須原遁上リ、爰彼ノ野山藪原等ニ隠ケルヲ狩出シ、或
ハ頭ヲ取、或ハ生捕ニスルコト不知其數、然レトモ、津野ト
耳トノ間ニテ、敵五六十騎程相調、先衆ヲ待付合戦有、少勢
ノ故ニヤ、於陳場曲田伯耆守・二階堂式部・海江田主殿討死
ス、サレハ、歴々諸大将、我先ニト耳川ノ渡口迄被追詰、此
日野頭ノ陣ノ邊ロニハ、高城ノ地頭山田新助地下衆又ハ足輕
少シ召具シ、山中二三里程被追掛、敵山毛坪屋ヲ指テ落行ヲ、

山田新助手へ三百程打留、

太守様ハ惣陣ノ野類湯迫トヤラン迄被成御打立、御手廻リ軍衆五萬余騎也、扱申刻始、於湯迫之川原、川田駿河守勝吐氣ノ場ニ頭ヲ擲漸二三千程也、サレハ、耳川常住坊迄伐捨タル死骸ノ体ハ、寔ニ算ヲ乱タル計也、此日暮ヌレハ、向ヒ三城ヘハ不相渡、殊ニ大雨頻ニ降ケレハ、軍ノ勞レト云、猛勢耳川ヲ限リニ夜ヲ被明、

太守様ハ財部ノ内城川上三河守所へ被成御座候、

一十三日、筑後ノ高良山ノ座司・星野坊両手三百余、如真幸被送遣、菱刈ヨリ如八代可被差遣談合也、此日右馬頭殿ヲ始宗徒ノ大将各耳川ヲ打渡リ、日知屋・塩見・門川・山毛・坪屋・田代・裏ノ里村迄属御安利候、此日坪屋ノ地下人豊後衆打頼逃來ヲ、二百程打取奉公也、

兵庫頭殿耳川歩渡ノ口ヲ為可被為見、御手ノ衆少々被召列候處、彼渡口近キ山陰ニ敵二三十程隠レ有ケルヲ、獨リモ不殘被為打取、然レハ、豊州南郡衆清田方軍場ヲ最前ヨリ被邊ケルニヤ、三城塩見之傍迄逃行ケレトモ、大勢ノ押渡間、無異儀右馬頭殿へ致降參、道ノ口預御免度由、頻ニ懇望也、難默止故ニヤ、被助置可有其沙汰由被仰聞、此日中務太輔殿耳川ヨリ先々如高城被打掃、此間ノ御軍勞無比類由、各中合ケリ、此日伊地知勘解由左衛門尉・市來備前守三城へ為御使被差遣、
井三納之亶人質取替、則刻番手被差遣、

一十四日、從三城縣へ真蓮坊・八木越後守為御使被差遣、土持ヨリ披露、前縣ノ吏大友入道宗麟、去ル十二日夜務司賀ヲ退去候之間、本ノ地下人迄ニテ無主ノ様候、早々御番手被差遣

可目出由被申入、此日中務太輔殿財部參上被成、然ハ、今日高城着陣、折角之儀、寔ニ夜白被抽戰功候故、無程御連ヲ被開、為彼忠節御感狀ニ領知ヲ被加被給成、則中務太輔殿へ御寄合、此日

兵庫頭殿ニモ耳表ヨリ參上被成、

一十五日、出仕如常、此日縣邊迄番手被差遣、

一十六日、財部ヨリ如佐土原御掃敷也、福島ノ竹之下宗悅御鑑下ニ奉棒、此使ニ從

近衛様御書并本所ノ御鞍・鎧・轡被成御賜、

一十七日、於佐土原

兵庫頭殿へ御寄合、為御佳例吉野・市來ノ黒月毛、

兵庫頭殿御賜被成、外聞妻儀忝ノ由御礼御申ナリ、此日伊地知勘解由左衛門尉・市來備前守從三城被罷掃、

一十八日、兵庫頭殿如飯野御掃被成、此日今度錯乱ニ、三納

之城ニ差籠タル番衆、地下ノ惡心人五十程、於六野原被打詰、

一十九日、本田下野守三城へ為御使被差遣、

一廿日、

一廿一日、福昌寺ノ東堂・諸塔頭坊主、今度ノ御勝利ノ御祝儀被申上、此日平田民部左衛門尉三城へ御使也、

一廿二日、福昌寺東堂、於高城表為施餓鬼財部へ被差遣、平田左馬助同心被成、此日本田下野守三納ヨリ被罷掃、

一廿三日、於高城川原、今度豊後衆為打亡、邊少々死骸集、号豊後塚、衆僧三百人余ニテ福昌寺大施餓鬼ヲ被執行、高卒部

婆ヲ立被吊、此日豊州北郷殿三城ヨリ參上、

一廿四日、從方々御祝有之、此日三城ヨリ伊集院右衛門大夫、

上井伊勢守・鎌田刑部左衛門尉、同心ヲ以被參、此日都於郡ノ地頭鎌田出雲守今度高城へ着陣ノ砌、為被馳込衆中被召列、被罷出於

御前、各御酒被下、此晚左衛門太夫殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守御寄合、此日福永丹後ノ嫡子被懸御目、并福永駿河守野尻ヨリ如飯野召列候衆中被掛御目、此日野村加賀守自身伺公ヲ以御祝儀雖可申上候、今度手負申候間、乍聊尔御近習中迄使ヲ以被申入候、

一廿五日、御帰陣ノ日取雖相定候ト、依雨被差延、

一廿六日、從佐土原御帰陣、老中平田左馬介御供也、伊集院右衛門太夫南郷ヨリ可罷越旨被申上、上井伊勢守依佐土原番前滞留也、鹿兒島衆モ當番前ノ衆ハ勢州同心ナリ、其外ハ悉ク御供也、都於郡衆中迄御迎ニ被參、六野原薩广坂邊迄御供也、本庄ヨリ平田狩野介ハ幡島迄御迎ニ被參、紙屋ノ衆中少々瀬越ノ渡迄被參、酉ノ刻末紙屋へ被成御着、稻留新助所へ被成御座候、

一廿七日、未刻紙屋ヲ御打立被成、野尻御迎衆戸崎ノ渡迄被參、野尻衆猿瀬ノ原ヨリ御暇被下、高崎ヨリノ御迎衆追々被參、酉刻前高原へ御着被成、内城上原長門守所へ御宿也、此晚長門守御會積被中、川上上野介殿・大田周防介御座へ被參、

一廿八日、巳刻高原ヲ御立被成、高原衆花堂渡口迄御供也、申刻霧島坊中へ御着也、頓而御在所へ御社參、御宮諸所規式如常、御下向ノ刻香堂へ被成御參、則御會積、此兩敷根越中守嫡子元服、

一廿九日、辰刻霧島坊中被成御立、昔於郡之御迎衆混之渡口へ

出合被申、濱ノ市迄御供也、社家衆留守・桑畑隈本ノ渡口迄被罷出、濱ノ市別當ノ所へ被成御座、上原右衛門介御酒持參、酉刻始御出船、都合三百余艘順風ニ帆ヲ揚テ一度ニ馳並タル体、更ニ五端ニ難述、此夜亥刻始御帰陣被成、御舟元へ釣齊、村田越前守ヲ始、鹿兒島ノ老若悉ク御迎ニ被參、

明
赫
記

卷之六

城親政属旗下事

去レハ、大友氏ノ軍大ニ敗レテ勢イ衰シカハ、本ヨリ肥前ノ龍造寺隆信ハ、出陣以前ヨリ大友ヲ叛キヌ、筑前・筑後・肥後ノ人々モ心々ニ替リ行、如此ナレハ、隈元ノ城越前守親政、飽田・託間・川尻ハ大友家ノ領地ナルヲ、蹴アケテ知行セラレケル、宗麟是ヲ聞キ、然ラハ城親政ヲ退治スヘシトテ、豊後ヨリモ大将ヲ差越レ、肥後国未タ大友家ヲ候ヒケル国中ノ一揆同心シテ、隈元ヘ押寄せ戦フ、大友方度々打勝ケレハ、城親政身ノ大事ト成ヌルニヤ、薩广ノ旗下ニ参ルヘキトソ思ハレケル、斯思立ヌレトモ、海陸共ニ隔遠路自由成サレハ、商人ノ傳テニカクト申入レニケリ、大守義久公聞召、薩广口ニモアラス、奥肥後ノ儀ナレハ、往還輒カラシ、互ニ約諾ヲ成ト云トモ、加勢モ成マシキコト也、如何スヘキト思慮シ玉フ處ニ、鎌田尾張入道寛柄此由ヲ承リ、近国ノ大名・郡司ケ様ニ申入コト、他国ノ覺ヘ外聞宜キ次第也、御扶助ヲ加ヘラレ候ハ、先足輕トモヲ少々番手トシテ差上セ、於以後肥後退治計策ノ其為ニ可然モヤ候ハント申サレケレハ、

太守一門・宗徒ノ人々ヲ召集、評定ヲソシ玉イケル、先薩广守義虎ヘ調法シ玉フヘキ由被仰、去ハ義虎内縁ナレハ、先ツ志岐方ヲ繰リ付、其連キニ巢本・神津浦・大矢野雨草島中五人ノ人々ヲ繰付レハ、出水ヘ打越義虎ヘ對面シ、是ヨリ以来薩广ノ御旗下トシテ申入ラレケル、依之、遠路ヲ凌クト云トモ隈本ヘ仰通ラル、鎌田寛柄ニ田尻荒兵衛尉ヲ相添、其外足輕三百余人相具シテ、見切トシテ隈本ヘ上ラル、出水ノ警固共ヲ類船シ、隈本ノ高橋ノ津ニ到着レケル、聽テ城親政出合、丁寧ニ賞飩シ、世上ノ体ヲ談合シ、

宇都ヘ申遣レケレハ、伯耆ノ鑑高モ聽テ御方ニソ参レケル、近国ニハ相良・阿蘇家敵タルニ依テ、葦北表ノ海路風波ヲ不嫌、抛一命敵中ヲ武略シテ、船ヲ乗上セ、肥州表ノコトトモ具ニ談合シテ、坂宅セラレケル、自夫次第肥後ノ通融安リキ、誠ニ忠義ノ至ヤト申ケル、

陷相良領寶河内岩牟礼両城事

去程ニ、相良修理亮頼房ハ、其比改名シテ義照トソ名乗レケル、世孫記及諸書、相良頼房ト改ト有、相良州勢先年日向へ着陣ノ折節、大口表へ色々念ヲ掛ラレケレトモ、武藏守忠元日向表ノ出陣ヲ免サレ、大口へ住番セラル間、思ノ俣ニ難計シテ、今日ヨ明日ヨト時剋ヲ伺レケル處ニ、豊後陣敗軍ト成ヌレハ、今ハ早ヤ手持悪クソ見ヘニケル、去トモ、阿蘇家ニ一味シテ未隨薩广、仍テ天正八年五月十三日ニ、新納忠元計ヒニテ、菱刈・牛屎両院ノ軍兵三千余騎ヲ催シ、寶河内ノ城ヲ攻落サル、聽テ柘野ニ岩牟礼ト云処ニ城ヲ拵へ、両城差合ヒ持セ玉ヘハ、相良弥敵ト成ニケリ、

擾乱記曰、相良ハ阿蘇ニ組シ、寶河内ノ壘ヲ取構テ薩广ニ仇ヲ成ケレハ、

義久公此由ヲ聞召、先ツ平田又三郎ヲ新納忠元ニ遣サレ、早々寶河内ヲ攻ヘキ由ヲ命セラル、忠元是ヲ承リ、又二郎ト相共ニ評義ヲ懲シ、其子刑部太輔忠堯各三人、天正八年庚辰五月十三日、宝河内ニ馳向ヒ、喊ノ声ヲ揚テ攻寄相戦ケル半ハ、又二郎・刑部太輔已ニ墜ヲ上ラント勇進處ニ、敵向ヒ合テ相戦、木村十助・園田掃部・又二郎モ打死ス、山下伊賀・同早左衛門・

早水金右衛門ナト粉骨ヲ尽シ戦ケル間、同十五日寶川内ヲ圍タル東駿河守落去シヌ、則爰ヲ本陣トシテ定メ玉フ、不幾日ニ、又凶徒トモ釘野・岩牟礼兩所ニ陣ヲ構ヘ、義陽猶憤耻ヲ雪ントシケレハ、岩牟礼ニ攻寄味方ヨリ一旬ヲ書、朱ニソ、イテ彼壘ニ向テ發ケル、

秋風ニミナマタツル木ノ葉カナ

斯リケレハ、又相良カ方ヨリモ旬ヲ連子テ送リケル、

ヨセテハ沈ム浦波ノ月

味方ノ軍兵是ヲ見テ、意悪ク思ケレハ、相良沈マハ味方浮ント雜言シテソ勇ミケル、已ニ岩牟礼ヲ陥サレテ、釘野モステニ落ニケリ、

諸將肥後發向矢崎青田落城之事

鎌田政年肥後ヨリ帰テ、彼ノ表ノコトトモ具ニ申上ラル、ニ依テ御評定成レケル、評定更畢テ、一家ニ佐多常陸守ヲ大將トシテ、川上參河守栗野衆ヲ相具ヌ、上原長門守・宮原越中守・左近將監・飯肥衆相具シテ、番手トシテ同八年六月中旬ニ出水米ノ津ヨリ出船シ、方々ノ島傳ヒヲ智略シテ、隈本ノ内高橋ノ津ニソ着ケル、翌日城ノ館ニソ入ニケル、城親政・息ノ左京亮久基・二男親基父子三人ヲ始トシテ、執事或ハ巧練ノ臣共ヲ呼集、評儀内談シタリケル、山法師俊長坊ト云者ヲ操トシテ、諸方ヘ差越ル、ノ処ニ、阿蘇家旗下ノ美船ノ甲斐入道宗運一圓ニ就不合、彼等ニ與同ノ輩矢崎ノ城主中村一太夫、青田城主中村二太夫、北表ニハ合志藏人親為・小代上野守隆運・大津山越前守ナト、豊後方トシテ種々ノ

武略ヲ廻シケル、斯ル処ニ、筑後ノ住人ニ秋月筑前守種實、息ノ二郎種長、同舎弟高橋九郎種直、高良山之執行良觀、草野將監鑑員、星野長門守鎮方、此等ノ人々申サレケルハ、先年於日州表ノ御恩何ヲ以謝セン、此節御恩ヲ報セントテ、筑後・筑前ヲカラクリ、忠勤ノ志ヲ致コソ神妙也、左ヤウノ躰ナレハ、次第ニ怒モ出来ナントテ喜ヒアヘル計也、去ハ敵方ノ御沙汰ニハ、六ヶ國ノ敵中ニ薩廣ノ軍兵立タルハ、大海ノ一滴カ、冠弱ノ至也トソ申ケル、然ニ、今境日ノ一行不可移日時ヲトテ、新納武藏守・伊集院下野守・鎌田尾張守隈元ヘ打上、佐多常陸守・河上三河守・上原長門守ニ取合、諸軍衆ニ談合シテ、矢崎ヲ可攻ニソ定リケル、城親政、息ノ久基・親元、宇都之城主伯耆ノ鑑高、舎弟ノ鑑弘ヘカクト申レケレハ、此人々ハ一途可抽忠節志非違儀、殊ニ矢崎・青田・嶋ノ浦ハ宇都・隈元ノ通路ヲ塞キ、阿蘇家一味ノ者ニテ候程ニ、御企可然トソ申サレケル、依之、天正八年^{庚辰}十月十五日ニ矢崎ノ城ニ押寄ル折節、薩廣ヨリモ兵船數十艘差上セラレケルカ、仕合モヨカリケン、其折節ニ、矢崎ノ濱ニ漕ツケテ、四方八方ヨリ吐氣ヲ作り、我先ニト攻上射付、火矢ヲ散々ニ射サスレハ、火焔天ニソ焼上ル、城中ノ者共、今ハ早為方ナサノ余リニヤ、中村一太夫ヲ始トシテ、同源四郎・同源次^{源三郎}・下向中務少輔・政所宮内少・白石刑部人道了庵・同左近將監・同氏少外記・鹿垣彈正忠・高橋藏人・高塚民部少・田代入道安慶・同善七郎・束帶刀長・今村入道宗薫・同式部少、其外之士トモ白ラ妻子ヲ指殺シ、各切テ出ニケル、寄手ノ軍兵受留、散々ニ相戦フ、鹿見島ノ住市來備前守・長野民部少、飯肥ニ上原内藏介・黒木掃部兵衛、市來ノ住貴島源二郎、福島三三原与四郎、其外所々ニ打死ノ人多カリケリ、矢崎

ノ城遂ニ攻敗ラレ、皆悉ク打死ス、武士ノ憤慨一命、夕ヘノ烟ト
消果シ其有サマソ哀也、薩方ハ打勝テ、已ニ其日モ酉ノ剋ニ成
ヌレバ、皆宿所ヘ打掃ル由タシサ申計ナシ、其翌日青田ノ城ヘ押
寄レハ、和義ヲ乞テ下城シ、阿蘇ノ方ヘソ行ニケル、即青田・嶋
ノ浦ヲモ受取、宇都ヘ三日逗留、手負トモヲ休メシニ、矢崎ノ人々
ノ消息ヲ、旅人モ城下人モ、知ルモ知ヌモ諸共ニ、涙ヲ流シ哀ヲ
催サヌ人ソナシ、同廿九日ニハ、諸軍皆隈本ノ如クソ引ニケル、
其後ヤカテ薩方ヨリ仰遣サレ、青田・嶋ノ浦三百町ノ所ヲ、伯耆
ノ鑑高ニソ遣サル、

合子表合戦之事

同年十一月廿三日、軍勢ヲ二手ニ分ケテ、奥肥後合子表ヘ打出、
窪田千町ヲ放火シテ引退カレケル処ニ、合子カ勢ヲ先トシテ、大
津山越前守大勢ヲ引卒シ、烟塵ヲ上ケ馳来ル、五ニ矢軍烈ク射合
ケル処、親政ノ郎等ニ平河カ一等二百計ニテ扣ヘタル所ヲ、大勢
切テ掛レハ争カ忍フヘキ、已ニ敗軍スル所ニ、薩方ノ軍兵一同ニ
攻掛テ相戦フ、其中ニ伊集院下野守ト名乗テ太刀始ヲセラレケル
面ニ疵ヲ受、太刀下ニ敵ヲ打取テ高名ヲソセラレケル、肝付弾正・
川上三河守・上原長門守・村田右衛門尉、其外菱刈大膳亮・長谷
場兵部少・宮原越中守・寺師刑部左衛門尉・上原勘解由兵衛・白
坂藏人・落合豊後介・井尻主税助・福崎新三郎・曾木権助・山法
師大乗坊、以下各軍勞殊也、又片表ノ一口ニハ、比志島宮内少市
来ノ勢ヲ相具シテ、敵數百騎カ中ヲ蹴立テ、縦横ニ駆分テ出ラレ
ケル風情、無比類コソ見ヘニケル、連ク兵ニ、新納忠元・息ノ刑

部太輔大口ノ勢ヲ相具シテ、不後ト打テ入、大将佐多常陸守モ打
出ラレハ、諸所ノ軍兵不劣ト駈入テ攻戦ヘハ、合子方大将大津
山越前守ヲ始トシテ、打取ノ首數百三十余人也、其外切捨數シレ
ス、各高名シテ隈元ヘソ引レケル、斯テ、同十二月十三日隈本ヲ
立、川尻ヘソ下ラレケル、宇都・隈本ノ人々上下見物シテ、薩方
衆ノ行粧イカナル天魔鬼神ノ威毛是ニハ過シトソ申ケル、扱コソ、
名遂功成テハ是天ノ道也ト、疾々立ヤ人々トテ、同十四日ノ早天
順風ニ帆ヲ上ケ、大小船三百余ノ兵船ヲ一度ニ颯ト走ラセ、一夜
ヲコメテ出水ノ浦米ノ津ニソ着ニケル、義虎此山ヲ聞、
太守ノ果報イミシク御座、各御軍勞申計ナシ、イテ祝申サントテ、
次日出水城ヘ宗徒ノ人、其外數十人ノ人々ヲ請シ入、御賞翫トソ
聞ヘケル、

世祿記曰、合志藏人之黨徒大津源左衛門尉引勢、如雲霞来而鉄
炮羽箭之防禦之時、伊集院久治先登衝入、得源左衛門之首、而
被面疵云、

同記曰、或云、今年吉利下總守、新納武藏守、伊集院美作守襲
取比良城、故翌日安樂城委去、而後趣高瀬云、

義久公御昇進^附相良義陽心服之事

上卿

水無瀬中納言

天正九年五月三日

宣旨

正五位下藤原義久

宣叙從四位下

天正九年^{辛巳}八月上旬之比、

義久公被仰出ケルハ、彼相良義陽古ヲ聞ニモ、薩戸ノ怨ト成者也、近年北原ヲ追伐セントセシ時モ後矢ヲ仕リ、又菱刈ヲ退治セントスルニモ大口ニ大軍ヲ入置、薩戸ヲ防ク故ニ、三年軍勞沙汰ノ眼也、又大友下向ノ節モ、隣所トシテ加勢シタリトモ不悪、利真幸・菱刈へ心ヲ掛ラレシ事、何ヨリ意恨ノ次第也、此節七浦へ自身向ハテ叶マシト宣ヘハ、一門宗徒ノ人々、御意尤ノ到也、然ハ早速其調法スヘキニソ定リケリ、境自ナレハ、先義虎陣場ヲ見セラルヘキ由仰ラル、鹿兒島ヨリ為検見少々申請、先陣トシテ横川平ニ陣ヲソ取ラレケル、其翌日、出水衆ニ一家ノ出羽守実忠・切通左馬允足輕トモヲ相具シテ、水俣ノ城薩ニサシカ、ル処ニ、城中ヨリ出合烈ク戦ケル間、出水衆難儀ニ及ヒ引退レケル程ニ、前川ノ渡瀬ニ追付合戦シ、即出羽守・左馬允打取ケル、慈ノ兵落合テ、漸々手負ヲ迎取、陣中ニソ引入ケル、去程ニ
太守義久公三州ノ大軍ヲ引卒シ、着陣ノ由仰出サレケル、相良此由ヲ聞ヨリモ、犬童美作守・息ノ軍七、八代ノ奉行東左京亮・養田信濃守・高橋駿河守・宮之原周防介、其外宗徒ノ究竟ノ者トモヲソ箠ラレケル、相良カ運命傾キケルカトソ申ケリ、去程ニ、同九年八月十八日、三州ノ軍勢都合五萬三千余騎、水俣城へ押寄陣ヲソ着ラレケル、先八景ケ尾ト申御陣トシテ、
義久公腰輿ヲ居ラレ、二萬三千余騎ニテ堅メラル、錢龜カ尾ト申ニハ
兵庫頭忠平公一萬七千余騎、出水陣ト申ハ薩戸守義虎一萬三千余騎ニテ堅メラル、去ハ陣ヲ取テ水俣ノ鉢ヲ見玉ヘハ、熊ノ牟礼ト

輕石ケ尾ヲ陣ニ取給ヘハ、ツナキ・湯ノ浦ノ通路ヲ塞ク所也、然ハ陣ヲ取レドテ、八景ケ尾ヲ差捨テ、出水ニ

義久公御座ヲ移サレケル、錢龜ケ尾ニハ

忠平公ニ相從フテ、伊集院右衛門太夫・佐多常陸守・新納近江守・穎娃左馬介、執事ニハ川上參河守・鎌田刑部左衛門、以下宗徒ノ人々數百人、熊ノ牟礼ノ陣ニハ左衛門太夫歳久・右馬頭幸久・圖書頭忠長・豊後守久親、相從フニ新納武藏守・肝付弾正忠・山田越前守、以下宗徒ノ勇士數百人ノ人々、輕石ケ尾ノ陣中務太輔家久、相從フニ川上上野守・椛山安藝守・大野治部太輔・桂常陸守・伊集院下野守・同名肥前守・同美作守・猿渡越中守、以下宗徒ノ士族ノ士數百人、其外三州ノ大名郡司、御陣ヲ取圍テ堅ク守護シケル、去間、城へ攻寄リ、間ノ垣ヲ結ビ廻シ、仕寄り物見ヲ作り掛ケ、大鉄炮ヲ打入、本陣ヲ始トシテ、諸陣一同ニ吐氣ヲ動ト作レハ、天地震動シテ森シク烟塵天ニ上レハ、開カトソ疑ハレ、城中ノ人々切迫ト成ケレハ、遁レ難クソ思ヒケル、去レトモ如何スヘキ様ナクシテ、一日二日ト日ヲ送リケル処ニ、陣中ヨリ發句ヲシテ、相良方ヘソ送ケル、
落テミナマタ秋風ノ木葉カナ 薩州方ヨリ
ヨセテハ沈ム浦波ノ月 相良方ヨリ
真砂地ヲ飛立雁ノ峯越テ 薩摩方ヨリ
イカナル人の仕ツラント思ニ、後傳得テ人ノ申ケルカ、鹿兒島ノ住人ニ瀧間美作守ト云人發句ヲシテ城中ニ送リケルニ、相良方ニ
奥越前守ト申者脇句ヲシテ、陣中ニ送り歸シケル、第三ノ句ヲ新納武藏守又ヨミテ送リタリシヲ、相良方有功ノ人々聞之、カヨウノ事ニツキテコソ人ノ意恨モ出来、又後ノ嘲トモ成物也トテ、夫

ヨリ是ヲ止メニケリ、其時、ヤカテ脇匂ノ浦波ノ月トシケルニ群ヲ申入ノ有リケルカ、程ナク水俣落城ト成ニケリ、去程ニ、水俣ヲ取巻昼夜隙ナク戦ケル間、城中ノ人々籠中ノ鳥ノ如シ、八代ノ宗徒ノ者トモ皆籠リタレハ、相良義陽ハ佐鋪ヘ帰リ、イカニモシテ一陣攻敗ラント思ヒ、薩广ノ陣ノ体ヲ見ケレハ、大軍ニシテ其勢夥シク堅キヲ見、不及其儀力尽テ思ワレケルカ、夫ヨリ和談シテ籠城ノ者ヲ助ント思ヒ、水俣・津那木・湯ノ浦・佐敷・一ノ瀬迄五ヶ所ヲ去、改前非、自今以後御族下ニ属スヘシト、偏ニ侘タルノ間、前科ヲ差棄ラレ、意恨ヲ不残、疾々和談可然ノ通被仰出、相良喜悅シ、果シテ御慈ニ参ラレケル、其時義陽ノ嫡子佐鋪ヘ差出元服セラル、烏津家ノ字、久ニテモ忠ニテモ名乗ヘキ由被仰、深水三河守承リ、自今以後無ニノ奉公可仕ノ間、忠節ノ忠ノ字ヲ望申サレテ、四郎太郎忠房ト名乗、侵病早世ナルカユヘニ、舎弟四郎次郎連続ス、四郎次郎後内少輔ト改ム、在安永在、改ム長壽寺、叙任從四位下

私曰、此段ノ発句、前ノ實河内ノ時ニ、世祿記・擾乱記共ニ記セリ、何レカ是ナラン、然トモ句中水俣ノ字有、水俣攻ノ時ナランカ、

相良義陽與阿蘇手切合戦義陽戦死之事

然処ニ、薩广ノ人々、義陽味方ニ被参トイヘトモ、其奥意ノ程如何ナラント疑敷申合リ、義陽聞之テ、サラハ對阿蘇家一戦シテ、薩广ノ人々ノ臆意ヲ晴サントテ、其年ノ十二月三日高佐・堅志田ニ打テ出、東左京亮ヲ始、深水・大重・箕田・矢橋・宮之原ヲ先トシテ其勢五千打テ出、堅志田・美船ノ境目ニ岩下町ト云所ヲ破

却シテ、敵余多打取、其辺ヲ放火、堅志田ノ籠ヲ破リ相戦フ、大方相良方勝利ナル所ニ、美船ノ主甲斐宗運、人ハ左ナキモノソ、日來一味同心ノ誓書ヲ申カヘセシニ變盟ヲ、今日阿蘇家ニ弓ヲ被引事何ヨリ以テ遺恨ナリ、天之道未違ハ、誓書イカチカ無ルヘキ、イサヤ一軍セント打テ出ル折節、義陽ハ一軍得利、心易ク遙ノ後口ヒ、キノ原ト云所へ、兎ヤ法師或ハ老タル者共相集テ、酒宴シテノ居ラレケル、宗運尾陰ヨリ寄来リ、思ヒモ不寄吐ト賦ヲ作テ駈出、幕覆テ混打ニ皆悉ク打取ハ、義陽モ驪テ打死ナリ、左京亮是ヲ聞テ、今ハ何ヲカ可期トテ、即打死シタリケリ、自夫志アル士トモ忠々ニ討死ス、其外ノ者共ハ漸々八代ニ引帰ル、哀ナル消息ナリ、如斯ナレハ、相良領分三郡浮立騒キアヘル事、何ニ警ン方ソナシ、仍テ八代ヨリ薩广へ番兵ヲ申請ラル、近方ナレハ、新納武藏守菱刈・牛屎内院ノ勢ヲ引卒シテ八代ハ打入ラル、漸ク八代靜リヌ、然ル処ニ、義陽ノ弟大膳亮ト申ハ、前津那木ノ地頭ニテ有ケルカ、義陽不快ニシテ八代ノ谷山へ被押込テ有ケル、義陽戦死以前ニ谷山ヲ逃去リ、隅州真幸へ打越

忠平公ヲ頼ミ居ラレケルカ、其十二月下旬ノ比上求广へ打入ラル、求广郡中騒キアヘリ、皆人ノ心区々ニ成、去レトモ薩广ノ所為ナラサレハ、大膳亮ヲ偽引寄、諫テ真幸ノ如ク呼返シ、求广ノ逆乱治リヌ、其時八代ノ老名共ノ中ヨリ申入ラル、彼八代ト申ハ、字都ノ顯高ノ本領也、ケ様ノ乱節ナレハ、押入知行ヲモセラレナシ、殊ニ阿蘇家義陽ヲ打取タル折節ナレハ、押テ打入ナント、思ハル義モアルヘシ、或ハ相良年来ノ者ノ中ニモ、大膳亮ヲ申請ント思者モアルヘシ也、其外大友・隆造寺方ナト引人モ多ク候ヘハ、以後ハ事煩カラシメテ治定ナリ、今ハ早相良ノ家自亡来ト覺候、

八代ヲ薩

太守ノ御領ト成シ、御恩ヲモツテ今一度美船ヲ從へ、義陽ノ追善ニセント存ル也、乍聊為伯カ心中イカ、ニ候、先為伯ニ腹ヲ切ラセ、東黨ノ者トモヲ追伐シ候ハ、別ノ支候マシト、類ニ訟申ケル、太守誠ニ義陽別心ナク戦死ノ跡ナルヲ、無由知行セン事如何ト辞退シタマエトモ、其理ヲ以テ類ニ訟ケル間、然ハ、他ノ八代ト成ナハ、相良ノ為ニモ薩ノタメニモ悪カリナントテ、明ル天正十年ノ正月、阿蘇家追討ニ事寄セ、薩ノ大勢八代ニ打入、箕田・高橋・宮之原ナトニ語ヒ合セ、八代ノ執事頭東為伯ニ腹切セ、東黨ノ者共凡打果シ、肥後表相良領五ヶ所ハ前ニ差上ラル、此度田ノ浦・二見・毘那子・幸田・八代・関・高塚・富福迄御領ト成ニケリ、義陽ノ息男四郎太郎・四郎次郎兄弟モ、年来住馴シ故郷ヲハ名残多クモ立別レ、求ノ山家ニ送ラレケル、志アル士共ハ供イタス人モ有、跡ヨリシタイ行モアリ、居付ノ人ハ皆御家人トン成ニケリ、自夫八代ヲ

忠平公ノ御領分ト仰出サレケルカ、依御辞退平田美濃守ヲ地頭職ニソ被成ケル、此等モ辞退申サレケレハ、後ニハ伊集院右衛門太夫地頭職トソナラレケル、如此ナレハ、小野・森山ト松波瀬ノ通融ノタメトテ、八代ノ内花農山ト云所ニ新城ヲ拵へ、人数少々移置、城ノ衆頭ヲ木脇刑部左衛門尉ニ仰付ラレ、求ノ八代ノ人々ヲ薩ノ勢ニ相加ヘ入番勤サセ、諸軍ハ先々引セラル、

世録記曰、天正十年^{壬午}正月、八代東為伯者、為衰田信濃守・高橋駿河守・宮之原縫殿助等被討殺焉、自是以後、相良之家危似風燈也、八代之旧老告于薩摩曰、八代之地曾為伯耆守之本領、如此紛亂之時、為我主之所有者未可必也、今阿蘇某殺義陽其勢

陵鑿、又有欲附相良大膳亮及肥前龍造寺・豊後大友者、然則、

八代不能為我有必矣、使八代為嶋津氏之土恩波遠流、而御船之地必從風偃焉、若是則庶乎可酬義陽之讐也、豈幸甚乎^云、

私曰、右東為伯ヲ討コト本文ト前後ス、

救田尻又救有馬^附隆信被討事

此ニ、肥前ノ国高来ノ郡司有馬修理久實聞、彼曰、裏祖昔關東下総国ニ都ヲ立、我身ヲ平親王ト自号セシ將門ノ後胤ナレハ、高家ノ人トテ、中比迄ハ屋形号ヲモ申受ラレケルカ、次第二家ヲトロヘ、就中近年ハ竜造寺ニ狹ラレ、是ヲ意恨ニヤ思ハレケン、薩摩ノ御旗下ニ參ルヘキヨシ申入ラレケル、竜造寺隆信近国ノ侍ヲ恣ニ執行ヒ、誠ニ寄瑞ノ風情ナリ、其比又隆信思ハレケルハ、筑後国ノ住人柳川ノ主蒲地民部太輔鎮並武勇賢キ人ナレハ、如何ニモシテ成懇志、肥前ヘ偽引入、後計ハンコトヲ思ヒ、色々調方セラレケレトモ、案ニ不随無參會シテ居ラレケル、去レトモ、末子ノ幼キ者ヲ人質ニ進セテ、互ニ使者ヲ以補礼儀ノミ也、或時隆信ノ母方ノ好ニ付テ便アリ、隆信向母申サレケルハ、鎮並ノ事近国ニ人多シトイヘトモ、別シテ無心底思ヒ、進セスルニ、我ニ隔心セラル事不心得、無本意事ニ思フナリ、鎮並ト我ト無隔申合スルコトナラハ、於近所恐ル、人アラシ、然レハ家ノ繁昌不可過之ト、誠ニ無底心口説侘ラレケレハ、母上ハ実ソト心得、柳川ヘ折々申通セ、或ハ恨、或ハ佞誓紙ナトシテ使サレケレハ、鎮並サテハ於今ハ非別心トテ、能兵三百計相具シテ、肥前ヘコソ打越ラル、隆信聞之、三千計中途ニ相伏テ真中ニ取籠、悉ク討果サレケル、自

夫筑後ノ大名郡司肥前方ヲ背キ、或ハ偵^{ツタ}狐疑スル者多カリケリ、蒲地武蔵入道宗雪ハ田尻伯耆守親種ノ甥也、伯耆守ノ子息丹後守鑑種ハ蒲地鎮並ノ母ノ舎弟也、上ノ蒲地左近大夫鎮廣、筑後ノ前守護富饒左兵衛尉鎮連、草野將監鑑員ノ息鑑家、尾山執行良親、西牟田右馬助種家、此等皆宗雪入道ノ甥也、就中、丹後守鑑種ハ内々

兵庫頭殿ニ申入置レタルニ、此鎮並ノ儀ニ依テ異恨ヲ起シ、背肥前無二ノ薩广方ト成ニケル、依之、隆信天正十年秋ノ末ヨリ數千ノ軍兵ヲ相催シ、田尻ヘ陣ヲ付ントテ発向ノヨシ聞ヘケレハ、鑑種高尾城ヲ居城トシテ、水流ノ城ニハ田尻石見守、濱田ノ城ニハ田尻大蔵少輔、江ノ浦城ニハ田尻常陸入道了哲、掘切ノ城ヲハ番持ニシテ、以上五カ所ヲ堅固ニ持テソ相付ケル、龍造寺大軍ヲ催シ田尻ニ陣ヲ付ラレタリ、昼夜手行ヲ替テ攻ルトイヘトモ、堅ク持防キケル間、城難落去トモ長陣ノ間迷惑ニ及、薩广ノ御加勢ヲソ乞レケル、筑後ハ固ヲ隔、其上肥後ハ阿蘇家一統ニ不從御下知ユヘニ加勢難成、肥前ノ近辺ヲ動シタレハ、定テ此陣引ンスラン、イサヤ近辺ヲ動セトテ、薩广勢高木ニ押涉リ、智々和ノ城ヲ攻落ス、其二モ未引サレハ、又如肥後押渡リ、比良ノ城肥後方シケル間是ヲ攻落、去トモ、勝代ヲ限リニ肥前方トテ堺目糶敷振舞ケリ、猶モ未引シテ差忍ル程ニ、明ル年ノクレ迄ニ籠城五百廿日ニ及ヒケレハ、粮尽餓死スル者多カリケル、去ハ薩广ヘ申分、龍造寺ニ降参シテ、當時ノ運ヲ開ントテ薩广ヘ註進申サレケレハ、感歎ノ至也、早速下城シテ當時ノ運ヲ開カルヘシ、必時節ヲ以可申合ト、返事仰ラレケレハ不及力、自夫請和儀降参シテ、城ヲ肥前方ニソ渡シケル、田尻鑑種ハ肥前ノ如ク繰移シ、僅ノ一所ヲ遣

シケルトソ聞エケル、去程ニ、天正十一年^{癸未}夏比ヨリ有馬久實高来ヘ番兵ヲ申受ラル、其故ハ、龍造寺近辺ノ勢ヲ催シ、有馬ノ領内美江・島原・深江ノ城ヲ討取テ、驕事余也、仍薩广ノ加勢ヲ差渡サル、番大将ニハ新納刑部太輔・川上左京亮ナト宗徒ノ勇士數十人、其外都合千騎計高来ヘ押渡ラル、宗徒ニハ久質ノ叔父左兵衛尉純成居ラレケル、薩广勢安徳ヘ在番勤ラル、斯リケル所ニ、同六月廿三日ニ深江城ニ打寄相働ク、新納刑部太輔垂ノ内ヘ攻入相働キ、無比類風情成リ、即打死セラレケル、文ニモ武ニモ不足ナキ惜哉人ヲトテ、惜マン人ソナキ、刑部太輔ヲ打取タル競ニ乘リ、安徳ノ城ニ度々寄セテ働キケル故ニ、有馬方ヘ一大事トハ成ニケリ、同十二年^{甲申}二月下旬ノ比ヨリ、高来ヘ渡ルヘキノ評定相定リ、

太守ハ佐敷ニ御座セハ、高来渡ノ大将ニハ中務太輔家久・息ノ又七郎豊久・又四郎茂久・圖書頭忠長、侍大将ニハ川上野守・平田美濃守・息ノ左近將監・其子新四郎、新納武蔵守・息ノ弥太右衛門・川上参河守・息ノ左京亮・弟四郎兵衛尉・同助八郎・河田駿河守・鎌田出雲守・山田越前守・上原長門守・息ノ右衛門尉・平山新左衛門・新納駿河守・鮫島又左衛門・市来玄番左衛門・稲留新助・大寺大炊介・宮原左近將監・菱刈大膳亮・猶原安藝守・二階堂安房介、其外劣ラヌ勇士七百餘騎、以上其勢三千餘騎、出水米津ヨリ出船シテ高来ヘソ着ニケル、其外相良カ勢志木・神津浦・巢本・大矢野相加里、久質ノ勢合テ五千餘騎ト申ケル、今天草方一人虚病シテ不参、世上ノ鉢ヲ伺レケルカト申ケル、去程ニ、薩广ノ船ハ赤江ニ着、深江ヲ差通り、安徳ヘ一宿シテ、ヤカテ高原ヘ押寄、假陣取テ、降参スヘキ由商ハセラル、ノ処ニ、

龍造寺聞之、薩門陣無勢ノ由聞ルソ、倡ヤ打越攻滅ントテ打出ラ
ル、龍造寺隆信・嫡子民部太輔政家・二男後藤左衛門尉家信・三
男多久三郎信鎮・四男江上四郎家種書大方・竜造寺左近大夫將監・
同七郎左衛門尉兩門・同越前守・同式部少輔・三根ノ単人止、佐
賀出羽守、藤津權頭、彼杵安藝守・鍋島加賀守・江島長門守・豊
島二郎左衛門・守一軒法師、大村・松浦・西ノ浦ノ者共、筑後・
筑前ノ大名近国ノ郡司侍共ヲ駆催シテ、同十二年甲申二月廿四日
辰刻計ニ、其勢四万余騎薩門陣ニ寄来ル、薩門勢見之、如是ノ大
軍ニ此無勢ニテ掛合、得勝利事思慮ノ外也、然トモ海路ヲ隔来リ
可遁方ハナシ、大將以下ニ至迄モ死ヲ一方ニ思切ル、川田駿河守
義朗吐氣ノ役者タリシカ、大將ノ前ニ参リ、師ヲスヘキ者ハ勢ノ
多少ニ寄ラス、兵規ニ云、周ノ武王以二万二千五百人紂カ億万ニ
勝、魏以五万秦ノ五拾万ヲ敗リ、漢ノ以三万楚ノ八万ヲ伐、我朝
ニテモ、楠判官ハ僅ニ一千余騎ヲ以テ關東ノ八十万騎ノ勢ヲ防ク、
皆其例多シ、今日敵ノ軍氣ヲ見ルニ、必慈ノ吉例成ヘシ、敵大將
可亡瑞相アリト申ケレハ、各今日ヲ限リトソ勇ミ敢ル、大將ヲ初
トシテ待以下皆一同ニ打出ル、川田駿河守三度吐氣ノ声ヲ上ラレ
ケレハ、新納武藏守護ノ策ヲ打持テ、クル々、ト圓ヲ廻シテ、面
ヲ不振懸レケル、慈無勢ナリト云ヘトモ、四五千騎ノ者共カ真中
ニ打テ入、四方八方ニ相當リ、掛合セ掛交、死生不知戦ヒケレハ、
有サカ繫敵猛勢ナレトモ、大將運ヤ傾ケン、早引崩シテ敗軍ス、去共
大軍ナレハ、返合セ々々往々ニ差忍テ戦ケルニ、番ノ折目ニハ圖
書頭忠長差忍テ戦玉ヘハ、鎌田出雲守・上原長門守・稻留新助・
二階堂帯刀ナト殊ナル働セラレケル、弓手ノ方ヲ見テアレハ山田
越前守合戦ス、飢肥住人ニ上原彦五郎・宮原越中・竹内備前介無

比類分捕セラレケル、於爰新納駿河守・久永九郎左衛門打死ス、
又四郎茂久十七歳少モ不臆翔人、一時計戦ヒ、面ニ浅手ヲ負、肩
ヨリ下リアケニ染テ引ヘ給フ、其有様実ニ由々敷ソ見得ニケル、
中務家久モ父子馬ヲ馳入前後左右ニ相當リ、合戦比類ナカリケリ、
又七郎豊久十三ニシテ合戦遂ラル、事、披群ニソ申ケル、大軍敗
北トナレハ争カ軍配調ヘキ、早引立テソ崩レ行、川上左京亮能敵
モカナト見ル処ニ、八人昇之輿ニ乘リ、百騎計リニテ取圍、靜々
トソ退レケル、左京亮、イカサマ是ハ大將ナラン、続ケ兵トテ、
透間モナク懸リケリ、慈ノ兵我不劣ト馳連ク、敵モ暫シカ程爰ヲ
専度ト戦シカ、或ハ手負、或ハ落失セ、去トモ究竟ノ者ト覺シキ
武者三十騎計、大將ヲ捨カ子テ相忍テ白眼合、半時カホト勝負難
決ケルカ、左京亮駟寄テ輿ノ中ヘ鎧ヲ突入ラル、築瀬兵右衛門不
劣ト突入ケル、其ヨリ前後左右ニ相受死生ヲ不知、拍ウツキ合思々ニ
太刀打分捕セラレケル、輿ノ中ニモ鎧数多突入ケレトモ、左京
亮一番タルカ故、此敵左京亮ニソ付ニケル、隆信ニテ御座事ハ、
打レ給ヒテ後ニ是トソ知ラレケル、守一軒ト云法師武者ヲ、曾木
權助・黒木七郎二人シテコソ討ニケル、去共頭ヲハ黒木某取ニケ
ル、斯リケル処ニ、清氣成小姓ノ者只一人、中務殿ハ何処ニマシ
マスソトテ、多クノ人ヲ押分ケ々々、尋ケル、慈ノ兵トモ、定テ是
ハ家久ノ小姓ニテソアラント思ヒシニ、思フサマニ參合攻付テソ
切タリケル、家久ノ郎等落合テ、即ソコニ打留ケル、家久手ヲ負
玉ヘトモ、サホト無シテ、アツハレ運ノ大將ヤトソ申ケル、彼若
キ者傳聞ニ隆信ノ小姓ナリ、主ノ敵ヲ取ラント思ヒ入タル志、ア
ツハレ剛ナル者也、ヤサシキトモ哀トモ数少ク覺ケリ、島原ヨリ
モ切テ出ントシケレトモ、彼城ノ押ヘニハ、川上上野守・平田美

濃守ニ相良カ勢、島ノ人々相加ヘ差入置レハ、心ハ猛ク思ヘトモ烈シク矢軍シタル計也、濱ノ手モ島原ニ取合ントセシカトモ、慈ノ兵二三百騎面モ不振切懸ル、暫カホトハ戦ヒシカ、遂ニハ切崩シテ敗北ス、慈ニ逆瀬川奉膳兵衛、鹿兒島住人四本主税介ナト數輩打死シタリケリ、隆信打レ如此成行ハ、只一方ニ落行ヲ美江ノ薩マテ追打ニ切伏タルハ、算ヲ散タル如也、吾先ニ逃ントテ人馬道ヲ去敢ス、為方ナサノ余リニヤ、山野ニ逃迷ヒ、幸代表ニ打出親ヲ忘子ヲ忘、兄弟親族不弁、我モ々、ト落行、海ニ打入船取々ニ漕出シ、竹島サシテ渡リケル、乗後レシ者共ハ幸代ニ逃入、幸代方ハ己カ館ヲ落去テ、温泉山ニ入ト聞ヘケレハ、若キ者共打留ントテ馳続ク、城ノ麓ニ追詰テ手ヲ碎キ戦ケル、城ノ者共出合テ今ヲ限リト防キ戦ヒケル間、上原勘解由左衛門・八代住人養田左衛門打死ス、宮原左近將監痛手ヲ負テ退ニケル、其後三日過ヌレハ、幸代方居城ヲ薩ハ渡シ、御旗下ニシテ參リケル、夫ヨリ深江・島原・美江・平金屋下城シテ薩ハ渡シケリ、幸代トモ六ヶ所、皆有馬ヘコソ遣サル、久賀高来ノ郡中不殘領分シテ、薩ハ御恩不洩コソ申サレケル、去程ニ、其勢ヒニ大村・平戸・西浦・三毛・小代・和仁・辺原方々ヲ方便リ付、同五月ノ上旬ニ引陣シテ、大將以下佐敷ヘコソ參シケル、隆信ノ頸ヲハ、於佐敷義久公御實檢アツテ、後ニハ、高瀬ノ如ク上セラル、此度滅ヒテ切備タル敵ノ頸八百余、其外切捨タル頸トモハイタクト云数モ知サル也、仍テ敵慈トモニ戦亡ノ為トテ、福昌寺代賢和尚日隅薩肥後表八代葦北ノ僧迄モ相催シ、一千余ノ僧侶ヲ誘引テ島原ニ打越レ、三千余等ノ高卒都婆ヲ作立、御経読誦シ御品有リ、見聞ノ人々モ成佛得脱無疑ト、上下万民ニ至迄難有コソ覺ケル、

世祿記曰、天正十年^{壬午}冬、龍造寺山城守隆信欲討田尻某、田尻請援兵於薩摩、

義久公聞之、催其兵先渡高来陷于岩城、然隆信堅陣不退、故我軍渡于肥後比良城、遂陷其城、私曰、隆信堅陣不退トハ、肥後田尻カ城ヲ攻メテ神ヲ退サレナリ、此時薩摩隆信ト對アラス、是時隆信之兵食多、又小代之地附之、其勢難決雌雄、薩摩之軍国遠兵少、粮絶器尽、不可久支、是以姑飯陣待其時、且又、肥前高来郡有馬修理太夫者、為隆信所逼含恨忠報至、翌年天正十一年^{癸未}夏、有馬請援兵於薩摩、

太守聞之、不得已使新納刑部太輔忠堯・川上左京亮忠堅領兵渡肥前州安徳、此時安徳城主有馬某之族派等迎出對面矣、同国深江島原之地皆屬於竜造寺堅固難拔、故我軍只鎮守安徳、而六月十三日、忠堯・忠堅往侵深江之城、忠堅相戰被傷意氣揚々、自得飯与忠堯相對曰、見我哉、戰而得疵實男子之本意也、忠堯聞之憤曰、此可笑之言也、我豈下於汝乎遂奮向敵軍称名新納刑部太輔忠堯、而乱戦死之、故我軍垂翅引返安徳也、

太守義久公聞此戦不利、翌年^{甲申}春、遣舍弟中務太輔家久及其子又七郎忠豊^{後忠}・從弟島津又四郎彰久・島津圖書頭忠長・川上上野介信久・同姓三河守忠智・同左京亮忠堅・平田美濃守光宗・同姓左近將堅・同姓狩野介・同姓孫六・新納武藏守忠元・同姓治部少輔・山田越前守有信・鎌田出雲守政近・河田駿河守義朗・高崎大炊介・上原長門守尚近・奈良原安藝守・二階堂帶刀長重行・鮫島又左衛門尉、其外上津良太・矢野・栖本・志岐等同来于慈、都合一千五百余騎赴肥之前州島原、着船於有江、與有馬之軍相合則漸及三千余騎也、自此直過深江急入安徳、一夜之中陣幕已成矣、未久衝進島原、促備柵遣使敵城云、與我和

陸降參於有馬某、其陸信聞之、不諾而自以為薩軍不足憂矣、我少恃己之多、乃以數万之兵出、而三月廿四日与我兵相戰、其衆寡強弱天地懸絕矣、大將家久素知兵法、申令軍中曰、寧死於肥前州之地首大苟生以到薩摩、今衆若背命可為島津家之耻辱、我子又七郎雖為十四歲之童、而不決勝負無再見鄉國矣、男子而流名於弓箭之地、乃死後垂芳譽於不朽也、故決戰死於此時、諸軍皆曰、敢不違令遂同心、定志以死為限合戰也、自辰至午或進或退勢同姪鷁、此時運策從濱迎突出橫攻、彼酒瀨川奉膳兵衛尉・前田志摩守・四本主稅助、魁諸兵督戰也、出雲守政近・帶刀長重行指揮之、上原彦五郎・宮原越中守・長谷場兵部少輔・竹内備前守有首功、新納駿河守・久永九郎左衛門尉・酒瀨川奉膳兵衛尉・四本主稅介・上原勘解由兵衛尉・荻田左衛門尉戰死也、國書謂忠長時雖死、薩摩左京亮・森權藏、守・編留小内記、長瀨右衛門兵衛尉ナリ、及未之初隆信力窮收北焉、是時川上左京亮忠堅欲得隆信之頸、直馳過隆信旗下之際、不辨自他衆高聲叱曰、隆信在此、向何敗走乎、忠堅聞之、始知隆信之所居、而自以為可得之首遂直馳進之、則隆信束手無策踞坐不動矣、忠堅乃以長鎗刺伏于地、拔劍欲誅之際、步卒築瀨兵衛門尉・萬膳仲兵衛尉・出石五郎兵衛尉走來、斬隆信首也、曾木權之助討殺守一軒者、家久之子又七郎忠豐亦斬強敵一人、其外彰久・忠長・信久・光宗・忠元・有信・政近・義朗等乘勝大戰、呼聲動天地、彼此難分之際、忽有一人、來于家久之旗下以刀刺貫、其從者頭高拳云、見之哉見之哉、今日之高名者吾也、遂進家久之右而急刺焉、家久即向左踊下斬得其首、諸軍見之、感惜豫讓知伯之忠者焉、今聞其名曰、隆信旗下有名之士而称江理口正右衛門尉者也、都得敵首者三千余員、或記曰、新納武藏守守太

時新納武藏守守太、島津利守戰功甲首其云々、隆信將領之險險者、守山、三軍、大將、比良、神代、伊福兵衛尉也、是時、義久公征肥後佐敷之地、多日逗留待其勝負之際、唱凱歌乃持隆信首來示

義久公前、然後送之高瀨焉、有馬修理太夫之本領乃半還与之、日上城自薩摩相模守之、三里・島原之地以忠長為宰焉、三国軍記曰、有馬修理太夫義統入道仙巖ハ、天正ノ始隆信ニ降り、一族ノ内島原大學・土黒備中ト云者兩人ヲ質ニ出シ、其上仙巖娘ヲ送り、隆信長男民部太輔政家夫妻トス、是ヨリ無事ノ交ヲナシケルカ、天正十年ヨリ又不和ニコソ成ニケル、其濫觴ヲ尋ルニ、去ル九年ノ五月、隆信浦地鎮並ヲ討テ妻子眷屬迄悉ク亡セリ、鎮並ニ四人ノ子アリ、三人ハ害セラレ、又嫡子ハ乳母ニ扶ラレテ、義統ヲ頼ント高来ノ郡ニ行ケレトモ、世ノ中ノ定リ難キハ人心、仙巖カ心底測リカタシアラハ、二名乗後悔ルモ益ナカラント、先偽テ、筑後方ニ賤シキ者ノ子ナリトテ、仙巖ニ抱ラレ、時節ヲ窺ヒ居タリケリ、其名ヲ徳女ト申ケリ、柳川ニ有シ時ハ深窓ノ内ニ長トナリ、未タ知人ナカリシ身ノ梓弓イツシカ今ハ引替テ、カ、ル勤ヲ島原ヤ、高来ノ嶽ニ立烟、胸ノ思ニクラフレハ、何レカ薄キ夏衣、馴又仕ヘニ日ヲ重子、ウキヲ身ニ知ル秋立テ、織女祭ル比ニモ成ヌ、城中ノ女集リ、品々ノ願ノ糸ノ一筋ニ、色々ノ衣ヲ掛ケ戯レ遊リ、其中ニ徳女ハ獨打シホレタル気色ナレハ、カタヘノ女房達立寄テ、何トテ衣ハ掛玉ハヌソ、今日ハ年ニ二度ノ星合トテ、衣ヲ竹ノ竿ニ掛テ思コトヲ祈ヌレハ、願ノ満ルト承ル、イサ掛玉ヘト有ケレハ、いさゝらは何をかくさん七夕に泪の外は身にそは、こそト吟シ、袂ヲ顔ニアテケレハ、人々は見テ不審シク思ヒ、仙

巖ニ始終語りケレハ、義統是ヲ聞テ、去レハコソ、我始ヨリ只人ナラスト思シニ、歌の姿心サマ哀ト云モ愚ナリト、側近ク召寄セ、父母ハ誰ナラン、何故サノミ隠スソト、頻ニ尋問ケレハ、徳女今ハ忍兼、細々ト語り出テ、親ノ敵ヲ討タキ由、涙ナカラニ頼ケレハ、仙巖大キニ驚キ、鎮並ノ息トハ夢ニモ知ラテ過シケル無礼ノ程コソ本意ナケレ、鎮並ト仙巖トハ本ヨリ所縁ノ有ケレトモ、山海ヲ隔タレハ、疎ラ中ノ習ニテ打過シケル計也、

我隆信ヲ打取、汝カ心ヲ安セン、今ヨリ後ハ此義統ヲ一向ニ親ト思ヘシト、簾中ニ傳キ入、嫡孫何某カ妻トナシ、是ヨリ隆信ニ返逆シ、密ニ便リヲ求メ家久ニ申遣ケルハ、我久敷隆信ニ意趣ヲ脚トイヘトモ、彼ハ多勢我ハ無勢ナレハ、空ク密ク光陰ヲ送り候ヒヌ、冀クハ御馬ヲ向ラレ、某ヲ扶助シ隆信ヲ亡サレハ、今生ノ御情ト存候也、然ラハ子々孫々麾下ニ朽ント申ケル、家久此由

義久公へ申サセ玉へハ、

義久公聞召、ワリナキ有馬ノ云事哉、誠ニ城ノ主トシテ斯マテ深ク頼コト、偏ニ舊恨ヲ散ントノ為ナラスヤ、此上ハ急キ軍勢ヲ差ツカハシ、カヲ合ヘシト有シカハ、家久畏リ、有馬へ返簡有ケレハ、仙巖悦喜甚シト云、

同記曰、天正十二年三月、中務太輔家久鳥原へ着船アル、其由有馬城ニ告ラレケレハ、城主大ニ悦ヒ使ヲ以テ、隆信數方ノ人衆ニテ明日寄来ルト承ル、當城ハ要害堅固ニテ候ヘハ、一所ニ防城アルヘシトソ申ケル、家久ハ子房・孔明カ旨ヲ探リ、文武ヲ兼シ大將ナレハ、情遠ク慮リ、先使ヲ城中ニ返シ、船ヨリ下テ所ノ者ヲ召寄セ、地ノ利ヲ委ク聞テ、其後陣中へ觸ラレケル

ハ、今度隆信トノ合戦、我小勢ニテハ當リ難シ、殊ニ彼ハ隣国案内ノ者共ナレハ、味方千ニ一ツモ利アルヘシトハ思ハレス、サリトテ、又退クヘキニアラ子ハ、家久父子ニ於テハ必死ニ究メ候也、是ニ附テ鹿兒島ニ告進ラスルコトノアレハ、畷ラント思人ハ即時ニ申出ラルヘシト、押返々々三返迄觸ラレケレトモ、誰有テ畷ラント云者ナカリケレハ、去ラハ陣ヲ構ヘシトテ、數艘ノ船ヲ沖ニ引セ、軍ノ安否究リ、家久下知ヲ傳ヘスハ船ヲ陸へ寄ヘカラス、必誤ルコトナカレト、番ノ者ニ云含メ、有馬ノ城ヨリ五六里程モ東ナル森岡ニ出張シ、令ヲ出シテ云レケルハ、隆信ハ尋常ノ者ニアラス、渠矢ヲ飛シ鎗ヲヒ子リ出ルトモ、家久下知ナキニ矢石ヲ放ツコトナカレ、早討ヘキト下知セン時、一度ニ連子テ討放チ、塩合能者ナラハ二放チハ放ツヘシ、三放トハ討ヘカラス、備ニ放チ放チナハ、齊ク鉄炮抛捨テ、拔連テ切掛レ、左右ヘ心ヲ移サスシテ真直ニ突掛リ、突伏セシタリトモ首ヲ取コト勿レ、弱ル敵ヲハ打ち捨テ、自余ノ敵ニ突刀シ、必組打スヘカラス、家久カ馬駭ヲ目ニカケテ、夫ヨリ先ニ出進メ、此ヲ高名ト定ムヘシ、敵ノ大將ト見掛ナハ、無ニ無三ニ打留ヨ、下知ヲ背ク者アラハ、味方タリトモ打捨ヨト、法令甚重ニテ、兎角シケル其内ニ、夜ハ明方ニ成ニケリ、

同記曰、隆信ハ已ニ有馬ヲ打ントテ旗下ヲ集ケルニ、鍋島加賀守直茂申ケルハ、今度ノ御出陣先ツ時ヲ御待候ヘカシ、夫ヲ如何ト申ニ、有馬ハ小敵ニテハ候ヘトモ、彼城地利堅固ニシテ輒クハ攻難シ、其上薩内ニ通シ援兵ヲ乞フ由、專以風聞ス、必怒ヲ止ラレ、卒忽ニ掛セ玉フマシ、先某馳向軍ノ誠ヲ仕ラント申ケル、去トモ隆信性急ナレハ、是ヲ敢テ聞入ス、有馬程ノ小

城ヲ蹴散サテ置故ニ、去年ヨリ叛逆シテ度々鹿兒島ノ勢ヲ招入ル、幕下ノ者ノ見懲ノ為、早ク馬ヲ出シ踏潰シト、陣觸ヲコソシタリケル、直茂モ此上ハ力ナク、共ニ有馬ニ趣ケリ、先惣軍ヲ三手ニ分チ、一方ハ直茂ヲ大将ニテ山ノ手ニ差遣シ、一方ハ隆信カニ男江上家種・三男後藤家信ヲ大将トシテ濱ノ手ニ差向ラル、一軍ハ中路大手ナレハ、隆信ノ旗本ニテ一万余騎、已ニ軍列調リ、須古ノ城ヲ打立、有馬ノ城ニソ向レケル、比ハ天正十二年三月廿四日巳ノ時計リノ更ナルニ、薩州ノ勢森岡ニ出張シ、十文字ノ旗ヲ立置シヲ、有馬小勢ニテ多勢ノ敵ヲ防キ兼、鹿兒島後詰シタル体ヲナシ、吾ヲ疑ハシメント謀ナリト見侮リ、隆信カ旗本沖田綴手ヲ打過、真直ニ打テ掛ル、抑此森岡ト申ハ島原ノ古城ニテ、東ハ海ヲ廻リ、西ハ高山難所ニテ、中路一筋ヲ大手トス、左右ハ深キ沼田ニテ人数ヲ分クヘキヤウモナク、只一行ニ押寄ル、家久諸軍ニ下知ヲナシ、敵ヲ近タト引付テ、一度ニ鉄炮ヲ放チケレハ、浮矢ハ有ラハコソ、先ニ進ム者トモ百七八十人、弓手・馬手ニ打倒ス、勝屋勝一軒・小河武蔵守信貴・納軍能登守家理無理ニ軍ヲ進シカハ、隆信三陣ニ打続キ、射レトモ打トモ更トモセス、死人ヲ乗越々々深田ヲカケリ、暇手ヲツタヒ、森岳ノ麓ニ攻着タリ、是ヨリ龍造寺如何思ケン、後陣ノ諸將ニ下知ヲ傳ヘ、陣列次第ヲ操替シカハ、跡ハ先ニト入乱レ騒シクコソ成ニケル、中務家久ハ此体ヲ見テ、大鼓ヲ打鐘ヲ鳴シ、短兵急ニ突掛ル、伊集院右衛門太夫東ノ山陰ヨリ、川上上野・平田美濃守、肥後・相良ノ両勢ヲ卒シ、新納武蔵守ハ西ノ山陰ヨリ、逆瀬川豊前兵衛・前田志摩・四元主税此外ノ勢ヲ引テ、共員ヲ吹合セ、濃雲ノ雨ヲ帶テ暮山ヲ出ル如クニテ、

左右ノ伏兵同時ニ起リ、隆信ノ旗本ヲ西ヨリ東、東ヨリハ西ニヌケ、一文字ニ切抜テ、十文字ノ白旗日脚ニイト、輝キテ、入違々々、討ツ討レツ戦シカ、浮立タル龍造寺カ勢、右往左往ニ混乱ス、去レハ、龍造寺カ旗本に四本鎗ト名付シ成松遠江守・百武志摩守・圓城寺美濃守・江理口藤七兵衛、并ニ三法師トテ高木泰榮・馬渡賢齋・成富源意、此等ノ者共度々高名ノ聞ヘアリ九州ニ威ヲ奮シカ、悉ク戦疲テ打死ス、其外軍兵暫ク足ヲトメカ子、此ニテ十騎、彼コニテ五騎、思々ニ散乱ス、此時、日比側近ク仕ハレタル處從ニ、鴨池新九郎ト云者走寄テ申ケルハ、恨哉、君ノ御運已ニ縮マラセ玉ヘリ、願クハ某ニ龍造寺ノ御氏ヲ許シ玉ハ、御一族ト名乗テ討死セン、其間ニ御心靜ニ御自害有ヘシト云ケレハ、隆信聞テ、ヤサシクモ申ケル者哉、去ナカラ、日頃九州ニテ鬼神ト云レ、旗ヲ向シ先毎ニ、忽不靡ト云所ナシ、斯マテ軍威ニホコル某カ、一戦ノ内ニ打負ケ、四本鎗・三法師ト呼レ、一騎當千ノ者共悉ク討レ、吾命此ニ縮リ生害ヲ遂ルナリ、汝ハ亦後頼シケレハ、如何ニモシテ早く雜人ニ紛去、時節ヲ待、政家ニカヲ合セ、我憤リヲ散セヨトテ、彼カ言ヲ不肯、新九郎畏リ、是ハ仰トモ不覚候、主ノ生害ヲ見捨遁行道ヲ不知、政家ヲ奉始、御賢息余多渡ラセ玉ヘハ、後日ニ御敵ヲ討レンコト疑ヒ有ヘカラス、只某カ望ヲ許シ玉ハレト、涙ニ噎ンテ申ケル、隆信モ是ヲ感シ、汝カ云ヘル所義アリト、去ハ、望ヲ叶ヘント、氏ヲハ許シ与ヘケリ、新九郎悦テ拜礼シ、敵ノ方ニ走取リ、隆信カ一族龍造寺新九郎、生年拾六歳、寄テ手並ヲ見ヨヤトテ、一文字ニ切テ懸リ、多勢ノ中ニ割テ入、縦横ニ働シカトモ、終ニ打死シタリケリ、偕隆信ハ自害セントシタリシ

カ、俄ニ心ヲ引替、如何ニモシテ此ヲ拔出古郷ニ飯り、兩度勢ヲ催シ耻ヲ雪ント、手負ノ体ニ出立、竹輿ニ打乗り、歩卒ノ者ニ昇セ、田中善九郎ト云フ者ニ助ラレ、畔ヲ渡リ山路ヲ求メ、忍々ニ落行ケルカ、善九郎高キ所ニ走り登リ、如何豊後ノ人々、龍造寺隆信肥前ノ如ク引退ク、皆馳統テ參ルヘシ、異儀ニ及者アラハ、肥前ニ歸リ急度其沙汰致サント、高カニ呼リケル折節、川上左京敵ヲ岸ニ衝付首ヲ取ントシケルカ、此隆信ト云声ヲ聞テ、願所ノ幸ト鎗ヲ其俣捨置、驪テ路上ニ出向テ傍ニ畏ル、善九郎ヲ始メ士卒共、隆信トイヘル名ヲ聞テ走り来ルト見テケレハ、少モ左京ニ氣ヲ不付、左京ハ近々ト立寄り、如何ニ隆信キタナクモ敵ニ後ヲ見セ、アサマシクモ落サセ玉フモノカナ、斯申ハ

義久カ家頼川上左京ト名乗り、ツト隆信ニ切テカ、ル、思寄サルコトナレハ、龍造寺ノ左右一度ニハツト乱レケルヲ、左京カ兵七八人急ニ突テ掛リケレハ、皆散々ニ成ニケル、中ニモ善九郎勇ヲ奮ヒ踏止リテ戦シカトモ、不叶シテ打死ス、扱隆信今ハ遁レ難ケレハ、竹輿ヲ起立、汝左京、大将ノ首ヲ得ル法ヲ知タルヤト云ケレハ、左京答テ、素ヨリ勇士ノ習、誰カ是ヲ知ラサラン、其時隆信眼ヲ八角ニ見開キ、意氣活然トシテ躍リ上リ、長刀ヲ一卓ス、其勢ヒ恰モ阿修羅ノ如也、暫有テ、イサ立寄首ヲ取レト云ケレハ、左京立寄テ首ヲ取ル、隆信今年五十六歳、始メ肥前佐賀ヨリ起テ、戦ニ不勝ト云コトナシ、攻ルニ落サスト云コトモナク、六ヶ国ノ太守トマテ成ケル、身ノ運命尽ダレハ、命葉秋ナラスシテ一陣ノ風ニ散リ果ヌ、左京首ヲ差揚、龍造寺山城守隆信ヲ

島津義久カ家来川上左京打取タルト、高聲ニ名乗り、一同ニ勝鬨ヲ揚ニケルト云。

私曰、右三國軍記ハ九州記ノ説ヲ用タリ、九州記ハ本吾國ノ書ニ非ス、見ル人はヲ折衷セヨ、

翰遊集曰、隆信勢六萬余騎薩戸御陣ニ掛リケリ、島原城衆ハ是ヲ見ルニ、切テ出ント勇ミケリ、去間、本口ノ押ハ勢ニハ川上上野守大将ニテ、相良方ト平田美濃守肥後ノ國衆ヲ引率シ、如何ニモ嚴ク矢軍致サレ、亦御陣表ノ大将ハ中務太輔家久ノ父子二人、又四郎・圖書頭忠長、其外宗徒ノ兵太刀ヲ取テ打添、我先ニトソ進ケル、中ニモ吐氣大将ニハ川田駿河守ト云シ人、世上ニ隠レヌ役者也、進出テ申サル、今日軍氣ヲ見ルヨリモ、時剋ヨキニ懸リナハ、必大将可討取ト下知ヲ加フ下ヨリモ、我モ々々ト面々ニ手柄ノ程ヲアラハセリ、先濱手ノ敵フリハ島原衆ニ取合ントセシカトモ、横入ヲタクミツ、先手ノ衆ニハ酒瀬川奉膳兵衛尉、相續ク兵ニ前田志戸守・四本主税介、此外ニモ百騎計指合テ切崩ス、此場ニテ酒瀬川・四本ハ戦死也、是ヲ見テ隆信衆詮儀ヲ成シ岡方ニ引上リ、六万余騎ノ者共ヲ三手ニ作テ攻掛ル、薩戸方兵ハ無勢ニテ有ナカラ、軍サ馴ルコト故ニ、御大将ヲ三手ニ分テ掛合セ、猛勢之真中ニ切テ入玉ヘハ、追ツマカリツ數ケ度ノ合戦ヲ成サレツ、其中ニ鎌田出雲守・二階堂帯刀長相統キ軍勞ス、爰ニ於テ、新納駿河守・久永九郎左衛門尉戦死也、日州鉄肥ノ任人上原彦五郎指合テ太力打ス、其同心ニ宮原越中守・長谷場兵部少輔・竹之内備前守合戦ヲ仕リ、太刀下ニテ分捕ス、又折目ノ御軍勞ヲ被成時、圖書頭忠長御供ヲ吞ムル也、其場ニ上原長州參ラル、又弓手ノ方ニハ山田新助・

稻留新助太刀打ス、一段ノ軍勞也、斯リケル処ニ、中務太輔家久父子御馬ヲ駆入サセ玉ヘハ、敵ノ兵指忍ヘ合戦ヲ仕リ、家久ニ名譽ノ疵ヲソ捧ケル、軍陣軍旅ノ御高名申モ余リ有ケラン、相統キ、又四郎十七歳ニテ御手柄ノ御太刀ヲ成レ、比類ナカリケリト云々、

是ヨリ以下降信戦肥前軍敗走、代賢和尚島原渡海等之支トモ、大概本段ニ同、

合志隈部宇動等屬旗下事

同年八月下旬、肥後表合志藏人親為ハ早薩摩方ニソ參ラレケリ、阿蘇家ト隈部ノ親光、和井府ノ宗家ナト未タ御下知ニ從ハス、此等退治トシテ、大將ニハ

兵庫頭忠平公、相從一門宗徒ノ勇士數百人、大勢ヲ卒シ隈本ヘ打入、即吉松ヘ御陣ヲ付ラレケリ、其内ニ和井府ノ松尾城ヲ可攻評定有ケル処ニ、城ヲ明退落失ケリ、暫在陣有ケル程ニ、隈部ノ親光モ赤星宗家モ降參ノ由ヲ申サレケリ、追付長野カ居城ヲ攻ラレケル程ニ、是等モ降參申タリ、味方ニ矢上兵部左衛門打死ス、夫ヨリ内ノ小鹿モ、山鹿雲洞モ參ラレタリ、去共勝代未タ肥前方ナル間、高瀬ヘ御陣替有ヘシトテ打入、高瀬在番ヲソセラレケル、聽テ勝代降參申サレケレハ、美毛モ即參ラレタリ、美毛殿ハ庶子宗領ノ争シテ、前美毛ヲ追出セハ半人ト成リ、合志ヲ頼テ居ラレケルカ、薩戸勢高瀬ヘ打入ノ折節、當美毛ヲ追出ス、肥前ノ如ク立退ケリ、前美毛古郷ヲ安堵シテ、無ニ薩戸方トソ成ニケル、夫ヨリ和仁・江原・大津山モ降參トテ參陣ス、筑後ノ大名ニハ蒲

地鎮宗・富饒鎮連・久留目林慶入道・黒木宗龍入道・同息ノ益種・溝口周防守益家・西牟田左近將監種純・星野・草野・尾山執行良觀・筑紫上野守弘門・田原下總守茂種、筑前大名ニハ秋月筑前守種實・高橋右近太夫種春、皆悉ク御旗下トソ申入ラレケル、龍造寺政家モ、薩摩ハ親ノ敵ナレト身ノ大事ト見ケレハ、江島長門守ヲ人質ニ差出シ、頼ニ降參ノ由ヲソ申ケル、然ニ春野間ト云所ニ、悪黨等要途拵取籠リ無道ヲ振舞ノ間、足輕トモヲ差遣シ即追伐セラレケル、從夫高瀬表ノ諸軍敗陣ヲソ申サレケル、如此國ノ勢ヒモ強大トナレハ、諸方ノ大名郡司モ年頭歳暮ノ御祝言、国々ヨリ申上ラル、其礼式仕合ノ威美事申計ナシ、去程ニ、八朔ノ為礼義、宇都・合子ノ使者罷出、太刀ノ前後ヲ争テ事煩ク成ニケル、宇都ノ使者先キニ立所ヲ、合志ノ使者素袍ノ袖ヲ引留ル、宇都ノ使者腹ヲ立、太刀目錄ヲ差捨テ、上ニ成下ニ成相撲ヲ取有サマ、餘リニ笑クソ見ヘタリケリ、

世録記曰、天正十二年^{甲申}、合志藏人・隈部但馬守・宇動左衛門

尉欲屬薩摩、遣使聞達

大守義久公、由是八月廿八日

兵庫頭忠平公率軍旅赴肥之後州隈元、而構陣於吉松、當此時赤

星^{城所之}三池皆屬來、而後構陣於高瀬、則日間野・大野・大津

山・和仁・邊春・田島・鹿子木・東郷・小代來降焉、龍造寺肥

前守正家亦以添島長門守為質也、且筑後蒲地某等・草野宗養・

星野九左衛門尉、筑紫之秋月種實・原田伊賀守來于麾下也、因

茲

兵庫頭忠平公歸陣矣、

惟新公御記曰、肥後熊元城主菊地之苗裔、親政雖豊州之旧好可

候當家由依中、天正十二年^{甲申}令進發隈本對面親政、自夫着陣
吉松、然者合志・赤星・隈部・三池・小代各相從之間、目出度
令畀國畢、雖然、阿蘇家者偏存大友一身之儀不相從、故翌年間
八月十四日押寄堅口、彼城平攻、城主及從軍悉令追討、依之、
高佐・三船・津森・木山・南郷・矢部之凶徒等、不叶防禦敗北
矣、

私曰、阿蘇家御攻、天正十三年ニテ後段ノ衰タリト云トモ、
文章連続スルヲ以断チカタキ故、其俟愛ニ記ス、

花山合戦鎌田政虎木脇祐昌戦死

愛ニ、阿蘇家ニ美船ノ主甲斐入道宗雲ノ息、嫡子ハ參河守、二男
ハ相模守、三男林越前守ト云リ、然ニ嫡子參河守ト三男越前守ト
ハ、父存命ノ時蒙不孝、如肥前去退ケル、仍テ二男相模守親教父
ノ家ヲ連続ス、彼親教花ノ山可攻由度々申ケレトモ、

三國軍記曰、肥後益城郡小熊之花ノ山ニ城アリ、是ハ先年相良
義陽ト甲斐宗運對陣ノ頃、鹿兒島方ヨリ此城ヲ拵ヘ、御船ヲ下
ニ見下シ、甚タ剛氣ヲ制センカタメ、木脇刑部左衛門・鎌田左
京亮ヲ籠置シニ、宗運一世ノ内何トカ思ケン、コノシロヲ手ニ
掛スト云々、

宗運入道是ヲ許サス、花ノ山ヲ攻シコトハ尤輒ルヘシ、彼城落去
ノ由薩戸ヘ相聞ヘナハ、定テ大軍差上セラルヘシ、其時誰カ是ヲ
防カン、阿蘇家ノ大事極ルヘシ、阿蘇家ヲ思悔テ、堺目ニ是程冠
弱ナル小城ヲ取ラル、コトコソ怖シケレ、無勿鉢ト云テ大ニ制セ
ラルニ依、力不及シテ日ヲ送ケル処ニ、父宗運同年ノ夏老死セラ

レケル、相模守父存命ノ時ハ免シナケレハ、依難背命堪忍シタリ、
於今ハイツ迄忍ヘシ、倡押寄攻落ヘシトテ、阿蘇家八千町ヲ催シ、
天正十三年八月十日ニ花ノ山ニソ押寄ル、地頭職ニハ木脇刑部左
衛門尉、薩戸入番ニ鎌田出雲守ノ一男左京亮大將トシテ、各在番
勤ラル、其外求磨・八代ノ人々相籠リテソ防キケル、阿蘇家ノ軍
兵大勢ニテ、混攻ニコソ責ニケル、城中ノ兵死ヲ不顧骨ヲ碎キ戦
ケル、左京亮ハ西ノ口ヲ堅メケルカ、勇士トモニ下知ヲ成シ、二
度防キ返サレケレトモ、敵ハ猛勢也、入替々々攻ケル間、左京
亮モ數ヶ所手負、次第ニ身モ弱リケレハ、木戸ノ構ヘニ寄カ、リ、
手ヲ合十念シテ、終ニ戦死ヲ遂ニケル、木脇刑部左衛門ハ大手ノ
口ヲ堅メケルカ、諸軍兵ヲ勇メテ、今ヲ最後ト思切、追ツ捲ツ戦
テ、是等モ敵ヲ追退ト云トモ、味方悉ク打死シ、其身モ數ヶ所手
負テ、今ハカナシトテ、西ノ空ヲ打詠メ、

打人モ打ル、人モ敵ヲ浮世ノ夢ハ今ソ覚ケル

ト一首ツラ子、眼近キ敵ヲ追拂ヒ、終ニ打死シタリケリ、薩戸・
求磨・八代ノ流石ノ人々籠居タレハ、無比類思々ノ戦死タトヘン
方ソナカリケリ、浮世ニモロキ花ノ山、秋ハ露霜ニ紅葉シテ散リ
行浮世ノ習トテ、無常ノ風ニ誘レ、皆チリ々、ト成ニケリ、名ヲ
ハ古郷ニ留置、姿ハ花ノ山陰ニ草葉ノ露ト消ニケルヲ、敵モ味方
モ押並テ、衰レ成カナト申ン人ソナカリケリ、此由薩戸ヘ聞ヘケ
レハ、三州ノ軍勢我先ニト統キ參ル程ニ、大勢早八代ニ着ニケル、
同聞八月十二日法蓮寺カ嶽ニ差上セ、陣所ヲ見セ玉フ処ニ、若武
者トモ足輕ヲ卒シテ隈莊口ニ野伏ヲカケ、敵五六人打取、其競
ニ幸佐ノ城ニ押寄、混攻ニ攻ケル程ニ、無時刻攻落シ、勝吐氣動
ト作りケル、鹿兒島ノ住人始良新三郎大手ノ木戸ニ於テ無比類振

舞ナルカ、其比年ハ拾六歳、即打死セラレケリ、平田左馬允連々志深思ヘル人ナレハ、此由聞ヨリモ、城戸ノ内ニ攻入、思敵ヲ打取、我身モ疵ヲ蒙リ、始良ヲ取テ出ラレケル、無比類次第也、寄手ノ軍兵下楯ヒヲ攻破リ本丸ヘ攻上ル、敵モ烈シク戦ト云トモ、皆悉ク打死セリ、城モ即落去セリ、城主ノ妻子ヲハ福島ノ人々生虜リケル、過シ比、花ノ山ニテ打果サレシ人々ノ手向ニセヨトテ引張テ見セケレハ、我身ノ上ト心得テ、隈ノ荘モ三船モ無為方ヤ思ケン、同十五日ノ早朝ニ城ヲ捨テソ逃去ケル、夫ヨリ津森・木山・友智・中山モ皆城ヲ明ケ逃去ケル、阿蘇ノ惟行モ幼少ニ御在セシカ、早降参シテ、薩ノ方ヘソ参ラレケル、又合志ノ藏人ハ吉松陣ノ折節、野心ノ志アリ、吉松ノ御陣ニモ相圖ニ鉄砲打セツ、敵方ヘ告知セ、高瀬陣ノ其時モ、味方遠ク陣ヲ取テ種々ノ謀計ヲ成ナリ、三船知行ノ折節露頭シテ、合志ヲ下城サセ、八代ノ内小野ト云所ニ移シ置レケルカ、又薩ノ如ク参リ、菱刈・羽月ノ山里ニ暫住居セラレケルカ、終ニハ討戮セラレケル、和井府モ隈部モ、吉松陣ノ折節御約束申ケレトモ未タ参ラサリケルニ、此刻知行セラレ、美船ニハ

忠平公打入玉ヘハ、隈ノ荘ニ伊集院忠棟打入ケル、即城親政・伯耆ノ顯隆・同舍弟ノ顯廣、其外隣國ノ大名郡司参陣シテ、御祝言ヲ申サレケレハ、肥後國中ニ残者ハ無リケリ、去程ニ、此度御手裏ニ進ル城数、津守・木山・友智・中山・白石・田代・武宮・幸佐・堅志田・隈ノ荘・美船、此表ハ合志・和井府・鴻巣、以上十四ヶ所、一月ノ内御領分ト成ケレハ、薩ノ人々ハ、目出度御代ト喜合ヌ者ナシ、同九月下旬ニ、

忠平公ヲ始トシテ、諸軍兵皆叛陣ヲ成レケル、右馬頭幸久美船

ノ番大将トシテ有ケレハ、肥後國中ノ人番替ニ美船ノ番ヲソ動ル、是ヨリ先キ此年四月、

忠平公ヲ守護代ト定玉フ、

世録記曰、天正十三年乙酉春陣於花山、使鎌田左京亮政虎・木脇刑部左衛門尉祐昌守其地、甲斐宗連之次子相模守權阿蘇八千町之士卒、而八月十日攻陷花山、則政虎・祐昌其外三十余人戦死也、

義久公聞之、卒数万之騎步赴八代之地、到閏八月十一日擊殺隈莊之凶徒、得首二百余員也、同十三日攻甲佐・堅志田、

義弘公魁諸軍登城也、於此戰平田新四郎被疵、始良新次郎戦死也、故同十四日夜、御船・木山・津守等委而去焉、同十六日隈

莊城主甲斐上総介且阿蘇惟前脱甲来焉、先是合志於吉松陣有隠謀之事、而今忽顯則無所指手足而降城謝其罪、以向薩摩来服矣、其後

義弘公九月下旬帰陣也、蓋高森有合心於豊後之間、故稻富新助長辰、阿蘇氏之臣仁田水右衛門佐等至高森欲得質人不得、却困

仁田水、然長辰漸免脱矣、乘其時、甲斐親乘・満永宗甫亦畔

太守、津守城曾為満水之本領、今也伊集院肥前守久春為地頭守其城、忽窺久春之不在城時、而十一月十五日陷津守城、爰聞於

薩摩、新納武藏守忠元卒諸軍、翌天正十四年丙戌正月七日、発大口至三船、使市来下総守及忠元之臣立本玄蕃允運討其讎之策、

坂無地遣忠元之陪臣二人矢邊、新納四郎左衛門尉・有村隼人佐・園田丹後守其外歩卒数多行向、誅伐謀逆之徒、而後同廿三

日欲陷高森之時、或人曰、廿三日

貴久公之忌日也、不忍殺人屠城乎、忠元曰、大

貴久公退逆臣之黨徒拳忠士之貞良、于朝于暮勞心治三州者非此
公之功哉、當其忌日誅伐逆徒、其靈威助戰場必矣、何可忍之、
則應其言軍衆出高森陷焉、

攻筑紫弘門事

天正十四年^{丙戌}夏ヨリ筑紫立之評儀アリ、彼上野守弘門去々年ノ頃、
御旗下ニ可參由申ケレトモ、異変シテ豊後方ト成、誠ニ疎意ノ至
也、可加誅伐トテ御出陣ノ評儀相定リ、同六月十三日
義久公・義弘公・歳久公・家久・薩广守義虎・圖書頭忠長、其外
一門宗徒ノ人々相具シテ、肥州八代へ打入玉フ、去程ニ、筑紫へ
打立先陣ノ大将ニハ、薩广守義虎・圖書頭忠長・伊集院忠棟・喜
入撰津守・吉利山城守・伊集院下野守・上井伊勢守・鎌田少外
記・同名出雲守・山田越前守・本田因幡守・上原長門守・伊集院
肥前守・税所新助・宮原左近將監・稻留新助・遠矢信濃守・梅北
宮内左衛門尉、宗徒ノ勇士数百人、都合其勢二万余騎、筑後ヲ差
テ攻上ル、同七月三日高良山ヘソ着ニケル、即ハ幡ノ座主打向ヘ
ニ參ル、夫ヨリ秋月種実・息ノ種直筑後ノ諸大名皆參陣申サレケ
ル、同七月六日堺目ニ軍兵ヲ差出サル、所ニ、筑紫弘門之ヲ見テ、
勢ヲ出シテ防キ戦フ、去トモ薩广勢大軍ナルカ故、其場ヲ追崩シ、
鷹取ノ城ニ追入、其只攻ニ攻ケル間、鷹取ノ城モ和賀山モ其日
落ニケリ、追付筑紫カ居城へ押寄、外拵ヲ打破リ、本丸口ニテ各
数ケ度ノ合戦アリ、中ニモ川上左京亮心勇ノ武士ナレハ、其方彼
方ニ馳合セ働ケルカ、数多ノ平負、心剛ナレトモ痛手ニ疲レ、朱
ケニ成テソ伏タリケリ、是ヲ見ル人々、惜哉人ヤトテ、籠手ヲ濡

サヌ者ソナシ、其外所々ノ軍兵トモ、我モ々、ト攻入テ高名究メ、
或ハ打死シテ名ヲ子孫ニ殘シ、昔語ト成ニケル、去テ筑紫ハ力不
及叶難ケレハ、死ヲ遁レント思ヒ、同十日ニ膝山ヲ下城シテ、薩
广方ニソ渡シケル、去トモ薩广ノ人々ニ心悪クヤ思ケン、山ノ方
へ逃入落行ケル、山中ニセン方ナサノ余リ、古キ歌ヲ思ヒ出シ、
一首此ニソ連子ケル、

存命ヘハ又世ニ出シ折モアリ

山ノ奥迄照セ月影

ト打詠シ、漸々山ヲソ逃出ケルトカヤ、味方ノ人々はヲ聞、嗚呼
シラケ、リトソ笑ケルカ、後ニ思合スレハ、弘門知慮有ケルトカ
ヤ、

世録記、此時三郎二郎忠隣被鎗疵^{云々}、其外本文大意同、

攻陷岩屋城事

筑紫カ外城ニ寶満ト云城アリ、是ヲモ受取ントシ玉フ所ニ、筑前
国岩屋ノ城主高階入道紹運、彼宝満ヲ薩广へ渡スマシキトテ、番
手ヲ入楯籠リ、渡シマシキニソ定リケル、然ハ紹運カ居城岩屋ヲ
可攻トテ、同七月十二日御陣替有テ、武蔵ト云所ニ着レケリ、此
所ハ菅丞相ノ旧跡天祥カ嶽ノ麓也、各南無天満大自在天神ト奉リ
礼シ、此度ノ嘉運ヲ祈リケル、明ル十一日息ヲ休メ、兵儀ヲ調ヘ、
同十四日ニ岩屋ノ城ニ押寄陣ヲ着、十輪轉ト取巻ク、即筑前ノ秋
月・高橋馳參ラル、豊前ノ城井・長野三千余騎ニテ參タリ、筑後
ノ原田・富饒・蒲地・黒木・溝口・西牟田・久留目ノ入道・星
野・草野モ參リケリ、去程ニ、野頭ハ肥後・日向ノ軍勢、大手ハ

隅薩ノ両勢、東ノ山ノ肩ハ豊前ノ城井・長野、西筑州ノ大名共、
大旗小旗相知^{シルシ}秋風ニ吹靡シ、飄々タルハ美々シカリケル有サマ
也、肥前国政家モ軍兵三千余騎相上セ陣場ヲ乞レケレハ、少シ間
ヲ隔テ陣場ヲ賦リ、島津一手ニテ一戦仕ラン、御見物アルヘシ、
若落去遲留仕候ハ、御加勢有ヘシト有ケレハ、少シ隔リ陣ヲ取備
居タリケリ、薩ハ親ノ敵ナレハ、仕合ヲ見、後切セント思フ心
モアラン、心悪シト申ケル、然トモ、九州ニハ豊後ハカリソ残
リケリ、七八ヶ国ノ軍勢參陣シテ、漫々タル勢イ森シク見ヘケレ
ハ、心ノ外ニソ思フラン、去程ニ、岩屋ノ城ヲ引開ミ降參スヘキ
由、両三度云越レケレトモ、彼紹運ト云ハ、天性心剛ナル者ナレ
ハ、下城セント云氣色ナシ、明日ハ城攻タルヘシトテ、懸梯ヲ調
テ持運ヒ動シケレトモ、夫ニ臆シテ下城セント云氣色更ニナシ、
秋月筑前守種實此由ヲ見、不便ナル次第也、某一腰仕ラントテ、
使僧使者ヲ以テ、今豊州ノ義ヲ何ヒ、守賢儀ヲ心猛ク思ヒ玉フト
モ、国中防戦ニ不可似、今島津家ヲ見ルニ、争カ御運ヲ開カルヘ
キトモ不覚、死ヲ一編ニシ玉ヒテ何ノ詮ソ、薩
太守ニ降參シテ、自今以後忠功ヲ成シナハ、乍不及可然モ取成致
スヘシト申シケレハ、高階入道聞ヨリモ、猶コソ思ヒ益鏡雲ヲヌ
月ノ都ヨリ関白秀吉公ノ上意被仰下、忝モ甲斐アル心ノ闇ヲ晴ス
ヘシ、其上数年大友家ニ隨テ、今背豊州露命ヲ借トテ、此急難ヲ
延タリトモ、千年ヲ待ツヘキカ、居城ニテ腹切テ法師カ首ヲ島津
家ニ渡シ、名ヲ後世ニ留メ、賢臣不事ニ君ノ法ヲ守リ、武士ノ遂
本意衷、今生ノ思出ト存ル也、種實ノ御芳志トカウ申ニ不及ト、
返事ヲ申切ラレタリ、敵モ味方モ是ヲ聞、嗚呼剛ナル武士トテ、
哀レ催サヌ人ハナシ、扱ハ無是非次第也、時刻ヲ不可移トテ、同

七月廿七日ノ寅ノ一天ニ、四方ヨリ押寄せ、吐氣ヲ動ト拳テ、石
火矢鉄炮放シカケ、呼キ叫ブ、其声天地振動シテ煙塵天ニ上レハ、
物ノ色地モ不辨、人ニハ人弥重テ、懸梯ヲ取カケ攻上ル程ニ、城
内ノ兵死ヲ不顧防戦ス、於大手伊集院左近允・矢上太郎四郎、八
代ノ住人養田弥四郎無比類振舞ナルカ、即打死セラレタリ、久富
木撰津介ハ痛手負テソ退ニケル、敵詰ノ城ニ引籠テ、今ヲ最後ト
相戦、撰津守ノ二男喜入三郎二郎・有馬弥左衛門・宮原越中守打
死ス、山田越前守・上井伊勢守・宮原左近將監石打ニ岸ヨリ下ヘ
打落サレ、身体危ケレハ、人々助ケ退ケリ、肥後隈元ノ住人井牟
田宮内三郎、八代ノ住人の場後藤兵衛モ手負ヌル上、石打ニ打レ
テソ退ニケル、日隅薩三州ノ軍勢、諸外城ノ士等打死シ、或ハ石
打ニ合ヒ、或ハ合戦高名スル人多シト云トモ、幾人ト是ヲ記シカ
タシ、寄手ノ勢モ死ヲ事トモセス、手負・死人ノ上ニ相重テ攻上
ル程ニ、早ニ二ノ丸ハ攻落シ、詰ノ城ニ切入レハ、紹運入道右ノ
腕ニ痛手負、今ハ早最後ソトテ、矢倉ノ上登ルニ、頸威長ケニ差
伸ヘ、點心シテコソ居ラレタリ、寄手ノ兵落合テ、紹運法師ノ首
ヲ取ニケリ、此岩屋ノ城ト申ハ、巖石峻クシテ、天ニ聳ヘタル高
山也、此城ヲ攻シコト、凡慮ノ所為ニテハ叶ヒ難ケルカ、宝輪空
飛時ハ瓦礫荆棘モ平地ト成ト云コト誠ナリ、其日モ巳ニ申ノ刻ニ
落去シケレハ、觀世音寺ノ西ノ方ニ頸トモ取備ヘ、勝吐氣ヲソ作
リケル、紹運ヲ始トシテ、八百余騎ノ滅ヒケリ、其翌日、若キ人々
足輕トモ相催シ、箱崎詣ニ事ヨセ、立花表ニ打出兵燹ヲ焼立レハ、
其辺仰天シテ、豊前国彦山座主ノ坊ヨリモ使僧ヲ差上ラル、扱又、
此程ノ究屈休ントテ、箱崎八幡ヘ參宮シ、或ハ安樂寺ヘ參リ、天
滿天神ヲ伏拜ミ、飛梅老松ノ殿ヲモ再拜シテ本地堂ニ參リ、御池

ノ橋ヲ渡リ、相初川ヲモ打詠メ、昔元曆ノ頃カトヨ、安徳天皇ノ古跡、宰府ノ内裏ナト一見シテ、薩戸ノ人々ノ形勢誠ニ由々敷ソ見ヘニケル、又立花ノ宗虎宗虎花左衛門ハ彼紹運ノ嫡子ニテ、立花ノ宗益ノ養子也、直ニ御陣替有テ、退治有ヘシト評定アル所ニ、八代ヨリ余リ長陣ナル間、先ツ帰陣有ヘシト仰上セラレケルニ依テ、岩屋・宝満ヲハ秋月種實ニ預ケ置玉ヒ、隅薩ノ勢八代ノ如ク引レケル、此時筑紫上野守ハ高良山ヘ出テ、右衛門太夫忠棟ニ參會シ、降參シケルカ、薩戸勢引陣ノ紛レニ、世上ノ牒ヲ見刷ヒ、人實出シ、我身ハ彦山ノ方ヘ參ルトテ、筑紫ヘ引返シ、己カ居城ニ馳籠ル、彼筑紫ニハ、草野・星野・高良山執行ニ預置玉ヘハ、番手ヲ入テ持ニケル処ニ、彼番手ノ勢ヲモ追拂ヒ切取シコトモ、百日ノ内ニシテ己カ遂本意、武略ノ至抜群ナルト申ケル、然トモ、此節ハ力ニ不及トテ、九月廿日ニハ八代ノ如ク先々帰陣アリケリ、此度ノ軍陣ノ疲労ヲモ休ントテ、諸国ノ大名小名相集リ、渋谷太夫与吉郎ニ三日ノ御能サセ、人ノ心ヲモ慰メ玉ヒ、斯ル日

出度折節ニ、先々御帰陣アルヘシトテ、

太守其外一門ノ人々、軍勢ヲ牽テ如薩戸引セ玉ヒケリ、五島・壹岐・對馬ハ、去年加世田ノ住人伊尻伊賀守ヲ差渡サレケル処ニ、皆御味方ニ可參由申サレケルカ、岩屋落去ノ折節、直ニ筑前ヘ使者ヲ差上セ、御祝言ヲ申サレケル、

翰遊集曰、五島ニ伊尻ヲ差下サル、小島トハ申セトモ、人ノ嗜深クシテ、御使者下向ノ會尺ニハ、馬狩ヲ馳走也、又夫ヨリハ壹岐ノ島方・對馬方、皆一同ニ御當家ヲ御頼母シク申上ラレテ、筑前表ノ御陣ニハ、直ニ使者ヲ差上セテ御札ヲ言上シ、ツフテト云ル御酒樽ヲ數百荷ノ進上也、其時諸軍勢雲霞ノ如ク立

ツ、キ、此大酒ヲ下サレテ、狂言ニ取合セ、イサヤ人々出合テ、ツブセ打ニ申サント、ツカ子繩ヲトキノベテ、手毎ニ一ツ二ツツ、取持テル有サマハ、御全盛トソ見ヘニケル、

世録記曰、筑紫廣門所領宝満之城者、岩屋之城主高橋紹運鎮種欲警固之、而令次子弥七郎直次守之、由是同十二日我兵到天拜嶽、十四日構陣於岩屋之四面、則秋月種實・豊前之城井弥三郎友綱・井長野三郎左衛門尉・龍造寺政家等引卒諸軍而來也、然政家素為我家之敵、不知其心中之向背而嫌疑之際、草野宗養・原田伊賀守・筑後之星野九左衛門尉亦來合力矣、當此時也、九州之内唯豊後一國與筑前之鎮種者不屈

太守之旗下、故雖再三遣使僞誘之不肯從矣、同廿七日進攻岩屋之城、權左衛門尉久高・長谷場兵部少輔首切最初也、久富木根津介被傷、其外越前守有信・伊勢守覺兼・宮原左近將監・中馬大右衛門尉・江田宮内左衛門尉軍功冠諸軍者也、臨其時而忠長

單騎謂敵兵曰、今我起義兵來、不如棄弓脫甲降矣、敵城之健將勇士聞之、撫劍疾視對忠長相戰、永長介永長介法号馳來添力、是時忠長鎗半折身已危、而從軍之士卒戰死者幾多、忠長之田戰死者、宮原伯耆守・山元助六・森助七・白崎上座、然督戰以進紹運、鎮種窮而登井樓自刎死焉、其外討捕者一千余而城乃陷也、紹運之田戰死者有土橋記之、高橋經前守、屋山中務太輔、同助、江朝右衛門太夫、中島治部少輔、同姓四郎、了了、同姓右衛門尉、土師兵部太輔、同姓七郎、北原内藏助、同姓四郎、伊部九花、同姓右衛門尉、同姓大守、同姓九郎、市川玄蕃丸、野田右衛門太夫、北原次右衛門尉、同姓六兵衛尉、同姓外記、加賀備前守、同姓三九郎、福田關守、同姓左馬助、原田伊豆守、富元忠富、同姓三河守、同姓新助、同姓長兵衛門尉、同姓三兵衛尉、同姓次郎、同姓右衛門尉、同姓市丞、中馬半人在、同姓左馬介、同姓大炊介、今村幸計頭、同姓永壽、同姓喜助、同姓石馬允、同姓五郎、同姓石兵衛尉、同姓内藏助、同姓三兵衛尉、同姓新三郎、荒川經藏守、同姓伊豆守、長松加賀守、同姓福部介、土岐大隅守、同姓良甫、水城喜助、合原内膳守、酒崎右衛門尉、同姓次郎兵衛尉、鬼木左馬介、成喜新五郎、松延助七郎、石橋弥助、前堀助、原口喜助、屋山右衛門、水野大守、井上主水止、長田大藏介、關助七兵衛尉、山下刑部丞、同姓九兵衛尉、伊

勢民部太輔・田中友義守・同姓四郎兵衛尉・同姓主馬丞・同姓左介・小島監物・淡江仁右衛門尉・大石七兵衛尉・行徳石馬允・同姓次郎一郎・岩内威丞・園木李助・藤和泉守・同姓左馬輔・同姓藤部丞・田原運次・赤坂運次・伊部孫三郎・同姓市正・高尾助解由次郎・同姓治郎少輔・同姓六郎・藤部式部丞・編島主水止・村山剛部左衛門尉・茂松兵部少輔・同姓宗休・轟木三助・林田三郎・小川宮内少輔・同姓新右衛門尉・麻島孫太郎・弓削二郎三郎・同姓正忠・菅島左京亮・湖上兵右衛門尉・桃山吉助・徳川備前守・同姓大藏助・二原和泉守・同姓宗九郎・古野右馬介・光行源次郎・賴戸口市丞・神田四郎三郎・輪崎長門守・同姓準人助・中願寺和泉守・同姓孫太郎・平山何右衛門尉・山元右馬允・萩尾赤吉兵衛尉・木村新右衛門尉・野上右衛門尉・千里事人佐・同姓七郎・戸坂市丞・巖岩事人佐・古野左京亮・森光輝正忠・内田出雲守・同姓内膳助・原越後守・久保李助・今村邦正忠・同姓刑部丞・同姓貞慶同姓運右衛門尉・求井民部左衛門尉・橋小路市助・同姓勘助・久保勘右衛門尉・綾部山城守・木野八郎・同姓新兵衛尉・花田宮内少輔・同姓勘助・上村刑部少輔・鬼村外記・同姓酒右衛門尉・佐藤善丞・八尋源助・加藤雅榮介・實田宗祐・橋本善兵衛尉・長久二助・藤助内・合山助・木下左助・同姓監物・大原木市助・米台市助・同姓新四郎・中島田作丞・財津式部少輔・小川備後守・内山田藏人・坂口右衛門尉・戸渡善助・大塚七郎・今村太郎五郎・合内藏助・戸渡刑部少輔・中川三郎・徳川源兵衛尉・同姓兵右衛門尉・市曾善九郎・藤原源内・大野準人祐・小島左馬介・同姓善助・松岡掃部介・吉田三郎次郎・合至助・天野弥兵衛尉・齊藤十助・宮松与助・中野清為・安河内三助・清未藏内・道上藏殿介・生須藏人・野上左衛門尉・中村甚助・同姓左近大夫・兼師寺三助・水城藤左衛門尉・中島新五兵衛尉・榎外記・同姓新三郎・古波李助・栗木大宇助・同姓弥三郎・因分次郎三郎・上原藏右衛門尉・千壽大藏助・同姓監物・榎部外記・上野式部少輔・同姓平三郎・園田平兵衛尉・今村次郎三郎・米藏助左衛門尉・藤藏人・河原左馬介・藤原出雲守・原左近將監・今村治部左衛門尉・山下金助・中島勘解由次郎・八尋市助・北島監物・中島安善九郎・笠原孫助・仲勘助・北孫山伊豫守・田島次郎三郎・野村金助・同姓藤内・邊原次兵衛尉・梅野左京亮・中島与次郎・長尾左京亮・大河備前守・更原七郎・吉田右丞亮・麻生外記・甲斐勘解由次郎・安内藏助・黒木徳三郎・藤善兵衛尉・西山藏部介・高木新五兵衛尉・我軍・喜入掃部助・伊集院左近允・養田弥四郎・野村玄白云々

矢上太郎五郎・有馬弥六・宮原越中守戰死・其外步卒等死者不知數也、高橋源七郎直次聞岩屋之陷而、立花左近將監下宝滿之城為

質而來也、且欲攻立花城以使僧曰、降來是也、若不然而當催兵屠汝黨族也、左近將監宗虎對曰、父紹運鎮種死損義欲生非士之志、

須待精兵之來也、此時忠長・忠棟・忠虎・忠元憐察曰、是誠勇士也、徒擊此人則顧非義也、始欲引退之際、

太守義久公送使云、可致帰陣、於是應命帰陣矣、是日岩屋并宝

滿令秋月守之去焉、筑紫某於高良山會忠棟出女子為質、是誠我所欲也、將向肥後相携其人之時、筑紫之計輒變、彼向居城而逃

去也、故悔情含憤、而到八代、雖然、愛憐人力之勞衰者

太守義久公之仁意也、軍衆遂共帰國矣、

明
赫
記

卷之七

攻豊後敗走大友付家久与仙石長曾我部
合戦上方勢敗北之事

其頃織田信長公ハ、其臣惟任日向守光秀カ為ニ弑セラレ玉ヒケルカ、羽柴筑前守秀吉山崎ノ趨合打勝テ、日向守ヲ誅シ、即天下ノ主トナリ、程ナク太政大臣関白ニ昇進有ケル、大友宗麟入道ハ天正十四年丙戌春上洛シ、秀吉公ニ訴申サレケルハ、島津義久日向ノ伊東ヲ追却シ、自夫肥後・肥前・筑後・筑前迄モ打從ヘ、近國ニ威ヲ振ヒ候、今ノ如シハ、豊後・豊前トテモ抱エカタク覺候、無念ノ至ニ存候ヘトモ、今ハ早我力ニテハ及カタシ、哀レ御威光ヲ以テ島津ヲ退治シ、大友ノ家ヲ残シ度候トソ申上ラレケル、
此時、大友重代ノ家寶骨喰ト云ル太刀ト、高橋冠華云ル名画ヲ神ケ、ルト云。薩摩ニ於テハ

太守義久公ノ思召ニハ、大友怨ヲ我國ニ積ム、遺恨忘レ難シ、夫レ薩摩・大隅・日向ニケケ國ハ

右大將頼朝卿ノ時ヨリ我家領帯ノ地ナリ、故ニ隣國ヲ撫恤シ傍民ヲ安堵セシメシカハ、遠近ノ貴賤來附セスト云々云ナシ、大ヲ以テ小ヲ事ルノ礼ヲ失サルニ近シ、然ルニ、日州ノ伊東ハ我ヲ背キ敵トナツテ屢我地ヲ犯ス、故ニ乱ヲ救ヒ暴ヲ誅スル之兵ヲ以テ是ヲ打シニ、伊東カ勢ヒ極テ、本國ヲ敗走シ豊後ニ落去シ、大友ニ寄食ス、彼大友カレヲ救ヒ去ル、天正六年戊寅冬大軍ヲ帥ヒ、我領スル所ノ日州新納院高城ヲ攻ケレトモ、大友却テ敗北シ、半ハソノ軍ヲ失ヘリ、然ニ今薩州征伐之夏ヲ秀吉ニ訴ト聞、彼カ謀ニ先テコレヲ伐スシハ、坐ニ亡ヲ待ニ異ナラストテ、兵ヲ催シ出陣ノ御用意アル所ニ、肥後八代ノ義田信濃守・高橋駿河守使ヲ馳テ申上ケルハ、豊後國入田宗和・志賀道益大友ヲ背キ、

太守ヲ頼奉リ、大友ヘ對シ怨ヲ報度志アルノ由申ケル、此ニ於テ義久公幸ニ思召、新納忠元ヲ召レ、早ク豊後征伐ノ籌ヲ廻スヘシト仰ケレハ、忠元承テ、則仙鏡坊ヲ入田カ城ニ遣シ、大友ニ背クノ志ヲ聞届ケサセ、三船ノ兵勦之丞并ニ忠元カ臣中馬源之丞ト云者ヲ差遣シ、其虚實ヲ試ミケル、故ニ吉良甲斐守・河南勘解由次百來テ、

義弘公ヘ見ヘケル、ソノ後橋木右京亮・中馬源之丞兩人ヲ志賀道益カ城ニ差遣ケル所ニ、志賀カ兵大塚石馬之助・新野新助ヲ以テ薩摩ニ降ルノ言ヲ伸フ、茲ニ因テ、野村与三右衛門尉ト云者、忠元カ臣尾崎彦兵衛尉・中馬源之丞、兵家秘蜜之針ヲ志賀城ニ納メケル、

去程ニ、此年天正十四年丙戌十月、大友征伐肥後口ノ大將ニハ

兵庫頭義弘公、相從人々ニハ、左衛門尉歳久・其子三郎二郎忠隣・右馬頭征久・圖書頭忠長・川上上野介信久・新納武蔵守忠元・同縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・桃山兵部太輔規久・伊集院右衛門太夫忠棟・同肥前守久春・同筑前守・鎌田尾張守政年法時・同姓出雲守政近・川上左近將監久辰・平田新左衛門尉・大寺大炊介・白濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈正忠兼寛・敷根藤左衛門尉・大野權左衛門尉久高・伊勢弥九郎貞政、都合其勢三萬七百餘騎、肥後ノ境ヨリ豊後國南郡ニ打入玉フ、肥後國ハ諸國ノ久八八代ニ殘ラレケルト云々、然人在番アルヘキトテ、右馬頭征久ハ八代ニ殘ラレケルト云々、
十月廿一日阿蘇郡野尻ニ至テ陣冊ヲ設ケ、同廿二日高城ニ押寄セ、則時ニ攻落シ、敵首數十討取玉フ、伊勢貞昌十七歳ニテ強敵一人ヲ討取、
義弘公ノ御感ニ預リヌ、扱入田宗和・志賀道益ハモトヨリ薩广ニ心ヲ合セタル者トモナレハ、隨兵千余ヲ率テ御迎ニ參陣シヌ、是

ヲ案内者トシテ、其夜入田カ城ニ入玉フ、角テ松尾壘^并ニ鳥獄ノ城モ皆陥テ敗走ス、其後戸次源三^{守備}カ守リタル津箇牟礼ノ城ヲ取囲マレケルニ、宗和・道益カ策ニテ源三下城シケレハ、義弘公ハ津ケ牟礼ノ城ニ入玉フ、然ルニ志賀道益カ嫡子道輝^{檢校}ハ城^次ト云者、豊後国岡ノ城ヲ據所トシ、病ト称シテ籠居セリ、此城ハ地形險阻ニシテ巖石屏風ヲ立タルカ如ク、一方ハ大河一筋流レテ逆浪ヲ揚ケレハ、中々徒ニテ渡ルヘキヤウナシ、評定末タ一決セサル処ニ、

義弘公ノ御中間忍ンテ、城ノ弱手ヲ見ントテ、夜ニ入竊ニ忍入、方々心ヲ配リ通ル所ヲ、城中ノ者トモ見附ツ、地下人ニ不似トテ、薩^薩原遁スマシト追掛ル、兼テ格護ノ事ナレハ、サラヌ鉢ニテモテナシ行過ルヲ、四方ヨリタイ松ヲ出シケルニ依テ、身ヲ隠サント岩石ニツカミサカル、運命尽ヌルニヤ、深岸ニ落テ空シク成ニケル、

義弘公モ此事ヲ聞召シ、其子少年ナルヲ召出サレ、士ニ立身サセ玉フトナン、其後ハ其俣ニ差置レケルカ、右ノ道輝タメニハ赤星備中守モ入田宗和モ親戚ナレハ、道益・宗和・備中守三人ノ計イニテ、種々ノ異見ヲ以テ引出サントセシカトモ、大友方ハ順義ヲ勤ントテ、更ニ同心セス、サレトモ、差置難キニ依テ、少年成リトモ子息ヲ先ツ差上テ、自身ハ快氣次第重テ參陣スヘシト申送りケレハ、道輝モ其言ニ應シ、人質ハ出シケレドモ、其身ノ參上ハ事ナラス、世上ニ事ヲ左右ニ寄テ差延ヌ、同年十二月廿二日ニ義弘公ヲ道益カ城ニ申請、無別儀モテナシ奉リ、中一日御評儀ニテ、同廿四日ニハ御陣替ニテ有之、朽網カ城ヲ繰下シ、御大將ヲ申請、御供之軍勢一同ニ陣ヲ取ル、此時白仁ノ志賀道運モ降參シ、

一万田・滑・瀧田城モ皆落去セリ、中務太輔家久日向口ノ合戦ニ打勝、大友ヲ追落シ、府内へ打入、府内ヨリ來會有テ、爰ニテ兩大将御越年ナリ、角テ天正十五年、^{正月廿六日}

義弘公ノ御陣ヲ珍珠郡野上ニ替玉イヌ、爰ニ於テ、下ノ城未タ降ラサルニ依テ、此口新納忠元阿蘇カ郡ヲ牽テ押寄せ、敵數多打取テ、二ノ丸ヲ攻破リ、上城ハカリニ詰寄せ、夜白五日ニ攻果サル、去ル間、岐部・惠良・切蕪・小国某・北里某等皆降參シタリケリ、同二月上旬、家久陣ヲ下城ニ替ラレケル、扱又日向口へハ

太守義久公、十月十八日御出陣アリ、日向ト豊後トノ境三城ニヲモムガセラレ、塩見ニヒカヘサセ玉ヒ、中務太輔家久ヲ大將トシテ、豊後國へ差遣サル、相從人々ニハ、山田越前守有信・吉利下総守・上持左馬權頭・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・上井伊勢守覺兼、其外人數一萬余騎、桃山ヲ打越、其中途寄々ノ城拵悉ク破却シ、村々ヲ放火シ、三重ニ打入ラレケレハ、近辺ノ者トモ悉ク屬シ來ル、然ルニ、緒方ノ城降ラサルニ依テ、伊集院下野守・同美作守・上井伊勢守ヲ差遣サレ、多勢ヲ以テ攻ラレケレハ、城内ノ者トモ手ヲ碎キ戦ト云トモ、終ニ攻果サレテ敗走ス、其後家久陣ヲ盤東寺ニ構ラレ、先勢ヲ押出シ、進ミ來ル敵ヲ追拂セケル、角テ南郡ノ大將

義弘公へ相儀シ、家久ノ隨兵ハ三重・年滿ヲ警固シ、義弘公ノ兵ハ鑑獄・鷲臺ノ城ヲ守リ玉フ、是ヨリ先

義久公ハ文之和尚ト鎌田刑部左衛門ヲ差上セ、秀吉公ニ訴玉ヒシカハ、秀吉公ヨリ、大隅・薩摩^并ニ肥後半國・筑前半國・日向半國ヲ島津領トシ、日向半國ハ伊東・豊後・豊前ニ筑後半國・肥後半國ヲ大友ニ、肥前一國ハ毛利輝元ニ与へ、筑前一國ハ秀吉公ノ

公領タルヘシト、令已ニ定リ、文之ト鎌田ヲ可帰トセラレシニ、此事薩戸ニ聞ヘ、諸將申ケルハ、九州ノ地皆

太守ニ属セハ可也、然スンハ兵ヲ止ヘカラスト云テ、弥軍威ヲ増

シ、干戈ヲ修練シケリ、此時小寺官兵衛黒田・仙石権兵衛水野向大

將ニテ、九州国割トシテ下向ス、仙石ハ土佐ノ長曾我部右衛門尉

ヲ同心シ、豊後ノ国ニ押渡リ、大友ヲ同心シテ豊前ノ国ニ打越ラ

ル、小寺ハ中国ノ毛利ヲ同道シ豊前ニ着シ、国分ケノ令ヲ行ント

セラレケレトモ、城井・長野・秋月・高橋ナト偏ニ薩戸方トテ、

小寺・仙石ニ曾テ従ハス、折節薩摩ノ軍勢向口ヨリ豊後ヘ乱入ノ

ヨシ聞ヘケレハ、仙石ハ大友ヲ同心シテ、豊後ノ如ク引返サル、

其外諸国ノ勢モ皆国々ヘ引入ケル、去トモ小寺ハ相留リ、漸ク豊

前ヲ相静メテソ居ラレケル、去ホトニ、薩州ノ勢霜刃鉄騎雷轉風

驅シテ、大ニ豊前半国ヲ打破リ、其餘當ルヘカサレハ、大友左

衛門尉義鎮驚蹙キ、魂魄ヲ失ヒ防禦ノ術ヲシラス、爰ニ於テ義鎮

仙石ニ相儀シ、府内ノ上原ト云所ニ陣ヲ構ラル、同年十二月十二

日、大友ト仙石ハ土佐国長曾我部泰信親・讃岐国十河隼人佐政泰

等ニ組シ、家久ノ年滿ノ陣ヲ侵ケル間、味方ノ兵挑戦、信親・政

泰ヲ討取ケレハ、仙石ト尾藤甚右衛門尉ハ漸ク命ヲ助リ敗北ス、

同十三日家久勢イニ乗シ府内ニ打入ラレケレハ、義鎮ハ高崎ヘ退

去シヌ、爰ニモ休ヘ得ヌ豊前国龍王ニ向テ退ケル、扱家久ハ其後

義弘公ノ御陣朽網ニ差越レ、彼所ニテ越年アリ、翌年二月月上旬

下ノ城ニ陣替アリケル、

翰遊集曰、南郡ノ大将

義弘公ト三重表大将家久トハ、御兄弟ノ御中水魚ノ如クマシマ

シテ、互ノ使節隙モナシ、鑑嶽ト鷲ノ臺ノ城ニハ、南郡ヨリ御

勢ヲ指籠ラレス、年滿ト三重ニハ日向口ノ御勢ヲ遣サル処ニ、

彼城主ハ是ヲ見テ、内ニテ評儀致シ、府内ヘ注進シ、則御敵對

致ニ依テ、軍兵ヲ指向ケ、我モ々々ト攻破リ、上城ハカリニナ

ル処ニ、御手ノ猛勢續合、跡ヲ遮リ媒略ス、用捨ノ兵者急ト見

テ、御方ノ猛勢ニ下知ヲ成シ、繰引ニ退テ陣中ニ打入ラル、其

夜モ拂曉ニ成シカハ、各支度シ打出テ、大河ノ渡リヲ見合テ詮

儀アル折柄、仙石其外ノ京勢トサシ見ヘテ、大幌高シルシ爰カ

シコニ備ヘ、花ヤカニ出立テ、城近ク成マ、ニ打入ヌトセシニ、

御方ノ勢闊ヲ作り、面モフラス切テ入ル、其勢當リカタク、花

ノ様ナル都人、馬ヲ乗捨、力ナク散々ニ落テ行、已ニ敵方敗軍

ニ及ケレハ、大将 家久ヲ始メ、諸軍勢一同ニ、勝テ甲ノ緒ヲ

シメテ、上ノ原ヘ見向ノ森岡ニ駈付テ着陣アル、家久ノ勇智敵

モ味方モ感セヌ人ハナカリケル、爰ニ於テ、家久ハ諸軍ヲ勞イ

一礼ヲノヘ時刻ヲ移ス、只今夜府内入ト下知アレハ、諸軍是ヲ

聞、我先ニトソ勇ミケル、ソノ刻敵方ハトルモノモ取アヘス、

大友ヲ引立テ豊前ヲ差テヲチテ行、打洩サレシ仙石ヲ跡ニ先ニ

ト落テ行、薩摩衆ハ是ヲ見テ上ノ原ヘ馳上リ、分捕高名遂ニケ

リ、此時ニ於テハ、足輕ヤ山野良ノ輕キ雜人下輩トモハ、斯ル

奇特ニ逢交ト、大友ノ重宝ヤ仙石等ノ捨物ヲ拾ヒ取り、町人百

姓ヲ手ニ付テ、土蔵ヲ格護スル者モアリ、十二月十二日ヨリ明

ル弥生ノ中旬マテ、蔵開キ蔵納我ヲ増トセシ隙ニ、年月日次ハ

押移リ、山野良モ堪カ子、皆本国ニ打歸リ、跡ハ無人ニナリニ

ケリ、豊後衆ハ無人ニナルヲ喜ヒテ、本望ヲ遂ント、主君ヘモ

註進シ、殿下ヘモ言上セシト云、

三国軍記曰、家久ハ戸次ノ内利光ノ城ニ押寄ケル、城中ヨリ是

ヲ見テ、竹中文藏・岩瀬玄蕃ヲ先トシ、其勢三百計鬼出々戦ケル、利光伊豫・左藤美作ヲ始五十三人討死ス、鹿兒島方モ二十三人討死ナリ、家久ハ利根ノ尾ト云ル所ニ居ラレケルカ、此鉢ヲ見テ、當城ハ戸次伯耆守カ居城ナリ、然ニ彼ハ筑前立花ヘ越テ、明キ城ニ籠リタル敵ナレハ、別テ強敵テハヨモアラシ、只一モミ攻崩シト、翌曉天ニ押寄せ、吐氣ヲ噓ト揚ニケリ、城中ニモ七百余人聞ノ声ヲ合セケル、吐氣ノ声モ静マレハ、我先ニト、高名セント勇進シテ攻上ル、城ノ中ヨリ徳丸傳八・加藤兵庫介ヲ始老若男女三十余、竹鎗・石弓・木石ヲ投懸々々討ケル間、手負死人夥敷、猶是ニモ儼易セス、息ヲモ継ス攻上ル、城中今ハ木石モ尽スレハ、草屋ヲ毀テ火ヲ付、手々ニ是ヲ抛ケル故、流石ノ鹿兒島勢モ煙ニ墮シテ登リエス、去トモ、城中數日ノ合戦ニ倦レ果テ、難儀ニ究リケルヨシ大友ニ聞ヘケレハ、大友モ急キ後詰ノ勢ヲ遣度ハ思ヘトモ、家臣大小トモニ心ヲ挟ム由、其説區々ナレハ其沙汰ニモ及ハス、兩上使仙石・長曾我部ハ、戸次利光ノ城難儀ノ由ヲ聞、豊州勢ヲ案内ニテ、其勢六千余騎、十二月十二日ノ早旦ニ戸次川ヲ馳渡シ、山ニ出張シテ、直ニ攻掛ラントソ色メケケル、家久是ヲ見テ、願所ノ幸也ト、脇ノツルト云所ニテ、互ニ吐氣ヲ合セ、一番ニ備ヘタル伊集院美作守カ軍兵、暫ク支ヘ戦ヒケルカ、何トカシタリケン、四國勢ニ切立ラレ引退ク、二番備ノ新納、東山ノ高キ所ニ馳上リツラ々々見テ居タリシカ、能キ時分トヤ思ヒケン、仙石・長曾我部ヘ切テ掛リ、死亡ヲ更願ス、爰ヲ去スト攻戦フ、家久ハ津留川原ヨリ攻寄ラル、三番備モ一ツニ成テ戦ケル、敵味方ノ軍兵一萬四千入乱レ、火花ヲ散シ、一擧ニ死ヲ争ヒケル、長曾我

部信親ハ父元親ト一所ニ居テ兵ヲ下知シケルカ、家久ノ勢急ニ寄ルヲ見テ怵ラヘ兼、自切テ出テ、追ツ返シツ戦ケルカ、多勢一度ニ取囲ミ、終ニ討レケレハ、相從フ兵細川源左衛門・福留軍人ヲ始二十四人討死ス、薩戸勢信親カ首ヲ取、呼キ叫シテ攻掛レハ、殘党散々ニ成テ、仙石ハ戸次川ヲ馳渡シ引退ク、家久ハ其弊ニ乘シテ、府内ヲ差テ攻寄タリ、然トモ長追ハ無用トテ、其夜ハ守岡ノ古城ニ取登リ、野陣ヲソセラレケル、夜ニ入テ宗像掃部介・大津留河内守・吉弘加兵衛ト云者ノ相談ニテ、主人大友ヲ相進メ、府内ヲ立高崎ノ城ニ逃籠ル、時ニ宗像・大津留・吉弘議シケルハ、此城人里遠キ高山ニシテ、兵糧ノ運送モ自由ナラス、然ハ長ク士卒ヲ養ヒ大敵ヲ引受ンコト叶難シ、豊前ノ龍王ハ田原紹忍カ居城ナレハ、遠路ナカラモ彼城ニ御入可然存候ト申ケレハ、翌日又高崎ヲ立、龍王ノ城ヘト赴カレケルト云、
帖佐宗□記曰、十日ニ戸次カ城一日攻玉ヘトモ、城ノ寄場悪クシテ不利、先ツ解玉ヒ、其夜ハ城ノ下ニ陣取玉フナリ、然処ニ、十一日ノ辰ノ刻ニ、仙石・長曾我部多勢ヲ以押寄せ、城ノ野頭ノ尾筋川越ニ打廻リ、軍ヲナサシテ引退クナリ、十二日ノ卯ノ刻ニ、敵昨日ノ如ク又押来ルヲハ、御大将ヲ始奉リ、一大支ニ究リ、思々ニ立願有テ、先ツ川越ニ矢軍ヲ始メ、鎗フスマヲ作り、心カ力ヲ一ツニシテ闕ヲ揚ケ、大勢ノ真中ニ割テ入、今ヲ最後ト打戦ヘハ、敵ノ足ナミ乱ツ、敗北スルヲ追詰悉ク討破リ、長曾我部ノ嫡子左京亮殿ヲ打取リ勝利ヲ得玉フコト、誠ニ不思議ノ御勝ナリ、然ハ親父長曾我部殿濱辺ヲ差テ行ケトモ、船塩干ナレハ可浮様モナク、不及是非次第ナリ、長曾我部殿周

章ケル処ニ、家久様ヨリ川上弓右衛門ヲ以テ長曾我部殿へ御使者有ケルハ、今度御息左京亮殿ヲ討取候立弓筋ノ故、不及是非次第也、然ル処ニ、舟毛塩干ニナリ難浮見得タリ、緩々ト塩ヲ待、帰陣アルヘキ由被仰渡候、誠ニ名将ノ至也ト、諸人感シ申候、

薩摩之諸將帰陣之事

大友已ニ府内ヲ落、仙石・長曾我部等カ軍敗ケレハ、薩广ノ軍威益々強大ニ成ヌ、此時秀吉公島津ノ罪ヲ数ヘテ曰、已ニ国分ケノ儀ヲ用ス、却テ仙石・尾藤ヲ追散シ、又長曾我部・十河等ヲ討殺シ、高橋紹運ヲ攻亡ス、是皆其科ヲ免シカタシト、大軍ヲ引卒シ、巴関ノ戸ヲ渡シ下向アル由、其声已ニ豊後ニ振シカハ、此間降参ノ者トモ、薩广方ヲ違背シテ大友ニ心ヲ傾ケスト云事ナシ、故ニ薩广勢ハ、三月十二日野上ヲ立テ、其夜ハ健軍ニソ留リ玉ヒケル、此時秀吉公ノ先勢湯ノ城ニ来リ、小寺ト謀ヲ廻シ、健軍ノ陣ヲ侵ント欲ス、是ニ依テ、味方馳合セ相戦テ、敵十六人ヲ討果シケレハ、敵方利ヲ失テ退散ス、同十三日早旦凱歌ヲ唱テ再到府内玉イヌ、サレハ叛心謀逆ノ者共相合テ、同十四日兵船ヲ浮へ出シ、沖ノ洲ト萩原ノ両村ヲ放火セシカハ、薩軍透間モナク馳続キ、敵數十人ヲ討取ヌ、

翰遊集曰、此時討取首実檢有リ、為

御名代川上上野守打出ラル、役者川田駿河守ニ被仰付ト云々、

同十五日、高野之木食興山上人・一色宮内少輔兩人来テ、頻ニ和睦ヲ勸シカトモ、諸將ノ心ニ叶ハス、皆々思ハレケルハ、不如早

ク我国ニ打帰リ三州ノ要害ヲ保チ時ヲ待ンニハトテ、義弘公ハ家久・忠長ト議シ、帰陣ノ手分ラソシ玉ヒケル、

肥後ノ方ヘ向テハ島津左衛門尉歳久、相從フ人々ニハ、町田出羽守・新納武蔵守・同右衛門佐・伊集院肥前守・同姓源助・寺山四郎左衛門尉・町田右京亮・同新左衛門尉・梅北宮内左衛門尉・二階堂阿波守・猿渡越中守等府内ヲ発シ、野上ヨリニ手ニ別レ、北里ニ留滞スルノ間、岡ノ城主志賀道輝軍衆ヲ卒シ、陣内ト云所ニ至リ、大野権左衛門・犬童美作入道休矣・同軍七・稻留將監大軍將監ニカ守タル坂無肥後ノ城ヲ侮犯ケルカ、忠元・久春之ヲ聞キ、忠元カ臣田中藏之丞ト云ル者ヲ竊ニ坂無ノ城ニ遣シ、久高二募リ、翌朝四月十六日道輝カ陣内ヲ陣内攻破リ、敵数百人カ首ヲ切掛サセ、縦横ニ鬪ケレハ、敵是ニ恐レテ敗北ス、久春斬強有首功、其子久洪亦有功、而父子競先後ノ首功、或曰、汲汲於名者猶汲々於利云々、雖然、勵其子亦善矣、世録記、坂無ノ城ニ入、大野犬童ニ會シテ、志ヲ同シテ合志ニ到テ引退ク、御船ヲ過ルノ時、隈狂ノ守兵宮原筑前守ハ凶徒ニ討レシコトヲ聞ト云トモ、救フ交ヲ得ス、只遺恨ヲ懷キ、豊福・小川ヲ相過キ高田ニ到ル、爰ニ松浦筑前守ト云者アリ、彼ハ薩摩累代ノ臣也シカ、曾テ罪ヲ負イ洛ニ遁レテ秀吉公ノ旗下ニ属シ、松浦久太郎殿ニ任フ、秀吉公大陣、陣内能知クル者ヲト尋テ折衝、殿前ト申サレケレハ、即召出サレテ賞シ、堅土田・谷山モ敵トナシケルト云々、今度先手ニ加ツテ、谷山ノ城ニ在テ種々ノ計策ヲ廻シケル間、同十七日忠元・久春彼城ニ押寄セ、其族徒ヲ悉ク追拂ヒシカハ、松浦ハ漸ク辛キ命ヲ助リ、山中ニ逃入ケルト也、龍造寺肥前守政家モ時ヲ得テ、尾牟田ト云所ニ陣ヲ構ヘ肥後八代ノ海上ニ兵船ヲ浮へ、比奈久ニ到リ漁村ヲ焼立ケレハ、忠元・久春諸軍ヲ卒シ、其徒ヲ追ハラヒ、高塚ノ関ヲ過キ、

八代ノ城ニ入テ、征久・久倍兩將八代ニ會セラレケリ、此時秀吉公ノ幕下ノ軍モ宮ノ原ト云所ニ柵ヲ設ケ、海陸ノ軍勢幾千萬ト云支ヲ知ラス、故ニ肥後ノ國人等心變セヌ者モ少ク、諸人ノ心疑シケレハ、忠元明智ノ人ナレハ、稚會ヲ催ニカコツケ國人ヲ會シケル折節薩廣ヨリノ士卒ト稱シ、馳來テ申ケルハ、羽柴美濃守日州ノ合戦敗北セラルニ依テ、

太守ノ旗本追拂ヒ、美々川ニ到リ、敵ヲ討捕其數ヲ不知ト云ケレハ、征久・久倍・忠元大ニ喜ヒ、稚會ニ列ナリシ幼童ヲ携ヘ、勢ヒニ乘シテ、同十八日月ノ出ルヲ待テ八代ヲ発シ、十九日安勢知ヲ諭テ質人ヲ勅勅掃サレケル、薩廣ノ假ト稱シ來ル者ハ忠元ノ知計也ト云フ夫ヨリ求廣ニ到着シケレハ、相良某ハ薩廣ヲ救ハント日向ニ差越レタル故、深水宗芳假ノ主トシテ人吉城ニ有ケルカ、病ト稱シテ出合ス、忠元強テ人吉城ニ行キ宗芳ニ對面ス、宗芳モ亦礼ヲ違ハス、大岩瀬ト云所マテ送りケル、角テ四月廿一日薩州大口ノ地ニ歸ラレケル、扱モ征久・忠元・久倍紛乱ノ際ニ臨ンテ人ノ向背ヲ知ラス、人吉ニ至ル支、屍ヲ鯨鯢ノ頭ニ懸ルト可謂者也、

勝目記曰、左衛門太夫歳久ハ白仁ノ城ヲ守ラレケルカ、肥後ノ如ク退レケルニ、路傳ソコヲ敵取切ケレトモ、打破テ通ラレケル、朽網城ニハ伯耆ノ頭隆、城ノ久基有番タリシカ、兎角シテアシライ、是モ難ナク退レケル、扱又野上ヨリ二手ニ別テ、町田出羽守・新納武藏守ナト日向口ヲ通り、秋月ヘ取合シ、其為ニ上筑後ヘ打越ントテ、已ニ打立レケルニ、薩廣ノ軍日向ノ如ク引入由ヲ聞キ、筑後表ヲ通ン支何カハ成ヘキトテ、肥後ノ如ク退レケルニ、切頭カッノ城ニ伊集院肥前守、相良カ老名大童美作・同軍七求廣ノ勢ヲ相具シテ守リケルヲ、迎取ントテ中

途マテ打寄ケル処ニ、案ノ如ク城卒切腹者早心替シテ、薩廣ノ者トモ一人モ通サシト附來ルヲ、返シ合テ追退ケ、同廿日北里マテ退レケル、同廿五日北里ヲモ同心ニテ、肥後ノ如ク退レケル処ニ、阿蘇ノ内坂無ノ城ニ、桂神祇正・大野治部太輔・花山太郎四郎各籠リ居ケル所ニ、岡ノ志賀道輝其邊ノ者ヲ驅催シ、追來テ陣ヲ附ケ取籠タリ、武藏守・肥前守・同息ノ源左衛門ナト大将トシテ、同廿六日ニ其陣ヲモ切崩シ、敵數多打取り、肥後ヘ打出、隈本ニハ武藏守、合志ニハ新納右衛門尉、津守ニハ伊集院肥前守在番シ、八代ニ右馬頭在城タリ、然ニ秀吉公之先陣、早肥後山鹿ニ着ケル由聞ヘケレハ、合子城ナトモ然々ナシ、殊ニカキ瀬ノ渡リ難所ナレハ、薩廣ヨリノ通融成リ難シトテ、和井府・合子・隈部ヲ引去リ、隈本ヘ打籠リ、城ノ久基ト一身シテ、一防キ防クヘシト思ヒケル処ニ、城殿モ何トヤラン氣色見ヘケレハ、八代サシテ引ニケル、斯リケレハ、隈元ノ城久基モ宇都ノ伯耆ノ頭隆モ京方トナリ、肥後國中ニ心替セン者ナシ、隈本ニ宮原筑前守在番シケルヲ、地下人トモ心替シテ、宮原ヲ始薩廣ノ番衆ヲ打果ス、去トモ切抜ケ遁ル、者多リケリ、津守・木山・美船・田代・幸佐皆火ヲ掛テ退ニケル、富福・高塚ヲモ燒拂ヒ、岡ノ如ク退キ、谷山ヲ攻崩シ、又岡ニ引取代ハハラレケル、肥前方モ心替シテ兵船ヲ揃ヘ八代ノ沖ニ押浮ヘ、比奈子・二見ナトヲ燒拂ヒケリ、幸田ニハ島津忠辰在城有シカ、空見シテ退ケマイラセ、其隈野ヲ取切ケル、諸將八代ニ相集ケルカ、京勢ノ近ツクヲ聞テ、征久ヲ始皆十八夜ノ月ノ出ルヲ相待テ、八代ヲ出求廣ノ如ク引取ラレ、アセチ越シテ、廿日ニハ求廣ノ人吉ニ着レケル、角テ廿一日ノ早朝ニ一占ヲ打出、大口迄難

ナク引取ラレケル、其頃相良宮内少輔ハ薩方シテ日向へ立チ、紙屋ノ辺ニ扣へ、世間ノ絆ヲ伺ヒ居ラレケルカ、心替シテ、廿一日ノ暮程三人吉ニ帰ラレケル、其朝薩勢ハ人吉ヲ立テ引取タル叟ナレハ、僅ニ半日ノ違ニテ、八代求ノ鵜ノ口ヲ遁レケルト申ケル、八代ヲ引レシハ十八日ノ月ノ出ノ事ナリシニ、十九日ニハ京勢悉ク八代ニ打入ケルトナン、危カリシ事トモナリ、

擬又日向口ニ掛テ退玉フ人々ニハ、御大将

義弘公・中務太輔家久、其外将卒相從テ、三月十五日ノ夜半府内ヲ発シ玉フ処ニ、敵清山ノ郷ヲ避テ往還ヲ止メヌ、其上道路艱難ナレハ、士卒ヲ整へ先手ノ兵ヲ以テ前途ヲ拂セ玉フ、此時伊勢貞昌貞昌・久富木撰津介上原長門守各敵一人ヲ討捕ル、戦死ノ人々ニハ、佐多常陸守忠常・伊集院美作守久宣・白濱周防守・平出新左衛門尉・長谷場出雲守・松下越中守・池山掃部兵衛尉・福永藤五郎・枝次左京亮・志和地外記也、同十六日三重ニ到リ玉フ、爰ニ於テ、上野介信久・右衛門太夫忠棟・出雲守政近・吉田美作守清存其外隨兵ニ命セラレ、前後ノ敵ヲ追拂ヒ玉フ、同十七日柵ノ嶮難ヲ經テ打越玉フ所ニ、敵ノ兵追來ル者幾多ト云事ヲ知ラス、

義弘公・家久白ヲ其軍中ニ衝入、氣ヲ勵シ威ヲ振テ戦ヒ玉ヘハ、敵兵潰散シテ八方へ逃去ケル、角テ其夜ハ永谷河内ニ宿シ玉ヒケル、翌十八日敵兵トモ又進來ル間、

義弘公・家久相向テ戦ヒ玉ヒ、大寺大炊介・阿多筑後守此時戦死ス、敵漸ク引退クニ當テ、梓山ヲ過玉フ処、三州ノ軍衆馳來テ迎奉リ、其夜縣ノ城ニ入玉フ、山田越前守今來于此亦軍衆ヲ卒テ爰ニ來リケリ、同十九日高城ニ入玉ヒ御一宿有テ、翌日高城ヲ発シ

都於郡ニ到リ、

義久公ニ 御對面有ケレハ、軍勞ヲ謝シ勲功ヲ感シ玉フ事不少ト

根白坂合戦與秀吉公御和睦三州 御安堵国家太平之事

斯テ秀吉公ノ御勢肥後・筑後・豊後ノ両口ヨリ攻下ル、豊後ヨリノ大将ニハ、秀吉公ノ御舍弟羽柴美濃守大和太納言二十万ノ勢ヲ卒シ、日州高城ト財部ノ境ニ陣ヲ構ヘラル、其陣ノ數五十一箇所也、

義久公・義弘公ハ都於郡ニ御座有テ、大隅・薩ノ勢ヲ待セ玉フ間ニ、美濃守ノ陣ハ弥堅固ニ取堅メ高太ヲ増シ、新納院高城ヲ攻陥サント、大勢ノ重ル叟日夜引モ切ラス、高城ハ山田越前守三百余騎ニテ守リケルカ、此時加勢トシテ馳籠ル人々ニハ、喜入式部太輔久道・平田新四郎・上原兵部少輔・本田弥六・同姓治部左衛門尉・三原下総守・同姓右京亮・野村狩野介・伊地知州部少輔・宅間与八左衛門尉・八木越後守・肥後宮内少輔・奈良原安藝守・同姓狩野介・宮内勝兵衛尉、此人々城中ニ馳加ル、角テ美濃守ノ先手宮部中務卿法印是城坊・小寺官兵衛尉ハ、陣壁ヲ根白坂ノ上ニ築テ旗ヲ靡カシ、堅固ニカマヘ居ケルニ、是ヲ討破ラントテ、四月十七日、

義久公 義弘公御陣營ヲ打出玉フ、相從人々ニハ、中務太輔家久・三郎二郎忠隣・圖書頭忠長・北郷左衛門尉時久・其子讚岐守忠虎・伊集院右衛門太夫忠棟・平田美濃守光宗・同左馬助・伊集院下野守久治・鎌田出雲守政近・肝付彈正忠兼寛・本田下野守親

貞・上原長門守尚近・頼姓左馬介久虎・比志高紀伊守國貞・同式部少輔義智・鎌田刑部左頼門尉・市来美作守・吉田若狭守・稻留新助長辰・新納縫殿介・同姓越後守・川田駿河守義朗、都合其勢二萬余人、我劣ラシト馳進ミ、同音二関ノ音ヲ揚ケ相戦フトイヘトモ、味方ノ軍利ヲ失ヒ、三郎二郎忠隣打死ナリ、其餘亡ル者三百余人也、角テハ叶フマシト思イケル処ニ、興山上人・安藝安國寺・一色宮内少輔来テ和睦ノ儀ヲ求ラレケレハ、

義久公聞召、我兵ヲ起シテヨリ、以後九州ニ横行シテ一人モ敵スヘキ者ナシ、故ニ關西ノ地皆我有ト成ルニ近シ、然ルニ今ツイニ爰ニ困ム事、是天也人ニ非ス、古ノ人云ル事アリ、城非不高、池非不深也、委而去之命ナリ、詩曰、畏天之威于時保之、孟子曰、以小事大者畏天者也、畏天者能保其國、孔子曰、知幾其神乎云々、和睦之儀モ亦宜カルヘシト宣イテ、同廿一日伊集院忠棟ヲ質トシテ差出シ玉イシカハ、興山上人・安國寺・一色宮内少輔悦テ、美濃守ノ本陣ヘソ帰ラレケル、斯テ五月一日

義弘公御飯陣アレハ、

勝日記曰、去程ニ、美濃守殿大軍ヲ牽テ豊後ノ国ヘ下ラレケル処ニ、薩ノ勢悉ク日向ノ如ク引入タル由ヲ聞、又日向ヲ差テソ攻下ラル、追付高城・財部ニ近寄り各陣ヲソ付ラレタリ、先陣ハ因幡國ノ住人宮部法印是常坊・小寺官兵衛尉、諸陣皆入番勤テソ堅メラル、夫ヨリ引続キ、毛利輝元・小早川左衛門尉・吉川十郎・浮田八郎、秀家之陣其外、益田右衛門尉・木下右衛門大夫・羽柴美作・毛利右近大夫・生駒雅樂介・小川土佐佐・藤堂七郎左衛門・蜂須賀右衛門尉・加藤左馬介・赤松上総守・

太田源五・早川主馬・稻葉兵庫允・奥山雅樂・山崎左馬允・市橋下総守・谷山羽守・土方勳兵衛・小野木縫殿介・福原右京允・山口右京進・別所豊後・中川修理亮・木下肥後・嶺田伯耆・有馬法印・石川備後守・同下野守・同備中・中江民部・堀尾帶刀・山内對馬守・松下嘉兵衛尉・有馬玄番・稻野下野守・中村式部・淺野彈正・齊藤左兵衛・宮部兵部・木下備中・龜井豊前・増尾隱岐・細川与市・池田備中・竹中源助・長谷川右兵衛尉・山崎右京亮・藤田權助、大友義統豊後ノ勢ヲ相催シテ、三十余ヶ所ノ陣ヲ取ツ、ケ、其勢幾ハクトシテ數ヘキヤウ無リケリ、

義久公 義弘公ハ佐土原・都之郡ニ籠リ居テ、隅薩ノ軍勢ノ続キ来ルヲ待玉ヘトモ、去年ノ十月ヨリ豊後ノ軍旅ニ勞レ、結局引足ニハ物具矢葉等ヲモ打捨ケル程ニ、是等ノ物ヲモ取調ン為ニ隙取テ、時日ヲコン移リケル、日數モ次第ニ延行ハ、京勢ハ陣ヲ堅ク取構ヘ、輒ク退治シ難クコソ見ヘニケル、就中先陣ノ大将ノ其中ニ、是常坊根白川ニ陣ヲ取り、諸陣ヨリモ能キ兵ヲ勝テ籠置、普請カイ楯丈夫ニシ、専ニ持タル剛陣ニ、隅薩ノ人々、彼先陣ヲサヘ切崩シタランニハ、後陣ハ自ラ臆スヘシトテ、大手擲手一同ニ時ヲ拏ケ、混攻ニ責ヘシト約シタレトモ、薩ノ運ヤ薄カリケン、大手ノ吐氣ハ擲手ニ聞ヘス、擲手ノ吐氣ハ大手ニ聞ヘス、無評儀ニシテ、各々村々ニソ掛リケリ、先陣ハ堀ヲ越ヘ扉ヲ破リ死生ヲ不知戦ヘトモ、後陣未タ続カス、攻アクンテソ見ヘニケル、歳久ノ養子三郎二郎忠隣二十二足ラヌ若大將ナルカ、味方ノ勢ノ臆シタル氣ヲ見、中務太輔家久ニ向テ申サレケルハ、我等ハ勿論若輩タレハ未タ譽レノ名ヲ得ス、家久

ハ聞ル覺ヘ御座ナレハ、今日ノ軍ニ於テハ不劣ト存候ト、云モ
アヘス掛ラレケル、味方ノ軍勢是ヲ見テ、同音ニ闕ラ上ケ、曳
ヤ声ヲニテ攻入、屏ニ重攻破リ、陣ノ内ニ切テ入ル、北郷一雲
ノ手ノ物トモ、屏ニ三十間引破リ陣中ニ切テ入、三百計無下ニ
打死シタリケリ、去トモ事トモセス、攻入々々戦ヘハ、根白陣
モ危ク見ユル所ニ、忠隣鉄炮ニ中ツテ戦死也、去ハ味方乱足ニ
成リヌル所ヲ敵數千挺ノ鉄炮ヲ揃ヘ、雨霰ノ如ク爰ヲ專ト討ケ
レハ、味方掘底ニ射伏ラレ、過半手負ニナリ、幾多打死スル者
アレハ、薩ノ勢無力野白ニ成テ引ニケル、扱是ヨリ和睦ノ儀
相調イ、

義久公ハ内端ノ駄覺東ナシトテ帰ラセ玉イ、

義弘公モ求磨口ノ雜説色々ニ相聞ヘケレハ、真幸ノ如ク帰ラセ
玉フト云々、

扱肥後口ヨリ攻下ル上方勢ハ、秀吉公自ラ大将トシテ關戸ヲ打
渡リ、豊前ノ国ヲ攻平ケ、筑前・筑後ヲ平定シ、肥後國於テ、日
州ノ合戦ニ京勢ノ利ヲ得タル叟ヲ聞キ、佐敷ヨリ船ニ乘リ薩州出
水ニ打入玉フニ、高津又太郎一矢ヲモ射スシテ降參シ、却テ案内
者トソ成ニケル、角テ秀吉公ハ又船ニノリ、四月廿五日川内ニ着
キ、陣ヲ泰平寺ニ設テ居玉イケル、出水サヘ降參ナレハ、高城・
水引・高江・隈之城、皆質ヲ出シテ降參ス、秀吉大陣勢イニ乘リ、
川内ノ逆波ヲ船橋ニ掛渡シ、人馬ノ往来平地ヲ行カ如シ、大勢引
モ切ラス馳渡ル勢イ雷霆ノ天地ヲ喪スカ如シ、到ル処皆驚サル者
ナシ、然ルニ桂山城守忠防ハ、獨リ孤城ノ然モ大敵ニ差臨メル、
サマテ要害モナキ所ヲ守リ、心ヲ張巡、許遠方鉄石ニ比シテ少モ
降ルヘキ色ナク、最モ城ニ籠リ居タル諸士モ皆忠義ヲ守ル者トモ

ナレハ、混ラニ節ヲ堅フシ、氣ヲ勵シ、死ヲ視ルコト帰ルカ如ク、
各誓ヲ戒メケレハ、耻ヲ忍ンテ生ンヨリハ、屍ヲ戦士ニ曝シ名ヲ
後世ニ流サンニハ不如、兵糧兵器ノ尽ルマテハ闕フヘシ、是ヲモ
用イ尽シタラハ、其時短兵ヲ以テ敵陣ニ相接シテ止ント、少モ怠
弛ノ心ナク、堅固ニ城ヲ固メケル、去ルニ依テ、秀吉公ハ小西撰
津守・脇坂中務少輔・九鬼大隅守等ニ命セラレ、此人々ヲ先鋒ト
シ、平佐ノ城ヲ取巻キ、吐氣ヲ發シテ攻撃ル、去トモ城中少モ不
屈シテ意氣自若タリ、時ニ入来院士卒ヲ遣シ忠防ニ力ヲ合セケレ
ハ、城中弥志ヲ堅フシ堅メケル、敵城門ヲ攻破ルニ及ンテ、忠防
下知シテ奮イ出、谷山次郎右衛門尉・春田主水佐・阿久根権助シ
ハ、戦テ打死ス、此時ニ當テ、武者一騎、伊勢ノ国ノ住人九鬼
カ兵ト名乗テ、會尺モナク打テ薙ル、高木帯刀長是ヲ見テ、直ニ
其軍中ニ突入、敵ノ真甲ニ突入ニツニ打破リ、首ヲ取テ刀ノ先ニ
貫キ、息ヲ休メテ扣タリ、谷山紀伊守モ高木ト共ニ戦ケルカ、深
手ヲ負テ引退ク、忠防ハ猶モ堅固ニ守ケレトモ、其後、
義久公ノ仰ニ依テ、
君命ニ應シ下城シケレハ、秀吉公御對面有テ、宝壽ノ短刀ヲ賜ハ
リケル、
五月六日ニハ、
義久公鹿兒島ヲ御発足アリ、伊集院ノ雪窓院公ノ御母ノ室ニ入セ玉
ヒ御法鉢アリ、御法号ヲ龍伯ト改玉フ、同八日ニハ太平寺ニ到リ、
佐々陸奥守・堀左衛門佐三因テ、秀吉公ニ、御見參アリケレハ、
秀吉自ラ帶シ玉ヘル備前ノ包平三条ノ宗近ノ御刀ヲ自ラ解テ、
義久公ニ授ケ玉ヒ、翌日御朱印ヲ賜ラセラル、其文ニ曰、
日本六十餘州之儀、改可進止之旨被仰出之条、不殘申付候、然而

九州国分之儀、去年相計之處、背御下知依頼所行、為御誅討、今

度闕白殿到薩州所成御動坐、吃可被討果刻、義久於一命走入之間、
御赦免候、然上者薩州一國被充行訖、全令領知、自今以後相守寂
慮、可抽忠勤事專一候也、

天正十五年五月九日 御朱印

嶋津修理太夫とのへ

同十五日

義久公御息女幼名龜子ヲ實トシテ差出シ玉イ、

公ハ御暇賜リテ鹿兒島ニ御帰城有シカハ、

義弘公、征久餘其外一城ヲ守人々各參候シテ、賀儀ヲ仲奉リケリ、

其後 秀吉公ヨリ

義弘公御父子へ御朱印ヲ賜フ、其文ニ曰、

今度九州之事、被成御改替、為新御恩地大隅国充行訖、全令領
地、自今以後可忠勤、但、肝付一郡之義、對伊集院右衛門太夫
可被遣之旨、最前被仰出候条、速ニ可引渡者也、

五月廿五日 太閤御朱印

嶋津兵庫頭とのへ

日向国真幸院付一郡之事、被充行訖、全令領地、向後可抽奉公

忠勤者也、

五月廿五日 太閤御朱印

嶋津又一郎とのへ

右ノ如ク

御三公三州御安堵ノ御朱印御頂戴有リ、夫ヨリ連綿トシテ、御子
孫御繁栄、国家長久ノ御代トソ成リニケル、

附録

秀吉公ハ、同年六月十二日本營ヲ平佐城ニ替サセ玉フ、無程

平佐ヲ御立存テ、大河ノ水ニ廻リ、那答院ノ内山崎・宮城ヲ

過サセ玉フ、諸郡モ此間之鬪ニ人馬トモニ疲レ、其上糧之シ

ケレハ、草葉ヲ摘テ食トシ、皆飢渴ニ苦ミ、或ハ倒路死スル

者モアリ、或ハ病ニ臥シテ苦ムモ有、淺猿カリシ交共也、此

時宮之城主左衛門督歳久謀ヲメクラシ、九尾ノ嶮難ヲ過サセ

玉フ、此地峯高ク石惡クシテ、中々人馬ノ往還自由ナラス、

漸ク嶮岨ヲ凌キ那答院ノ内鶴出ニ着玉フ、

義弘公ハ爰迄追テ 秀吉公ニ 御對面アリ、御朱印御頂戴ノ

儀ヲ謝シ玉フテ御帰城也、 秀吉公ハ夫ヨリ菱刈郡曾木ヲ過

テ、大口ノ天堂ケ尾ニ陣ヲ構玉フ、此時新納忠元我カ国勢ノ

振ス、主威之衰ヘタルヲ嘆キ、憤ヲ抱キ兵ヲ拵ケ、少モ屈セ

ス、耻ヲ雪キ之ヲ報ントラモイ、一价ノ使ニ米一俵ヲ負セ、

細川幽齋ニ贈テ云セケルハ、吾子カ軍令糧ニ乏キ亘ヲ聞ク、

少小ナリト雖是ヲ贈ル、之ヲ食テ軍忠ヲ励マサルヘシト云ヒ

贈リケレハ、其軍士皆武士ノ氣アル交ヲ感シケルトソ、斯テ

義久公御使ヲ以テ忠元へ仰越レケルハ、日州之家久已ニ和睦

ス、然テ忠棟質トナル、我モ又秀吉公ニ參會シ、女子ヲ以質

トス、勢イ今如此、イカントモスヘキナシ、忠元モ降ルニ宜

シト有ケレトモ、忠元ウケカイ奉ラス、御返答ニ申上ケルハ、

臣不肖ナリト云ヘトモ、願クハ力ヲ尽シテ敵ヲ討チ、謹テ當

家之遺意ヲ奉ン、臣ニ託スルニ、討敵興復ノシルシヲ以テシ

玉ヘ、然スンハ敵ヲシテ坐カラ我家業ヲ耗フセシムル也、彼

秀吉ハ日本ヲ權ヲ席ノ如クニ捲キ、我三州ヲ挫イテ無人ノ地ニ入ルカ如ク、縱横自在恐ル、夏ナシ、今若弓二節ハケス、刃ニ血又ラスシテ輕々數降ルニハ、薩ノ男子ヲハ皆婦女ノ如クニ見セシムル也、兵ノ成敗利鈍ハ素ヨリ定レル事ナシ、逆見ルヘカラス、昔シ曹操百萬ノ衆ヲ擁シ、荊州ニ下テ孫權カ呉國ヲ吞シカトモ、一旦赤壁ノ鬪ヒニ大ニ敗走シ、袍ヲ脱キ鬚ヲ剪テ、纒ニ一命ヲ助ツテ逃ルコトヲ得タリ、又田單ハ、田氏齊ノ七十餘城ヲ悉ク樂毅カ為ニ攻滅サレシニ、田單ヤウヤク莒ト即墨ノ兩城ヲ保チシカ、終ニ燕ノ二十萬ヲ追退ケテ、再ヒ齊國ヲ恢復セリ、是ヲ以テ思フニ、アナカチ擁ムヘキ事ニアラス、我兵ヲ以テ彼に敵セハ、長短權力日ヲ同シテ語ルヘカラスト云ヘトモ、我兵ハ皆死節ノ士也、古語ニモ、断スルニ當テ断セサレハ、却テ其始ヲ受ト云ヘリ、若シ彼レヲ不伐ハ家業必亡ヒン、坐ナカラ之ヲ見ルヘカラス、事止ムヘカラス、臣力ヲ尽シテ死節ヲ一定シ、猛卒ヲヒキイ、川ヲ池トシ、谿ヲ壘トシ、輕弩精卒是ヲ搏シ、若利非ンハ彼カ軍ニ死セン、此忠元カ素意ニシテ、

公室ニ忠アル所ノ職分也、庶幾ハ、努力ヲ竭シ強敵ヲ追拂ヒ、國業ヲ興復シテ鹿兒島府ニ還ント申ケル、敵軍モ之ヲ聞キ、我衆多シト雖、已ニ九尾ニ苦ミ、又兵糧食ニ乏ク、重テ此難ニ逢フ、今勢イ究リ兵疲る、然ニ是ト久シク對陣セハ、果タシテ戦イニ利アラシト、議論止事ナシ、

義久公之ヲ聞召テ、又仰下サレケルハ、忠元カ申所理アリト雖、我已ニ和睦ヲナシ信ヲ約ス、今汝カ言ニ從ハ、是ヲ誣ル也、又家ヲ敗リ國ヲ亡スノ基也、是非思召ニ從ヘシト有ケ

レハ、忠元止コトヲ得スシテ、天堂カ尾ノ御陣ニ降參ス、秀吉公大ニ悦ビ、其忠勇ノ士タルコトヲ知テ、長刀一柄ヲ給フ、其後秀吉公ハ天堂カ尾ヲ發シ、堂崎ヲ經、大口戸神之地ヲ過キ玉フ、忠元是ヲ送り奉リ、道ノ傍ニ拜謁ス、秀吉公近ク是ヲ召シ、道服一領ヲ賜リ、御手自修羅扇子一柄ヲ賜イケル、角テ秀吉公ハ平泉・上場ヲ過キ肥後ニ出、筑前博多ニ至テ帰帆ヲ揚ケ玉フ、

勝日記曰、京勢大口ノ城ヲモ下城サセ、直ニ肥後ノ如ク押通ントセシニ、忠元大川ヲ隔テ出向イ、大口中ニ不入、押テ入者アラハ戦ハントス、此時天下ノ宗匠紹巴、秀吉ノ九州下向路統ヲ書キシニ、薩摩ノ国牛屎院ニ新納忠元ト云鬼武者アリ、我領内ニ乱入者アラハ、大口ニ食ハントセラレシトナリ、

去程ニ、秀吉公ハ博多ニ在テ、九州ノ地ヲ配分シ玉フ、筑前一國ハ小早川隆景ニ被下、筑紫廣門ヲ筑後ノ山下ニ移サレ、柳川ノ主蒲地鎮村ヲ三池ニ、立花宗虎ヲ柳川ニ下サレ、豊前國ヲハ小寺官兵衛ニ、日向國飢肥・曾井・清武ヲ伊東ニ、同國縣・三城・宮崎ヲ高橋ニ下サレ、同國高城・財部・福島ヲ秋月ニ、同國都於郡・佐土原・三納・穂北・富田ヲ島津又七郎忠豊ニ賜フ、家久ハ羽柴義隆守ニ會シ、島津ニ渡リ死タリ肥後求廣・葦北ニ郡ヲ相良ニ授玉ヒ、其外一郡一郷ヲ玉フ者ハ記ニ不及也、嗚呼嗚呼、サセニハ豊後・豊前・筑後・筑前・肥後・肥前已ニ御手ニ屬ス、然ニ今如此、而可賀ハ御家ノ安定而已、

世録記、枳木食興山ハ、

義久公ノ御上洛ヲ急キ進メ參セケレハ、同六月十五日

義久公鹿兒島御立有テ、秀吉公ノ駕ヲ追イ、上洛ニ赴キ玉フ、明ル日牛屎院小河内ニ宿シ、同十七日肥後国佐敷、十八日八代、十九日徳洲ヨリ御乗船、高瀬へ御入津、同廿日天津山、同廿一日高良山、廿二日筑前国岩屋ニ宿シ玉フ、秀吉公ヨリ召レシカハ、博多ニ到リ、石田治部少輔三成ニ付テ、秀吉公ニ御對面有リ、秀吉公茶亭ニ召レ美宴ヲ賜ス、伊集院忠陳モ會席ニ陪シケリ、其後

義久公ハ秀吉ノ仰ヲ以、先達テ御上京アルヘシトテ有ケレハ、同廿三日博多ノ津ヨリ纒ヲトキ、長門国下関ニ泊リ玉フ、此時御息女ノ御乗船、其外又一郎、久保君・又四郎彰久・圖書頭忠長等、国中ノ城主ノ子質ト成テ上京スル人々、此津ニソ来リケル、爰ニテ

義久公御船ヨリ下ラサセ玉イテ、阿弥陀寺ニ御參詣アリ、一夜此寺ニ宿シ玉イ、翌日上ノ関ニ至リ玉フ、義久公ハ御宿願ノ事アツテ、同廿五日嚴島へ御參詣有、日ヲ経テ御息女トモニ堺ノ津へ御着船、夫ヨリ御入洛有テ、四條ニ御旅宿ヲ定メ玉イケリ、角テ翌天正十六年^{戊辰}七月五日、摂州能勢村・播州萱野村ニテ、都合一万石御拝領アリ、同八月御暇ヲ賜リ、九月三日京師ヲ辞シ大坂ニ到リ、同八日御登城、秀吉公へ御目見有リ、同十一日山里ノ茶亭ニ召レ、御茶會有ケル、扱大坂御発足境ノ浦ニ到リ、十四日御出船、十月五日細島御入津、同十四日御帰城有ケル、義弘公ハ鶴田ニ於テ秀吉公へ御對面ノ後、飯野へ御帰城マシマシケルカ、其年天正十五年肥後隈元ヲ秀吉公ヨリ佐々陸奥守へ賜リ、在城シケルニ、邪欲日々ニ発シテ驕慢甚シ

ク、人ヲ害シケルニ依テ、国人返逆ノ基ニ成リ、陸奥守ヲ背キケル、此由秀吉聞召、九州へ御朱印ヲ下サル、其趣ハ、陸奥守政道正カラサルニ付、是ヲ誅戮スヘシトノ儀也、伊集院忠棟秀吉公ノ命ヲ受ケ薩州へ下着シケレハ、同年十二月廿日

義弘公飯野ヲ御立有リ、大口ニ屯シ、陸奥守ヲ誅スルノ謀ヲ廻シ玉フ、角テ肥後七浦ニ屯シ、透間ヲ見テ討ント相伺フ、陸奥守ハ求廣ノ相良カ姉ノ夫ナル間、八代七浦ヲ遮テ、味方ノ隈元ニ行ク兵ヲ防シカハ、件ノ旨ヲ秀吉公へ奏セント、伊集院忠棟入洛ス、其後安藝ノ安国寺ヲ差下サレ、暖トナリ、陸奥守ヲ同道シテ上洛ス、故ニ

義弘公ハ、翌年春御散軍有リ、同五月廿六日飯野ヲ御立、閏五月廿三日境ニ御入津、六月四日大坂へ御登城、秀吉公へ御目見有リ、秀吉公自ラ任侍從ニトノ仰有テ、御饗宴ヲ賜イ、同十五日、口宣御頂戴有テ、任侍從、從五位下ニ叙シ玉イヌ、又同七月ニハ秀吉公ノ姓氏ヲ御受有テ、羽柴薩廣侍從豊臣義弘ト称シ玉フ、同月廿六日ニハ從四位下ニ叙セラレ、八月五日ニハ日州諸縣一郡ヲ賜ハリ、翌天正十七年^{己卯}八月十日御暇賜ハリ、飯野へ御帰城也、

右、此卷部者、天保十四年^{卯辰}六月下旬ヨリ翌^{甲辰}五月上旬ニ至写置者也、

共七本 田部定位

既刊史料名

- 三十四年 第一集 薩藩政要録
- 三十五年 第二集 丁丑日誌(下)
- 三十六年 〃 (上)
- 三十七年 第三集 薩摩国新田神社文書
- 三十八年 第四集 一向宗禁制關係史料
- 三十九年 第五集 薩摩国山田文書
- 四十年 第六集 諸家大概・職掌紀原
- 四十一年 第七集 薩摩国阿多郡史料・山田聖采日記
- 四十二年 第八集 御登道中日帳御下向・列朝制度
- 四十三年 第九集 明治元年戊辰戰役關係史料
- 四十四年 第一〇集 伊能忠敬の鹿兒島測量關係資料並解説
- 四十五年 第一一集 管窺愚考・雲遊雜記伝
- 四十六年 第一二集 川上忠塞一流家譜
- 四十七年 第一三集 本藩人物誌
- 四十八年 第一四集 薩陽過去帳
- 四十九年 第一五集 備忘抄・家久公御養子御願一件
- 五十年 第一六集 鹿兒島県地誌(上)
- 五十一年 第一七集 鹿兒島県地誌(下)
- 五十二年 第一八集 薩藩舊土文章
- 五十三年 第一九集 薩藩先公貴翰 乾
- 五十四年 第二〇集 薩藩先公貴翰 坤
- 五十五年 第二一集 小松帶刀傳・履歴・記事
- 五十六年 第二二集 小松帶刀日記
- 五十七年 第二三集 新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)
- 五十八年 第二四集 新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)
- 五十九年 第二五集 三州御治世要覽
- 六十年 第二六集 桂久武日記
- 六十一年 第二七集 明赫記

鹿兒島県史料刊行委員会

五十音順

川越政則	元南日本新聞社社長
芳即正	鹿兒島純心短大教授
桐野利彦	元鹿兒島女子短大教授
桑波山興	鹿兒島大学教授
五味克夫	鹿兒島大学教授
小西四郎	元東京大学教授
犀川璇吉	元甲南高等学校校長
竹内理三	元早稻田大学教授
福満武雄	鹿兒島新報社専務取締役
宮下満郎	甲南高校教諭
村野守治	鹿兒島女子短期大学教授
桃園恵真	鹿兒島大学名誉教授
山山尚二	錦江湾高校教諭

明
赫
記

昭和六十二年三月

発行

鹿児島市城山町五の一
鹿児島県立図書館

印刷

(有) 朝日印刷
鹿児島市上荒田町八五四の一

電話 五一二一九一